

# 奇譚クラブ

1956年 10月号

奇譚クラブ

昭和三十一年十月号

10

10月号

昭和三十一年九月三十日印刷 (第十卷 十月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可



「サヘル・マソツホ」黒女皇  
「サデイズム・シーン」詳察  
(近頃のスクリーンから)

沼正三 訳並に  
藤木仙治 解説

奇譚クラブ

昭和三十一年九月三十日印刷 (第十卷 十月号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805





〔奇譚クラブ最近号総目次〕

奇譚クラブ最近号総目次  
昭和三十年

○十月号（復刊第一号）二百円  
絵 美しいドアー 四馬 孝画  
頭立三馬車 都築 数久画  
水中の女 峰子画

緊縛フット・オンパレード  
黒のシユミーズ 川辺 砂登子  
縋るようなポーズを 伊吹 真佐子  
どうの？ 萩 千恵子

ボリウム 加賀 利江子  
朝日を浴びて 須川 令子  
うつつ 須川 令子  
旅の縛られ女 藤田 節子  
きものシリウス 藤田 節子  
悪魔の責め方 白木 仙次  
ボクの責め方 白木 仙次  
女性の下着について 水谷 三太郎  
鼻の下の写真 北谷 英二  
奈落の欲情 沢井 和雄  
洗腸器と共 久利 須人  
お膳の型と種類 土屋 淑人  
自殺娘の死体 近藤 美子  
二個のイチジク 花村 恵子  
完全なる禁断 坂田 三子  
サディズムの快感 沼田 信治  
再度の鞭を期待して 沼田 信治  
女工哀史以前 南 洋一  
乗馬スポンの女腹切 藤山 洋一  
女性の手愛用 田辺 愛子  
切腹通信 津島 比呂子  
少年刑務所体験記 三根 比呂子  
男性自虐の方法 岡村 文雄  
玉稿落穂集 山田 集  
アブ追求三〇年の回顧 春田 一郎  
幽囚十ヶ月 春田 一郎

女性切腹面に憑かれた男 伊藤 和彦  
素足礼讃 高柳 正夫  
新しいコルセット 一柳 真砂子  
あるマゾヒストの手帖から 沼 正三  
私の洗腸論 数 正男  
映画に見た淡いマゾ 春木 俊野  
アクロバット通信 九 傾城  
明治年間の新聞覚え書 吾妻 新造  
残虐なる女性達 森 比古  
一七化け小僧出現 緑 猛

○十一月号（復刊第二号）二百円  
絵 みのむし 四馬 孝画  
小さな運動会 都築 数久  
漂う女二題 滝 純子  
賭場の獲物 杉原 虹児  
小人島の捕われ人 北原 純子  
女教師の捕われ人 杉原 虹児  
掃除日の出来事 依田 義賢  
告白 佐川 昭二  
変態小説論 古川 増夫  
幽囚十ヶ月 春田 一郎  
ボクの責め方 白木 仙次  
レスボスと洗腸 羽村 三子  
稲古着姿の女腹切 藤山 洋一  
命がけの遊び 沼田 信治  
あるマゾヒストの手帖から 沼田 信治  
拷問に笑う女 辻村 耕二  
敵前上陸 三根 比呂子  
賭けられた娘 宮崎 隆  
お灸と腰巻 永 長治  
錯乱 山 真一  
私にも貴女の下着を 芳野 眉美  
伊勢 田 治  
伊勢 田 治  
接客の婦 加賀 利江子  
大和撫子の散華 宮崎 隆  
残虐なる女性達 森 比古  
被虐より嗜虐へ 沖野 恵美子

明治年間の新聞覚え書（四） 吾妻 新造  
泉都の夜明け 坂田 三子  
完全なる禁断 坂田 三子  
洗腸器と共 久利 須人  
或るソドミアの告白 朝路 昭二  
洗腸のお仕置 宮崎 隆  
サディズムへの憧れ 京町 柳平  
掲載候補作品寸評 柳 平画  
王稿落穂集（二） 柳 平画  
女優の素足 高 正夫  
百合子の記録 渡辺 陽一  
長瀬昭子さんへ 渡辺 陽一  
映画雑誌芝居の緊縛場面 波田 規矩  
吹き溜り 近 東一  
アクロバットと曲馬団 銀治 真三  
続・岩瀬祥一のお灸院 岩瀬 祥一  
続・映画に観た淡いマゾ 春木 俊野  
アルバム第三集のアイディア 鳴海 文雄  
セルラー服姿の切腹写真 編集 策部  
女子プロレスリング雑感 東山 集  
密着 青葉 盛  
同愛の土に告ぐ 天泥 盛  
蜂の胸四十五センチ 川上 信吉  
先祖の女腹切 吉住 信吉

昭和三十一年  
○四月号（復刊第三号）二百円  
絵 苦痛の夢 四馬 孝画  
第二次会場の披露宴 宮崎 隆  
戦国夜盗 柳 平画  
ナイロスのレインコート 秋 千恵子  
「こんなポーズで？」 佐賀 美智子  
「お気に召すかしら」 加賀 利江子  
「手首が痛いから」 加賀 利江子  
くく解いてエ！ 吾妻 新造  
明治年間の新聞覚え書 吾妻 新造  
おしめ放浪記 黒岩 当磨  
黒人少女の飼育 黒岩 当磨  
或る切腹マニヤの恋文 笠原 孫之介  
楽い正月映画の縛られ女 嵯峨 美也子

幽囚十ヶ月 春田 一郎  
山口式ボディビルの御紹介 山田 集  
キヤルマタの美 山田 集  
魔の味 山田 集  
ドストエフスキイの嗜虐性 山田 集  
女性乗馬考 山田 集  
サジスチンの独白 山田 集  
ボクの責め方 白木 仙次  
女剣士の切腹について 白木 仙次  
ラブレター 春田 一郎  
少年矯正院体験記（みせしめ） 春田 一郎  
仇討アレイ 春田 一郎  
私は訴えるアブ・放譚 春田 一郎  
腰巻着用許可願 春田 一郎  
完全なる禁断 坂田 三子  
鼻の下の写真 北谷 英二  
映画の緊縛断片 北谷 英二  
マニア誕生 北谷 英二  
体験告白 北谷 英二  
残虐なる女性達 北谷 英二  
切腹願望と洗腸 北谷 英二  
縛られた女腹切 北谷 英二  
悲恋粟田口 北谷 英二  
ああこの恍惚境 北谷 英二  
シソニー責め 北谷 英二  
洗腸器と共 久利 須人  
洋面に於ける緊縛場面 久利 須人  
接客の婦 久利 須人  
蜂の胸四十五センチ 久利 須人  
こたえて 久利 須人  
倒錯の英雄 織田 信長 久利 須人  
Xの女のお腹談義 久利 須人  
「話の尻尾」 久利 須人  
王稿落穂集 久利 須人  
赤い花は泣いている 久利 須人  
失恋の告白 久利 須人

○五月号（復刊第四号）二百円  
絵 素晴らしいショー 四馬 孝画

幽囚十ヶ月 春田 一郎  
山口式ボディビルの御紹介 山田 集  
キヤルマタの美 山田 集  
魔の味 山田 集  
ドストエフスキイの嗜虐性 山田 集  
女性乗馬考 山田 集  
サジスチンの独白 山田 集  
ボクの責め方 白木 仙次  
女剣士の切腹について 白木 仙次  
ラブレター 春田 一郎  
少年矯正院体験記（みせしめ） 春田 一郎  
仇討アレイ 春田 一郎  
私は訴えるアブ・放譚 春田 一郎  
腰巻着用許可願 春田 一郎  
完全なる禁断 坂田 三子  
鼻の下の写真 北谷 英二  
映画の緊縛断片 北谷 英二  
マニア誕生 北谷 英二  
体験告白 北谷 英二  
残虐なる女性達 北谷 英二  
切腹願望と洗腸 北谷 英二  
縛られた女腹切 北谷 英二  
悲恋粟田口 北谷 英二  
ああこの恍惚境 北谷 英二  
シソニー責め 北谷 英二  
洗腸器と共 久利 須人  
洋面に於ける緊縛場面 久利 須人  
接客の婦 久利 須人  
蜂の胸四十五センチ 久利 須人  
こたえて 久利 須人  
倒錯の英雄 織田 信長 久利 須人  
Xの女のお腹談義 久利 須人  
「話の尻尾」 久利 須人  
王稿落穂集 久利 須人  
赤い花は泣いている 久利 須人  
失恋の告白 久利 須人

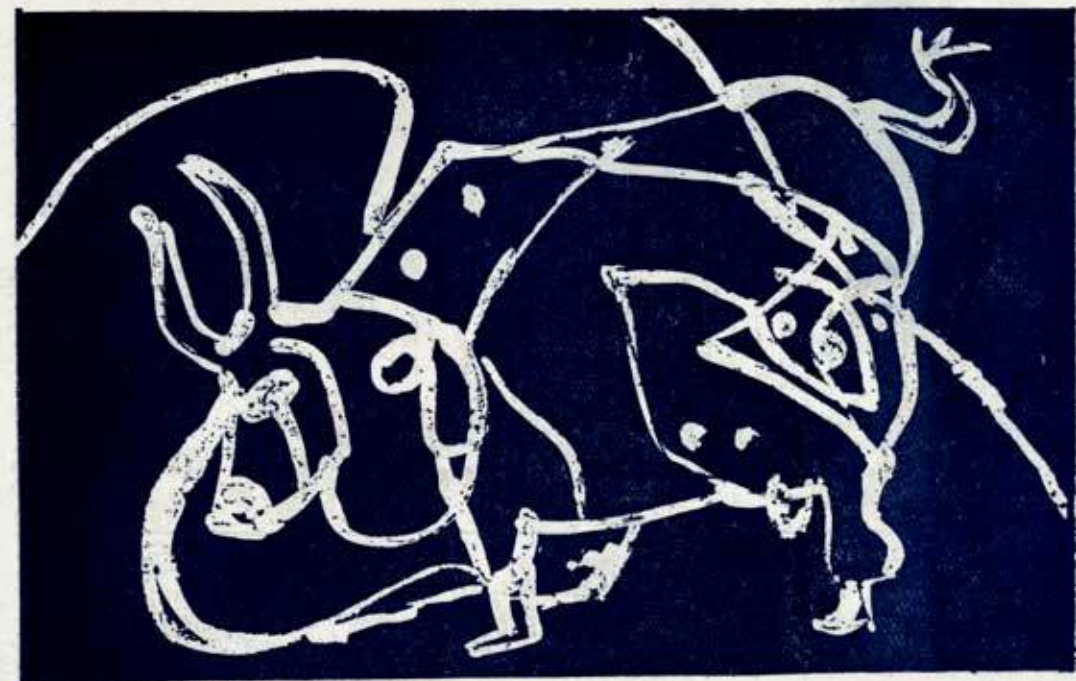
幽囚十ヶ月 春田 一郎  
山口式ボディビルの御紹介 山田 集  
キヤルマタの美 山田 集  
魔の味 山田 集  
ドストエフスキイの嗜虐性 山田 集  
女性乗馬考 山田 集  
サジスチンの独白 山田 集  
ボクの責め方 白木 仙次  
女剣士の切腹について 白木 仙次  
ラブレター 春田 一郎  
少年矯正院体験記（みせしめ） 春田 一郎  
仇討アレイ 春田 一郎  
私は訴えるアブ・放譚 春田 一郎  
腰巻着用許可願 春田 一郎  
完全なる禁断 坂田 三子  
鼻の下の写真 北谷 英二  
映画の緊縛断片 北谷 英二  
マニア誕生 北谷 英二  
体験告白 北谷 英二  
残虐なる女性達 北谷 英二  
切腹願望と洗腸 北谷 英二  
縛られた女腹切 北谷 英二  
悲恋粟田口 北谷 英二  
ああこの恍惚境 北谷 英二  
シソニー責め 北谷 英二  
洗腸器と共 久利 須人  
洋面に於ける緊縛場面 久利 須人  
接客の婦 久利 須人  
蜂の胸四十五センチ 久利 須人  
こたえて 久利 須人  
倒錯の英雄 織田 信長 久利 須人  
Xの女のお腹談義 久利 須人  
「話の尻尾」 久利 須人  
王稿落穂集 久利 須人  
赤い花は泣いている 久利 須人  
失恋の告白 久利 須人

幽囚十ヶ月 春田 一郎  
山口式ボディビルの御紹介 山田 集  
キヤルマタの美 山田 集  
魔の味 山田 集  
ドストエフスキイの嗜虐性 山田 集  
女性乗馬考 山田 集  
サジスチンの独白 山田 集  
ボクの責め方 白木 仙次  
女剣士の切腹について 白木 仙次  
ラブレター 春田 一郎  
少年矯正院体験記（みせしめ） 春田 一郎  
仇討アレイ 春田 一郎  
私は訴えるアブ・放譚 春田 一郎  
腰巻着用許可願 春田 一郎  
完全なる禁断 坂田 三子  
鼻の下の写真 北谷 英二  
映画の緊縛断片 北谷 英二  
マニア誕生 北谷 英二  
体験告白 北谷 英二  
残虐なる女性達 北谷 英二  
切腹願望と洗腸 北谷 英二  
縛られた女腹切 北谷 英二  
悲恋粟田口 北谷 英二  
ああこの恍惚境 北谷 英二  
シソニー責め 北谷 英二  
洗腸器と共 久利 須人  
洋面に於ける緊縛場面 久利 須人  
接客の婦 久利 須人  
蜂の胸四十五センチ 久利 須人  
こたえて 久利 須人  
倒錯の英雄 織田 信長 久利 須人  
Xの女のお腹談義 久利 須人  
「話の尻尾」 久利 須人  
王稿落穂集 久利 須人  
赤い花は泣いている 久利 須人  
失恋の告白 久利 須人

幽囚十ヶ月 春田 一郎  
山口式ボディビルの御紹介 山田 集  
キヤルマタの美 山田 集  
魔の味 山田 集  
ドストエフスキイの嗜虐性 山田 集  
女性乗馬考 山田 集  
サジスチンの独白 山田 集  
ボクの責め方 白木 仙次  
女剣士の切腹について 白木 仙次  
ラブレター 春田 一郎  
少年矯正院体験記（みせしめ） 春田 一郎  
仇討アレイ 春田 一郎  
私は訴えるアブ・放譚 春田 一郎  
腰巻着用許可願 春田 一郎  
完全なる禁断 坂田 三子  
鼻の下の写真 北谷 英二  
映画の緊縛断片 北谷 英二  
マニア誕生 北谷 英二  
体験告白 北谷 英二  
残虐なる女性達 北谷 英二  
切腹願望と洗腸 北谷 英二  
縛られた女腹切 北谷 英二  
悲恋粟田口 北谷 英二  
ああこの恍惚境 北谷 英二  
シソニー責め 北谷 英二  
洗腸器と共 久利 須人  
洋面に於ける緊縛場面 久利 須人  
接客の婦 久利 須人  
蜂の胸四十五センチ 久利 須人  
こたえて 久利 須人  
倒錯の英雄 織田 信長 久利 須人  
Xの女のお腹談義 久利 須人  
「話の尻尾」 久利 須人  
王稿落穂集 久利 須人  
赤い花は泣いている 久利 須人  
失恋の告白 久利 須人



奇譚クラブ 復刊第九号 十月月号 目次



北原純子 十月集 壊れ易き獲物  
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎  
現代マゾヒスム―芸術時評(復の三) 参考資料: 原 忠正 提供  
引 廻 し 春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢  
米誌に見た緊縛写真  
B・IZARRヨリ  
欧米式新スタイル(3) LABONDA 画

サディズム・シオン詳察  
藤木仙治 18  
お灸の女王 コンクール  
絵と文 岩瀬祥一 26  
小説的事実 天は知っている  
宝塚二三夫 25

体験記 光りある中を(三)  
近東規矩也 28  
大衆雑誌と責絵  
青山三枝吉 37

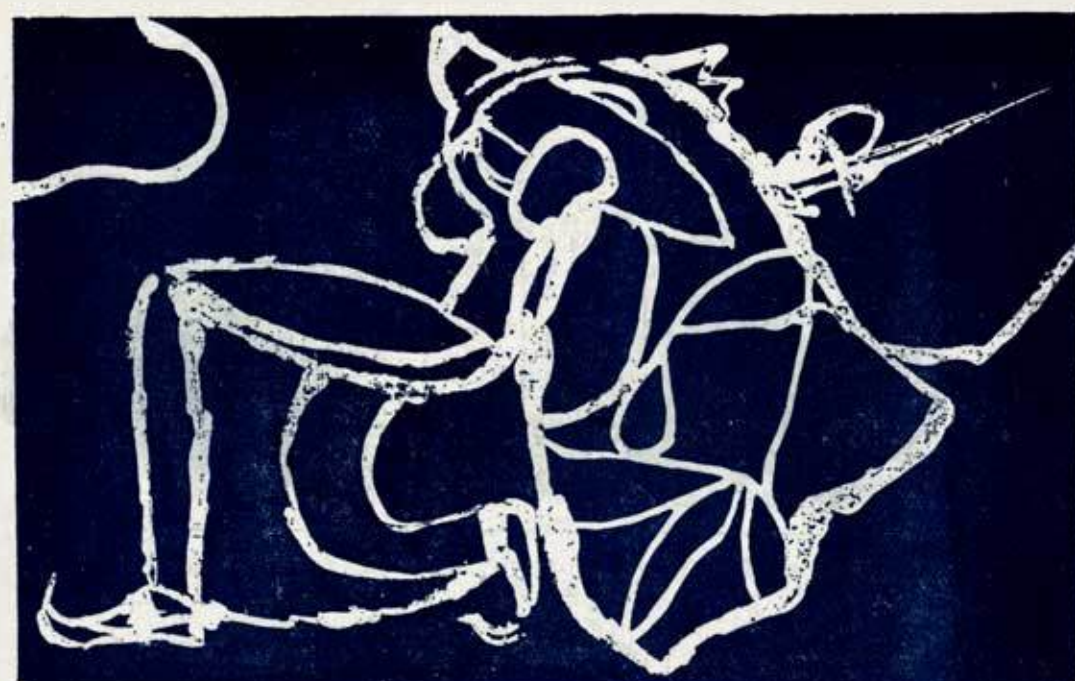
捨 犬  
青葉楓一 38  
私の流腸ブレイ  
ラブマン 45

受刑生活の思い出  
福村光治 46  
現代マゾヒスム芸術時評  
原 忠正 50

寄生 虫(二)  
壬生すみ子 54  
マゲモノ 俺は知らない  
本田由郎 62

執筆者沼正三氏に対する公開状  
麻生和夫 64  
『家畜化小説を喜ぶ』に共鳴して  
青山三枝吉 70

変態「ますらお派出夫」の犯罪  
松原一提供 72  
〔新聞・雑誌〕通信  
池田正一提供 74  
泥棒に縛られた話二件



エスキモー娘の切腹  
沼 正三 76  
ある夢想家の手帖から  
東沼完一提供 85  
『流腸』に関するレポート  
古苗節人 86  
締めつけられた女優達  
古賀信司 87  
泥棒に入られた南田洋子  
伊藤晴雨 88  
晴雨随筆 責め絵の今昔  
東 一郎 91  
レポート  
矢桐重八 116  
『二男色者の手記』  
大谷絢子 120  
創作なめくじ  
羽村京助 129  
私のアイデア「晒し台」  
柳沢吉保 130  
ローカル・レポート  
千葉栄市 133  
緊縛映画速報欄  
東 一郎 92  
探偵小説新考  
鷹野めぐみ 134  
サジスチンの半生記  
畑村一提供 135  
〔新聞・雑誌〕通信  
逸名居士 137  
私のイメージ  
沼正三訳・解説 138  
『同好和服マニア会』遂に設立さる  
藤山秀緒 155  
サッヘル・マンツホ 黒女皇  
白石 稔 162  
続・乗馬ズボンの女腹切  
女優緊縛映画速報版 最近の映画から  
四馬孝縛り画集 美しき女体家畜飼育室  
160  
女体切腹構成案図譜  
163  
外国文献分譲  
164  
読者通信  
176  
編集後記



〔奇譚クラブ最近号総目次〕

モデル嬢の表情(緊縛写真集)	モリ子
佐賀美智子	須川 令子
加賀利江子	萩 千恵子
アメリカ雑誌「ビザ」より	——
赤い花は泣いている	宮崎昭平・画
幽霊十ヶ月	高木 伸一
魔の味	坂田 信治
完全なる隷屬	岸本 信治
戦慄怪談屋敷	青柳 作
体臭日記	狩井 麗
葉子やしき(異常体験記)	相沢 松
おそい目覚め	足立 夏夫
灰色のノート	矢崎 竜一
箱のノット	多山 竜一
女サデイストより奴隷に	森山 美歌
与える手紙	北川 美歌
撫子の花散りぬ	森山 美歌
奇妙な花	北川 美歌
責めとフェチズム	加賀 美歌
魔の白鳥	須川 令子
おのの研究(二)	須川 令子
生埋め願望	長岡 俊一
紅い魔殿	佐々木 俊一
姉と弟	青木 伸一
陰花への憧憬	吉井 伸一
去る日の美女	吉井 伸一
悲風上原	吉井 伸一
王稿落穂集	編 集
アブノーマル・モノログ	竹谷 十三
(あるアクロバット・ダンサーの記録)	——
拷問に笑う女	辻村 隆
〇六月号(復刊第五号)二百円	——
口絵	——
美顔の屈辱	四馬 孝・画
孤島の捕われ人	アメリカ雑誌
佐賀美智子ボーズ集	曼陀羅華の萌芽
私室でのプレイ	須川 令子
深夜のホール	四馬 孝・画
修道院の神室	宮崎昭平・画

大衆文学に現れた責の描写	藤見 郁
赤い花は泣いている(第三回)	松井 一
明治と昭和の絵くらへ談義	緒合 あふみ
幽霊十ヶ月	春田 一郎
世相断片、ローカル・レポート	——
奈子の自己愛について	門田 三枝子
洗馬の自己愛について	青山 三枝子
鞍馬の自己愛について	緑 猛比古
一代理部便りの夢	並原 新一
女散華	——
悲風上原	瀬川 泰子
女サデイストより	瀬川 泰子
奴隷に与える手紙	森山 美歌
私のアイディアと回想	菅原 春夫
いっせいで湯	泉 義明
コレットと魔力	林 清彦
変つた切腹の掟	山中 同人
私のマゾ・スクラ	春木 俊野
ツプ帳より	次 清克
甘美なる被虐の幻想	伊藤 三
脱腸に対する私見	伊藤 三
小説「虐妻日記」	竹谷 十三
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
お仕置遊戯	極井 美智子
フェチシストの文学ノート	S・T 生
猪狩り	黒井 邦
緊縛女体考	黒井 邦
一輝先生	浮城 美三
最近の縛り時代劇映画から	青葉 慎一
おのの研究	須藤 雨
結髪研究	伊藤 雨
王稿落穂集	編 集
映画に現れたムツキ	赤井 紀世
虐げられる娘	藤木 仙治
ナチスの暴虐	藤木 仙治
娘の告白	東 坊丸
サデイストイックな漫画	藤木 仙治
〇七月号(復刊第六号)二百円	——
口絵	——
拘束服の装着	四馬 孝・画

道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	——
ネルソン提督	二丁拳銃の姐御
女士官	木製の兵士
新人モデル嬢紹介	花坂 道子嬢
パイアの馬	北原 純子嬢
凝視	北原 純子嬢
馬を御す令嬢	北原 純子嬢
現代大衆文学に現れた責の描写	藤見 郁
若衆歌舞伎復興	小竹 紀夫
幽霊十ヶ月	門田 三枝子
赤い花は泣いている(第四回)	松井 一
ボディビルマシンに依る少	熊谷 俊一
私のコレクショニより	角田 由吉
一責め一芝居難考	真木 不二夫
梶井君の恋	山口 幸一
少年雑誌の恋	山口 幸一
奇妙な倒錯の恋	(新聞雑誌通信)
活稿落穂集	青葉 慎一
玉稿落穂集	編 集
被縛の切腹幻想	高井 成太郎
女性の下着マニアの告白	古井 成太郎
或る下着マニアの告白	古井 成太郎
或る従軍婦人の死	土路 真一
マゾヒズム断片	天谷 盛治
H氏の奇妙な告白	北原 純子
サデイスト小説「いで湯」	泉 義明
私はおしめマニア	多野 京
スーダン	川野 成太郎
乙女の腹切抄	鳴竹 成太郎
〇八月号(復刊第七号)二百円	——
口絵	——
美しい床の間	四馬 孝・画
すべり床の間に	(萩千恵子嬢)
米詰にみた緊縛画、欧米式新スタイル	北原 純子・画
華々しき私刑	——

大衆文学に現れた責の描写	藤見 郁
無惨なマニア	——
二等兵時代の思い出	——
縛り絵マニアの回想	——
光りある中を(二)	——
おきなとしての公開状	——
一読者としての公開状	——
元緑女腹切	——
「太陽の季節」を斬る	——
歴史に現れた三人の美少年	——
「鼻」と「変型しほり」	——
幽霊十ヶ月	門田 三枝子
自決する従軍看護婦たち	東 坊丸
奈子のA感覚について	春田 一郎
賭けられた洗馬	門田 三枝子
最近の縛り映画から	門田 三枝子
赤い花は泣いている	松井 一
奇譚クラブに寄せて	角田 由吉
私のコレクショニより	真木 不二夫
統一少年雑誌	山口 幸一
K誌編集方針について	佐藤 幸一
潰滅の前夜	土路 真一
緊縛映画速報欄	——
最近の映画から	千石 栄
春日ルミ嬢の集まり	白 三
私の蒐集帖「緋草紙より	緒合 あふみ
新聞紙上に出た切腹実話	編 集
探偵小説新考	東 坊丸
炎痕を吸う	藤木 仙治
蜂の完成	藤木 仙治
倒錯の英雄、織田信長	藤木 仙治
とりこの白人娘	藤木 仙治
〇九月号(復刊第八号)二百円	——
口絵	——
美しい銅貨物の調教	四馬 孝・画
恋の脱獄	松井 一
紅い蓮	青葉 慎一
奈子の恋愛について	門田 三枝子
なめくじ	大谷 正三子



# 北原純子

十月集

＜ 壊れ易き獲物 ＞





＜ 刺 青 師 の 部 屋 ＞





＜ 和 蘭 陀 屋 敷 の 謎 ＞

北 原 純 子・画



〈本月号50頁参照のこと〉

復刊第九項「親の許さぬ仲」

(メル・ケイソン画)



復刊補遺2

「フランス雑誌ヴォアラより」



復刊第10項

「映画モニク・ヴァン・ヴァレン」



復刊第11項

「女優 キャザリン・ヘップバアン」

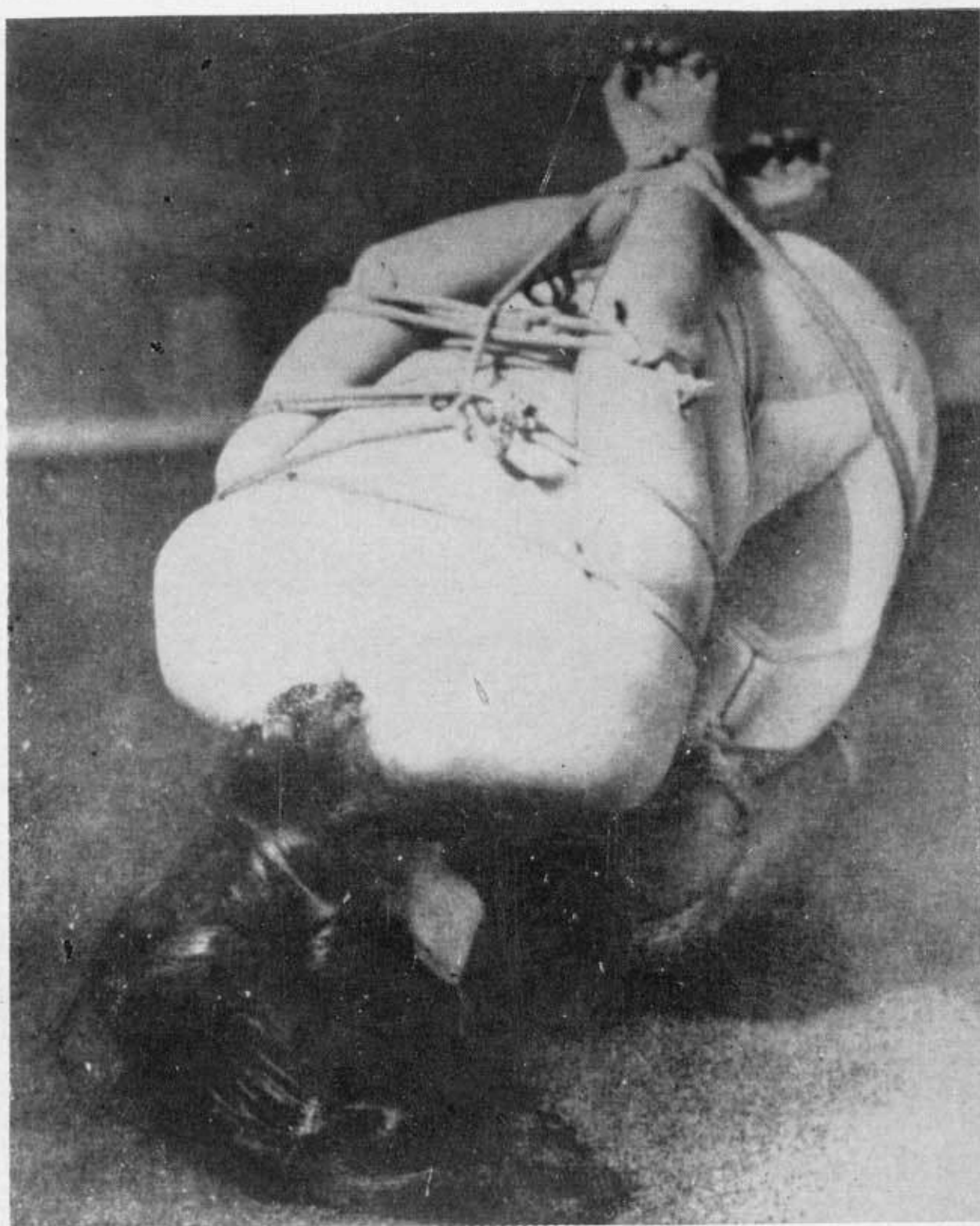


引 廻 し



春日ルミ嬢

伊吹真佐子嬢



米誌に見た緊縛写真

(BiZARRヨリ)

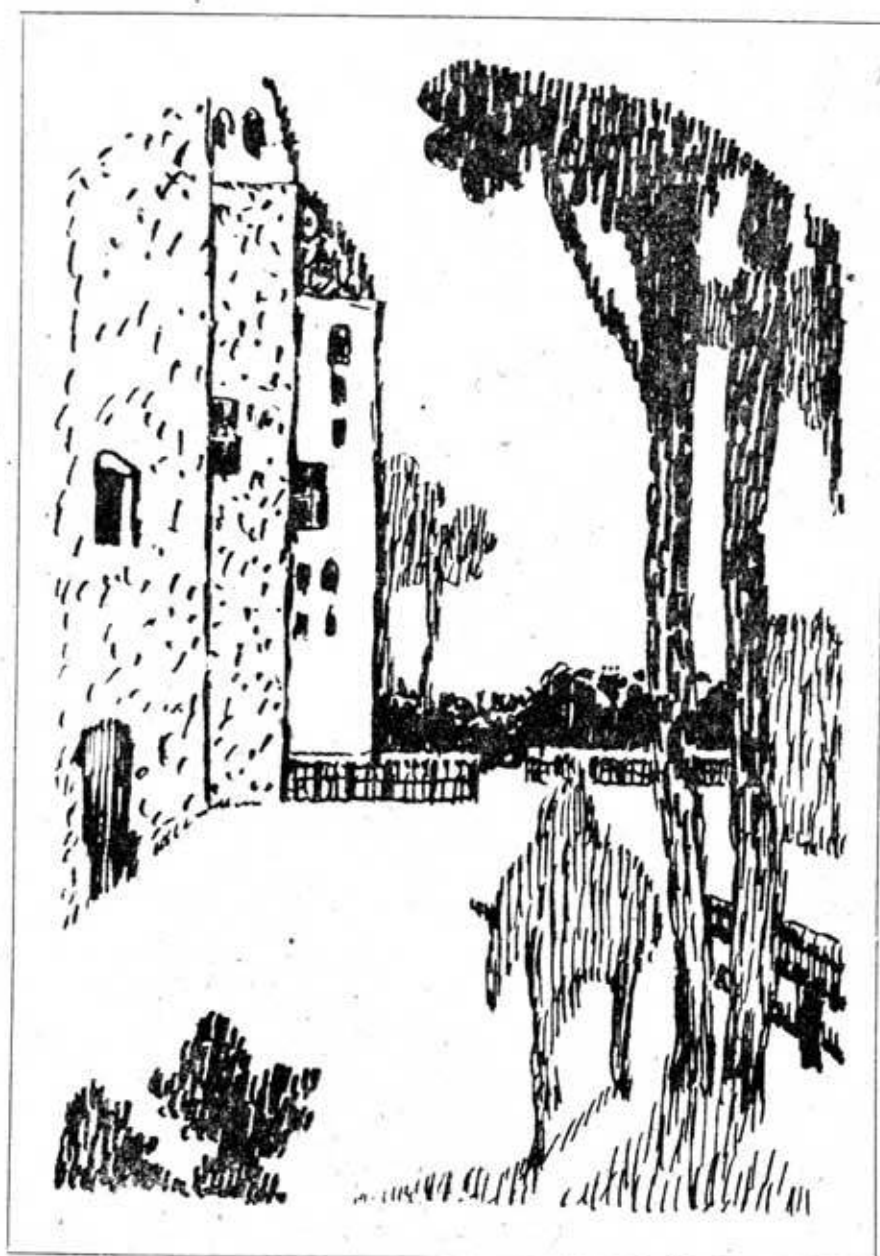


欧米式新スタイル (3)



(La Bonda 画)





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1956年 10月号

(第十卷 第七号 通刊第八十九号)



# サ デ イ ズ ム ・ シ ー ン 詳 察

—近頃のスクリーンから—

藤 木 仙 治

緊縛映画の紹介は毎号くわしく誌上に載せられ、多くの読者の支持を受けているが、その多くは極く簡単な紹介だけで終わってしまうので、私はその中から特に二、三の映画を抜きだして、少し詳しく述べてみたいと思う。「緊縛映画速報版」と重複するが、私は紹介だけでなく、緊縛に関して私なりの考察をもふくめて書きたいと思うので、その点諒解を願います。

封切映画の二本立興行の是非が云々されてから、もう月日も久しいが、映画会社が好むと好まざるとにかかわらず、今なお依然として二本立封切は続けられている。その理由は簡単で、一本より二本立のほうが観客がよるこぶからである。観客が喜べば、それだけ興行成績が上るからである。しかし映画会社としては、一週間に新作二本を製作しなければ

ならぬ苦勞は並たいていではない。そこで完全な長尺物一本に、中篇又は短篇の連続映画を併せて二本立上映という現象があらわれてくる。前置きが長くなったが、つまり、緊縛ファンにとって嬉しい映画は、特にこの併映用中短篇に多いのである。私がこれから述べようとする、東映映画「日輪太郎」同じく東映「怪猫乱舞」大映作品「魔の花嫁衣裳」同じく大映「豹の眼」すべてこれ、併映用連続短篇映画なのである。

はじめに「魔の花嫁衣裳」から取り上げてみる。この映画は探偵作家高木彬光の原作を前後篇の二部に分けて映画化したもので、一部の上映時間が四十五分足らずという短尺物であるが、短かいなりに要領よくまとめて、スリラーものとしてはよいほうである。

おハナジは、主人公である富豪の財産相続人（船越英二扮する）を殺して遺産横領を企及む悪人輩（高松英郎他）が、一度はまんまと成功して邸を手に入れるが、数年後、白髪鬼と称する怪人物のために、やがては全部殺されてしまうという、まことにサツバツたる怪奇もの。つまりその白髪鬼なるものが、殺された筈の主人公であるという次第。悪人達最後の手段として、主人公の妹を捕える。そこでファンお目当の場面が展開するというわけ。縛られる女優は、南左斗子という新人。椅子に縛りつけられるのだが、一寸変っているのは、椅子の背に両手がまわり、ねじまげられて縛られている。安楽椅子風の、やゝ幅の広い椅子なので、背にぎっちり廻されても、両手首は交叉しない。交叉しないまゝにくくりつけられるのが変っている。今までの



映画だと、普通に背中に後ろ手に縛られ、そして椅子に腰かけ、或いは更にその上に椅子ごとグルグル巻きにされるのが、よくある一般の型であった。それが監督さんのどんなチエカは知らないが、一寸コった縛り方をしたので、女優サンはずい分せつなかつただろうと思う。腕が不自然にねじあげられているので如何にも苦しそうであった。縄は乳房の下を三、四本、麻縄でぐるぐる巻かれている。猿ぐつわは、口だけを申しわけに縛ってあって、いさゝか頼りないが、幾度も恐怖におそわれ、その度に悶えて、顔がクローズアップになり、苦し気に歪むので、かなりサディストチックな刺戟を受ける。

幾度も恐怖におそわれ、と書いたが、それはこうである。先ず兇暴な悪人達の前に縛られていること。次にピストルを顔に押しつけられ命を奪われそうになる。次に、突如、四谷怪談のお岩さんのような醜惡な女が眼前に現れる。更に謎の白髪鬼の出現でピストルの乱射。と、このような事件が次々に縛られている眼の前で展開されるのである。したがって緊縛場面もやゝ長く、美女の危難の設定になかなかのサディズムを感じる。私には近頃面白い映画であった。書き忘れたが、これは現代物で、洋装の縛られ姿というのも、一寸珍らしいのではないか。

この主人公の白髪鬼は最初に妻に裏切られ

るが、その妻にもやがて残酷な復讐をするのである。つまり現在は仇敵である悪人（高松英郎扮する）の情婦になっている妻（矢島ひろ子扮する）を捕え、失神させて、闇外科医を使って、おそろしく醜惡な顔に変相させてしまうのだ。少し前に述べた四谷怪談のお岩さんのような、というのは即ちこの女のことである。女の顔にメスを加えるところは流石に映画ではおっさりと、かげになって運ばれてしまうが、この設定もずい分サディストチックなものだと思ふので、私は慾をだしてこんなイメージを浮べてみる。

——どんなに暴れても騒いでも外に知れない地下室へ、捕えてきた女を突きとばして投げこむ。まだ縛ってない。女は怖しがってしきりに許してくれ許してくれと哀願する。ひざまずいて涙を流す。復讐の男は立ったまま、冷たくわらう。自分を手ひどく裏切った女への報復の手段を考えている。

室の天井から一本の縄が垂れ下って居り、それに女の両手を前に縛って吊りさげる。縄をうんと引張ると、女の身体は宙に浮く。男は鞭で女の尻を思いきり打つ。音がして豊かな尻の肉がプリプリふるえる。重い肉体が鞭の音と共にゆらゆら揺れる。女は怖しさと痛さに、ワアワアと子供のように声をあげて泣く。涙がボロボロ頬を伝わり、唇がふるえて紫色になる。そのクローズアップ。キヤメラ

は縛られてもがく両手首を大きく写す。はだけた胸を写す。鞭で破れた尻を写す。

やがて今度は、木の台の上に身体を伸ばしてしっかりと縛りつける。足から股から腹から胸から首まで、ぎゅぎゅと動けぬように固定してくりつける。そして、次の部屋に待たしておいた外科医を呼ぶ。

不気味な外科医が無言のまま現われる。復讐の男は黙って女の顔を指さす。外科医はうなずいて、手に持った鉋を机の上に置き、中身をひろげる。冷たく光るメスが次々に現われる。女はあまりの恐怖で、もう口もきけない。必死になって身体を動かそうとするが、それも今は空しい抵抗。肥った皮膚にぎゅぎゅ喰いこんでいる縄を、キヤメラはぐんと近づいて克明に写す。

外科医は一本のメスをそつと手にとる。男はそばについてニヤリとわらう。女の恐怖は極点に達し、大きく眼をみひらくとガックリと氣を失う。

といったシーンをこくめいに撮るのだ。顔にメスをあてる実際の場面は、あまり残酷で私でも撮らない。然し、私が今述べてきたシーン位ならば、撮り方によっては映画倫理規定の範囲内で充分映せれると思うのだが、どうだろうか。奇クファンの方ならば絶好のシーンとなるし、一般の観客にとってもすこぶる緊張した雰囲気盛り上って、演出としても



いい効果がでると思うのだが。

よく、縛ったり吊したりするのは残酷だという批評家があるが、私はそれよりも最近の映画の中で流す血のシーンのほうが、余程残酷的だと思うのだ。ことにアメリカの西部劇などで、インディアンが斧をふりかぶって相手の頭をざっくり打ち割る場面がよくある。血がどろりと流れて、その残酷なこと。ましてそれがカラーフィルムの時など、思わず眼を覆いたくなる。その他にも投げ槍がピューと音たてて飛び、相手方の胸にズブリと突きささり、赤黒い血がタラタラと流れたシーン、まことにいやなものだ。シネマスコープ立体音楽などだと、その効果を強調するため、こと更そういうテクニクを使うので、そのサツバツさに於て、緊縛の比ではない。その上、血を流す場面は必ず人間が死んだり、大怪我をしたりするに決っているので、いくらそれが悪漢でも、後味はよくない。

いろいろと物議をかもした、れいの石原慎太郎原作の大映映画「処刑の部屋」のリンチ場面でも、リンチを受ける主人公が、実際にリアルに血だらけになるので、一般の観客は尚更、惨虐的な印象を受けたのである。そして「お上品な」人々から、攻撃のマトになってしまった。映画の「責めシーン」の場合、なるべく血を見せないように、キメラワーク

を美しく、リアルな惨虐さを避け、型式美を重んじ、しかも或る程度の実感をこめなければならぬ。これはむずかしい注文かも知れないが、私の願いである。そしてなおも考えれば、これは普通の、動かないフोटにもそのまゝあてはまることである。

筆は横道にそれたが、次に「日輪太郎」と

いう映画から、思いついたことを述べてみよう。子供向の映画だから、殊更云々するのも大人気ないが、これを私が銀座の劇場で観た時など、あたりの客席を見まわしても、立派な大人が結構たのしんで観ているので、あながち軽視するにも当るまい。

この映画を特に挙げたのは、普通の映画に於て女を縛り責める時たいていの場合は単なる拘禁か、自白を強いる場合か、おとりに使う時とか目的があつて緊縛するわけである。



ところがこの「日輪太郎」の場合は、責めるほうの「どくろ丸」というおそろしくグロテスクな怪物が完全なサディストなので、たゞ相手を苦しめて喜ぶのである。その点が他のストーリーとやゝ変っている。

頃は戦国時代の後期、美濃の齊藤道三の城へ、織田信長方の女スパイが忍びこんで、捕まり、道三の輩下「どくろ丸」に責められる。



このシーンは短かいが、印象的であった。どくろ丸の家の一室。あやしげな拷問道具が並んでいる不気味な洋室。ひし掛け椅子にその女スパイが縛られている。両手は両脇のひし掛けに縛られ、胸は椅子ごとぐるぐる巻きになっている。足も着物の裾ごとしっぺり縛られていて、緊縛感はかなりある。どくろ丸は、この女に涙を流させ、その液体を小さいグラスに受けて溜め、不老長寿の薬と称し、城主の斎藤道三に飲ませようというのである。ところが女スパイはなかなか泣かない。それではというのでどくろ丸、くさりのついた拷問道具を手に持ち、やおら女に近づく。やがて女はギャツとすさまじい声をあげる。このシーンのカメラは、拷問道具の置いてある部屋の一隅を映し、責められている女は蔭になっている。悲鳴が終ると、女は涙を流し、どくろ丸はグラスを女の頬にあててそれを受けている。次のシーンではそのグラスの涙を道三が眼をつぶって飲むところを写すがその時には私はむしろマゾヒズムを感じた。監督がとくにそんな効果をねらったわけではないだろうが、サドとマゾの入り混った奇妙な味のシーンであった。

嚴重に椅子に縛りつけた女を無理に泣かせて、その涙をグラスに溜めているシーンなどちよつと珍らしく、奇クのフオートに撮っても構図如何では変った面白いものができそうでは

はないか。

「日輪太郎」後篇になって、女主人公の姫（丘さとみ扮する）が、日輪太郎（伏見扇太郎扮する）と共に縛られる。

道三の庭前に縄つきのまゝ引き出されるが背後から撮って丘さとみが後ろ手にしっぺり縛られているのが寸時みえる。よく縛っているが、やゝロングなのが惜しい。丘さとみという新人女優は、色気はないが丸顔の可愛らしい顔立ち。二人は縛られているくせに道三に反抗するので、道三は怒って斬れと部下に命じる。すると又どくろ丸が現れて、すぐ斬り殺してしまうのはもったいない、ゆっくりとたのしんでから殺そう、という。苦しめてから殺そうというところなどは、悪質サディストの面目充分である。ラスト近くになってから、何故このどくろ丸が、姫を苛めるのか、が判明するが、つまりこれも復讐のためなのである。

二人は先ず水責めと称されて井戸の中へ吊り下げられる。日輪太郎は両手を頭の上で縛られた両手吊り。丘さとみは太い縄で後ろ手に縛られ、吊される。足は自然に宙ぶらりんとなっているので、トリックではなさそうである。女の着物が純白なので、哀感があり、わるくない。たゞし演技がうまくない。

それでも参らないので次に、いぶし責めと称して庭の木に二人共吊り下げられる。今度

は日輪太郎も後ろ手である。ところがこのいぶし責め、二人の下で焚く火がお粗末なのであまり効果はなさそうだ。しかし乍らこの責め、丘さとみは氣を失ってしまふ。この演技もまずい。苦しくて失神したのだが、まるでいい氣持になって眠ったようにもみえる。だから私はここでこんなことを思う。緊縛された全身を撮さなくとも、たとえば顔だけをクローズアップして、充分なる演技をもって悶え苦しめば、かえって効果的な責めの雰囲気が出るのではないか、と。近頃の緊縛シーンは、どうもマンネリズムが眼立つようだ。私がこの文中に挙げた映画はまだよいとしても、他の映画の緊縛シーンには安易でいいかげんなものが多い。

つまり、縛られる女優のポーズはいつも同じ、カメラの構図も類型、せりふのやりとりも平凡で新鮮味がない。たかが責め場のワンカットぐらい、と安易に片附けないで、意慾的な監督なら、奇譚クラブでも読んで勉強することだ。手近なところで最近号の九月号をみても「吊りを加味したアイデア」という絵が、ていねいに描かれているのだから。大衆の喜ぶ映画に於て、緊縛シーンのないストリーは先ず無いのだから、監督といわず、俳優でも企画者でも、もっとこの面の研究をされたらどうか。

以前の奇クの記事によると、巨匠溝口健二



監督の書齋には奇クが並べてあったというのだが、私はそれを読んだ時、さすがはと思った。溝口ほどになれば、奇譚クラブの存在を見逃さないのである。奇譚クラブの存在の真実性を評価しているのである。本当の「責め」の心理も、人情の機微に鋭敏な者でなければ、感受し得ないのである。

### 次に大映作品の「豹（ジャガー）の眼」という連続活劇。これは全く

典型的な冒険活劇で、底ぬけのバカバカしさが楽しい。大人の俳優さんや監督さんが、大まじめにこのような映画を作っているところを想像すると、うれしくなってしまう。

それはさておき、女主人公の藤田佳子がだいぶ殴られたり縛られたりする。はじめに船底の部屋で、後ろ手に足首まで縛られ、恐怖の表情もよろしく、なかなかいい雰囲気です。ことにこの少女が東洋の或る国の姫ということで、中国風の上衣、ズボンを履いているのが目新しい。が、北原義郎扮する正義の快男子が救いに現れた時に、後ろ手と思っていたのが、実はただ手を背にしていただけで、縄は胸と腕をぐるりと縛っただけの、かんたんな縛りだったことがわかる。被縛体が新鮮



だったのでもまだ救われたが、興味は半減せざるを得なかった。これは意識的に縛らなかつたのではなく、やはり監督のミスなのである。

次に後篇にはいって、再び悪漢に捕まり、椅子に縛りつけられ、ムチで打たれる。ピシヤリ／＼キヤツという音と悲鳴がサディズムティックである。この時はクサリの前手縛りで、手からんだクサリが足をも縛っているのが眼を惹いた。北原義郎が救にくるが、合鍵を探してクサリの錠をあけるのが、細かい演出で気に入った。北原義郎がもどかしそうに錠をあけるのを、悲しみとよろこびの眼で待っている女が痛々しかった。

最後にまた椅子に縛りつけられるがこれは普通の描写で、特に記すことはない。たゞ笑いが止らなくなつて死んでしまうという怪しげな薬をふりかけられ、縛られたまゝ恐怖の顔でゲラゲラ笑うところが、変わっているといえは変わっている。

前に一寸述べたが、この女優は新人の部類に属し、私たちの眼にはまだ縛られ姿が珍らしく刺戟がある。いくら私たちにとって貴重な縛られシーンでも、女優がいつも同じで、ストーリーも雰囲気も変わりばえしなかつたら興味は薄れるばかりである。このことは奇クの方オのモデルにもいえることで、たまに新しい顔が登場すると、その印象は新鮮で強烈である。私たちの望みは眼新しい女優が次々と縛ら



れることだ。もっとも人によってそれぞれお気に入り、嫌いな女優だと縛られてもつまらないという方もあるから、これはいちがいには云えない。

次に東映の「怪猫乱舞」これは映画自体まことに俗悪でとるに足らないものであるが、後ろ手縛りのまゝ俯伏せに倒れ、したがって両手首にかけられた縄が、はつきりみえるのが取り得であった。

ストーリーは全くよくあるお家騒動の一つで、忠義な中老（月丘千秋扮する）が悪家老の一味に責められ、やがて斬り殺される。そこで、日頃月丘に可愛がられていた猫が主人の血をなめ、たちどころに「怪猫」となって「乱舞」するのであるが、そのシーンをもう少し詳しく述べてみよう。

悪家老の奸計にかかって、月丘千秋が庭前に縛られムチで打たれる。この責め場は割に迫力がある。千秋はムムムムと悶える。やがて斬られ、悲鳴一声前のめりに倒れる。時刻は黄昏頃で薄暗いが、後ろ手に縄がかゝっているのがはつきりみえる。千秋の愛猫が現われ、死骸に近づき血をなめる。と同時に猫の姿が忽然として消える。あゝ不思議や死んだ筈の千秋が顔をもちあげる。つまり猫が主人の死体のにろうつたのである。悪家老たちが驚くうちに、縛った縄から手がスルスルとぬける。怪猫の魔力というところ。

私のみたところ、このシーンはトリックではなかったから、背後の両手首の縛りはすぐ解けるように細工してあったのだ。したがってポーズのよさはとも角として、あまり緊縛感を感じられなかった。だが月丘千秋もそろそろ女優生活十年に近く、演技も向上しているの、その顔立ちと共に白衣の縛られ姿は哀感があり、暗い痛々しさがあって、雰囲気は本物である。この女優が出演した三、四年前の現代劇「東京市街戦」などという映画では、椅子に縛られ頬をなぐられ、後ろ手に縛られたまゝ必死に床を這っていく好シーンがあった。この時以来、この女優は何度縛られたことであろう。姉の月丘夢路と違って、愁い勝ちの面だちなので、マゾがかった役柄が似合うのかも知れない。

次に松竹映画の「あばれ侍大暴れ」の緊縛シーンを少しこまかく観察してみよう。これも原作は高木彬光で、探偵味のある時代小説である。水原真知子扮する夜桜お源という鉄火な姐御が「青竜秘文」という密書を持っているので、幕府の隠密の一派にねらわれ、責められる。牢屋の中で後ろ手に縛られ、割れ竹様のムチでピシリピシリぶんなくられるので凄惨な感じがする。私の隣の観客席で見ていた二人の女学生は「まあすごい」といって下をみてスクリーンから眼を避けていた。しかし私に云わせれば、縛ってある縄が直径

七、八分、或いは一寸もあろうと思われる程ふといので、かえっておかしい。あれでは緊縛はできない。まるで船で使う帆綱のようにごつく、バカふといのである。だから縛っても肉体に密着せずに隙間のありそうな感じである。人間を縛るには、やはり、やわらかい細引のようなものでなければ、肌にキュッとしまらない。よく形容に「縄が肌に喰い入って」とあるが、鉄材でもぶら下げそうな太綱で縛っても、第一手首のような細いところが縛れない筈なのである。ふとい縄で身体をぐるぐる巻けば、スゴイ責め場の雰囲気が出るだろうと計算した演出家の心もわからぬではないが、あまりコケおどかしだと却ってこっけいになる。

けれど考えてみれば、わずか二分か三分のシーンにこれだけこまかい観察をするのは、（あまり自慢にはならないが）おそらく私ぐらいなもので、監督に云わせれば「余計なおせっかいだ、一般の客はこれでも結構ハラハラしてきているのだ」と、いうだろう。

このシーンの前に、夜桜お源が吊り責めに逢う。この吊り責めは一寸だけだ。両手首を頭の上で縛られて、足は床から離れて、身体がブラブラ左右に揺れている。（しかしこれは私のみた所トリックであった）和服で両腕を高く吊られているので、袖がずっと肩までさがり、したがって腕が全部露出して、



色っぽさと、残酷さが入り混って、時代劇責めシーンとしては、すぐれているほうであろう。髪がくずれて顔に毛がふりかゝっているところは凄艶ともいえるし、伊藤晴雨老の喜びそうな図柄であった。

過去の映画の中で、これと同じような和服での責めは、日活の「緑はるかに」新東宝の「逆襲大蛇丸」日活「江戸怪盗伝」の中にもあったが、この「のんき侍大暴れ」の吊り責めシーンが、私としては最も印象に残った。

次に、日活の現代劇から一つ挙げておこう「謎の金塊」というアクションドラマ。河津清三郎扮する志津野一平という私立名探偵が登場するシリーズ映画である。泉圭子という、これも新人女優が縛られるのであるが、縛りそのものはここに取るあげる程のものではないが、縛りシーンの後にこんなアクションがあるので一言書いてみたい。

娘の父親は既にギヤングに捕まって、金塊の埋め場所を教えろと責められている。そこへ娘も捕われてきて父親と対面させられる。この時、娘の縄は解かれていて、娘の両腕は左右からギヤングの手下につかまれている。革鞭で首をしめられている父親をみて、娘は声をあげてもだえる。ギヤングはあわてて娘の両腕をうしろにねじあげて抑える。娘は必死にあばれて父親のそばへ寄ろうとするが、ギヤング二人につかまれて、まるで驚につか

まれた小雀のようである。その身もがきの痛々しさ。私はこのようなシーンにサディズムチックな刺激を受ける。いい加減な縛りよりかはえって興奮するのは、このようなシーンが動的だからだろうか。そういえば緊縛シーンというのは大抵静的であるが、思いきってダイナミックな演出をしたら、きっと素晴らしき近代的な責めシーンが現われるだろう。

最後に新東宝映画から一本あげてみる。「暴力の王者」という、神戸を舞台にしたギヤング映画。例によってキヤバレーだの酒場だの麻薬だのピストルだのがでてくる物騒なおはなし。新東宝の看板女優、久保菜穂子と水帆順子が、手首だけを後ろに縛られる。チラと見えたところ、手拭いのような布きれで縛られていたらしい、真白い手拭いで猿ぐつわを噛ませられ、その表情はいい。この映画も縛り場面よりも、三井弘次扮するギヤングに久保菜穂子が無理矢理麻薬を注射され、犯されるシーンに、見るべきものがあつた。カメラの構図と演出に、工夫が感じられた。

尚、同じく新東宝の「快傑修羅王」というチャンバラ映画。築紫あけみが土蔵の二階に荒縄で縛られるが、ワンシーンなのでとりわけ書き残して置くほどのことはない。細い荒縄で柱に入念に縛られているのが、ちよっと眼を惹いた。築紫あけみも新東宝ではよく縛られる女優である。時代劇「美女決闘」の時

後ろ手に縛られ立木から吊り下げられた好シーン、フアンズの眼に未だ新しいところである。可憐な姿態と容貌が、如何にも縛られ女優らしい。

これらの映画は「速報版」にも洩れていたもので、一応書いてみた。奇巧の映画関係の記事を読むと、私はいつもこうしたフアンズの意外に多いことを感じとる。

私は満員の客席に埋もれながら、このような責めシーンが現われると、時々あたりを注意して見る。すると、格別異常とも思われぬ一般の人々が、小さな嘆声をあげたり、眼の色がかわったり、顔がこわばったりするのを見る。その時私は、やはり異常と正常の限界はないのだな、こうしたシーンに反応を示すところを見ると、彼等も私たちも、やはり同じ性情をもった人間なのだ、と思うのである。

以上、私が述べてきた映画は「速報版」に載ったものもあるが、「速報版」ではわずかに五、六行で片附けられてしまう映画の中にも詳察すればこれだけの問題点がふくまれているのだ。この一文がフアン諸兄姉の共感を得ることができれば、うれしいと思う。

(おわり)

× × × ×



## お灸の女王コンクール

絵と文 岩 瀬 祥 一



女の背中をシリシリと火傷させるコンクール。若くて美しい女が、灸の数を競う。お灸の女王コンクールが岩瀬祥一お灸院で行われました。世は正にコンクール時代であり、各方面に於ても色々のミス日本が現出しておりますので、お灸の方でも「日本一」お灸の

強い女王様を選びだそうという訳です。

審査方法は、最も大きなお灸を数多く据えることの出来る女、そして熱がり耐える魅惑的な媚態を見せる女。それらの最高の女性がお灸の女王になるのです。併し、わたくしこそ、お灸の女王にならんものと、詰めかけて来た大勢の女達を、容貌、肉体美的な点も、入選条件としますので

純情可憐な娘さんから婀娜年増のお姐さんまで、七名が予選通過となって、あとはふるい落されました。

最も魅力ある女性、美しさに溢れた女性、それらの女性ばかり七名が選ばれて、お灸の熱さを我慢する為や、艾の数を少しでも多く

据えることが出来る為に、はり廻らされてある欄干に、両手をしっかりと後手に縛られます。芸者も、妾婦も、職業婦人も、淫売婦も女学生も、未亡人も、女給も、背中にそれぞれ四つ乃至六つまでの大きな艾をのせられ、火をつけられて、燃えてくる艾火により、背中を焼いてゆくのです。灼熱地獄の様な熱さから、どの女達も顔は歪み「ひいーっ、あつあつあつ、熱ちい！ おゝおゝ、ちゅちゅちゅちゅ、熱ちい！」と悲鳴を上げ乍ら耐えるのです。

もう／＼と室内に立てこもる線香と艾の臭い、そしてむーっとなぐさかえる女の体臭、更には女の背中を焼ける臭い。壮観というかすさまじいと云おうか、気の弱い者なら思わず逃げ出したくなるような光景である。彼女達は、こんな目にあっても、自分を魅きつけようという、すさまじい闘志を漲らせているからであろうか、それともお灸の女王になれるという憧れとか誇りとかを持っているからかも知れない。それは兎も角、栄えある女王様は誰が選ばれるであろう。一つ皆さんで、どの女性がお灸据えの女王になるか、選定してみてください。





小説的事実

天は知っている

宝塚二三夫

序(解説)

マニア三昧もロマンスグレーともなると、何かにつけ文句が多くなる。何十年間、仕放題のマニア振りの結果は斯くの如し。(決して不幸、不満でないから御安心下さい) 例に依り生々しい事実なので証拠品等は人道上發表出来ぬのが残念である

では、何故数多い中から特にこの話を取上げたかと云うと、ボク、と云うより大体マニアは相手と合意の上での事が通常であるのに珍らしく強制的に責めた話であるので全く小説同様のものになって終ったものである。マニアであり乍ら若い人、又はマニアであり乍ら十分マニアに徹し得ない方々に何か得ると

ころがあれば幸甚である。

「住所は」

兵庫県尼崎市杭瀬堂後二

「姓名は」

山上孝子

「年令は」

昭和十二年七月二十二日生れです。

「御家族は」

母と弟と三人暮しです。

「御希望は」

希望といつてありません。

「趣味は」

別にありません。

これは誰しも聞く入社面接時の第一義である。然しマニアであるボクには又別の見方もあるわけで、約五十名の応募者の中に選り出した孝子一人、ボクのめがねに適った条件、

一、肉付よい丸型の小柄である事。

一、平凡な内にもよく整った顔立。

一、小麦色でなく又、病的白さでなく血色よい白い肌である事。

一、娘々らしい中に理智的である事。

マニアであると同時に脚への異常な愛着を持つているボクが、この孝子の脚、脛、腓から爪先に至る迄に惚れて了ったのも最大条件の一つである。第一、近頃の娘には珍らしくパンプスの靴ズレたこは勿論、キズ跡一つないのを知ったボクが雀躍りしたのである。



今から二十年前F食堂の故照子の脚の想出を十分プラス出来ると知った時、年甲斐もなく胸を躍らせて終って平常の落着と順序立も忘れて「ヤンチャをする」と括るよ」とまで云って終ってハッとしたボクである、当然、孝子の一言は胸をわく／＼さす待言葉である。

——彼女別に驚いた顔もせず、ニッと糸切歯を見せて小笑顔、無言で軽くうなづく。別に特異に気を止めるでなく、就職に真剣な面持である。ボクも亦冗談的な言葉廻しの中に念を押す。

「じゃ、括られても構わぬ気なら明朝八時から役員室の受付係として入社して下さい。」

翌日、今迄の文子は秘書に昇進させて、

T短資会社社員証とスモック(事務服上衣)の孝子の希望に輝やいた姿はボクにフレッシュな楽しみを予約してくれた。

文子のボクの心を見透すような笑顔は何かテレ臭い感じである。(この文子の話等ははずれチャンスに別項として描くことにするが筋の進行上省略) 気心のわかるまで暫くは何の変化もないのであるが、二三日してからわかって来た事は、

一、口かずの少ない事。

一、人慣れせぬ事。

一、何か明朗さのない事。

それでもボクは衝立の横、小机の前で、切手、受発信整理等をし乍ら時折プランプラン

と振る円い脛、靴を脱いで足の拇指をピク／＼さすのを透し眺めて快よい気持ちになっている始末であった。

四五日目であったか? ボクが事務室へ出たのが八時四十分頃、いつもならスッカリ片付けて出迎えている孝子が、ボクの机の裏大型ガラス戸の外のポーチ、藤棚の下鉄平石畳を掃いている。遅刻と直感する。と同時に孝子もホウキを捨てて低い声で「お早ようございます」と云う。ツカ／＼とポーチへ出たボクは間髪入れず孝子の両手首を掴むと、藤棚の丸柱を背にして両手を後手にして縛った恰好で組合わした両手首をシッカと掴み、

「おくれたネ」

「ハイ、すみません」

余りの物寂しい感にボクはハッとして手を離した。孝子はチョット振返ってボクの顔を見ると、頭を下げて又ホウキを持って相変らず物静かに掃き始める。問題は縛りへのコースの可否であるのでボクの胸はやはり高鳴ったわけ。

翌日、同じケース、柱を背、後手に組合した手首に心なしか一しお力の入ったボクの手に、ピク／＼と握り締めたり十指開いたりした孝子、

「括るよ」と云うボクの声に打返すように

「かまわないワ、どうなりと」

あきらめ、と云うよりも淡々たる感情がほ

とぼしるような佗びた声である。

ボクは又ハッとして手を離した。然し「縛れる」と云う希望が胸一杯になってとても嬉しい気がして孝子の手首をさすっているボクの手が震えた。正九時に姿を現わした文子が「何をソワ／＼してらっしゃるの?」と又見透すように云う。それから人気のない折を見て孝子の机のそばへ行き発着信簿を見乍ら「何でもないようでも大事なお仕事だから」と言葉を切って孝子の手首を掴んでうしろへねじ廻す。斜め前かがみになって振返ると「気をつけます」といわれる。と冷たい感情が走って、又手を離す。徐々に正常縛りへのコースへ進んでいる。

一週後、例の如く何げない習慣的な風を装って手首をねじ上げようとするハッとしと氣を立てた風情で腕に力を入れて指をシッカと握り締めてガンとした抵抗で顧り真剣な表情で動かない。ボクの方もハッとして当がはずれて一応手を離すと無言のまま、

「今日はどうした?」と席に戻ったものの、その解釈に何かと不可解で結局娘の気まぐれと一人合点することにした。然し、今にも縄をかけさしそうな時、断平として反抗する時、そのホントウの理由がハッキリ判明したのである。そして、それがこの文の本筋へ入って行くのである。

(未完)





## 【体験記】

## 光りある中を (三)

## 「生保患者の記」

近東規矩也

昭和二十九年——この年の春は、降雪も少く、総じて暖かな陽射しの日が多かった。三月二十七日も朝から柔らかな気温であった。私達を乗せた台東福祉事務所の患者移送車は青梅街道をゆっくり下って病院に着いた。午前十一時を一寸廻っていた。堂々たる構えの病院である。正門を入り、玉砂利を敷き詰めた舗装路を抜けて玄関に到る。左側の植込みの奥に豪華な院長室を挟んだ新築の二階建の病舎が二棟並び、正面玄関は事務室、応接室と続き、長い病廊を見せて病室が二十八室並んでいた。手前の欧米様式の新築の建物を外来病棟、次を「新館」と呼んでいた。正しくは第三病棟である。第一、第二病棟は玄関裏の旧館の上下を称った。因みに外来とはこの立川市附近の患者さんが治療に来たり、入院したりしている病棟であり、新館は五年、六年と長期に亘って入院している結核患者ばかり

りの病棟であった。この新館はサナトリウム式の完全な病舎で、総ガラスを嵌め込んだ採光の巧みな構造であった。旧館の木造は、かなり以前の建築であつたらしく、特に二階の第一病棟（収容患者数九十名）などは、床板がきしみ反り、少しでも人員の加刺を見ると床が抜ける懼れもないではない。南側は兎も角、さぬだに冬期の北側の病室の寒気は殊更に厳しい。暗い中央の廊下は、ひねもす電灯を点けておかねばならなかったし、ひくい、すくけた天井、ベニヤ板の剥がれた病室、娯楽室とは名ばかりの、たけつけの悪いガラス窓は、もう数ヶ月間も半開きの儘、雨風の吹きさらしにまかせてあり、窓ガラスはまるで破れほうけていた。だから堂々たる正門玄関を抜けて、この旧館の第一病棟に上ると、人々は皆、云い合わせた如く一様に二度吃驚してしまうのである。前者はその近代築造美



を誇る技術の粋をあつめたと、まがうばかりな玄関の構造ぶりにであり、後者は、戦時中の兵舎を想わせるような暗い、角材ばかりを使った木造の、この第一病棟にであった。私は私達を乗せた寝台自動車に車廻しを上って玄関に横づけされた瞬間に正直、驚いてしまったものである。この素敵な「白亜の大病院」に今日から収容されるのかしらんと思うと、知らず識らず夢の中の幻想の世界にでも遊んでいるような錯覚に引曳り込まれてしまう。

受付で長い間、待たされた。型通りの書類に記入捺印を終えると「じゃ、病室へ行きます」

と年配の看護婦が云う。事務室の裏側の階段を上る。そこが看護婦勤務室で、茲で治療を受けたり、医師の診察が行われる。その隣りが倉庫で、布団や病衣が置かれてある。洗面所、便所を隔て、左右が病室になって、ずっと細長く続いていた。採光の悪い建物なので周囲は暗く、一様に湿っぽい空気が感じられる。私達は勤務室の入口で、いきなり宣言されたものである。

「着て来たものは全部脱いで裸になる、パンツもとること、病室に入る前に頭髪を刈ります。いゝですね、皆んな坊主になるんですよ」うむを云わずに裸にされてしまった。三人の若い看護婦と三十九年配の看護婦主任が私達を囲むようにして、せき立てる。流石にパンツを外す際には多少躊躇された。彼女等は（浮浪者のくせに、何が恥かしいのさ——）と云わぬばかりの冷たい眼で、従順する。つぎ、はぎだらけの、それでも、洗いたてた白衣が渡される。丈が短かい、紐もない。再生ガアゼの繃帯を帯代りに呉れる。着て来た私物は全部熱気消毒を施すということで、とり上げられてしまった。洗面所で雑役の老人がバリカンを器用に使って私達の頭の髪を刈り落した。手と足を洗わされて藁草履を貰い、始めて勤務室に通された。若いインタアンらしい青年が聴診器で型通りの診察をする、その足でレントゲン撮影に、明るい外来病棟に連れて行かれた。写真

を撮り、再び二階に戻ると、こゝで私達は各々別れて病室に入れられた。私は十三号室であった。この病棟は二人部屋、八人部屋、大部屋などとわかれていて、概して四人部屋が一番数も多かった。部屋番号は一号室から二十八号室まで、四と九の数字の部屋はない私の入った十三号室は病廊の中央に位置し、南側の北較的清潔な感じのする部屋であったが、勿論ベッド等はない。板の間に藁藁を敷き詰め、その上にマットを置いたものであった。六畳に四人の割である。この部屋の患者は結核が私一人、他の三人は外科療法を受けている老人であった。他の病室も同じようであった。開放性のガフキイ六号を出している結核患者が一般外科患者と同室であったり、腸捻転の開腹手術を行った患者が、第四性病を患っている人間と床を並べたりしている。与えられた寝具は綿の落ちた、薄い敷布団と同じ巾の、汗や血やあかで汚れきって、てかてかに光っている湿っぽい感じのする臭い掛布団が一枚であった。枕も無い。仕方なく敷布団の端を折って高くする。きたない寝床ではあったが、五日目ぶりで布団の上に横になれた訳である。私は疲れ切った身体を倒すようにして、どっと床に就くと、もう前後もわからなかった。五時にはうどんの夕食が出たが、何故か食欲もなかった。ただひたすらに眠りこけたい気持で一杯だった。こうして病院の第一夜を迎えたのである。

明くれば三月二十八日、四度び私を運命の死へ導いた未遂の自殺行為は、私をして、新しい人間像を一夜の裡に造り上げてしまっていた。私は再び生きる為に生きる斗いを始めたのである。そしてひたすらに生き抜く努力を尽くした。夜も朝も、又来る夜も、ただ生きたいと云う強い慾望に駆られて高熱とたふかった。半月目にストレプトマイシンの注射が行われた。パスが投薬され、黄色いイソニコチン酸ヒドラジドが併用された。ティピオンも調剤された。あれ程、激しかった腸結核も、声のつぶれた咽頭結核も、みるみる快



方に向い、旬日を経ずして肺の症状を残して他の疾患は全治に近いものがあつた。三十分で八六、一時間一二〇、二時間一四二もあつた血沈も、現在（昭和三十年二月一日）では八、一六、三二と、順調の経路を辿り、平均体温も三十六度五、六分を上下していた。ラッセルも消え、右の空洞は潰え去り、僅かに左に粟粒状の点を見える程度にまで長期の科学療法は奏効していた。そして私は現在、この病院の患者自治会の執行委員書記長を務めているのである。治療退院は来春を約束されていた。

× × ×

扱て医療法人財団の組織によるこの病院は当時、本当に酷い処であつた。昭和二十九年九月に発行された日患（日本患者同盟の略。東京都北多摩郡清瀬村にその事務局が在る）のパンフレットや療養新聞によると、「結核患者の生血をしぼりとる」病院であり、「この世に存在している最も懼ろしい搾取」病院であると訴えている。病院には一九五四年型のプリムスが一台院長の乗用車として車庫におさまっていた。もとより急患や遠隔地への往診に備えてであつたが、実際には、院長の家族が花見遊山や都内の映画観劇に使用される率の方が多かったようである。第三病棟と呼ばれる新館も、患者からの医療費の搾取による建築であるとの専らの噂ですらあつた。六月には更にヒルマンが一台購入されて、ガレイジは大きく改築された。炊事場の横に本建築の講堂が新たに出現した。これも入院費の搾取にまかせた結晶だと仄聞する。勿論、患者の慰安になどは許容しない。従業員や看護婦たちの、それは春の宵、ダンスに興じるホウルとして使われた。事務員家族の映画会の催などにはしばしば供されていたものである。

医師の回診は入院以来一度しかない。——と云う患者が大半であつた。まして院長の診察などは、とうてい望むべくもなく、中には院長の顔すら知らぬ患者があつた。入浴は週に一度、重軽症の別な

く、内科も外科も一緒に混浴させた。完全看護の基準によると（昭和二十六年四月一日民保収第三三二号）看護婦は入院患者四人又はその端数ごとに一人の割となつてゐる。ところが実際にはこゝでは十五人に二人にも当らぬ数の看護婦しか勤務していなかつた。しかも「完全看護では、その施設の看護婦が自身で、又はその施設の看護補助者の協力を得て、一切の看護を行うものであるが、そのうち患者の直接的看護は看護婦によつてなされてゐること、直接的看護とは病床にある患者の検温、検脈、身体清拭、摂食介助、病衣交換診療処置等患者の病状に直接影響のあるようなものをいうのである」が、病衣の交換は二週間、ひどい時には四週間も、あかに汚れた儘で放置されていた。従つて入浴出来ない患者の清拭や洗髪などは殆んど行われない状態で、胸廓成形術を実施した患者が一週間で、もう配膳室まで自分の食事を運びにゆかねばならなかつたし、その上手術時の血まみれの病衣を自分で洗濯せざるを得ないような雰囲気になつて看護婦達によつていじめつけられたものであつた。

不思議なことに、この病院には安静度が指示されてなかつた。当然、手術後の絶対安静と思われるような患者も、ガアゼ交換には看護婦勤務室まで治療を受けに自分から出向いてゆかねばならなかつたし、起き上つて食事の出来ない患者に食べさせてやるようなこともしない。不自由な恰好で食事をしてゐる患者の膳も、どしどし取り上げて片づけてしまふ。ましてこうした重症患者の洗面などはついぞ二度たりとして呉れたことはなかつた。下の世話に到つては特に甚だしかった。尿瓶はそれでも一日に二回、朝と夕、投げてくれたが深夜の溜まりきつた催尿には随分困却しぬいたようであつた。尿瓶の口一杯に溢れた尿は朝まで捨て、呉れる者もない。その患者は膨れ反つた下腹をおさえた儘で夜明けを待たなければならぬ。しかし冬期は兎も角、夏場には周囲の患者は大変な災難であつた。小便はそれ程でない迄も、大便に到つては閉口した。臭気が部屋一杯



に充満し、胸が悪くなる。仕舞には見兼ねて患者が、それ等の排泄物を処理するようになった。最も驚くことは病院でありながら、氷がかけらだに貯蔵されていなかった。全病棟通して三百人近い患者が入院していたが、外来を除いて第二、第一、第三病棟には氷がなかった。三十九度、四十度のマラリヤ患者やシユウブを起して高熱に喘いでいる結核患者にも氷は当てがわれなかった。夏期には水では何の役にも立たなかった。日曜日は文字通り「本日休診」の札が下げられ医師は不在であった。当直の看護婦が三人程、申訳程度に勤務室で小説本に読みふけり、生欠伸を噛んだりしているだけであった。こんな風であったから、患者の症状が極度に悪化すると、便所の隣の個室に、嫌応なしに運び込まれた。こゝは「地獄部屋」と呼ばれ、こゝに搬入された患者は例外なく死んでいった。看護婦の口を藉りて云うならば「もう駄目なのは、仕様がなしい」のであった。だから死期の近い重患は放任されて、殆んど見殺しにされた儘で終っていた。

このような状態なので、患者の死亡率は非常に高い数字を示していた。昭和二十九年の四月から八月末日までに三十七名が死亡し、二十八年などには僅か六ヶ月間に五十三名が鬼界に去った。一例を挙げるならば、多い日には一日に何と六名も霊安室に運ばれていたのである。更に特筆すべき事実は患者の給食費、医療費のピンハネである。もともとこの第一、第二、第三病棟は、全患者が国家から生活保護法の適要を受けている患者（生保患者）ばかりである。勿論、患者一人に対して月一万五千円の療養費が民政局から直接病院に払い込まれ、患者に対しては月六百円の扶助料（併給金）が支給される。これは理髪、衣料、其他日常品の齒磨用具や石鹸類の購入に充てられる。しかし中には単給患者と云って扶助料の支給を受けない者もある。これは該患者の父兄なりに多少でも生活能力がある場合に限られた処置であって、概して生保患者は併給患者によつ

て占められていた。

扱て、この病院は昭和二十六年六月二十六日に「完全給食の認可」を厚生省より受けていた。完全給食の意義について（昭和二十五年九月九日保発第六三三号）による厚生省保険局長通知の基準によると、「一般に患者の病状と嗜好とに適應する様、必要な注意が払われ、栄養量は、普通患者成人一日について二、四〇〇カロリー、蛋白八〇瓦、脂肪二〇瓦以上とする。従って一般に患者の側で食餌の補給をする必要がないと認められる程度の給食を行うことをいう」とあり、更に「給食賄費のうち、その給食用食品購入費（材料費）は十五点（一点単価十二円五十銭とし百八十七円五十銭）の六十四%（百二十円）以上とすること」と明示されていた。病院事務長は給食費の純材料費は一日平均百三十円程度使用していると説明しているが、実際には私が推定計算をやってみた処では、一日平均七八十円程度しか消費していないことが判明した。そこで炊事長を招致して訊ねてみたところ、矢張り「一日、七十円以下におさえ、調理するように」申し渡されていたことが解った。この数字から換算しただけでも毎月の給食費は三十万円余のピンハネがあった。従って、完全給食が認可されて以来のこの三年間には一千万円に近い巨額の金が患者の給食費から削られていたことになるのである。民生局保護課に提出されたこの病院の献立表によると、一ケ五円のシウマイが八円に、鰯一匹揚げるラアド代が二十円、朝のきうりの塩漬二切（大きさ三粒位）が四円二十銭など、まったく出鱈目な数字が報告されてあった。しかも結核の特効薬と称され、高価薬と云われる STREPTOMYCIN は福祉事務所を経て医療審議会に申請して許可を得るのであるが、四十本の許可を取ったものが実際には十二、三本で中止され、「必要がなくなつたから、症状の急変に備えてあとは保存しておく」と称してその儘になつてしまつた例も屢々あった。だから実際に使用した本数と申請許可になつた額との



間には、相当のへだたりがあることが察知された。のみならず、このストマイの注射に際しては看護婦が一本の大型注射器で六人、七人にも針も替えずに筋肉注射を行うのである。消毒も滅菌もあったものではない。針が切れようが、切れまいが、おかまいなしである。その上、一瓦のストマイ剤を五CCの蒸溜水に溶解するのであるが



な都内の病院に転送されてしまった。こういう状態のため、真実を口にして正義を叫ぶ者も何時か口を緘して、そつと成り行きを見守る外に策がないようであった。この間の事情を日患のパンフレットは「——こんなひどい病院がこの世に存在している」という見出しで次のように訴えているのである。

何分患者に目撃した者もないので、どれ程の水増しが行われているのかも疑問とするにやぶさかでないわけである。

このように全く非道い有様であった。私が入院する以前院長に不満を申し出て改善方を要望した患者もあったが、即日、福祉事務所に、その患者の私行に就いて、まったく出鱈目な通告が一方的に行われ、翌日には福祉事務所から移送車が廻され、強制的に有無を云わさず連れ去られ、転院をさせられてしまったのである。そして何とかして病院の改善に乗り出そうとしていた新館の患者三名は、（彼等は赤い患者である。共産思想をこの平穩な病院にばらまかれてはたまらない、どしどし出て行って貰う）と云って八月五日と六日の両日に、小さな都内の病院に転送されてしまった。こういう状態のため、真実を口にして正義を叫ぶ者も何時か口を緘して、そつと成り行きを見守る外に策がないようであった。この間の事情を日患のパンフレットは「——こんなひどい病院がこの世に存在している」という見出しで次のように訴えているのである。



(こんなひどい処が今だに病院の看板を掲げて、この世に存在しているのだ。患者を治療すべき病気が、こゝでは患者の生血をしほり金もうけの道具として、患者を入れておく場処になっている。死にたくない患者は、どんどん転院して行く、転院できる者はよいが、家族もなく、生活保護法で入院しており、転院の術を知らない患者、転院しようにもできない多くの患者は、病院に居ながら、みすみす病状を悪化させて、次々と死んでゆくのだ。これが私たちの入院している病院の実態である。こんなひどい処が病院として存在しているのだらうか、こゝに居たのでは殺されてしまう、みなさん、何とかして私達を助けて下さい。――)

ところが、これは私が見た病院側の施設や療養面に対する擁護に過ぎない。面白いのはこゝの患者の生血なのである。私は今まで、病院の実態を探究するに急であつた。これからは、この物凄く病院と対照的に話題に挙る、こゝの入院患者のうちの、殊に第一病棟第三病棟の患者の日常性を客観的にのぞいてみよう。勿論、私もこの中の一人であることは言を俟たない。第一、第三病棟の患者は全部生保患者である。即ち、殆んどの者が生活に喘ぎ、病いに斃れたものばかりである。カルテには一、二人の人間を除いて、他はことごとく住所不定と記されてあつた。しかも前科を犯して刑務所を出て来た者、ヒロポンやチクロパンなどの麻薬の密売を生活の糧にしている、ポン売と称する者、ダフ屋(劇場の切符をプレミアを付けて売る商売)フウ売(汽車の切符を売りつけたり、座席料を取ったりする商売)が多く、所謂顔を売りものにして盛り場(新宿、浅草、池袋、新橋等)を喰いものに行っているやぐざがいる。彼等は喝上げと称する、恐喝行為を以って渡世のならいとしている。それから獅子舞いのお神楽師、地方廻りの芝居者、盛り場で露天教授をやる囲碁師、中には何となくパチンコでもやって一日を送っていた青年もある。彼はパンパン達に客を斡旋して、なにがしかの謝礼を得るポン

引きをやったり、薬売の手伝いをやる。劇場のモギリ嬢と親しくなつて木戸御免で映画を観る。パチンコ屋の店員をダチ公(友人)にして、一日そこで遊んでいる手合いもある。真面目なニコソンの労働者や、靴磨きを生活にしているような人間は少かつた。これは男性の側であるが、女性の患者に到つては淫売が断然多かつた。それも洋パン(外人を相手とする売春婦)シキパン(乞食淫売)とさまざまであつた。勿論、中には戦災で両親に死別した娘や、ポン売をやつていた中年女もいないではない。しかし云うなれば、いずれもが世の喰いつめ者ばかりが患者の第一病棟であつた。この病院は、これ等の患者にとつては人生の終着駅でもあつた。だから、誰一人として、早く癒つて、もう一度社会人として復帰したい、仿きたいなど考える者はない。なるべく、のんびりと骨休みをやりたい、出来れば一生こゝに居ついてもいいのである。又、それに結核という病気は、そう短期間に治癒するものではない。三年、五年は普通なので、思いきり、面白おかしく生活をしたのである。外科と違って、めつたに痛い、苦しいの自覚症状もない。ただ無理をすれば疲れる程度のことしか解らないから、この点、至極具合がよい訳である。三度／＼の食事の心配も要らない。だまつていても朝の八時になれば看護婦が床頭台に配膳して呉れるし、祭日や祝日のもの日には袋菓子や汁粉も出る。月々六百円の併給金も貰える。食べて寝て、好きなようにして一日を過ごしていればよいのであるから、実際こんな有難い制度は、そうさらに他にあるものではない。生活保護法様々である。免に角、することがない。だから閑でやりきれなくなる。刺戟がない。重症患者は別としても、一般の結核症の者はまったく耐え切れないものだ。しかも病院も極めてルーズであるから、安静時間も設けてない。患者は好きな時に起きたり寝たりする。小人閑居して不善をなす譬えで、そろそろ悪の愉しさが頭を抬げ出す。娯楽雑誌にも飽きると青春の血汐は、止まるところを



知らない。女患者と恋愛する。それもプラトニックな恋などと云うものでは毛頭ない。そのものずばりの方で、恋愛というよりか、お互いの交歓を娛しむに過ぎない。いわば、その瞬間だけをよるこんでゆく、刹那的な享樂が、こゝの患者間のレン・アイであり、恋人同志なのであった。とにかくこれはまことに奇異な生活現象ではあった。

しかも彼等は大多数が台東区の福祉事務所の管轄によって斡旋されて来た患者ばかりなのである。台東区と云えば上野、浅草が中心である。従って彼等の生活も上野、浅草を中心として分布されていた。ノガミのパン助、地下道のルンペン、ヤマの住人、エンコのテキ屋、山谷のドヤのニコヨン、「男娼の森」で名高いオカマ屋（女装の淫売）等である。

山谷といえ、こゝには山谷の人々が多いのにも驚く。昔の歌に「流れ／＼て落ちゆく先は——」と云うのがあるが、山谷のドヤ街は、まったくその落ちゆく先の一つであった。浅草から吉原に抜けて十分程、都電の山谷町を中心として、山谷三丁目と四丁目、この二つの町全体が簡易旅館の通称ドヤでうずまっていた。電車通りに面したところには、みかけは綺麗な、旅館の名にふさわしい建物も有るには有ったが、一寸足を奥へ踏み入れてみると、薄汚ないアパートともつかず、しもた屋ともつかない家が軒並みにならんでいる。看板に「勉強本位一泊七十円」と大書して掲げてあるドヤである。そしてこの町の百四十軒のドヤに大体七千人の人間が生活していた。しかもこゝに住んでいる人達は殆んどニコヨン、日傭い人夫、パンパン、フウ売等、いわゆるその日暮しの者ばかりである。ヤド銭は一日ごとに払わなくてはならない。仕事にあぶれても、病気になるっても、これは必ず取られるのである。しかし権利金も要らず、移動証明の必要も無く、簡単に入り込めることや、それに皆同じような環境に生活して来ている人達ばかりの集まりだけに利用者は多

かった。それに人の出入りは実にめまぐるしいばかりで、どんな人間が、どれ位住んでいるのかという確かな調べも警察はやっていない。彼等はどこまでいっても「流れ者」なのである。こゝでは移動証明が一個の商品として売買されている。彼等はこれで外食券を貰い受け、この食券をまた売買するという訳である。——こゝから浅草寺病院に搬ぎ込まれ、二、三日して福祉事務所の移送車で入院して来た患者が多い。

上野も全く同じケエスである。上野駅の地下道は「無料宿泊所」として全国的にも著名な存在である。こゝからは浮浪者や男娼などが送られて来た。

愛称「熊さん」という二十八才になる青年がいる。彼は金杉の都電通りに店を出している下駄屋の息子であったが、少年時代から浅草の雰囲気捲き込まれてしまい、店の金をくすめて家を飛び出してしまった。山谷のドヤ住いをして、パン助の「姐さん」につかえて、ポン引きをやった。その小遣い銭で麻薬を打っては、ひっくり返っている男であった。彼がボン中（ヒロボン中毒）にかゝって、こゝにかつぎ込まれて間もなく、「姐さん」であるパンパンが結核で転がり込んで来た。だから熊さんは、いまだに娼婆の恩義を忘れず、易々諾々として、この「姐さん」に仕えているのである。

「ガンちゃん」という二十の青年がいる。彼はエンコの興行師の稲村某の飯を喰ったこともあると云う。入院前まではテキ屋の甲州屋一家の若い者で通っていた。今年二十だったが、がっちりした体軀はどうして力道山のよりに逞ましい。彼は喝上げの名人である。新仲見世のパチンコ屋を一軒潰した程の豪の者だ。いやがらせをやつてパチンコの玉を捲き上げるのである。一日に光を二百箱も持って帰る。それが十日も続いたのではたまったものではない。その為の開店早々で身売りをやってしまった話は彼を嚆矢とするそうである。

x

x

x



何時か病床は涼風を娛しむ季節となっていた。早いもので、もう入院以来半歳になる。娯楽室は今日も賭博でにぎやかであった。朝食が済むと、患者達は各々痰コップや牛乳瓶を持参して娯楽室に集まるのである。ダフ屋の顔役が胴元になっての御開帳であった。トランプを使った、おいちよ株というやつである。八の数をおいちよと云い、九をかぶという。今日は日曜日なので病院も「本日休診」で医師は一人も居ない。看護婦は勤務室で編物に余念がなかったし、天下御免の賭場であった。娯楽室は窓をとり払って、涼を入れるのであるが、ひどい人いきれでむんむんする。おまけに梅雨明けの湿気から、ねばつく温気である。それでも白衣一色の娯楽室はたちまち活気づいて、中には双肌脱いで、女郎蜘蛛の勇ましい文身をひけらかして張切る兄貴が出て来る。親が四枚の札をまく。張り子が拾円づゝそれぞれの目に張ってゆくわけである。「三・三六法引くべからず」とか「八・八六法見ずに引け」とか云う。思案六ぼうというのであった。「ちんけに負ける豚もある」と云って張り子がよろこぶ。七台に六の札が来た。もう一枚引くと八である。それで目数は、ちんけ（一）と下ってしまったのでがっかりしていた処、何と親の目は零で、つまり豚である。「八、一くるくる車屋の株」「二・三・四は岡崎の株（三州岡崎をもじって云う）」

と唄うように口誦み、親は株が出ると満悦であった。またゝく間に親は三百円程せしめて、次に胴が移った。この胴は小心もののボン売屋なので勝負は少さく、あっけなかった。やくざが胴をとった。これはお手のものとこととて札をさばく手先も鮮かであった。





「四つ一、九つ一、親のかき目」と叫んで、札をたゞきつけた。確かに四台に一の札を揃んでいた。言葉通り張り子の金をかき集めてしまった。二度目も五す、で勝ち続けた。子は各々三すんと四つやであった。あやしい魔力といえよそれまでであるが、三年、五年、長いものは十年も、おいちよかぶをやつて来た者ばかりである。それでもこの親の強さに、ただ精気が抜けたような顔をして、ぽかんと、やくざの札を眺めていた。三度目の親も立った。ようやく賭場は殺気を帯びて来た。張り子は五拾円から百円を張つて来た。それも無人の境をゆくようにして、親の手元に集まつてしまった。再び親が廻つて来た時に、ポン売屋は一たん病室に帰つて療友から八百円を借りて来ていた。親で潰された彼は、張り子で、それを取り戻したかった。しかし今度もんで歯が立たなかつた。八百円はみる間に持つてゆかれ、来月分の併給金六百円を賭けたが、これもそっくり、やくざの親のものになつてしまった。彼は「もどり」を百円貰つて、すぐご娯楽室を出て行つたが、その晩、病院からとんづら、をしてしまった。借金で博打の金だけで二千余円の額になつていた。

看護婦が昼食を配つても、誰も食事を摂りに部屋を立つ者はない異様な空気の中で彼等は痰を吐き散らし乍ら、活きものののように札を扱った。

その夜、やくざは賭博に勝つた嬉しさから、焼酎を買つて来た。

七、八人の仲間で「三楽」の四合瓶を五本も空けた。夜中の一時近くまで勤務室にとぐろを巻いて看護婦をからかっていた。まるで飲み屋のような馬鹿騒ぎをし抜いた。翌朝、はげしくシユウプを起すと、大咯血をして、一週間を待たずあつてなく死んでしまった。

月曜日——昨日の賭博に負けた連中が各病室を廻つて金策を始めた。おどしたり、すかししたり、懸命である。しかし誰しも六百円の

手許では、融通するだけの余裕は更にはない。揚句の果てには、ジャンパ、ズボンが競売に出された。五拾円足らずの値で落札された。だからこゝの「ノミの市」は本当に安い値で物が手に入った。バンド二拾円、洗面器四十円である。因みに理髪は、手の器用なのが、剃刀をうまく使った。一人頭三拾円でおめかしが出来た。賭博は併給金が支給されて一週間位がさかんであつたが、それを過ぎると、大体金が一方に落ちてゆくので、もう親が立たなくなり、自然、次の併給日まで沙汰止みの状態になった。

煙草は新生が一番よく売れた。結核患者は嚴禁を申し渡されていたが、外科の患者が許可されているので、何時か、そんなタバウもなくなつてしまひ、皆、平然と喫煙して、はゞからなかつた。十円でパイプを買い、一本が完全に灰になるまで、のんだものである。どうにも困ると朝早く、外来患者の待合室に出掛けて行つて、その吹殻入れをあさつて、かき集めて来たりした。非道いやつになると、夜明けをねらつて小使室にしのび込む、朝の掃除に出掛ける不在を待つての早業であつた。新生や光を一包み窃盗して来ると、一時間またゝぬ間に半値位で病室に売りさばいてしまふ。彼等は、やはり仕事には実に敏捷な行動を執つた。アルミニウムの食器や膳を貯め込んで、立川市まで運び出し、その金で高砂町の色街で一晩遊んで来る患者もあつた。そんなスキヤンダルは跡を断たなかつた。

(未完)

## 私のアイデア

を募る

本誌の口絵写真、口絵絵画、分譲写真、等に使用する皆さま方のアイデアを募ります。採用の分には、撮影写真のキャビネ版或は絵画の原画を贈呈します。適当なアイデアは誌上に紹介の上、読者の方々の批判を仰ぐことにいたします。

(編集部)



近頃書店をのぞくと、先ず眼につくのは新書版のハンラン。純文学であれ、大衆小説であれ、書き下し小説、探偵小説に至るまで、なんでもかんでも新書版。エロ随筆などは体裁のいゝ表装にかくれて、かなりきわどいものも沢山ある。ひとたび奇クの誌面に載せると発禁になりそうな文章もこゝでは大手をふって横行している。

次に眼につくのは、大衆娯楽雑誌が増えていること。それも安

易な小型本でなく、頁数もどっしりと厚く、

内容もしっかりしたボリウームのある雑誌が多くなっている。

店頭を一渡り見廻し

ても「キング」「講談

倶楽部」「大衆小説」「傑作倶楽部」「捕物小説集」「小説倶楽部」「読切倶楽部」

「講談と読物」等々々。

この中で、「キング」だとか「講談倶楽部」などは大衆雑誌としては老舗で、また編集も良心的である。が近頃どうも見たところ大衆の好みは、戦後派の「大衆小説」他の双葉社発行による一連の雑誌に傾向している風潮がみえる。

## 大衆雑誌と責絵

青山三枝吉

双葉社は徹底した大衆追従主義で、このところ大分発行部数を伸しているのではな

いか。毎月発売日近くの新聞広告をみても講談社に負けぬ位のフアイトが感じられる

それはさておき、最近になってこれら大衆雑誌の挿絵に、責め絵、縛り絵が多くな

ない。しかし、近頃のように、それが一冊の雑誌に二篇も三篇も、そして、どの雑誌を開いてみても必ず、というのは一体どうした現象だろうか。

機をみるに敏な編集者が、大方の読者の傾向を察しての現われか。需要があるから供給するの。こゝで私はこのような現象をよいとか悪いとか云々するのではない。よくないことですね、と無責任に慨嘆してみれば良識家として世間からは賞められ

た。けだ。もしようが私はたゞ事実を報告しているだけだ。その縛り絵もたんなる綺麗事のポーズでなく、次第に工夫を加え、迫真性を持って来ている。凄惨性を帯びて来ているのだ。ひとところの奇クの挿絵のように。

面白い現象だと思ふ。

奇クが店頭から姿を消したことゝ、一般大衆雑誌のこのような変化とを結びつけて考へるのは、私の速断だろうか。

そして又、当局がいくらにがい顔をして、大衆の欲求というものは押しつぶされることなく、芽を出してくるものだという

ことを、私は苦笑しながら思うのだ。もちろん、以前からこのような大衆雑誌に責め絵が載ることは、決して珍らしくは



## 犬 捨

— 青 葉 楨 —

(一)

九月に入ると、毎日のように雨ばかりで、又梅雨が戻って来たのかと思われた。

一寸の心算で立寄った伯母の処でつい時間を過し、大分遅くなったのを悔い乍ら家の近く迄来た私は、先刻から又降り出した雨の中を、ワイシャツ一枚で傘もささずに歩いて来る男をみると、思わず足を止めたのである。向うも様子がおかしい。よろめくような危い足どりが、酔っているのとは違う。ジッと見てみると、外燈の点った電柱の下迄来て突然バタリと倒れて了った。

急いで駆け寄ってみると、男は前のめりに水溜りへ上半身を突込んでいた。

「モシ——。何うしたんですモシ、しつかりなさい……！」

そう声をかけ乍ら、併し私は未だそんなに事を重大だとは考えていなかった。瘦せた男の身体を抱起し、その顔がガクンと仰向けになったとき私は初めて愕然としたのである。

頬の削げた鬚だらけの顔にダブって、狼のように剽悍で残忍な憲兵曹長の顔が浮んだ。余りにもヒドイ変貌——！だが、間違いはない。

「杉坂の兄さん……兄さん……銚三さん——！」

私は声を顫わせて、遠縁に当る男の名を呼

び、二三度強く揺ってみたが彼は空しく頭を振るばかりで、臉を開こうともしなかった。

幸い私の住居は其処からはもう三十米とはないので、抱くと云うより引きずるようにして、とりあえず彼を運んで行く事にした。

上背のある、見るからに逞しい軀つき。陽灼けた顔に、何時でも獲物を狙っているような鋭い両眼。固く結んだ唇の端にひとを嘲けるような笑いを刻んで、肩で風をきっていた、憲兵時代の杉坂銚三の面影が、雨の縫う暗い空間にチラつく——。

夢の中を歩いているような不安と、息苦しい歓喜とが、交錯しつゝ頻りに私の心を襲った。

普段は不自由な一人きりの暮しを、その時ばかりはよかったと思った。それ程私は、彼の姿をひとに見られたくなかったし、まして触らせたくはなかったのである。

先ず何よりも濡れた衣服を脱せなければならぬ。ベッタリと貼りついたワイシャツの釦をはずすのも、もどかしく引剝すと、肌着は無く、いきなり胸部がむきだしになったが、その途端私はもう少して声を立てるところだった。骨の浮いた蒼白い皮膚の上を、虫の匍うように幾筋もの不気味な傷痕が、電燈の光を受けて赤黒く光っているのである。

(何うしたんだろう——！何の創だろうか！)

急いでズボンも脱ってみると、下には何も



つけていず傷の痕は下半身にも及んでいる。凝然と見詰める私の身内を、不思議な戦慄が走り過ぎた。

失神したまゝの杉坂は半ば開けた唇から苦しげな息を吐いている。不安ではあったが、此の異様な傷痕を医者に見せるのは何かはゞかられた。ともかく寝巻を着せ床へ入れると、飲み残しの葡萄酒があつたことを思い出し、少しづつ口に注ぎ入れた。と、やがて彼は眉の辺りをピク／＼と痙攣させると、眼を開き、まぶしそうに私を見上げた。

「銚三さん！ 気がつきましたか——。僕です。槇一ですよ。判りますか……？」

私は思わず大声で云つて、顔を近寄せた。

「——あゝ、槇一君……！ 君は何うして此処に居るの……？」

「判るんですね。此処は僕の家ですよ——」

「——君の家——じやあ俺は？——ネエ、俺は一体何うしたんだらう……？」

「それは——僕にも解りません。貴方は道に倒れていたんです。それを僕が連れて来て上げたんです」

懐かしい杉坂のバスを聞いている中に、私の睫は濡れて来た。奇妙な邂逅ではあったが亦感動もそれだけに一入だった。

「——さア、考えるのは後にして、今夜はゆっくりとお寝みなさい」

「うん……。槇一君。判りかけて来たよ。雨

が降ってたんだ……。雨の中を俺は彷徨ってた……。そして、卒倒した……。俺は疲労してたんだ。すごく疲れてたんだ……」

「そうですよ。貴方はとても疲れているんです。グッスリ眠らなければ駄目なんです。苦しいようなら医者を呼びますけど、でも、今夜は様子をみて、明日にしましょう。僕が看病して上げますから大丈夫です。安心してよくお寝みなさい。ネ……」

と子供に云い含めるように云うと、彼はコックリと肯いて眼をつぶった。

私は、その晩、とう／＼一睡も出来なかった。暗い中に杉坂の不規則な寝息を聞いていると、昔のことが色々と思ひ出されて来る。

親戚にはなっていない、杉坂家とは随分離れていたし、何時も彼と一緒にいたわけではない。逢うのは一年に一回か二回、偶に私の家へ遊びに来て二三日泊ってゆくとき位だった。少年の私には、粗暴とも云える彼の男らしさが此の上もなく好ましいものに思われ、四六時中傍につきまといていたが、或る年の冬、二人で入浴した。そのときから一層私には彼が愛しくも懐しくなり、その気持は今も変わらず続いていた。

九年振りの、思いがけぬ再会。彼と二人きりで居ると云う事実が、私には不思議でもあり、何か空恐しい気さえしたが、やはり身体中を駆け廻る嬉しさは何うすることも出来な

かった。

勤務先から一週間の休暇をとって、一心に看護した甲斐があつてか、杉坂はメキ／＼と元氣を取戻し、すっかり元の丈夫な軀になつた。

彼と暮す毎日は、私には恰で新婚家庭のようになしく幸福だった。

十月初めの日曜日。私は彼を誘って郊外へピクニックをした。野菊のこぼれる堤に足を投出した杉坂の脇に顔を埋めて、甘酸い体臭を嗅ぎ、衣服を透した肉体の温かみを頬に感じ乍ら、私はうっとりとしていた。空は高く澄みわたり、後の雑木林では頻りに百舌鳥が囀っている。

「槇一君——」吸い差をポンと川の中へ抛ると、杉坂は静かな声音で、

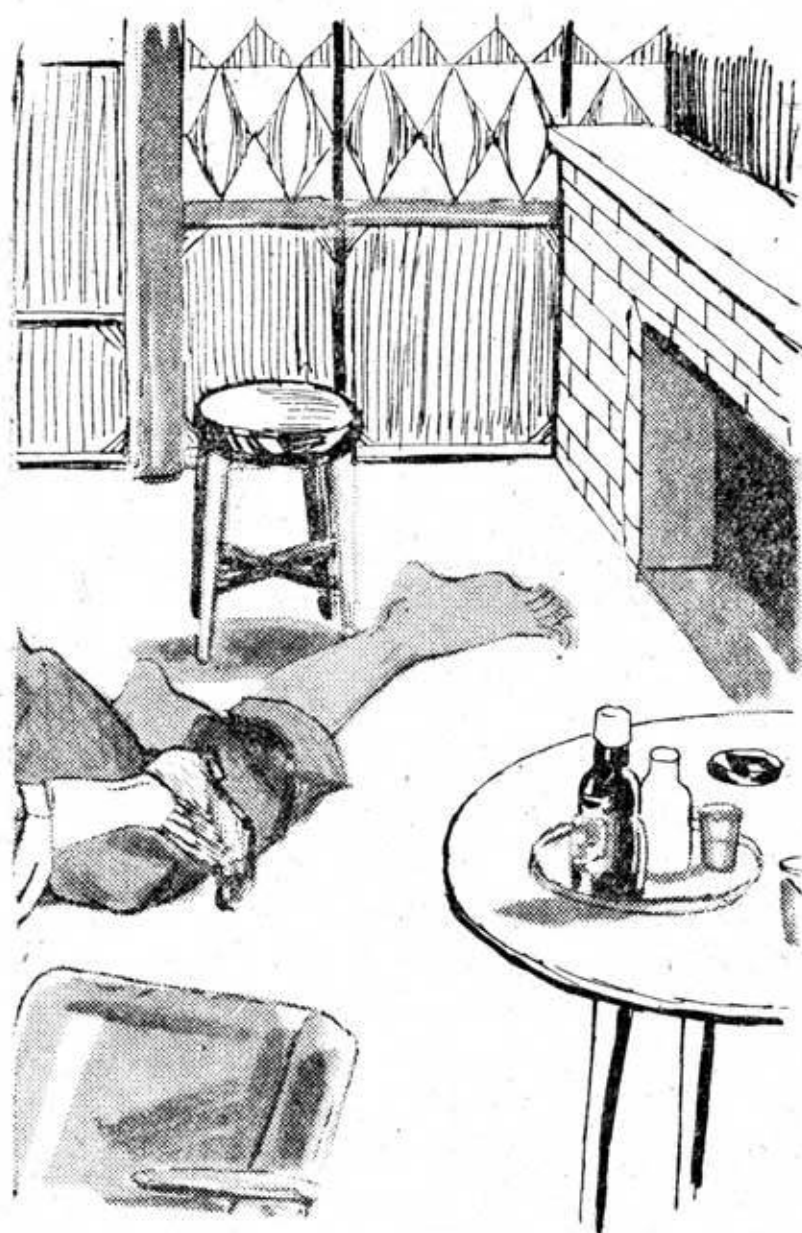
「——俺は、一度は君に話さなけりやいけな」と思つてたんだ。あの夜の事を……」

と話し出したのは、彼の身体にあの妖しい傷痕をつけた、世の常ならぬ体験だったのである。

## (二)

杉坂銚三が、東宝映画「七人の侍」を観たのは、丁度行き合わせていた名古屋の封切館だった。その映画を観る氣になつたのは、只評判がいゝから、という理由に過ぎなかったが、眼に見えない悪魔の手が、そのとき既に





劇場の中から彼を手招きしていたのかもしれない。正面の扉を押して這入ると、スクリーンでは、三船敏郎の扮する浪人菊千代が、禪一本の裸になって、溪流から鯉を手掴みに捕るところだった。

休憩になると、煙草を喫む為に廊下へ出た杉坂は、ソファにもたれて雑誌の頁をパラ／＼やっている青年の指に紙巻がはさまっているのを見ると、ツカ／＼とその方へ近寄っていった。

「——恐縮ですが、火を一寸……」  
「ア、どうぞ——」

煙草を差し出し乍ら青年が膝の上で閉じた雑誌の表紙を何気なく見ると、それは自分も興味を持っている本なので、杉坂は急にその青年に親しみを感じて来た。

歳は二十七八になるのだろう。青年は髪を長く伸ばし、何か病的な大きな眸をしている。皮膚は蒼白く神経質そうだが、ベレー帽に、エンジのカッターをのぞかせている服装は、明るい感じで、よく見ると、何処かに未だ純真な子供らしさが残っているようだった。

杉坂は、紫色の煙をプウツとふいて、  
「何うです。やっぱり評判になるだけあって

素晴らしいじゃないですか」  
「えゝ、本当に——！僕もスッカリ感動しちゃいました……」  
「こんなに重量感と迫力のある作品は、日本映画には一寸珍らしいでしょう」  
「そうですねエ——。それに、僕——あ

そこが良いと思いました。ホラ、捕虜になった野武士が——」

「あゝ、縛られて、地面の上を転がり廻り乍ら泣き叫ぶところでしょう」

「そうですね！僕思わず昂奮しちゃって、まだ胸がドキ／＼してるみたいです……」

そう云うと青年は、頬を上気させ、凝と杉坂の浅黒い顔を覗めた。

それから暫くの後、杉坂とベレーの青年とは、恰で恋人同志のように仲好く連れだって劇場を出た。

杉坂銑三が、自分をマゾヒストとして自覚し始めたのは、皮肉にも彼が憲兵曹長として外地に勤務していた時である。彼は表面サドを振舞いつつ、心の中には次第にマゾに傾いてゆくのを、どうすることも出来なかった。

その矛盾は、当然彼をひどく苦しめた。

部下の揮う笞の音を聞き、吊されたまゝ、悲鳴を上げて苦悶するスパイ容疑の男の肉体を見ていると、杉坂の血は逆流するようだった。そして遂には、凄まじい嫉妬と、突き上げて来る激情に委せて、部下の手から笞を奪うと、狂ったように、続けざまに打擲した。やがて、その男が満身血塗れとなって失神すると、杉坂は不意に笞を投げ捨て、恰で自分自身が撻たれでもするかのように、床に打倒れ激しく身をもむのである。  
彼は又度々、部下に責められる夢をみた。





「僕にとって、今日は本当に好運でした。貴方にお逢い出来たんですから……。僕は永い間、貴方のような方を、どんなに探し求めていたか知れないんです——」

広小路の喫茶店でコーヒー・カップを口に持っていて、ベレーの青年はそう云と、好もしうに杉坂の男らしい貌へ笑いかけた。

「僕だって同じことです。君みたいな美しい相手が出来たかと思うと、急に世の中が楽し

尤も名古屋からは三時間足らずですけど——」

「そんなこと——君、イヤ、貴方の来いと云う処なら、何処へだって従って行きます」

「そうですか。では——これからすぐに駅へ行きましょう。確か、二二時一五分の上りがあった筈です」

列車がH駅に近ずくと、青年は杉坂を連れて洗面所へ這入った。

「いゝですか。これからは、一切僕の命令通りにして貰いますよ」

「は……」

そう答える杉坂の身内には、もうジン／＼と疼くような異様な感覚が匍い始める。

青年は、シヨルターから両眼用の眼帯を取出すと、杉坂の眼を覆った。裏側に黒い布が幾重にも当てゝあり、眼を開けても、視ることは絶対に赦されなかった。

「此の眼かくしは、家へ着く迄ってはいけない。わかったね」

杉坂が肯くと、青年は彼の手を引き、人に怪しまれぬよう、もとのこには戻らずに、次のこへ移った。

やがて列車はH駅に着いた。時間は〇時を大分廻っている筈である。杉坂は駅前からタクシーに乗せられた。自動車は深夜の街をかなり長いこと疾っていた。その間三度も乗次ぎをさせられたし、眼は見えないので、杉坂には今自分が何処を疾っているのか全く判らなかつた。やつと車を捨てたかと思うと、今度は二百米ばかり歩かされて、ようやく一軒の家の前へ着いたらしい。暫く鍵を開ける音がしていたが、まもなく、杉坂は目かくしのまゝ家の中へ導かれ、少し廊下を歩いてから、青年は一寸立止り、

「地下室へ下りるから、足もとに気を付けて——」

と注意した。

覚悟して、いや自ら望んで来たものゝ地下



室と云う言葉は、妙にドキリとするものを感じさせた。

その夜から、杉坂銃三は、以前防空壕に使っていたと云う、床も壁も天井も冷いコンクリートの、箱のような地下の一室に監禁され美しいサデイストの意のまゝに、責めさいなまれ弄ばれる身となったのである。

こうして、夢のような日は瞬くまに過ぎていった。

或る日。もう少し正確に云えば、九月初旬の曇った夜。突如として不幸がやって来たのである。

疲労でウト／＼としていた杉坂が、靴の踵で蹴上げられ、吃驚して眼を開けると、ドサツと頭の上にズボンやシャツが落ちて来た。

「それを着るんだ——」

青年の、如何にも面倒くさそうな声が聞える。「はい」とヨロ／＼と乍ら起上った杉坂は、素肌に、ワイシャツを着、ズボンを穿いた。

青年は黙ったまゝ、ポケットからあの時の眼帯を出して、杉坂の両眼を覆った。

門を出ると自動車が待っていて、彼はそれに乗せられた。青年は一口も口をきかない。杉坂は次第に不安になって、ソツと眼帯を押えた。

眼かくしを外されたのは、真暗なひどく淋しい場所だった。眼の前には、余り高くはな

いが雑木の繁った山が黒々と覆いかぶさり、願れば、遠く迄拡がっている田圃の果に、星のような灯が、心細くチカ／＼と瞬いている。「サア、此の山へ登るんだ」

青年は懐中電燈を点け後から促す。腰の辺迄来る笹を分け乍ら、何度か跌いたり滑ったりして、やつとのことで少し広い処へ出た。

「——此の辺でいゝ。オイ、裸になれ」

「ハ、ハイ……」

「おい。裸になるんだよ！」

「ナ、なります——」

杉坂は顫え声で云い、着ているものをあわてゝ脱いだ。

懐中電燈を石の上に置いた青年は、馴れた手つきで、杉坂を後手に松の幹へ繋いだ。

（あゝ、此処で責められるのか——）

そう思うと、彼は安堵と共に新に起った喜びで胸を一杯にして、媚びるように青年を見上げた。

だが、青年は冷い眸で一べつして、

「オイ、よく聞くんだぜ。僕にはもうお前が不要になったんだよ。お前はそんなに弱って了ったし、それに第一お前には厭きて了ったんでね。新しい相手ももう見付かった。お前は役にたゝなくなつた犬さ、可哀想だが此処へ捨てゝいくよ。諦めてくれ——」

「そんな——！イ、嫌です！私は、貴方に捨てられたら生きていられません。お、お願い

です！ 今迄通りお側へおいて下さい。後生です。一生のお願いです！ お願いします。ど、どうか、私を——」

杉坂は涙をボロ／＼こぼし、身を採んで哀願した。

大粒の雨が、ポツリ／＼と落ち始めた。

青年はクルリと背を向けると、幼児のように泣きわめく杉坂には見返りもせず、無表情な顔でズン／＼山を下りて行った。

恰で繋がれた犬が縄を脱けようとして暴れるように、杉坂は死物狂いで身を藻掻いた。

縄はさして固くしてはなかつたと見え、三十分余りそうしている中に、とう／＼脱すことが出来た。

見廻すと先刻脱ぎすてた衣類がそのまゝである。ビタ／＼に濡れているのを絞りもしないで着ると転るようにして山を駆け下りた。

勿論青年の姿は影も形もなかった。度々来た事はあつても、その割にはH市の地理に暗かったし、それに終戦後はすっかり変つていく。彼は、痛む軀を引摺り／＼、オイ／＼と声を上げて泣き乍ら、灯の見える市中の方へみじめな恰好で歩いて行った。

### (三)

杉坂の告白は、私に異様なショックを与えた。日が経つても心にひつかゝつたまゝでいた。そうして、彼を弄んだという見ず知らず



の青年に対する敵意のようなものが、ブズ／＼と燦り出してゐた。

併し私の生活は、彼がいる限り張りがあった。毎日いそ／＼として勤めに出掛け、退ければ真直に帰つて来る。

その日も私は、肉屋で五十匁のトンカツを二枚買つて口笛を吹き乍ら帰つて来たが、見ると玄関の戸に錠が下りていたのである。そんなことは今迄に一度もない事だったし、それに私の帰る時間はわかつてゐるのだから、何もその時に家をあけなくともと思うと、私は急に不機嫌になり、ガチャ／＼と乱暴に鍵を廻した。

夕食の支度がすっかりと／＼のつても、杉坂は未だ帰らない。

その中に時計が八時を打つ。私は少し焦々して来た。先に食事をする気にもなれず夕刊を隅から隅迄読んで了つたが、それでも彼は戻らない。九時になり、十時も過ぎた。卓袱台の上の布巾に、白々と電燈の光が落ちてゐる。腹立たしさの中に、次第に不安が大きくなって来た。

(何処へ行ったのだらう——?)

そう考えると、勝誇つたように笑つてゐる美しい青年の貌が頭をかすめる。見たこともない貌なのに、その幻影は鮮明だった。そして振払おうとすればする程、尚執拗にまつわりついて来る。



何時か強くなり出した風に雨さえも加わつて、外は暴風雨が近付いてゐる気配である。

私は騒ぎ立つ胸を押えかねて、何度か玄関へ駆出しそうになった。そうして、とう／＼一時になった。

突然玄関の戸が開いた。私は弾かれたように立上った。

玄関のたゞきに私が見たものは、頭から濡鼠になって、幽霊のように立っている杉坂の姿だった。だが安堵より先に怒りの方がムラ



く、とこみあげて来て、きめつけるように  
「何処へ行つたんですか。こんなにおそく迄  
——？」

「——ウン……」

「早く上つたらどうです。そんな処にグズ  
くしてないで——」

オド／＼した様子で突立つたまゝでいる彼  
の手を掴んだ私は、邪慳に引っぱり上げた。

「済まん……赦してくれ——」

杉坂は私の剣幕に当惑したのか、泣笑いの  
表情を浮べて、卑屈な上眼使いをする。

「そんなことより、サッサと服をお脱ぎなさ  
い。感冒でもひいたらどうします」

私は荒っぽく彼の身体から濡れた衣服を拵  
りとった。

「ごらんなさい。猿股迄ビショビショだ」

ガタ／＼顫えている彼へ、投げつけるよう  
にバス・タオルを抛ると、

「本当に、何処へ行つてたんです？どんなに  
心配したか——」

と又云いかけて、私は急に口を噤んだ。そ  
の後に来る彼の返事が恐しかったのだ。

「済まん。君には悪いと思つたが……我慢し  
きれなかったんだ——。出来たら、もう一  
度だけ、あの青年に逢いたいと思つて……」

だが駄目だった。市内であることは判ってい  
ても、方角の見当はつかないし——

「当り前ですよ！無理なことはきまつてるじ

やありませんか。それに、貴方は其の人に捨  
てられたんでしよう。それを今更——みつと  
もないとは思いませんか。血迷うのはおよし  
なさい——！」

爆発したように噴上げて来る嫉妬に、私は  
自分が何を云っているのかも判らなかつた。

いきなり杉坂の手からバスタオルをひたく  
ると、雨戸を開け、荒狂う暴風雨の中へ力ま  
かせに突きとばした。不意をくらった杉坂は

アッ、と叫ぶと、もんどり打たせて庭へ転り  
落ちた。そして泥まみれの顔を泣くように歪

めて、沓脱石へ這上つて来たところを、私は  
ビシヤリと雨戸を閉めた。

「オイ、開けてくれ！俺が悪かつた……」

謝る。謝るから、開けてくれ。オイ、オイ、  
な、頼む——。お願いだ。開けて、開けてくれ  
エ——」

雨戸を叩き乍ら、され／＼に叫ぶ彼の声を  
サルを押えたたまゝ聞いている私の胸の中は、

外の嵐にも増して、激情が猛立っていた。

「ハハ、さんさんそうしてほざくがいゝさ。  
あんたは、此の家が嫌で出てつたんじゃない  
か。何処やらの美青年の方がいゝんだから、

其処へ行つたらいいだろう——。僕の気持は  
お前なんかには解らないんだ。もう用はない  
よ。畜生……。何処へでも行くがいゝ！」

口惜しまぎれに、唾でも吐くような調子で  
そう呶鳴ると、私は手早くレイン・コートを

はおり、革バンドと懷中電燈を手にして、雨  
靴を穿くのももどかしく、玄関を出て庭先へ  
廻つた。

杉坂は私を見ると、転るように寄つてレイ  
ン・コートの裾に縋りついた。

「オ、お願いだ。赦してくれ。ナ、俺が悪か  
つた。赦してくれ。赦して、くれ——」

「うるさいッ！」

私は靴で彼を蹴とばした。

「アア……」と悲鳴を上げて、仰向けさま  
にひっくり返つた杉坂の軀を懷中電燈の光が

追つたとき、私は異様な戦慄と共に、己の加  
虐性を目覚めたのである。

車軸を流す豪雨と狂奔する風の中で、私は  
悪鬼の如く鞭を振った。水を吸ったバンドは

情容赦もなく唸りを上げて、杉坂を泥の上に  
のたうち廻らせた。

それから、どの位時間が経つたか。

停電で真暗になつた部屋の中で、雨と泥に  
まみれた杉坂と私とは、向き合つて坐つてい  
た。

「——楨一君。俺はもう、君を離さない……！  
今迄俺は、君というものをよく知らなかつ  
た。君は素晴らしいサディストだ！俺は君が

好きだ俺はもう君のものだ……！ あゝ、も  
う二人は離れてはいけないんだ。決して、離  
れてはいけないんだ——！」

喘ぎ／＼、嚙のように云い続ける杉坂の咽

喘ぎ／＼、嚙のように云い続ける杉坂の咽



喉の奥から欬くような声が洩れる。

ドドツと雨戸が揺れ、又一際風雨が募った

らしい。

(おわり)

## 私の浣腸プレイ

### ラヴマン

先ず、私の持っている道具を御紹介します。アメリカ製の半透明ビニールのイルリガートル、容量二千CC、肛門用と膣用両方の嘴管が付いています。同じくラテックス製の物、これは真赤な色でチャージングです。いずれもメンスバンド位の大きさになり、いつも私の鞆に入っています。

ガラス製イルリガートルに、千五百CC五十CCと三十CCのガラス製浣腸器、三十CCの方はシリンドラーの中にグリセリンを入れる事が出来て、花村恵美子さん愛用のを送って頂きました。初めてこれで浣腸した時の感激は忘れられません。ラテックス製エニマシリンジ、アメリカ製大型スポイト、二百五十CC、直径一センチ位の太いカテーテル二本、

さて浣腸プレイをするにはホテルか温泉

マークのバス付の部屋を借ります。バスルーム内にトイレのある部屋の方が我慢の出来るギリ／＼迄注入出来るので便利です。

最初グリセリン液を三十から五十CC位注入し、次は濃い石鹼液をイルリガートルに満たし、二千CC全部注入してしまします。グリセリンで刺戟されている後に濃い石鹼液を大量に注入するのですからその苦しい事、でもこの苦しさは好きなのです。その後少し熱い位のお湯で三四回浣腸します。グリセリン座薬も好きで、時々使います。フランスでは飲み薬は胃に悪いので、どんな薬でも肛門から注入したり、坐薬にして挿入したりして大腸から吸収させるそうです。大人でも体温は肛門で計る由。でも、いつも一人のプレイではつまらなくなってきました。もし美しい女性とこ

んな事をしたり、されたり出来たらという期待に、私の胸ははち切れそうです。

次に私の「浣腸プレイ」についての夢を述べてみましょう。奇ク誌上に数々の告白を発表された浣腸マニアの花村恵美子さんとは、奇クの幹旋によって度々文通することが出来ましたが、私の理想としては、花村恵美子さんのように、「浣腸嗜好」に理解のある女性と、心ゆくまで語りあい、浣腸プレイを楽しむことです。

女性の方は、引つ込み思案と云いますのか、花村恵美子さんのようには、中々心の底から打ち解けて語ってくれませんので、大変残念ですが、きっと広い世の中のことですから浣腸に強い関心を持っていただける婦人が居られることゝ思います。只、そういう方々の眼に触れないのだと思います。

どうか、奇ク愛読の女性の方々、私達浣腸マニアのために、どし／＼名乗りを挙げて下さるよう大いに期待いたします。

(おわり)



# 受刑生活の思い出

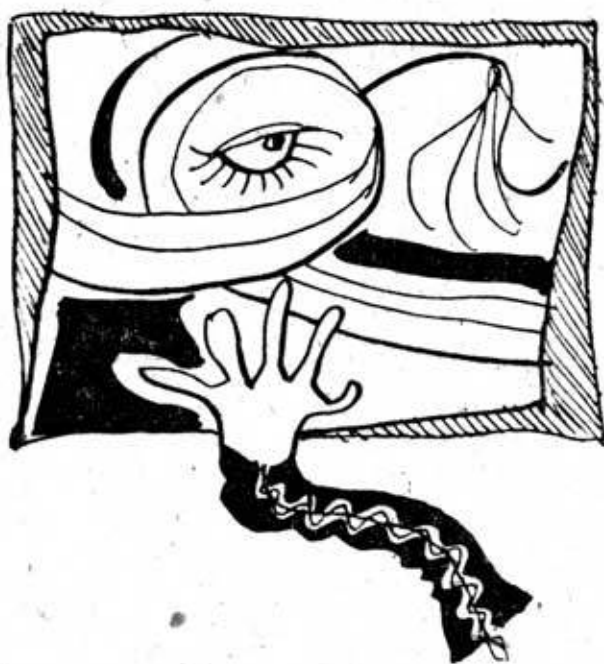
福 村 光 治

私は以前に強姦傷害事件について、自分の犯した事を告白いたしました(註、本誌三十一年八月号、「玉稿落穂集参照」)今度はその罪によって刑務所へ送られた私の受刑生活の体験を告白致します。

刑務所の生活や受刑者の待遇、雰囲気(風紀)は、ずっと春田一郎さんの書かれた「幽十カ月」や三根耕二さんの「少年矯正院体験記」等で詳しく紹介されておりますので、私は受刑生活の中でも、特に変わったところを選んで書き抜いてゆきたいと思ひます。

私は昭和二十一年より二十七年までの足掛け七年間の永い間の刑務所生活でしたので、その間、刑務所を四カ所変つております。この間の日常生活は、春田一郎さんが詳しく書かれておる通りですから省きます。

受刑者に反則は付き物と言われております



が、正にその通りです。反則とは、してはいけないときめられた事を敢て犯すことを言うのですが、私達受刑者は、自由刑の執行を受けているのですから、何をするのにも、担当さんの指示を受けねばなりません。担当さん

の許しがなければ何にも出来ない有様です。だから、受刑者は概してマゾ的な立場に常に立たされているわけです。従つて、辛い受刑生活そのものも、マゾ的な気分浸つていられる者にとっては、結構楽しい処でもあるわけです。勿論、これは全部が全部の受刑者の味うことの出来るものではないでしょうが、私自身の体験としては、相当数の人が、知らず知らずの中に、そういうマゾ的な雰囲気浸つていくということが云えると思ひます。

私は六年間の受刑生活でやった仕事は、次のようなものです。紙細工、燐寸細工、藁細工、便捨、内掃、運搬、指物大工、印刷工、メリヤス、等、私も最初の半年位は、刑務所の内部については、何の要領もわからず、何をして楽しい事なぞ一つもなかったのですが、馴れるに従つて要領もわかり、刑務所の



生活も楽しくなってきました。

昭和二十一年より二十三年頃迄は、私はH刑務所でメリヤス工をしていましたが世間は物資の統制のきびしい折でしたから、刑務所も待遇が悪くて困りました。特に食塩が不足していました。朝は味噌汁なのですが、味噌を使ってくれるのは週に一回位のもので、他は塩汁です。その塩水も食塩が不足して、ますますから、海岸へ行って海水を汲んできて、それで汁を炊くという仕末ですので、その味と

いったらお話にならないものです。

こういった有様ですから、受刑者の反則も極度に不足している物資の方へ傾っていったのは当然です。食に不足していたら食物一方ですし、食が満たされたら、タバコとか同性愛とかといった調子です。だから、その頃の私も食気一方でした。反則というものは、しかけたら止められないものです。何故、反則が面白いかと云えば、やはりそのスリルが忘れられないのだと思います。単調極まりない受刑生活の中に於いて味うことの出来るスリル。これが受刑者を敢て犯さなくともよい反則をさえ、犯さしめるところの魅力となっているのでしよう。

反則は、鵜の目鷹の目で監視している担当さんの目を盗んでやらなければならないのですから、中々むつかしいものです。若し発覚

すれば当然罰を受けねばなりませんのですから、そのスリルは、又、何んとも云えない面白さなのです。私は、メリヤス工で軍手を機械で織る仕事をしておりました。その仕事の事業主というのが、前科のある人で刑務所の内部の事情をよく知っている人でしたから、都合がよく、事業主が仕事の材料を持ってくる時、タバコ、アメ、菓子等を秘かに混ぜて来、それと交換に、内部の製品や洋裁の服地などをゴマ化して渡すのです。

ところで、アメや菓子は工場内で食べるこ

とが出来ますが、タバコは房へ帰ってから、担当さんにかくれて、ゆっくりするのが又、なんとも云えないよい味なのです。然し、反則の中でも一番重いタバコを房の中へ持つて入るといふことは、これ又、並大抵の苦勞ではありません。裸検身のある中を通って房の中へ持つて帰ろうというのですから、容易ではありません。しかし、同房の者たちは、なんとか、かとか工夫して皆うまく持つて帰るのには、最初の中は私も感心しましたが、自分も馴れると結構やれるようになりました。そして、その時のスリルがなんとも云えない魅力でした。

私が刑務所にいる間に封切された「脱獄」という映画に、刑務所の内部の様子が詳しく出ていたらしいですが、聞くところによりまずと、タバコにつける火をおこす事や、ガラスを鏡代りに使ってシケ(担当に見つけられないように番をする)を張っている事やら、房で作ったマメグソ(豆草履)を耳の中へ入れて出て、飲屋で金のかたにおく所が出ていたそうです。

タバコに火をつけるのは、色々の方法があります。手箒の葉を使って、原始人を思わせるようなやり方で火をおこすのが普通です。これは春田さんの「幽囚十ヶ月」にも出ていました。こういった苦勞してやるのも、又、結構楽しいものなのです。又、同性愛についても、一般社会では想像もされない色々の事があります。男ばかりの世界で、女気というものがないのですから仕方ありませんが、恋愛といっても、普通の社会で男女が恋愛するのと少しも変わりありません。又、時には男娼を商売にしている男が受刑者として入ってくることもあって、こんな時は、面白いことになります。

こうして、私の受刑生活も次第に楽しくなってきた頃、K刑務所へ移送されることになりました。K刑務所へ移送された当初は、又初めから新入りですが、要領はわかっていましたから馴れるのは早いので楽です。こゝでの私の仕事は、最初は紙細工でしたが、次いで内掃に変わりました。K刑務所は今までのH



と違って大分小さい方なので、内掃の者は便捨も運搬も兼ねてやらねばなりません。内掃というのは、所内の清掃ですから、朝は朝食前に、表事務所の掃除に行き、帰って朝食をすまして、それから舎房の便器を替え、次は所内の清掃に廻ります。昼食が済むと、又、所内の清掃、草引き、ドブさらえ、工場の便汲み、等が一日の日課になっています。

その中で、運搬があれば二、三名が出てゆきます。石炭や米運搬の時は重労働なので、六・七名もゆきます。この運搬というのが、私達受刑者にとっては、一つの楽しみとなっています。一日か半日か、その時によって違いますが、なににしても娯楽の風に当れますし、町の風景を見てこられるのですから、それだけでも、社会と隔絶されている受刑者にとっては、大きな特典です。

だが、この運搬で所外へ出てゆく者の人選が、正担当さんの権限で、いつも真面目に働いている者や、担当さんにウケのよい者、それからウサギ（逃走のこと）の気のない者が選ばれるわけです。その点、私は恵まれていて、運搬の度に出して貰いました。こういう事は何処でも同じですが、平常から真面目でないと、いつも損をします。刑務所では、中で仕事するのと、外に出て仕事をするのでは担当さんの扱い方が違います。内部で使っ

ているような使い方をしていると、皆、スキを見て逃げ出しますから、自ら扱い方も変わってきます。そして担当さん自身も、勤務時間中はタバコを吸うことが出来ない規則になっていますが、外へ出れば吸ってもよいことになっています。

受刑者にとっても、所内ではタバコなどには触わりも出来ませんが、外へ出れば、良い担当さんだったら呉れます。又、悪い担当さんでも、自分が吸ったあとの半分ほど残った吸いざしを、吸えと云わぬばかりに手近い所へ置いて、そ知らぬ顔をしております。それだけ、内と外では違ってきましたから、何をするにしても都合がよいわけです。石炭や米の運搬は重労働で余りよい仕事というわけにはゆきませんが、野菜や魚の運搬は、青果市場や魚市場へ行くので、色々と面白いこともあります。それらを詳しく書きたいのですが、次の機会に書くことにします。

最後に、私が反則で罰せられたときのことを少し書いてみましょう。今迄書いてきたような好いことばかりではありません。反則もわからず済んだら刑務所も住み難いところではありません。見つかったときの罰の怖さといったら、尤も、そのために、皆真面目に働くわけですが。

最初の中は、私も随分警戒はしておりますし

たが、馴れるに従って次第に大胆になってきます。そうして、初めの中は小さなことを、コソコソやっていますが、いつの間にやら大きなことをやらしますから、つい発覚するということになります。私の反則が見つかる四、五日前に、洋裁工の田中という男が、担当と組んで大分大きな反則をやったのが挙げられました。その反則というのは、洋裁に使う相当大量の服地を流していたのです。この男の取調べで、相当ひどいヤキ（仕置）を入れられているのを見ましたが、その時は惨酷なことをするものだ、と思って見ていましたのに、すぐ、自分の身の上にも同じようなことが降りかゝってきたのは皮肉なものです。

この男は担当を仲間に入れているので、口を割ったら担当さんに迷惑がかかるから、中々頑張りました。それだけ又、ヤキもひどかったようです。後手手錠をいれられ吊下げられた上、竹や電線の鞭で、むちやくちやに打ちさえられていました。「ひい、ひい」という悲鳴がこだまして無気味でした。その中氣絶してしまふと、すぐ縄を解いて水をぶっかけて息をふきかえして、又鞭で打つという具合に、一調べに二回ぐらい気絶させる有様でしたから、とても傍から見えていられたものではありません。

次の日、折柄十一月のうすら寒い日でした



のに、片手錠をいれられ、池へ裸でほうり込まれていました。これは（ぼうせいぐ）という革で出来ているチヨツキのような物で、これを着せられ、ボタンとバンドで締められ、水をぶっかけられると、革が締って息が詰って気絶するといった一番ひどい道具です。これを一回かけられたら、三年は寿命が縮まるそうです。現在は、これは禁止されているそうですが、私が居った当座は使っていたのです。

私は、この男の反則が発覚したあと、十一月十八日、朝、表事務所の掃除に行った折、担当さんのすきを見て、事務机の抽斗を開け中にあったタバコ、光二個を持ち帰ったのです。いつも、掃いたゴミの中から吸いさしを拾って箒の柄に詰め込んで持って帰るのですが、馴れてくるにつれて大胆になったのですね、掃除が済むと検身を受けて、それから食堂へ帰って朝食をとるのですが、身体につけておれば検身のときみつきりますので、雑巾桶に入れて、上から雑巾をかぶせておいたのでみつきりませんでした。それでも検身のときはビクビクものでした。

朝食が済んでから、何喰わぬ顔で自分の房へ入れておきました。一日の作業が終って夜になって、こっそりと吸う煙草の味は又、なんと云えないものです。その日一日は夜に

なるのを楽しみに、まあ無事に過ぎましたがその次の晩、点検がすみ、やれやれ今日は一日過ぎた、ゆっくりタバコでも吸わして貰いましょうか、と、やおら吸いかけた時、夜勤の担当さんに見つかってしまいました。すぐ房の外へ引っぱり出され、戒護へつれてゆかれました。

タバコの出所や、房で誰と誰と吸ったか、をきびしく調べられました。友達を出すわけにはゆきませんので、あくまで一人で通しました。タバコの出所はかくすわけには参りませんが、最初はどう答えようかと大分迷いました。いずれにしても、取調べのときの訊問には極力否認しましたから、後手錠をはめられ、私の場合は「テツポウ」といって片手を肩から背中へかつぎ、片手を下から背中へ合わせて手錠をはめられました。只、はめられただけでも腕が痛くて辛抱出来ないのに、手錠に縄をかけて、天井の梁へ足の爪先が地面に少し着く位に吊下げられ、電線のムチで打ちまくられました。

私はたゞ、「うむ、うふうふ」とうなるばかりでした。それでもまだ白状しませんので、更に一層きびしく打ちすえられ「いひいひいひ」と悲鳴を挙げました。そのうち、吊ってある縄を少し緩めて白状するように迫りましたので、タバコの出所だけは白状し

ましたが、友達のことはあくまで言いませんでした。そうすると、又鞭で打ちまくりますが、私の腕はもう痺れてしまっているの感覚はありません。ようやく、二時間あまりの責折檻でやっと許されました。

房へ帰ってみると、その時の私の顔は倍ほどにも腫れあがり、そして身体中、鞭のあとが紫色に腫れて、その夜は痛くて痛くて眠むれませんでした。普通、又次の日に調べられるのですが、私はそのまゝ何の音沙汰もありませんでした。あとで判ったことですが、私達の正担当さんと私がタバコを持ち帰った盗られた担当さんとは、野球友だちでしたので二人の方から嘆願して下さったので助かったのです。

その時に受けた手錠で手の甲に喰い込んだ傷が今でも残っています。腕の痺れは一月ほどなおらなかったように覚えていますが、色々、とりとめのないことを書きましたが、まだ書き足りないことは次に書くことに致します。

（おわり）

「お断り」「玉稿落穂集」は、誌面の都合により、本月号は休載いたします。次号を御期待下さいませ。



## 現代マゾヒスム芸術時評

(復ノ三)

原 忠 正

## 復刊第七項、第八項

## 波蘭土映画「アウシュヴィッツ

## ツの女囚」

## 佛蘭西映画「夜と霧」(未公開)

共に戦時中に悪名高かった独乙の敵国人収容所を題材にした映画、前者は、当時収容されていた人が戦後に記憶と報告とに基づいて製作した劇映画、後者は、独乙側の手による記録映画と戦後の同収容所を撮影した聯合國側の記録映画とを編集した実写反戦映画である。前者は映写時間約二時間、後者は約三十分であるが、良風美俗を害すること、特定の一国を対象とするという政治的な見地から、戦後珍らしく、本邦公開が禁止された。映画が、娯楽の為に製造されつつある聖林の方針とは甚だかけ離れた意図によって製作されている映画であるだけに、両者共に一般に与える刺激と感動は大

きい。前者はすでに、本年二月頃松竹洋画系に於て封切られ、すでに番線外に落ちたものであるが、やはり時々は上映されている様である。(例えば、都内では下十条ニユー・パール映画に於て、七月廿四日より三十日迄上映、但し三本建の中の一本)共に黒白のごく質素な映画ではあるが、まず前者、「アウシュヴィッツの女囚」について云えば、劇映画だけに起承転結も十分意を配っており、女性対女性の関係での特定の地位と相違が、烈しい対照を以て描かれている。所長である女士官は、この収容所での大量の殺人や、懲戒的な理由による射殺、日常の如く行われる鞭打等のすべてを指令し、実行する。曾ってマクヌス「ヒルシュフェルト博士がその浩瀚な著作「戦中戦後の性風俗史」(Sittengeschichte von Weltkrieg; Sittengeschichte von nach Kriegszeit = 邦訳「戦争と性」)及「戦後の

性」)に著したロシア革命当時の有名な女秘密警察員の現代風な再現がここに発見される。鞭が如何に当然の如くに無援の状態での俘囚達の上に揮われるかということ、そうして、犠牲者達が、他の残忍な行為に對して示す程の反感を鞭打に對してだけは持っていないらしい事、ひいては、他日立場を逆にした場合、今の犠牲者も亦同様に——他の残虐行為や虐殺に對しては自制するとしても、——鞭打による懲戒を平然と行うであろうこと、これらは充分に注意に価する事実である。画面は特に誇張されたかと思われる汚らしさが常に背景となつてゐるし、ここには一片の诗情も、感傷も直接的には存在しない。ひとりマゾヒスムに関心を持つ者にとっては全篇が雄渾壯重なサディズムの大敘事詩である。その刺戟力は卓越しているし、一貫して湛えられている淫虐の香気は蒼然眼を掩わしめる。泥濘と汚辱とに終始するこの現代史劇の一篇は後世に今世紀ゲルマン民族女性のサディステイクな性格のきらびやかな開花を伝えるのであろう。後半には場面的に秀絶した鞭打場面がある。

後者「夜と霧」については、筆者は未だに実際には映写を見る機会を逸しているが伝えられる種々の情報と発表されたステイクル写真によって、相当に反戦的な色彩のみ



の強い宣伝臭の強い作品の様に思われるが前者と異り実写である点に強い興味が注がれる訳である。

【附記】旧作映画の中の一部、特に北欧、南欧の旧作やワーナー・ブラザーズ作品の多くが、東京ではナイト・シヨウ（夜十時頃からの特別興行）に現われるので、洋画上映館（通常番組は邦画であつても、ナイトシヨウが洋画である館を含む）を此処に紹介しておく、番組は通常二、二日替りである。

一、オデオン座	新宿	35	二九〇六
二、	中野	38	六〇七一
三、	北沢	42	〇三八八
四、	阿佐谷	39	〇三四四
五、	吉祥寺	〇三六〇一五	
六、	荏原	78	六六二〇
七、	新宿ニュー・オデオン座	35	七一四三
八、	高円寺平和	38	四六二五
九、	大山文化	96	一八七四
十、	大井町銀星座	49	八八三一
十一、	池袋エトアル	97	六二六一
十二、	幡ヶ谷文化	ナ	不明
十三、	板橋大都	ナ	不明
十四、	平和シネマ	95	三六九六
十五、	平井映画館	68	〇一一五
十六、	平井エトアル	68	一五七〇
十七、	高田馬場アイシス	37	九四四七
十八、	中野大映	38	二〇一三
十九、	高円寺映画	38	四三六三
二十、	大井スズラン座	49	八五三一

二一	蒲田大映	73	四〇三二
二二	荏原プリンス	78	〇二九〇
二三	雑色銀星座	ナ	不明
二四	板橋劇場	96	五六三九
二五	本所映画	63	三一二二
二六	神楽坂武蔵野館	33	九九九六
二七	杉並映画	38	二六一八
猶、	下十条ニュー・パール	91	二七三九甲
エビス本庄	46	四一五一	目黒パレス 49 七四
七六等の三、	四本立の一本	一九三〇年代	の歐洲作品がよく出る事を附記しておく。

### 復刊第九項「親の許さぬ仲」

#### メル・ケインソン画

（本邦出版「現代生活のバイブル誌」第三十九号 第二二頁 黒白版）

この漫画が、米本国で何日程どこで何誌に発表されたかも、又作者の経歴も皆目判らないが、只右の本邦出版物が「艶笑アダムとイヴ全集」という副題を持って居ること、それから、此の画風が、米国の定期刊行物に散見されるものであることだけを併記しておく。絵は一見して判る様に、人馬獣と白人娘との淡い恋情を湛えて、夢幻的でさえあるが、マゾヒスト好みの空想（特に、若し、この二人が意気投合して駆け落ちでもしたときのこと、ひいては彼等の奇妙な結婚の生活のこと等々）の無限の翼を与えてくれよう。沼氏はその博学を傾注し

て旧刊の『手帖』の中に「犬人」——（Hundemensch）を伝えたが、ここに誇らかに舞いめぐる幻想はより巨大な肉体とより完璧な服従を要求されるべき人馬獣である。犬は誤ちなき限り愛撫をうけ、決して苦痛を与えられる事はない。犬に対しての意志の伝達は多く言語を以って為されるが、之に反し、馬は、その意志の伝達に於て、人間との接触の瞬間に於て常に苦痛によつてのみ支配される。言語による伝達は甚だ尠く、且又常に補足的なものである。此の比較を以って、人馬獣に想いを致すとき、読者は、即座にこの画が時評によつて採択された意味を窺はれる事と思う。

### 復刊第十項「映画女優モニク・ヴァンヴレン」

#### ヴァンヴレン

（Monique van Vooren）米週刊誌 Picture Week 一九五六年七月三日号第五三頁右側

此の写真は新進女優モニク・ヴァン・ヴレンが舞台女優として進出している事を報じた右米誌が Strictly Monique という特輯に挙げた四枚の写真の最後のものであり、同誌の表誌も、この衣裳のモニクの別のポーズによつて作られている。写真についてには冗言を要すまい。アラビア風の衣裳で鞭を持った美女、この設定が、広汎な範



囲の傾向を持ったマゾヒスト達にとって誠に物欲しいものであることは想像に難くない。少くとも、第九項によって昇進する人よりはこのモニクに執着する人の方が心理的に浅いだけに反って数に於ては多いのではなからうか。此の写真はブロード・ウェイ(米国紐育市内の興行街)での出演のものであることを附記しておく。

### 復刊第十一項 「女優キヤザリン

#### ヘップバアン」

『(Katherin Hepburn) 独ニハンプルグ市王版、映画誌 "Star und Revue" Die Film- und Fernseh-Illustrierte 一九五六年五月号ノ内第九卷第十一号第七頁右側』フランスの有名な映画誌「シネモンド」(Cinémonde)と殆んど同型、同傾向の映画誌であり、昔日の我が国の「スタア誌」に類似した体裁と編輯傾向の雑誌であるが、この雑誌は我々が全く眼を閉ざされている西独の映画界の華々しい復活を逸早く伝えてくれた。筆者は、現代風の女ドラキユラとも考えられる「妖花アラウネ」の存在を此の雑誌によって知り、後にジュリアン・デュヴィヴィエの名作「アンリエットの巴里祭」に出演した妖星ともたとえらるべき「独乙の頰癩」の異名を持つヒルデガルト・クネフの詳細をこの本によって知り

このデュヴィヴィエの作品の萌芽とも考えられる「題名のない映画」(デュヴィヴィエの作ではない。)の完成も亦此の雑誌によって知った。そうして敗戦によって全く崩壊したかと思われた大映画会社ウーファ(UFA)の健在をも知る事が出来た。この様にこの雑誌は、この時評に常に新しい示唆と暗示とを与えつづけて来たのである。こうして今、再び英国で製作されつつあるこの米国俳優と米国女優による新作についての明らかな予告をする事によって、複雑な傾向を持つマゾヒストやフェティシストの多くに黄金の夢を齎らそうとしている。「ニノチカ」。大方の読者はこの映画の題名を覚えていと思う。二昔前、神聖の気をさえ漂わせて、別格の大女優であったグレタ・ガルボが再起を目したかに思われた一篇であったが、すでにこの北欧の聖女も昔日の倣さえもなく遂に映画女優としての生命を決定的に失うに至った映画である。この「ニノチカ」の二番煎じと思われる筋書きによって作られた映画「鉄のペチコート」が問題の新作である。(Iron Petticoat)「鉄のカーテン」という流行語によって赤露は「鉄」と因縁をつけられたが、この作品はソビエトの女空軍士官がロンドンに偶然滞在せざるを得なくなつて、英軍将校(ポップ・ホープ)とあちこち見物している中に資本主義に対する敵意が薄らぎ、恋を

感じるに至る。鉄のペチコートの中にも、女の心と肉体が息吹いているのだという荒筋であるが、相当以上に宣伝映画の香りがあることは否めない。

時評の立場からすれば、この女士官に紛したキヤザリン・ヘップバアンの「鉄の意志」を表明する前半に主として興味が注がれるのである。ソビエト軍の女士官について私達は被占領国民であつただけに比較的に多くの知識と憶測をする事が出来る。満洲からの引揚列車の車中で、公然男を強姦した事件、ゲ・ペ・ウの女士官が、性的な興味から俘虜を死刑に処した話、女士官の手による様々の拷問、實際行為としてはとも角として、話として空想としては実に豊沃な夢の源泉となつていゝ。

私は前号に「サーカスの女王」というソビエト映画に紹介されたイリナ・ブルグリモワ女史(ライオン使い)の事を書いたが、其の結尾に附記した、「若しもブルグリモワ女史から返信でもあれば、私達は曾って、ザッハール・マゾッホがその碩学を傾注して仰いだキエフの街の更に彼方に大きな希望を見るのである」と。

あれから三ヶ月、私達はアングロ・サクソンの複製によるソビエト女士官の理想的な模写に発見したのである。政治的見地については今は言及しない。マゾヒステイ

クな見地からのみするならば、ソビエツト社会主義共和国連邦も亦、サディスティンの系列に関する限り、爛熟した帝政ロシアの貴婦人の血統を其のまま、承継しておりマゾツホ教授の時代と同じく、今も猶マゾヒストにとつての希望の国である事を断言できるのである。その血統は瞑想と文化の東洋と合理と文明の西欧との誇らしい混血である。その領土は酷寒に閉ざされるとはいえ広大肥沃である。その言語は衰亡のギリシヤ文化に源を発する異様な文字を以て表わされる。常識と人間の正常性を否認する秘密機関の未だに権力を持つ国であるマゾヒスト好みの豪華絢爛の豪奢が未だ地を払わぬ国である。

キヤザリン・ヘップバアンについては、すでに過去の女優であるので、僅かに「旅情」と「アフリカの女王」の二作によってのみしか知らない方が多いと思う。「愛の調べ」(クララ・シユウマンに扮して好演)等以前に一九三〇年代、強烈な個性的な容姿で有名であり、私達の愛好するタイプの女優として活躍した事を附記しておいて参考供しようと思う。

## 「補遺」

### (一)靴フェティストの為に

数年来米国の左記雑誌(他にもあると思

う)に掲載されていた特殊靴の製作広告を御存じだろうか。

1) SEE 2) LAFF 3) POLICE GAZ  
ETTE 4) BRIEF 5) NIGHT AND  
DAY

広告文に曰く、「ヒールの高さ六吋以上の舞台用靴、長靴の製作販売。如何なる注文にも応ず」と。私は早速手紙を出してみた。返信に曰く「店主は文字が書けないので、私が代行する。一切の通信は私宛にしてほしい」とのG・ガイエットという人の手紙で「店主は輸出までしようという気はないが、貴下の御注文にだけは特に応ずる様に致します。」として注文票一通と「特殊ハイヒール着用のモデル写真を一ダース二枚にて送る」という但し書がついていた私は折返して、十弗を送金して写真等待った処、私の手違いで、本誌にも時々発表されたビザール誌に送ってしまったので、紐育市内で振替えて貰い、数枚の写真と靴フェティスムに関する切抜きを送ってもらった。若し強つて製作の希望ある向には何とか方策をお教える心算であるから申越されたい。念の為め値段は左の通り、

1) SANDALS.  
OPERA PUMPS.  
SLING PUMPS.  
ANKLE STRAPS. } \$50.00

2) PLATFORM STYLES \$60.00  
3) BOOTS (MIDWAY to KNEE)  
\$90.00

「 (UP to KNEE) \$100.00  
「 (HIP height) \$150.00

(以上すべて運賃、通信費、送金費用を含まず。)今の時代には珍らしいもので、店主は相当の老人らしい。  
猶、小生手許にあるモデル写真は複写してあるので御希望あれば、御頒けしてもよい。

(二)一九三七年「フランス雑誌ヴ  
オアラ」より(=VOILA)

沼正三氏にも見せたのであるが、記事は大した事ではないが、珍らしい写真なので紹介しておく。パリの陋巷になる鞭打娼家である。私の賞掲掲く能わざる名画家、ルドフ・シュリヒテルの好んで描いたボタソ留めラック塗り婦人用靴をつけた、職業的の女主人がこうして紹介される事は甚だ珍らしい。(以上)

## 【註】

本項、挿入参考図は、本月号の口絵に発表してありますから御参照願います。



# 寄生虫

(一)

壬 生 す み 子

(六)

妾は週二回の由美子の家庭教師として以外にも笹崎家を訪れるようになりました。研究室が何時か妾たちの逢曳場所となっていました。妾は、血管を赤く不気味に浮上らせた乳白色や褐色の寄生虫の標本を次第に何とも思わなくなりました。哲三郎の後に従って、犬小舎へも行きました。飼育や糞便の検出などにさえ、妾は興味をもちはじめました。薬品で腹腔を幾度も洗滌するために赤く、ぬめぬめと滑かに濡れた犬の肛門が妙に被虐的に妾の気持を刺戟しました。

特殊な薬品の配合によって作られた、擬似体液に充たされたガラスばりの体壁構造の中で、哲三郎が寄生虫の生態をメモしているのを、妾は興味深く肩ごしにのぞきこんで説明をきくのでした。

「こちら側にいるのがアスカリス・ルムブリコイデスの雌虫です。普通体長が廿五センチ内外。尾端が鋭く尖っているでしょう。あちら側が雄虫です。十七、八センチですね。尾端が鉤のように曲っているからすぐに区別がつくんです。長いになると四十センチ位もありますよ」

「まあ、そんなにありますの」

「エジプトで発掘されたミイラから発見されたルムブリコイデスの化石は四十三センチあったと記録に残っています。一寸、(と妾の肩をついて)見て御覧。何をしているかわかる」

「一緒にくっつき合ってますわ」

「交尾しているんだ。雌の生殖口は体の後三分の一の辺にある。雄のは曲った尾端の内側だ。尾端で雌虫の体を抱きこんで交尾を営むのです。雄虫は交接刺で合著し、交接裏で雌

虫の体を固く抱き、しばらくその姿勢を保っている……」

哲三郎の腕は何時の間にか背後の妾の腰をひきよせ、妾はしっかりと彼に寄り添うのでした。

妾と哲三郎とのそんな関係を間もなく由美子は感じとった様子でした。妾に対する反感を時折り露骨に示すようになりました。妾は由美子がそんな態度を妾に示すことが不可解でした。何故彼女が反感をもつのか、その理由がわからなかったのです。わからぬままに妾も又その影響をうけるものとみえ、なんとなく焦々するのです。

或る日、妾はそのことを哲三郎に告げました。すると彼は俄かに腹をたてたようなむっとした表情になりましたが、やがて由美子を冷やかに鼻でせせら笑うのでした。

「貴男から理由をきいてもらえませんか？」

「放っておけばいいんだよ」そういったきり  
妾が不満な気持ちでいるのにも拘らず取りあ  
うとしました。

或る日、妾は標本瓶の間から注目すべき一  
つの記録を発見しました。それは二つの人体  
間に交互的に飼育された寄生虫Xの成長記録  
でした。その実験に加った人体は男女各一名  
でした。その日々に摂った食物の種類、運動  
量、睡眠時間までが細々と誌されておりまし  
た。そうした条件の組合せから、もっとも成  
長に良好な状況を辛抱強い計算の上で抽出し  
ようという目的のもとに企てられたものであ  
ることが読みとれました。

寄生虫Xの交配によって新たに発生してい  
くX<sup>1</sup>、X<sup>2</sup>、X<sup>3</sup>、……という寄生虫の系  
譜、成長過程が克明に書きとめられてありま  
した。そして種は次第に巨きな、薬品に対す  
る抵抗力をそなえたものへと進化していまし  
た。

体長六十八センチ、体囲三センチ……そん  
な驚くべき数字が認められました。

或るページまで来たとき、烈しいショック  
に妾の指先は思わず止ってしまいました。実  
験人体間に愛情のとりかわされたことが記さ  
れてあったからです。

△印であらわされるそのマークがひんぱん  
に目にふれるようになりました。それと同時  
に、奇怪なことに寄生虫Xの成長系譜は何処

にも見出すことが出来なくなつたのでした。

哲三郎のしるしたその記録をよんだとき、  
妾はたちどころに一切を覚りました。(そう  
だったのか。由美子と哲三郎とが異母兄妹で  
あったのか。)

妾は、その記録を前にして茫然としている  
と、不意に後からそつと肩に触れたものがあ  
りました。ぎくつとして振向くと哲三郎が青  
ざめた顔で立っていました。額には脂汗がに  
じんでいました。ギラ／＼と光る眼を見た瞬  
間、妾の顔も反射的に青ざめていました。

妾はその部厚いノートを陰すようにして後  
ずさりしました。

「読んだね」

哲三郎は語気鋭く問いつめました。妾は仮  
面のような顔を横にふりました。

「読んだね、君は。」

と彼は繰返して、迫ってきました。「君は  
もうぼくから離れられないんだ。いいかね。  
由美子のことはなんでもなくなる。ぼくは君  
を相手に新しい種を創造するプランを建てた  
んだ。間もなく君は寮から出るようになる。  
ここでぼくと一緒に暮らすことになるからだ。  
いいかね」

彼がそういう残して出ていった後には、一  
冊の真新しいノートが残されてありました。  
余程の時間がたってから妾はその第一ページ  
をひらきました。そこには次の文字が読みと

られました。

「清純な処女の体内に宿った寄生虫Y。おれ  
の体内で交配させて第一代種を創造する。体長  
一米にまで成虫が進化するまで実験を繰返す  
要がある。M(註・仲介を業にしている者の  
姓であろうと推定される。)に売価の交渉を  
すること。外国の好事家はもっと大金を出し  
て買取っている筈だ。中間搾取がある。今度  
のYは、人肉の華」と命名しよう。彼女は美  
しい。肉体も豊満だ。人肉の華。Yも丸々  
と白く肥るように」

彼女というのは、妾のことに違いありませ  
ん。何時の間にか妾は被実験動物に変わって  
いたのでした。そうしてぼんやりとわかること  
はその人肉の華Yが外国人との間に売買され  
るらしいということでした。

### (七)

妾はその後、或る事件によつていよく固  
く彼に結びつけられてしまいました。それは  
由美子の死でした。健康でハチ切れそうだっ  
た彼女が、そんなに急逝するとは夢にも考え  
てみなかっただけに、妾にはその死因が非常  
に怖ろしかったのです。病名は痙攣性腸閉塞  
でした。

寄生虫が或る部分に一定数以上寄生すると  
腸管を機械的に閉塞してしまうのです。

哲三郎がどうして、その危険を予知して手



当をしなかったのか、それが第一に妾の胸に  
来た疑惑でした。妾は何時か哲三郎が研究室  
で洩らした「由美子のことはなんでもなくな  
る」といったその言葉が脳裏から離れません  
でした。

由美子の死後、妾は哲三郎と同棲生活を始  
めました。哲三郎の母親は居間にこもったき  
りでした。妾は哲三郎のすゝめによつて学校  
を退きました。

こうするうちにもYの実験は着々とすす  
められていたのでした。妾たち二人は食事の摂  
生をしなければなりません。毎日摂つ  
た食品の種類やカロリーは克明に記録されま  
した。

コンデイションがととのえられた或る日、  
妾はオブラートにつつんでYをのみこみまし  
た。それは見るのも気持ちの悪い三十センチほ  
どの乳白色の寄生虫でした。のみこんだ後、  
妾はYが静かに食道を伝って降りていく様子  
を想像して慄然としました。オブラートが溶  
け、Yが体をくねらせて暗い胃の中をうごめ  
く様が妾を恐怖におとし入れました。

「胸が悪いわ。あげそうよ」

「辛抱するんだ。すぐに慣れるから」

妾はその言葉の終るか終わらないかのうちに  
嘔き気を催しました。急いでハンカチを口に  
あてましたが、黄色い液を少量吐いただけで  
した。哲三郎は静かに妾の背をさすり、口移

しに水をのませました。妾はその日一日中、  
体内をはいずり廻るYの姿を想像して落着き  
ませんでした。

その夜、怖ろしい悪夢にうなされました。  
寒々とした地下室に唯一人で妾は坐っている  
のでした。まるで牢屋のように陰気な感じの  
あふれた部屋でした。机が一つ中央に据えつ  
けられてあって、その上に水とパンがのって  
いました。

妾は満腹であつたにも拘らず、それを食べ  
なければならぬ義務に縛られているのでし  
た。妾はパンを千切り、水で喉へと流しこみ  
ました。すると妙な変化が生じました。

のみこんだものが喉を通過するや否や、ま  
るで生きもののようには蠕めき始めたのです。  
妾は不気味さに堪えきれなくなつて、指を喉  
へ差込んで嘔吐しようと試みました。すると  
妾の指先にくねくねと巻きつくものがあるの  
でした。寄生虫でした。何時の間にか夥しい  
数の寄生虫に変化してゐるのでした。

妾はたちまち嘔吐しました。一塊の寄生虫  
が絡れあつて吐き出されました。白っぽく濁  
つたような色のものや、赤黒い紐のように太  
いのや、褐色のもの、青みがかったもの、そ  
れらが無数にうごめいているのでした。妾は  
口の中へ指を入れて一つかみの寄生虫を掴み  
出しました。ぬめ／＼と濡れ光った寄生虫の  
肌が薄気味悪く掌をくすぐり、妾の肌には粟

粒が生じました。十二指腸虫、蛔虫、蟯虫、  
鞭虫、肝臓ヂストマ、肺臓ヂストマ、条虫、  
裂頭条虫、有鉤条虫、無鉤条虫、およそ今ま  
でに妾の見た限りの寄生虫がもつれ合い、搦  
みつき合つて吐き出されました。

妾は幾度も／＼吐き出しました。体中に何  
時の間にか寄生虫が巢嚙っているものでした。  
寄生虫は妾の体をくまなく遊ぎまわつていま  
した。消化管を上下に移動し、腸から胃に上  
り、食道からはい出してきたものは吐き出さ  
れ、大腸を通じて下つていったものは肛門か  
ら出ました。消化管に連つてゐる管腔に侵入  
するものもありました。鼻腔に侵入したり、  
輸胆管、胆嚢に入り、更に肝臓に穿入するも  
のもしました。数匹の条虫は臍管、虫様突起  
にはいりこんでとぐるを巻きました。

のみならず腸壁を穿孔して腹腔内に游出す  
るものもありました。妾は生ける屍と化してい  
ました。無数の寄生虫たちは妾の血液や体液  
を存分に吸いはじめました。妾の栄養分は急  
速に失われていきました。太った寄生虫は妾  
の肋骨や背骨に巻きついて憩つていました。

ふと妾は奇妙な発見に目を奪われました。  
一匹の太い寄生虫がじつと妾の顔を内側から  
見詰めていたのです。妾の顔は何時の間にか  
裏返つてゐるのでした。

（あ、この顔！）と妾は思いました。哲三郎  
の顔だったのです。哲三郎はなおもじいつと

妾から目を離しませんでした。妾は思わず大声を上げました。――

「どうしたんだ？」

哲三郎が妾の顔を覗きこんでいました。夢

からさめた妾は眼前の彼が宵から同衾していた哲三郎であると自分に納得させるまでに、余程の時間を要しました。

「何でもないの。一寸怖ろしかっただけ」



「夢だったんだね」哲三郎は妾の背に手をまわしました。

妾は全身がじっとりと汗ばんでいるのに気付きました。そして自分が巨大な寄生虫にでもなったかのような錯覚に襲われるのでした。

一ヶ月後、妾は薬品でYを排泄しました。

特殊な試験管に入れて入念に観察していた哲三郎は、やがて疑似体液中に養育していた原虫との体長を比較し、満足そうに笑みを浮べました。

「成長良好だ」

「これからどうしますの」

「Yを創るのだよ」

哲三郎は自分の排泄したYを別の試験管に入れて、同じように観察していましたが、しばらくすると、それらを同一の管内に入れました。二匹のYはもつれあいました。その様子を熱心にみつめていた彼は、突然妾の方をむき、

「お飲み。」といいました。

差出された試験管に手を出し兼ねていると

彼はもう一度、

「お飲み。」といいました。



妾は首を振りました。

「では、ぼくがのませてあげる」

哲三郎はいきなりその試験管を自分の口に  
あてて、Yを口中にふくみました。そして妾  
の首を抱きよせ、唇を重ねました。

哲三郎の唇から長い、軟体質のYが身をく  
ねらせながら妾の唇へとはいって来ました。  
妾は身を藻掻かせました。しかし、しつかり  
と彼の上搏が妾を抑えつけていて身動きを許  
しませんでした。

妾は観念してYをのみこみました。

哲三郎は妾の顔をみつめ、満足の笑みを浮  
べていました。

「さ、次にはこれをおのみ」

哲三郎はグラスに灰色の液体をついで差出  
しました。

「何ですの」

「生殖作用を促す薬品なんだ。これをのむと  
Yが刺戟をうけて体内で交配する」

「そうしたらどうなるのです」

「排卵作用が生ずる。第二代種Y2が出来る  
のだ。ぼくたちの体内で養ったペットだ。ぼ  
くと君のエッセンスだ」

「それが人肉の華なのね」

妾は奇妙な興奮に駆られて口走ってしまし  
た。

(八)

六ヶ月後に、妾は見慣れぬ人物が訪ねてく  
るようになったことを書かねばなりません。

その頃Yの実験は順調にすすみ、第八代種Y<sub>8</sub>  
が妾の体内に棲息していました。記録による  
と身長七十八センチ、体重二・五センチでし  
た。妾はその頃には不潔感も薄れ、逆にYに  
対して不思議な愛着をさえもつようになって  
いました。

或る日、玄関を訪なう声に妾が出てみると  
黒く陽焼けした小柄な、見るからに頑強そう  
な体格の中年の男が立っていました。船員の  
かぶる帽子をなぐめにかぶっていました。

「どなた様ですか」

妾は用心して問いました。男は返事もせず  
無遠慮に妾の顔をじろじろと眺めていました  
が、ふと唇の端に卑しい笑いをうかべ、

「旦那はいるかね」とぞんざいな口調でいい  
ました。妾が哲三郎に知らせますと、彼は妙  
に興奮した面持となり、急いで玄関へ出まし  
た。男は框に腰を下してマトロス・パイプを  
くゆらしていました。

「何だ。真つ昼間くるなど、あれほどいい  
あるじやないか」

哲三郎は、トゲ／＼した声で叱りつけまし  
た。男は妙にふてくされた顔付でシロリと妾  
に一べつをくれ、

「上だまだね」

といました。妾は辱しめられた思いでか  
つと頬に血が上りました。

「お前はあちらへ行っておいで。くるのじや  
ない」

哲三郎はきびしい声でいい渡しました。次  
の間へひきとって耳をすませた妾の耳に、玄  
関から激怒した声高な哲三郎の声が聞えてき  
ました。

哲三郎の母親は、その時台所にいたのでし  
たが、心持ち青ざめた顔で妾の横で熱心に聴  
耳を立てていました。妾は母親の一心な様子  
から年寄の不安とでもいうようなものばかり  
を感じとっていたのですが、迂潤といえど迂  
潤なことだったと思います。しかし妾は――  
後で驚いたことでした――そのとき母親が  
そんな企てを抱いて聴耳を立てていたとは夢  
にも思いつきませんでした。哲三郎は男と一  
緒に出ていったきりその夜はもどって来ませ  
んでした。その夜、母親は縊死したのです。  
哲三郎の行先がわかりませんでしたので、  
妾は途方にくれてしまいました。とりあえず  
届出をすませ、検屍の終わった後、座敷に遺体  
を安置して、遺書の類をさがしましたが何処  
にも見当りませんでした。  
翌日の昼過ぎにもどってきた哲三郎は縊死  
を知ると流石に顔色を変えましたが、無言で  
研究室へはいりました。しかし直ちに出て来

た彼の顔には唯ならぬ氣配がみなぎっていました。

「どうかしたんですか？」

妾も思わず緊張して訊ねました。

「G・Lをすっかり駄目にしてしまった。薬瓶が滅茶滅茶だ」

研究室へ踏みこむとガラスの破片が散乱していました。何ものかが故意に破壊した惨憺たる跡でした。妾は犯人を直覚しました。

「G・Lもですか！」

妾は声を途切らせました。それは寄生虫が体内において分泌する毒素を中和させるために用いる薬品でした。妾たちは毎日三度ずつそれをのんでいたのです。若しそれを怠ったなら、中毒症状を起さねばならないからでした。

「原料の薬草も焼却されている。何とかしなければならぬ。」哲三郎は外出のため帽子をとりながら口早に妾にいました。「Mに掛合ったら大丈夫と思う。心配はいらないから待っていておくれ」

「Mって誰ですか」

「昨日の男だ」哲三郎は嘔んで吐き出すように苦々しそうにいました。

しかし夕方になって戻ってきた哲三郎は決して吉報をもたらしませんでした。妾は焦々した彼の表情からその交渉の結果が芳しくなかったことを直感しました。

事態は妾が考えていたよりは一そう悪かったということが間もなくわかりました。哲三郎がYを体外に排泄するために用いる薬品はニューギニア島の或る地方の現住民が栽培するデリスモニアという薬草が原料だったので。人体に害を与えずしかも強い麻酔をかけて寄生虫をそこなうことなく体外に排出することは非常に困難な問題です。その要求にピッタリと合致するのがその薬草でした。そして悪いことは寄生虫Yは他の如何なる駆虫剤に対しても不死身な抵抗性をそなえていることでした。その薬草以外に適当な薬剤はないのです。たといYを殺してしまおうと企てても、人体をたおす以前にYのみに効果を求めるといふそのような芸当は如何なる科学の智を絞っても、不可能なことなのです。Yを殺そうとすれば宿主の人体も自殺しなければならぬのでした。

G・Lの原料薬草も又欠除した今は、Yを体内に持つものは何処かの薬草が手に入らない限り死をまぬがれないのです。

母親は前日玄関の立話に聴耳をそばだてている間に、薬草のストックが残り少くなっていることを知ったのでした。その対話から、当分入手困難を盗み聞いた母親は貴重な薬草をことごとく濃硫酸で焼却してしまった後に縊死したのでした。それが実の娘の由美子に代っての復讐であったのでしょうか……。

「交渉の仕方がまずかったのだ。足もとを見られた」そう哲三郎はMとの交渉の錯誤をくやむのでした。Mは濠州通いの機帆船の水夫長で密輸業者でした。彼が禁輸入の劇薬であるその薬草を哲三郎のもとへ届け、その返礼に哲三郎はモルヒネ注射液の秘密な取引をしていたのです。

「しかし、心配はいらない。もうすぐに持ってくる。Mの応待はお前がやってくれ。ぼくはこれから少し出かける。研究室の方へあげておいてくれ」

哲三郎はそういいおいて出て行きました。妾は何故か彼の挙動から、不審なものを感じとりました。

入れちがいにMがやって来ました。妾は、いいつけられた通り、研究室へ彼を通しました。彼はニタニタと不気味な含み笑いを口もとにただよわせ、

「姐さんも、とんだ御難にかかずらったもんだね。」となれなれしように唇を寄せて来ました。妾は青ざめて彼をにらみつけました。

「御約束の品物を戴きます」

「ふん。それじゃあ、こちらもお約束のものをいただこうじやねえか」

彼はガラリと態度を変えて凄味を利かせました。

「何のことですか？」

「何のことですかとは恐れ入った。じゃあ、



レコから何も聞いちやいねえんだな」と彼は拇指を立ててみせました。「まさか聞いていて白ばつくていいるのではあるめえ。おれが御注文の品物をもつてくる代りに、それも即座にだぜ、よく覚えておいてもれええんだ即座に右から左へともつてくるかわりに、姐さんの身体をもらうってえ約束なんだ。約束なんだからな。文句があつたらいいな。ただしおれへはお間違えだ。いやならいやでいいんだぜ。おれがああのを渡さなきゃ、ポンポンにとんでもねえ代物を飼ってやがるお二人はあゝの世に向つておサイナラときやがら。」

Mはむんずと手首を握ると、否応なしに妾の体をたぐりよせました。

「じたばたするでねえ、姐さん。おれを悪党だなぞと思っちゃいけねえ。途方もねえ寄生虫をこしらえて、毛唐のシヨウにうりつける野郎の方が何層倍、悪党かってことよ。可哀そうに無垢の娘たちが酒のみで助平の紳士の前で、あゝのうねと長いヤツをのんだり出したりさせら



れるんだぜ」

どれ位時間がたったのかわかりませんでした。妾はあらん限りの力を絞ってなおも逃れようとしたが、遂に力つきて組敷かれました。Mの潮くさい頑丈な体がまのように

べったりと迫って来ました。が、奇妙なことにMはそれぎり動かなくなつたのです。気付くと妾の顔に生温かい血潮がふりかゝつて来ました。

Mをはねのけて立上ると、哲三郎が血まみ

れの櫓の棒をもって、真っ青になって立っていました。後からMを一撃したのです。

哲三郎は無言で妾を抱きおこしました。

「予定通りだ。仕方がなかった。手伝ってくれ」

彼は床板を剥がしました。そうしてその下からあらわれた鉄の環のついた石扉を妾の力を借りてひきあげました。そんな所にそうい仕掛の隠されていたことが妾には異常に感ぜられました。扉がこじあげられた瞬間、妾は声をのんでしまいました。怖ろしいものを目撃したのです。

畳二枚敷くくらいのコンクリートの凹みにはスカートをつけた、多分死後一年は経過したと思われる女の腐らん死体が横たわっていたのです。哲三郎はMをその中へ蹴落して再び石扉を閉じました。

もと通りに床をなおすと、哲三郎は早速Mのもって来た包みをひらきましたが、たちまちサッと顔色を変えました。

「違う！これじゃない！」彼は狂気のように包みの中の薬草をかきわけました。

「畜生！」彼は地団太をふみました。

「では、欺したの」妾も青ざめていました。

彼は椅子に腰を埋め、髪の中へ指先をつっこんで三十分近くも血走った目で前方をにらんでいましたが、余程だったと思われるこる正気にもどったように、かすれた声でいい

ました。

「誤算だった。万事休す、だ。ぼくの方は中毒症状がひどくなって来た。唇がしびれる。腹痛がする……」彼は苦痛のため顔を歪めながらいいました、「雄虫だからな、ぼくの方は。君の方はまだ大丈夫だろう。Yを殺そうとしたら、此方の体も駄目になる。しかし、このままでも同じことだ。今となつてはYの成長の成功が仇となったようなものだ。しかし仕方がない。自業自得だ。聞いてくれ床下の石畳の女は一年前ぼくが寄生虫Zの実験に使った女の死体だ。何故殺害したか、それは聞かないでくれ。由美子もそうだ。由美子も殺した。しかしお前だけは、ぼくはお前を本当に愛した。許しておく。痛い。……そのうちYは自家中毒を起して腸管閉塞をやるだろう。残る道は開腹手術以外にない。しかしぼくはもう助かるうとは思わない。お前は直に病院へ行って手術をうけるのだ。いいかね。ぼくをこのままに放っておけ。すぐに行け！」

妾がとるべき道はたった一つしかありませんでした。妾はそれを即座に実行にうつしました。

## (九)

開腹手術は妾にとってのみ好結果を（医師はそういいました）生みました。哲三郎は手

遅れのため経過が悪く、遂に死亡してしまいました。

半月後に妾は退院してもどって来ました。

何処へ？ああ、呪われた家へと。そこには五つの亡霊が妾と共に住むことになっていました。妾は石畳の上の腐らん死体を想い出し夜半に耳をすませて慄然としました。微かなすすり泣きが何処からともなく洩れて来るように思われてなりませんでした。

先生。今、黄色い佻びしい電燈の下で妾はこの手記をしたためています。背後に忍びよってくるものの怪に、冷汗を覚えつつしたためています。たった一人、しんと静まった邸の中で怯えつつペンを走らせています。以上が先生にお伝えするすべてです。

哲三郎が白人の好事家に密売することを目的に育成したYを、先生ならば科学的対象としてとりあげては下さらぬかと思ひまして、筆をとりました。それが結局、この邪惡にいろどられた事実を何らかの意味で人類のための仕事の対象の一端に加えていただけることになりはしまいかと思ひましたからで御座います。

しかし、どうしても他人の顕微鏡の下にYをさらさせたくない強く反撥する妾の内の一方の心はYに対する母性愛……とでもいうものでございましょうか。哲三郎と妾とのひめごとの結晶に他人の容嘴をこぼもうとする



自然の情愛なのでございましょうか。

(あとがき)

私がこの手記を読みおえた後の異様なショックについては、その印象の鮮明な今はふれるべき時ではないと考える。読了した時、私の念頭に浮んだのは、次の二つのことであつた。

虚構か？  
事実か？

一体、科学者の私に探偵小説を送ってくる物好きがあるだろうか。私は慎重に考慮した結果警察に差出人の調査を依頼したのである。一週間後発送先は判明した。中部地方のN市に在るその家は十日前に火事で全焼した後だった。『打ちつゞく不幸に神経衰弱気味だった若い未亡人が放火の挙句自らも縊死した、』というのが近所の人々から聞きこんだ警察の報告だった。

私はその後、調査を依頼してから親しくなった警部補から、その後の詳しい捜査の結果を聞かせてもらった。それによると、新たに派遣された捜査隊が研究室のあったと覚しいそのあたりの地面を掘りおこすと、案の定さびた鉄環のついた石扉があらわれたのである。そして石扉をこじあけると、腐らした二個の死体が手記にしろされた通りの恰好で折り重なって倒れていたという。

(完)

## 東宝ミュージカル第二回公演

### マゲモノ スリラー 俺は知らない 十二場

本 田 由 郎

今月中(七月)東京宝塚劇場で上演中の東宝ミュージカル第二回公演で、美空ひばり主演菊田一夫原作・演出になる「マゲモノスリラー、俺は知らない」(十二景)の第四景水中花の景で加虐的な水責の場面が有ります。

喜びだったそうだが、役がひばりの妹で、悪旗本どもに責められて水責めに会うという因果な役、水槽に水を満たされ、その中で溺死する訳だが、原作者の菊田一夫が「君がうまく溺れないとなかなか幕がしまらないが、君泳げるかい」と心配顔をしたと云う。

各六間の脇舞台の有る大劇場で、この本舞台の中段に旗本屋敷の地下室を作り上げ、中段から下は黒幕でかくされ、たゞ風穴のような格子戸が地下室中央の地面に出ている。右の壁から鎖で矢場女お芳(水谷良重)がつながれている。お芳が左手にある入口に声を張り上げてわめきたてる。

「早くこゝから出しておくれ、助けて、私をどうしようってんだい」

一人でわめきちらしながら、入口に向って突進してゆく。鎖がピンと一杯に張ってお芳の身体をグンと伸び、鎖がガチャガチャと音をたて、引き返してしまふ。いくら力んでみた所でお芳の弱い力ではどうにもならぬことを知り、観念してかお芳は静かになる。入口からならず者のり蔵(三木のり平)番頭有八(有島一郎)が話しながら入ってくる。

「どうだい、こゝが有名な地下室だぜ」

「本当だ、鬼気せまるってやつだな」

「俺達の仲間以外この地下室を見た者は生き  
ちや帰れねえおきてだぜ」

「それによ、この室に水牢が有ってな、水責  
めにあって、数人も男や女が死んでるんだ  
ぜ」

二人の話がとぎれ、右手を見るとお芳がい  
るが、根は弱気な二人はその女が矢場女のお  
芳だと解からない。

「助けて——」とお芳の一声で、お化けだと  
逃げだし、入口まで行くと女師匠芳沢歌仙（  
浦島歌女）が旗本江の太弾正の用心棒達三人  
（川上、滝、志賀）に荒縄で後手に縛り上げ  
られて、地下室に連れてこられ、白状せよと  
責められる。云わぬとならば身体で問う、身  
体に聞くと、一人が後に廻り、割竹で縄尻を  
グツとねじ上げ、いま一人は前で、刀をサヤ  
ごと縄目に入れ、乳房のあたりをグリグリと  
突く。歌仙は苦しい悲鳴を「うーん、うー」  
と吐き出すかの如く、だが歌仙は苦痛をこら  
え、白状しようとしな。後にいた一人が縄  
から、いきなり割竹をぬいて背中を打ちはじ  
める。割竹の音は、オーケストラ・ボックス  
からドラムで効果を上げる。歌仙はいくら責  
めても白状しない。用心棒の一人が、  
「ふーん、ようし白状しないな、今、面白い  
みせ物を見せてやるから、ゆっくり見物をす  
るがい。おい、だれかいって信濃屋のお神

を呼んでこい」

信濃屋お藤（藤波洗子）が用心棒に手をと  
られて地下室に、ひきずりこまれる。

「どうだ、お神、お前さんなら全部の秘密を  
知っているはずだが」

「私は何も知りやしない」

「地図の半分は手に入った。残りの半分の有  
り場所を」と迫ってくる。この地図は「信濃  
屋」が生前財宝をかくし、財宝の在りかを書  
いた地図で、この秘密を悪旗本江ノ木弾正が  
知り、信濃屋の娘お秋を吹矢で殺し、地図の  
入っていたお守袋を奪った、只手に入った地  
図は半分だけだった。この半分の地図の秘密  
を知っていそうな女達を責めて有り場所を白  
状させようとしているのだった。

「お神さん、地図の在り場所おしえてもらえ  
ないなら、可愛そうだが」

中段から黒幕が水槽の部分だけ、水槽の上  
は格子戸で開ける。下り滑り落ち、ガラスの  
水槽の中に信濃屋の妹娘お品（氏家真紀）が  
入れられており、お品の胸のあたりまで水に  
ひたされている。地図の在り場所を云わなけ  
ればお品を水責めにするぞ、それ水を入れる  
綱をしろと、水槽の中に本水が泡を立てて流  
れこみ、お品は水のため浮き上ってしまい、  
底をはなれた、小さな可愛らしい足をばたば  
たさせ、水の上に身体を浮かせようとしてい  
る。もう一寸も水位が増したなら水の中に沈

んでしまおうと思うるとき、水が止め  
られる。実際に水はお品の身長より多く、水  
槽のとつ手につかまり、首から上をかううじ  
て水の上に出しているというぐあい。それで  
も白状しない。これが最後だと、再び水を水  
槽の中に入れる。お品も最後のあがきをつ  
け、首も顔も水の中に没して、時折水の上に  
顔を出して息を吸うが、又水の中に沈みそう  
になって手を動かし、足を動かし、浮び上ろ  
うとする。娘お品に加えられる拷問のきびし  
さ、お品の苦しみを見るに見兼ねて、信濃屋  
のお神お藤も地図の在り場所が、お秋の双子  
の妹姉お春（美空ひばり二役）のお守の中だ  
とおしえた。お品は水の中で弱ってしまい、  
水の止る寸前溺れてしまい、一度沈んだ身体  
は大の字なりに浮き上り、島田に結った髪は  
乱れ、着物の下から白い足が痛ましいかぎり  
白い足にはぬれた赤い腰の物が水藻のよう  
にからみついている。水が止った時お品は完全  
に溺死してしまっていたのだ。

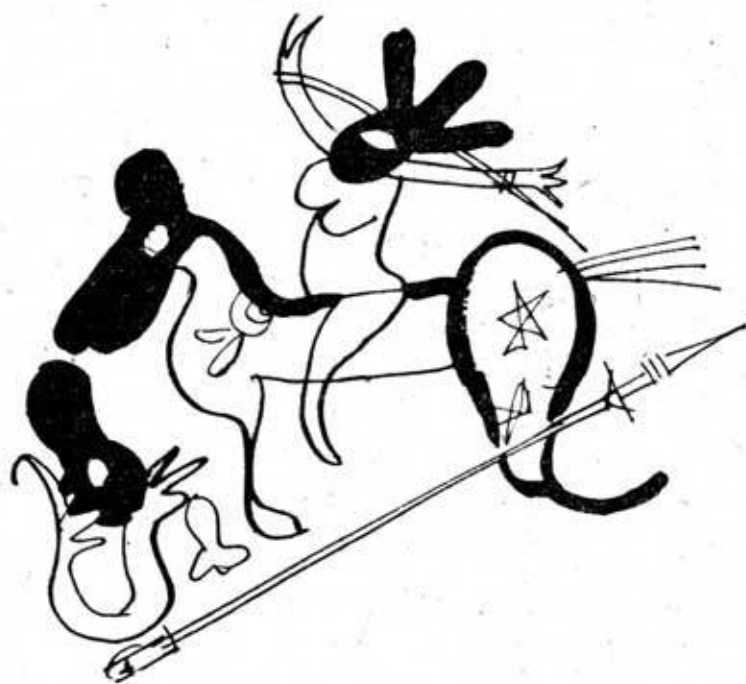
この事件を目明し文七（小泉博）お春、お  
七（草笛光子）お銀（岡田茉莉子）の活躍で  
目出たく解決し、幕となる。ほど三時間上演  
されるミュージカルでした。この他、エノケ  
ン、宮城まり子、益田キートン、如月寛多、  
高木新平、南道郎、高英男が出演しています  
（註）本ミュージカルはNHKテレビに中継  
放送されている。



執筆者 沼正三氏に対する公開状

## 「家畜化小説を喜ぶ」に共鳴して

麻生和夫



敬愛する沼 正三氏へ

私が奇クを手にしてとだえていた貴兄の名文が、再び奇クを飾ったことに奇クの読者の一人として全く喜びに堪えない上に、どうしてもこの手紙を書かなければならない感銘をうけたのです。

旧刊に連載されていた「手帖」はずっと、興味深く読ませて頂いておりましたし、数ある文章の中で私のイメージとして誠に懐しい箇所に分出くわしました。特に三十年七月号の「日の丸ズロース」三十二年二月号の「

空想科学小説について」感銘の深かったものです。併し、貴兄の他の文章すべてそのまま私にピッタリというわけではありません。殊に貴兄がコプロラグニストにこだわすぎる様な気がする。（私だって全然否定は致しません。むしろ大きな要素と考えてはおりますが。）そういえば貴兄の最初の発表「神の酒を手に入れる方法」が偶然にも私の「肥満体への郷愁」と並んでいたことは、光栄至極な因縁と申せましょう。又貴兄の「手帖」の中に不具的な肉体をもつ人々をマゾヒストとして登場させてくること、等が私にとって不満を抱くものです。（議論しようとは考えておりません。お互いの好みの違いですから致し方がありませんが）

この手紙を書かせたのは九月号の「手帖」ではありません。短文「家畜化小説の登場を喜ぶ」の一文です。御指摘の通り、あの中にほんの少しですが、私の名が出て来ました。私にとって奇クに名前が出るということは、普通の新聞雑誌に名が出る時の売名的虚栄的昂奮ばかりと違い、あまりにも珍奇な私の幻想的な告白を読んでもくれた人がいるのだという意識が先に仿いて何ともいえぬ。礼をさえずりたい気持——日本の国のどこかにアブノーマルな私の名を覚えてくれている人があるという何ものにもかえがたい慰め（自慰の気持）となるのです。編集部の方々、歓義先生

無残絵マニアの河内茂紀氏、読者通信の素渾朝氏、Y氏等も私にとって忘れられない感激を残してくれた人々ですが、特にマゾヒストたる私の一面が最も尊敬している教養（何とまあ徹底してMの研究をされていることよ）高き貴兄に公然未熟な公開状をさし出すことを御寛容下さい。

この手紙の中には随分いろいろと私の独善的な気持から貴兄に御迷惑をかけ、私の浅慮な自慰的な気持を貴兄に迄押しつけ同一視した様な無礼があることでしょうが、どうか御諒承を願いたいのです。

「家畜化小説云々」の全文が私の気持を代弁してくれて、胸に迄出ながら言い得なかったものをズバリと引き出してくれた清涼さを感じるので、最も重大で印象深い一文「人間の肉体を備えつつしかも家畜と同様に取扱われる存在」という処、その「同様に」を「として」と迄私は考えたいのです。そして人格物視と、「白人種の家畜としての日本人」との混同の世界——ああ何という素晴らしい言葉でしょうか、私はこの言葉に感激して、拙い筆で私自身のその混同の世界を貴兄に見て頂きたいと思うのです。

私の「第七天国」をよんで頂けたことと思います。私の意気地なさは、ああいった短い下手な表現でしか出来ず、思いついたことはいえませんでした、私が書きたかった世界

はあく迄も自由を謳歌する恵まれた豪華なアブノーマルの世界、エロの景色を十分たんのうさせてくれる国を、片方に被占領国の完全なる隷属、不自由化に徹底した国の二つを対照してみたかったです。この国の片方の自由は今次大戦で矢張り連合軍の手によってなされたもの、片方は同じ大和民族の分身ながら日本の戦争に協力し、共に勝利を確信し、日本の国の一部として戦い、そして惨な敗戦——この後者を占領したのが、白人種を中心とする連合軍で、誰に気兼ねもいらぬその占領政策は容赦なき苛酷さで推進され、奴隷化から家畜化へと戦いに敗れた黄色人種が追いやられてゆくのです。白人種でなければ人間でない。この徹底した信条の下に第三国人は戦勝への協力のお陰で差別待遇をされながらも漸く人たる事が許され、大和民族は根こそぎ家畜化され、文字通り生殺与奪の権利を冷酷な白人種に握られているのです。この二つの国を東西両ドイツの様に隣合わせておくべきか、それよりも一つの国にミックスした状態の方がより大きい効果をあげるだろうかとか考へたりしているのですが、片方は無限の自由、享樂に明け暮れる中に、これは又人間家畜の存在！より高度の自由の讚美の為に考へついた白人種の需要と供給の原則にたえて成立した家畜制度、世界に誇る優秀性を自認する白人種が大和民族を家畜として、その調

練、飼育を担当するのは一段低級と目される第三国人を使い、人間家畜を白人種の文明の高度化の為に犠牲とし奉仕する為に生かし、百%利用するのです。

私が「第七天国」の中であえて肥豚という言葉をつかったのは、私自身既に奇くで述べた通り私のイメージには、いつもでっぷり肥った即ち豚の様に肥満した男女があるからですが、もう一つは犬や馬を見ても笑わない人でもブウブウと餌を鼻でかき廻している不恰好な肥った肉体を見るとワツと嘲り笑うことであるうと思われる豚の感じ。犬や馬と罵るより豚といった方が軽侮の感じが強いと私自身考へているのです。

私は日常、道ばたで杭に縛られて乳をしぼられている山羊や、道ばたの木に短かく鼻をくくりつけられて数匹の蛇に襲われて太った筋肉をふるわしている牛や、坂道で重い荷をひかされてピシッピシッと皮が破れる程鋭い鞭をたくましいおしりに受けている馬や、せまくなるしい汚い囲の中でコンクリートの床にベタリと大きい腹を横たえている豚等を見る度に、ムクムクとその幻想が頭を取り巻いて来るのです。この構図がすべて人間家畜におきかえ得るポーズなのです。いやまだまだ面白く現存する家畜では見られない突飛な図もとび出してくることでしょう。その哀れな人間家畜を追いまくり、見物するのは冷



ややかな白人種。唯私は大和民族の優秀性を頭からつめこまれて来たせい、又マゾヒストの立場ばかりになりきれないせい、その人間家畜は白人崇拜ではなく優秀性をもった黄色人種が戦に敗れた結果、強制される劣勢化——優秀の裏づけを持つ強圧的人間家畜化であるのが貴兄のいう日本人の頭からの問題なしに白人崇拜観念と一寸違う所でしょうか。

その一こま——。市場（多勢の白人が出入している）その床の上に両手両足を縛られてころがされている肥った丸裸の日本人のおしりや太鼓腹を素晴らしく均整のとれた若い白人の女がハイヒールでふみにじって肉づきをためしながら「このおす豚がよさそうね。ここんとか、ホラ前肢のくくりつけてある腰のところにえぐれた傷があるけれど、たまのあとかしら、愛きようにもなるわね。あのめす豚と二ひき、つがい欲しいんだけど」売手の中国人が追従笑いをしながら、「へへへ、あいつはもう先刻売れましたんで、ホラ右のおしりに売却済のハンコがペタリとおしてあるでしょう。汗でにじんでいるけれど、これから荷造りして次の自動車で送ろうかと思っています。あの若い雌はどうですか？」

「白人種の家畜としての日本人」何という大胆な言葉でしょう。日本人である筈の私が何でこの言葉に感激し大きいシヨックをうけて

自分の恥を公刊誌にさらそうというのでしよう。私の異常なコンプレックス、どこにそれが原因しているのか、愛国心をたぎらせていた筈の私が戦争中一番胸をおどらせたことは——私のかたい心の隅に既に発表した通りの（三十年十月号、欽義先生相談欄）日本人にあるまじきひそかな喜び、戦争につきものの残虐行為というよりも優秀な大和民族が白人に人権をふみにじられ、復讐の為にうける数々の非人道的な行為の記録「虐待の記録」この本を私が喜びの目で読んだその我が心の恐ろしさ。

併し仕方がないのです。真底、私の心に起ったことなのです。日本人が占領地区で行ったといわれる残虐行為を私は歓迎しませんでした。その惨虐行為のやり方の目新らしいものには目を見はりましたが、全体的に弱者を虐げる強者の感じを私は嫌悪さえしていたのです。所が英米軍は果して日本人より弱いのか、尊大ではないのか、それなのに日本人が白人に対して行っていたであろう捕虜虐待には私は矢張り昂奮出来ませんでした。飛田良二氏の「罪の椅子」に金髪の白人の娘をいじめる処がありました、あれも同様です。その時、私ははっきり自分が白人に対する（サジストとしての）興味は全然ないことを知りました。そして日本の敗戦——弱者がいじめられることを嫌う筈の私が、戦争に敗

けた弱い筈の日本人が暴行されるのを嫌わないうどころか息をのむ様な興味を覚えたのですから矛盾といえれば矛盾した話です。唯、先刻いった通り大和民族を優秀と思つてその裏付けによる快感といえはその通りです、私も社会的精神的に弱いもの、いや醜く卑しいもの、又不完全なものという方が妥当かも知れません。（婦人は私の興味の対象にはなるのですから）に対する興味のなさが十分意識されるのです。

最近問題になっている映画「アリスの様な町」の写真や文を見たところで大した期待がもてず、英国人の女性の前で威張っている日本兵の恰好が何と成り上りの板につかない貧弱さが見られ、馬鹿にして笑えてさえる私が、とうとう陽の目を見なかったという日本映画「壁あつき部屋」に期待し、戦時中は「通州事件」を初め、敵愾心鼓舞の為に、大々的に宣伝された、鬼畜米英の非道を見よとばかり、日本人の引揚船の船長や日本人が丸裸にして調べられたとか、南方の孤島で傷ついた将兵が敵軍のブルトナーに引き殺され鬼の様な白人が笑いながら見物していたとか、婦女子に対する言語に絶する暴行！とかが私に皮肉な昂奮をもたらしてくるのです。私はその頃より夢想家でした。それ等の資料を集め、ひそかに自分の楽しみの中に数々の映画化を空想しました。総合芸術といわれ刺

戦の強い映画の魅力に私の夢をのせて、「N島哀史」なんていうものを企画し、シナリオを書き演出をし上映の喜びを味わいました。N島に住んでいた日本人が鬼畜の如き白人の為占領され、言語に絶する超非人道の取扱いをうける。ただ私の気休めとして宣伝文句に曰く「白人のこの残虐行為を見よ」白人の黄色人種に対する軽侮の念を極端に煽りたてるスチール写真の代りに縛られた将兵、姦される婦人を描く——いいえ、貴兄が私の様な意識をもっておられたとは考えていません。しかし問題は白人に対する隷従の意識——これです。

終戦前後にかけていいふらされた「敗けたら女は残らず強姦され男は去勢される」の文句にしても、私として信用していたわけではありませんが、こんなことを考えるのです。戦時中は威張りちらした将軍や指導者達が全部W化される——と考えるだけでも、私はゾクゾクする気持をおさえきれない。浅間しーと思いつつ「彼等には責任があるんだ。戦争を起して多数の人間を殺し負けたんだからそれ位の報復は当然じゃないか。」私の意識の中には古代ローマ帝国時代の戦争によって終身奴隷にされた捕虜の姿が想像される。私はその時代錯誤の光景を思い浮べる。まるで暴れる雄牛や肥らせる為の肉用豚を去勢する様に、日本の将官や大臣、高級官吏、裁判官

検事総長達が丸裸にむかれて両手足を縛りつけられ股をひろげさせられ、勝利に酔うた白人が笑い楽しみながら、一人一人丹念に去勢してゆく。これが私の人間家畜化と白人種への隷従の混同した幻想なのでした。知人にきいた話に南方で終戦後捕虜になった日本人の白人から受けた虐待行為。半裸で鞭うたれつづ刃のない鎌で草を刈られ、素手でどぶ掃除をやらされる。復讐とサジズム、雄略帝がはらみ女の腹をさき、爪をぬいて芋をほらせたとという書紀時代と何等かわらぬ人間の本能的サジズムの現れ、世界中を敵とし世界を征服せんとした国民への復讐。黄色い猿といわれ、ジャップと罵られる。もし国策とか国際関係上の制約がないならば人間の家畜化に対する希望者も夢とばかり考えられない数字を示したものではなからうかと私は考えるのです。

「潰滅の前夜」にもあった様に人間家畜はすべてがけだものでなければならず、生活も家畜同様でなければならぬのであり、「許す」とか「遊ぶ」ということは存在しないのが当然です。人間の形を備えた四つ足のけだもの、犬でも馬でも豚でもない新しい家畜。それにふさわしい新しい名前が考えられなければなりません。人語を解する便利な家畜、教え込めば何でも覚え、仕込めば大体の動作は出来るし、他の家畜の真似も代用も結構や

つてのける素晴らしい利口な家畜、主人や訓練する人、いいえ人間に聞かれたこと以外には自分から言葉を出すことは禁じられて只はえたり、うめいたりしながら、すべて動作によって表現しなければならぬ。少くとも人間の着る衣服全般についてはまとうことは凡そ考えられない。全然新しいデザインのアクセサリーとしての変った褌や一枚の布や毛皮等は主人の趣味によって考案され、その都度にまきつけたりはずされたりすべきでなければならぬ。暴れたり抵抗したりするのを防ぐ為に常時油断なく鎖で、又は縄その他でつなぎ、猿ぐつわも適当にはめ搾衣も考案されるであろう。四つ這いに這わせ、又立っても使えるが必要などころ以外はギリギリと縛って余計な動作を起さない様にしなければならぬ。この新しい家畜の餌もいろいろ売出されるのであろうし、飼いや馴らし方や利用のしかたも追々に普及してゆくであろう。新しい家畜専門の獣医も開業するだろう。いとも自然に鞭で追いついてられ、実験に使われ、見世物に出され、獣商人の手によって売買がされるのが当然のことでは何の不思議も伴わない。飼主のないものの保護も考えられねばならず、施設もあるし、又その処分も適用に十分活用しなければならぬ。若い雌は愛玩用となり、たくましい雄は労役に酷使され競技に闘争用に賭けられて主人の懐を肥やさなく



てはならない。道具の代りとなり、用をきき汚い仕事をし、すべてに器用でなければならぬ。専門の訓練士の鞭がその臀部にうなり、調教のためには、餌や水も制限される。こうして実には、餌や水も制限される。多い新家畜として時代の脚光を浴びる。

酷使され、玩弄された、その最後は「娘子島探険」の如く肉が店頭に並ぶことになり去勢して肥大させられた雄のしりの肉がえぐられて白人の女によって生々しい新鮮な血のたれる様な肉片は、焼かれて珍奇な食物としていかもの食いの食慾をそそる。私はあく迄「娘子島探険」の様に肉を得るのが目的でないため、余りこの肉が牛や豚の様に美味でひっぱり尻になることを恐れるのですが、誰かの小説に「カンガル」に似た肉として人肉を食った」意味がありました。願わくば、蛇の肉を賞味する様な位の価値であってほしいのです。おや、とんだ話になってしまいましたね。所詮、家畜には自分で運命をきめることは出来ない筈ですから、獣には自殺はないといえますから——安心です。

人間家畜として飼育される大和民族のなれの果は、愛玩用に使うのでも労役に使うものでも十分栄養をとらせて、又休ませなければなりません。この家畜は他の家畜にくらべて肉体がきやしゃですし、皮膚だって弱いし実に多くの病気ももっていることですから管理

が中々大変だろうと思います。人間家畜の飼育その他の研究が現代の原子力の研究程積極的に論ぜられることになり、大流行を来たし随分賑やかになることでしょう。

私はかく考えている中に一つのアブノーマルの昇華を見出しました。一対一の畜生扱でなく制度化された人間家畜、即ち支配者である白人が自己の欲望のままに占領下にある黄色人種を否応なしにすべて家畜化した世界。

そうなると家畜の中にマゾヒストもあるかも知れません。人間家畜化を理想とする貴兄等も或はそうかも知れません。併しそれは何も問題でないということです。単に家畜のタイプの一つに過ぎないだけです。即ち物のわきまえが良く、従順この上なく、尻尾をふって、いや尻尾がないから随分滑稽な姿でしょうが、嬉しい時にはそうすることを強いられている。馴れきった家畜として申し分ない型もあれば実に剛情で人間になつきにくい型（日本の戦陣精神で鍛えられた武将にはこんな型が多いでしょう。馴らすことが困難だから実験用にするか、動物園へやるか何とか考えねばならない）等いろいろある筈です。

又私が東坊丸氏の「娘子島探険」の中で全く制度化した「娘子島」に於いて只これ雄に課せられた仕事を忠実に何の不満もなく働いている——や、極めて従順な畜生なので自己の運命に泰然自若たるものがある云々に少

らぬ不満をもち、又五才から六才で「国立種雄飼育場」「国立肉雄飼育場」に別けられて「肉雄」の方へやられた六才の雄は直ちに両手を切断され、去勢されて、という段になると多少サジストの気持のある私にとって、あまりにも家畜化しすぎている。即ち幼時よりその様に家畜として養育されるのであるから人間としての誇りも又マゾヒズムも芽生えないのではあるまいか。又サジストにとっても何の刺激にならない。（東氏は恐らくマゾヒストと思われるが）等と考えて、果してこれが最善であるのか、私の様に家畜の補給を日本の国に求めるのが理想なのかという点、又貴兄がかつて書かれて私がそれが嫌だといった型。身体醜くゆがんだ男、肉体の一部がなえて一部が異常に発達したものや、小人、せむし男等、初めから不完全な肉体であったもの、私にいわせれば弱者の典型的なもの——は果して家畜としての市場価値がどの位に値ぶみされるだろうか。果して珍重されるか、又、反対にみにくい家鴨の子みたいのけものにされるか？といった心配も又家畜としてだんだん馴らされることにより完全な人間の姿から家畜の姿に変形してゆき（当然人間として家畜としては頗る家畜らしくなる）長期に窮屈な姿勢でいたため、だるま大師の様に手足が退化し、又あまり強情なため肉体の一部を落されたみじめなもの、貴兄の

訳された「公妃の復讐」(二十八年八月号)

の中で手足を斬り落されたデレブラン侯マク  
の如く(あの一文の最後の八さてマクがかよ  
うに幸福だったとすると、オルグの復讐は果  
して成功したといえるだろうかVの一文が大  
きい問題となりますが)又精神的に家畜化し  
た主人の目をおびえてオドオドとした家畜の  
卑屈さ、馴れっこになったものから果ては喜  
ぶ家畜に対しては、さてこの制度化に成功し  
て我がことなれりと喜んだ白いサジスト達が  
(支配者の大半はサジストでありましょう。

併し家畜の大部分はマゾヒストではなかつ  
た)失望し、この家畜に飽いてしまい、案外  
つまらないと感じはしないだろうかという危  
惧から、私流の家畜はいつ迄も堂々とした偉  
丈夫であり、又美しくという鉄則もだんだん  
とぐらついて来たのです。それ等も貴重なる  
一部分なんだ。人間各人の好み趣味を律する  
ことは出来ない筈だ。たとえ嗜尿症でも切腹  
願望でも仕方ない話なんだ。

私はそれを悟ることを得て私の夢想した第  
七天国にも自信を得ましたが、併し矢張り動  
かせない現代の発達した科学と社会は人間家  
畜の評価も陰鬱な目つきをした野良犬や、や  
せさばらえた駄馬が全然市場価値がない様に  
あく迄も文化の高いのを誇りとする白人種に  
とっては黄色い人種(その中でも文化が高い  
と自負する生意気な日本人)を家畜化するこ

とには何の不自然さもなく自分の飼いならし  
たこの家畜を友人や恋人に見せたり、又お互  
いに斗かわせたり、下男である第三国人の飼  
育係の手によって調練した数々の芸当をさせ  
て(この家畜は実に世話のしやすい家畜で自  
分の大小便は自分で処理することが出来るの  
で飼育係も全く楽である)自慢の種にする為  
にはより高等な立派な家畜とすべく半分は  
きびしく半分は大切に飼育することを心掛け  
るでしょう。

堂々たる名犬や闘犬、血統正しいサラブレ  
ッドを皆が望む様に、毛なみ美しく(北林透  
馬氏の小説に戦争中戦線慰安婦が乱暴な将校  
によって四つ這いにされ、「ワンといえ」と  
強いられ「犬がフンドシをまくか?とつま  
え」と丸裸にされ「少々色が黒いが毛なみの  
つやは良さそうだ」とうそぶかれる場面があ  
りました)十分に手入れが行き届き、血色  
がよく、肥え太って、外見の堂々とした立派  
な家畜が矢張り上流階級の飼う家畜としては  
ふさわしく、市場取引の価格も高いというこ  
とは容易にうなづけると思います。併し白人  
種が益々この家畜を研究し、色々な品種をつ  
くり出す為の例外は認めなければ、とてもこ  
の人間家畜制度には行きづまりのくることが  
予想されます。サジストの人だったらどうか  
も知れませんが。「人間家畜が制度化され完全  
に隷属した状態になった時には最早や興味が

半減するに違いない」

私はこの家畜を型にはめない様に努力しな  
ければなりません。丁度奇クが型にはまった  
時は、読者だって欠伸を催す時であるからで  
す。何だかわけが分らなくなりました。誇大  
妄想狂の幻想の様にとりとめもなくなつて参  
りました。これ以上筆を続けると何をいい出  
すか分りません。貴兄と違い私は所詮、研究  
とかまとめるとかする才能もなく、唯奇想天  
外な空想図を追っかけてさまよっているだけ  
の男に過ぎないのです。

あ、最後に一つ、この国にも空想小説があ  
るということを——。ここまで理想的な社会  
を形成した「第七天国」でも、真逆、火星入  
が攻めてくるわけもなく、矢張りこうなると  
流行の空想科学小説があり映画が出来るとい  
うことです。私は映画に異常な執着を感じる  
のですが、例えばその家畜を存分に使用して  
空想映画をつくる。「ゴジラ」はあまりいら  
気がなさすぎるのであんなのは駄目。それよ  
り巨大な蟻に征服された人間、蜘蛛や毛虫や  
蛇や蛾の為に飼育される家畜としての人間。  
これがこの国の空想映画であり、フィクショ  
ンであるのです。これにも私は少からぬ興味  
を覚えます。地蜂の一種に肥えたった芋虫を  
生きながら貯わえ卵をうみつけて卵からかえ  
った幼虫がその肥えた芋虫(私の空想では人  
間、勿論日本人)の肉を食いつつ成長すると



いう話。逃げてても逃げててもぬけられぬ蟻地獄。巨大ないやらしい蜘蛛の巣にかかった美しい肥った婦人——等々。

とに角「空想は実に楽しい」といわれた東氏にしても、「明日にでも貴方達を襲うかも知れない」といわれた土路氏にしても、「山椒魚戦争」の紹介をされた貴兄にしても、私にとって涙の出る程嬉しい存在なのです。空想の素晴らしさを分ってくれる人——。出来得ることならその人達に会って心ゆく迄空想の世界について語りあい、理想の恍惚境にひた

りたい。私は苦笑する、こうしたとてもないことを考える連中が集まって勝手な熱を吹ちようしている光景。私の過去もその姿だったけれども他人は全然気がつかない。いくら怪しげな地図をかき入れて勝手な国をつくって見た処で、しかし数人の男が新しい夢想境に宇頂天になっている。ハテナどこかの精神病院の一棟かな、と首をかしげられるかも知れないということです。併し又おりの中という言葉に少からぬ昂奮を覚える。こうなるときりがありません。唯私もこうした種類の

大きいスケールのマゾヒズム小説が出現することを期待するのです。それは一面に、サジストの描かれた家畜化小説にも共通して希望出来る私（第七天国に於いてもあく迄第三者の立場をとって外国の雑誌記者、奇クの特派員たる身分と申しましたが）として傍観する私、ハテ卑怯と仰有られますか？ が鶴首して期待するものが必ず出現するであろうことを——敬愛する貴兄に嬉しさのあまりに乱暴に書き流した手紙の結びと致します。

(了)

【新聞・雑誌】通信

変態「ますらお派出夫」の犯罪

青山三枝吉

「週刊サンケイ」七月一日号に、次のよう

な記事が載っていた。全文を書くとは長くなるので、私が要点だけをわかり易く紹介してみます。「街の話題」という欄で「恋態「ますらお派出夫」の犯罪」の見出しがついています。

「……榎戸は大正十一年三月都下青梅市に

生まれた。

実家の同市西分五七には、実父の鶴吉さん（七〇）と弟がいる。兄は三人あってそれぞれ生計を立てており四男坊だった。青梅小学校を卒業すると糸の加工職人となり、八王子市で働いた。十八年三月に千葉県の片岡部隊に入隊、九月にはスマトラに出

征、そこで終戦を迎え二十一年の八月復員した。その後は關米の買出し、浅草の運輸店で雑役をやったりして三十年の一月、当時青梅市で染物工場をやっていた。今井さん方につとめた。

一方今井さんは二十九年の暮妻の定子さんととは、年上の愛人ができたため、別れたが、この愛人ともうまく行かなくなり、翌年の四月の末に別れたという。経済的にも行き詰った今井さんは同年十月頃、定子さんとの間に生れた明君（二〇歳）昇ちゃん（五つ）和雄ちゃん（三つ）を連れて飯能に引越し、そこでまた榎戸を雇入れ、派出夫として使った。

しかし、この派出夫は不幸にも恋態性慾

者だった。料理、洗濯、子供の世話など、家事一切をやつてのけるこの「派出所」は夜になると「女」としての愛撫を今井さんに求め、また今井さんも或る程度までこれに応えて奇妙なる夫婦関係が、この五月の末ごろまで続いたのである。

女に関心を持ってない男——榎戸は自分に就いてこう語っている。

『スマトラにいた時、一つ年上の小隊長に毎晩抱寝をされて「男の味」を知った。復員してからはじめて三つ年下の女と結婚の約束をした。女は妊娠したが自分を嫌い、人工流産して他の男に嫁いでしまった。たいてい好きでもなかったが、それ以来、女は大嫌いになった』

これが彼の混乱の動機だった。

今井さんは、

『榎戸が女より男が好きだということは聞いて知っていた。仕事も染物より勝手などの仕事が出来たので、飯能の家では子供と家事一切をまかせた』

と、いっており、問題の同性愛の点については、

『いっしょに住むようになってから毎夜つきまといに来て、始めは身体をすり寄せて来たりしたが、………つてくれと要求したり、キッスしたりするようになった。断

るとカミついて来た』

と係官に変感性慾の一面をさらけ出したが『しかし、最後の「一線」は越えなかった。この傾向は四月ごろからだんだん強くなり、要求を断ると一日中寝ころんだり、子供達を折かんしたりした。そこで生活を

変える意味もあって、勤め先の主人、小谷野を通じて定子との復縁話を持ち出した。これを知った榎戸は二日、世の中がいやになった』と二児を連れて家出したがすぐ連れ帰った。榎戸を断わりたかったが、若し榎戸を断ると自分かあるいは留守中子供達に危害を加えるのじやないかと思つて言えなかった』

といっている。……』

こうして六月三日、午後三時頃、今井さんの子供二人を連れ出した榎戸は、飯能市から三キロばかりはなれた宮沢湖に子供を投げ入れた。幸い一人は救われたが、一人は溺死体となって発見された。

当然、榎戸はすぐ捕まった。

「……刑事の顔があぶらと汗に汚れ目が真赤になりはじめた翌七日のあさ五時三分すぎ榎戸は今井さんの宅から約百メートルほど離れた飯能第一小学校の校庭であっけなく同署小野博次刑事（三）の不審しん問にかかり逮捕された。

『申訳ありません。お兄さん（榎戸は今井さんをこう呼んでいる）が、三年前に別れた奥さんとまたいっしょになる聞について、口惜しかったんです。本当の女に負けないように一生懸命やっている私をすててよりを戻すなんて——だから子供達を道ずれにして、自分も死ぬ気でした』

と榎戸は逃走のつかれに薄汚なくなっていたが、何となくなまめかしく、女性的な口調で取調官にこう語った。……』

「……この事件について埼玉大学心理学研究室の山根薩教授は、

『同性間の愛情といえは一般には恋愛的なものの特視するが、心理学的にみると男女間の愛情と少しも変らない。その意味でこの事件は別れた妻の復縁を嫉妬したこと、この事件は別れた妻の復縁を嫉妬したこと、これは正常な心理だ。しかしその気持を表すため恋人に八つ当たりするか、恋敵を傷つけるのが普通だが、うつ憤の対象に子供を選んだことは道義的感情を持っていないことを示すもので、その点ではこの男は正常な感情をもっていないものといえる』

と、いっている。……』

以上、週刊サンケイ（産業経済新聞社発行、週刊雑誌）の昭和三十一年七月一日号のものでした。



## 〔新聞・雑誌通信〕

松 原 一 提 供

## 「女給をなぐるける」

〃かせぎが悪い〃と暴力マダム

△読売・京浜扱三一年七月七日付▽

横浜伊勢佐木署は七日朝十時ごろ、横浜市  
中区羽衣町三ノ六一、バー「六九」経営者田  
村京子（三四）を暴行傷害の疑で検挙した。  
調べによると、同店住込みの女給淡谷きみ子  
（二四）さんをかせぎが悪いと二階に連れ込  
み、全裸にしてなぐるけるの暴行を加え、逃  
げようとすれば裸にしてしぼりつけるなどの  
乱暴を働き近所では暴力マダムのうわさが高  
かったもの——。

〇 〇 〇 〇

まさに此のマダムこそ、暴力マダム無くし  
て女性サジストである。

次にこれは男性の場合のサジストを扱った  
記事として——。

## 「革バンドの魔力」

〃ムチが鳴る〃夜の床

△日本観光新聞三一年八月三日付▽

「浅草は六区、青天井をかりまして……」

むしあつい六月の夜、相も変らぬテキ屋の口  
上がグルリに人を集めてハズんでいた「さあ  
さあ男は度胸、女は愛きよう」男の目がすば  
やくぐるりの人埋を一べつする。やがてその  
垣が一人去り二人去りだすと男は立ち上って  
人垣からはなれかけた若い娘の肩をトンと叩  
いた「ネエさん、家出したんじやないかよ」  
ギクツとした娘が思わずうなずくと、男は傍  
にいた若い女に声をかけた「ヨウ、お前知っ  
てるだろう、どっかつとめ口探してやんな  
よ」「OK、いらっしやい、あたしもちよう  
ど住みかえようと思ってたんだから、一しよ  
につとめましようよ」

娘は相手が女であることに気を許しておと  
なしくついて行く、いわずと知れた行先は特  
飲店だ。そこで迎えた最初の客がさっきのテ  
キ屋でそれはおそろしい夜だった、皮バンド  
で叩かれ体はミミズばれになったが、その夜  
男が店から札タバを受取って出たのを娘は知  
らない。一週間たって、一しよに住みこんだ  
女にいわれるままに着替えて外に出ると他  
の特飲店につれて行かれ、いまわしい——が

なんとなくひかれるあの最初の男がまたあら  
われた、男はまた金をフトコロにして店を出  
た。こうした風聞が警視庁保安課の耳に入っ  
たのはグレン隊取締りのきびしくなった今年  
の六月ごろの事だった。佐藤刑事ほかの内偵  
がすすむにつれてやがて全国をマタにかけた  
人身売買のテキ屋一家がうかび上がった。七  
月二日未明、鈴木部長刑事以下は東京  
都墨田区吾郷町西四の四六テキ屋一家の子分  
加藤孝夫（二六）を検挙、続いて七月二十六  
日までその情婦田村栄莉子（二二）州崎弁  
天町カフェー「一ツ松」主人畠中留吉（四五）  
ほか二名を職安法違反容疑で、また吉原特飲  
街カフェー「四海波」経営者大和竜平（三三）  
ほか七名を勅令九号、都条令、職安法違反容  
疑でそれぞれ検挙した。

家出娘や職を探している娘も言葉巧みに赤  
線に売りどばし、情婦を使って店を転々させ  
るたびに五千円から二万円とっていた。

情婦田村栄莉子が調べ室で身をふるわせな  
がら語るところによると、田村は小学校を卒  
業して浅草の乾物屋の女中をしていたときや  
はり乾物の小売をやっていた加藤と知りあっ  
た。しばしば顔をあわせるうち誘われて映画  
見物に行ったが、その帰り飲み屋の二階につ  
れこまれてそれとは知らず睡眠薬の入ったビ  
ールを飲まされた。眠りこけていた田村が目  
をさますと体中がツキ／＼痛む、腕とその局

所に「孝夫」のイレズミがしてありもちろん体はおかされていた。田村が十五才、加藤は十九才の時の事で加藤は典型的なサジスト、それ以来逢瀬で体にミミズばれの出来ない日はなかった。しかし初めて知った男に仕込まれた倒錯性欲に次第に馴れていった田村は彼とははなれられなくなり、以来グレ出した加藤がテキ屋の仲間入りをしお定まりの生活に困つての末、一昨年五月田村は洲崎弁天町の кафエー「一ツ松」に前借二万円で住みこんだ。

ところが寝巻一枚で入った田村にはタンス鏡台などの前借がいつのまにか七万八千円になり、泊りの客が二、三人の場合主人畠中に少な過ぎるとオドされて多い時には八人もの泊り客をとられ、別々の部屋に客をおいていわゆる「まわし」をとらされた。このため体が疲れている処を更に時おりたちよる加藤がミミズばれにするとといった案配にたまりかねて昨年の一月十八日、着のみ着のままここを逃げ出し吉原病院裏手の渡辺方に身をかくした。

しかし田村はすぐ「一ツ松」につれもどされた。十日程、前と同じように「一ツ松」で働いた田村は二十九日ネマキに半てんを引かけた姿でフラ／＼と亦ここを飛び出した。あてどなく浅草をふらついていたら時ピッタリ加藤に逢ってしまった、畠中、加藤とよくよく

浅草のヤクザに見こまれる女だと田村はクチビルをかんだが、この男には辛い目にあわされながらこうして逢ってみると離れがたい何かがあった。加藤の手で再び吉原の кафエー「万開」に入った田村はすぐにも加藤の「仕事」の手伝をしなければならなかった。

加藤やその手下が目をつけた女を特飲店につれて行き、暫くたつとおびき出して他の店に住みかえさせるのが、彼女の役目だったが誘惑した娘ともども同じ特飲店に住み込まされるのがならわしだった。しかし住みかえごとに周せん料でふくらむ加藤のポケットから田村はほとんど金を受取った事はなかった。金はすべて加藤達一味に山分けされていた。

売られた女達は検挙されるまで十一人に上っているがみんな加藤の情婦になっていた。サジストである加藤はこれらの女に逢う度に皮バンドでムチ打って満足していたが、女達は自分一人が情婦でない事を知りながらもその倒錯の魔術からだん／＼のがれられなくなっていた。そのうち二日に加藤が検挙された。と知るや田村はかねてからの馴染客松本尚高(二五)と山谷三丁目のエビス旅館に同棲していたが数日後検挙された。

調べにあたって係官が田村の体のミミズばれや切り傷をみて「加藤を傷害罪に」と洩らした時彼女はカンゼンと首をふった「彼はお

そろしい人です、でも私はこうされても憎めません、私はあの人に情婦を世話したり皮バンドで叩かれたりするのが何か病的なのたしみました。」その田村は加藤との間に六つを頭に二人の子供をもうけているが、二児とも洲崎弁天町の田村の実家にあずけてある。

加藤は浅草に根を張る長沢一家の子分である手下は二十三人もいた。拘留中の加藤にかつて売りどばされた女達が入れ替り立ち替り差入れに来る。その女達があまり加藤をうらんでいないどころか逢いたくてたまらないというのも不思議なサジズムの魅力らしいと係官は当惑顔だ。しかし女達の中一人だけこの暴力街に背を向ける者がいた。昨年九月一味の通称山チヤン(逃走中)に名古屋でだまされてつれてこられ吉原の「四海波」に売られたS子さんがそれだ、彼女は刑事事のはからいで川口市の工場に女工として勤める事になったが「だまされた女が深みにハマリこんだら最後二度と浮び上がるとうする氣力をなくして悪に温存してしまうのはどういふ事なのだろうか——」と係官はなげいている。

睡眠薬を飲まされ、イレズミをされ、皮バンドで叩かれた女がその男のサジズムの魅力にひかされ悪の花グリーン隊に食われた女人群像——これは「ニュースの穴」の再録である。



## 泥棒に縛られた話 二件

池田正一 〈提供〉

## その一

(東京タイムズ、昭和三十一年八月二十二日版)

東京タイムズといえば、東京に於て一流には遠く及ばないとしても、まず二流の中でも上の位置を占める日刊新聞であります。その東京タイムズとしてはこの見出しも記事も多分にセンセーショナル、リョウキ的でありましょう。「下着を包丁で切りさいてお尻を出し、傷を負わせて手拭で猿ぐつわをかませ、後手にしぼり」などと、まるでそばで見ていたような書きぶりです。しかし、これが事実にして、誇張であるにして、この記事だけを讀む上においては、多分にサデイスチックといえましよう。

## 昼寝の少女を襲う

## 巢鴨脱走少年、恐るべき犯行

危い！昼寝のスキに忍び込んだ相談所脱走少年が、少女独りの留守番とみて居直り、処

刑の部屋。その日の乱暴を仿いて二千余円を奪って逃走するという事件が繁華街の裏通りに起ったが、幸い犯人はスピード検挙された。

廿一日午後二時四十分ごろ豊島区巢鴨六丁目会社員方(特に名を秘す)に十五、六歳の少年が上り込み奥八畳間でタンスの引出しを開け物色中、同間で昼寝していた四女(七)と高校三年生Ⅱが目をさまし「何をするの」と大声で叫んだ。少年は「金を出せ」とおどしたが、気丈な少女は「ひどい人ね、お父さん、お母さんに悪いと思わない」と逆にたしなめたところ少年はやにわに台所から菜切包丁を持出し、少女のワンピースや下着を切りさいて裸にし、お尻に約十センチ、全治二週間の傷を負わせたうえ押入にあった兵児帯で首を絞め手拭で猿ぐつわをはめ、後手にしぼり「ツベコベいうな、金のありかをいえ」と詰めよった。少女は縛られたまま「カギはタンスの中よ、勝手にしなさい」というと少年

は鍵を取出し、タンスの最上段の引出しをあけて現金二千二百九十円を奪い、干物の白ナイロンシャツを着込んで窓から飛び降り、大塚駅方面に逃走したと同三時五分買物から帰った母親が巢鴨署に届出た。

現場は国電大塚駅の南東約二百メートル啓成予備校、帝都ゴム会社、旧白木屋など高層建物に取囲まれた穴のような住宅街の一角。少女宅は玄関も台所も戸締りがしてなく、六畳の間の窓は明け放しで裏手は約二百坪の草原のため大声をあげてもきこえないところ。

同置で緊急警戒中、同五時ごろ文京区大塚仲町三六六公園のベンチに腰かけていた拳動不審の少年を大塚署員が職質したところ犯行を自供したので、強盗、傷害現行犯などで逮捕、巢鴨署に引渡した。調べによると犯人は愛媛県喜多郡長浜町松原通中学三年S(二五)で、今月はじめ郷里で万年筆三本を盗んだことからいづらくなり、家の金一万五百円を持って家出上京したが、女遊びをおぼえて金を使い果し、ぶらぶらしているうちさる十五日丸ノ内署に保護され巢鴨の中央児童相談所に送られた。所内ではネコをかぶって掃除等を進んでやり模範児童と思われていた。(同所の話)廿一日午後一時半ごろ同所員三名が児童三十八名を連れ近くの風呂屋へ行ったが、入浴後「便所に行く」といい、スキをみて便所の窓から逃走、同二時過ぎ風呂屋から三百

米離れた少女宅の高さ六尺の下塀を乗り越えて裏のトウモロコシ畠に身を潜め様子をうかがっていたが、母親が出かけたのを見済まして窓から侵入、犯行を働いたもので、Sは「金が欲しくて空巣を狙ったが、女が騒いだので切っておどかした」と恐るべきティーン・エイジャーの衝動的犯罪をさらけ出している。

▽警視庁防犯課談「まだまだ昼寝の季節が続くが、昼間でも女子供だけの場合は一応戸締りはキチンとしてから昼寝に入らないといけない。まして人通りがあるからといって人目につく屋内での昼寝はこんな凶悪な事故にならなくてもノゾキ程度の軽犯罪の危険はある。

## 新聞雑誌通信

## エスキモー娘の切腹

本 間 宏

三世社発行「実話雑誌」第十一巻第九号9月号大号に、切腹研究家に興味あるうと思われる記事がありましたのでお知らせします。

「幻の航海4600浬」という文の中で、エスキモー女の自殺と題して次のような文がありました。「エスキモー女に老婆はいない。性の乱費のため、早く歳を取ること

る。危険に気がついた時は大声もよろしいが昼間なら早く外へとび出すことが第一だ。女の人はこんな時によく家の奥へ奥へと逃げたがるが、これはかえって賊のワナにおちいるようなものだから気をつけてもらいたい。

## そ の 二

(東京新聞三十一年八月二十二日夕刊)

これは、所もあろうに鎌倉八幡宮の境内で縛られたというのが変わっている。しかも、いくら夏とはいえ、屋外に於て男と女をハダカにして、足まで縛ったというのですから。この場合、丸ハダカというのはどんな程度のハダカなのでしょう。まさか一糸まとわず、と

もあるが、幼い時から死ぬ迄、仇きずめに仇くので、二十三歳から二十七、八歳迄の間に死んでしまう。いつでも洞窟の奥にひっこんでいる彼女達は、十三、四歳で盲目になるものが多い。そういう盲目は三年ばかりで死んでしまう。

中には「いつそ殺してくれ」と家族に頼む者がある。すると家族の者は盲娘を穴の外へ引きだし、凍りついた地上に仰向けに寝かせ、ズボンをぬがせ下着をまくりあげて、ナイフで一文字に彼女の腹を割く。あけに染まった切口から湯気がほの白く立ちのぼる。」

いうのでもないでしょうけど。まるで昔の芝居をみるような場面です。脅かされた二人はずい分怖しかったことでしょう。

尚、この二つの事件とも東京の周辺に同じ日に発生したということは偶然でした。しかし、こんな偶然の重なりは、困りものですね。

## 参拝のアベック裸で縛らる

## 鎌倉 鶴岡八幡に二人組追ハギ

【鎌倉】廿一日夜九時ごろ鎌倉鶴岡八幡宮にきた茨城県北茨城市華川町小豆畑九八二常磐炭礦社員根本昇さん(三三)と横浜市中区山手町一八四会社員A子さん(二四)は参拝し帰ろうとしたとき、常夜灯の影から二人組の男が飛出し、肉切包丁を突きつけ、男のスイス製腕時計と現金五千二百余円を奪い二人を丸ハダカにして手足を縛り、社殿横のミゾの中に押しこめてなお脅しているうち、神官が巡回してきたので肉切包丁を投げ捨てて逃走した。

犯人は二人とも廿二、三才、一人はアロハシャツに空色ズボン、他の一人は白ワイシャツ黒ズボンの男。

【編集部より】新聞、雑誌、単行本等に変った記事がありましたら、長短に拘らずお知らせ願います。



## ある夢想家の手帖から

沼

正

三

## 第九十六 マゾッホの汚物趣味

今度マゾッホの「黒女皇」を訳出したが、その解説中で私好みの汚物趣味にまで筆を走らせてしまった。このことを行き過ぎのようと思われる方もあらうと思われるので、これについて弁明しておきたい。

一体マゾッホ自身には汚物愛好の趣味があったろうか？もし、なかったのなら、その作物に私のような空想を附加することは、彼の作品の冒瀆でしかないだろう。

たしかに、一見彼にはそのような趣味はないように見える。私の知る彼の小説戯曲は決して多くはないが、そのいずれをとってみても、汚物趣味の痕跡をも残さない。彼の妻の離婚後の回想記を見ても、この点について推測させる記述はない。——では、マゾッホにはそのような傾向はなかったと断じて良いか？必ずしも然らず。

第一に考えねばならぬのは、当時における文芸作品の検閲である。オーストリア政府は女皇マリア・テレサ以来伝統的に取締の峻厳を誇ったのであって、一定の限界内ではいわゆる「好色のウィーン」的文化を繁栄せしめたにもかゝらず、変態的傾向は厳に弾圧した。プロシヤ政府はそれ以上に厳格であった。

例えば「毛皮を着たヴェヌス」を見よう。男が契約に縛られて女

の奴隷となり、女から虐待される。このストーリー自体は、今日何等禁圧の必要のないものであるが、これが屢次の発売禁止処分のみならず、刑事裁判まで惹き起したのである。

大体この作品の結末は検閲に対して妥協的に書いてある。ワンダがゼヴェリンを裏切って愛人に彼を散々打擲せしめた後、彼は飄然ノーマルな性格に立ち返って、彼女に対して復讐を考えるに至る。これはそれまでのゼヴェリンの性格や心理と全く矛盾しているのである。そも／＼マゾヒストが女から虐待せられることによってマゾヒズムを捨てるということはあり得ない筈である。本誌三〇年五月号・十一月号榎本利子さんの「悪癖」は、右の流儀を学んで虐待によって夫のマゾヒズムを治療しようとした妻が、かえって嗜虐の妙味を覚えるに至る物語であるが、夫の被虐受容の程度も次第に強まり、益々深味に入っていくことになっている。マゾヒズム心理としてはこうなるのが当然なのであって、事実マゾッホもそれを理想としていたことは「黒女皇」のウラジミールが自分に死刑の宣告をしたナルダの足にキスする場面でも分る。虐待され／＼ばされるほどの女に恋い焦れる。これこそマゾヒズムである。だからゼヴェリンの豹変は明らかに作者の意に反する曲筆だが、それでさえ足らず、更に前後の枠の話の話を附けて、彼が最後には女性一般に対し、むしろサディスティックな態度をとるに至る。という味気ない変改を加え

ることを必要とした。変態傾向に対する取締の峻厳さが思いやられる。その位だから、いわゆる汚物愛好的な内容を文章に盛ることは、到底公刊の可能性が望めなかったのである。だから、彼の公刊の作品に汚物趣味が見当らぬということだけでは、何とも断言はできない。一体マゾヒズム生成の契機は多種多様であつて、同じくマゾヒストと名乗る人の中にも、色々な傾向がある。殊に、純粋な緊縛鞭撻の愛好者の中には、苦痛性感アルゴリズムのみに重点を置き、マゾヒズムの本来の契機たる凌辱の点を問題としない者もある。然し、正統派のマゾヒストは凌辱の中に快感を求めるのであつて、マゾッホは実にその正統派の旗手なのである。ところで、この凌辱観念をつきつめてゆくと、マゾ的な下降の極致として汚物愛好にまで陥るのが自然である。勿論正統派と目すべき人の中にも、心裡の禁圧から汚物まで下降しない者もある（例えば天泥盛英氏）が、大多数のマゾヒストは凌辱の極致として対者の汚物との接触を考える。このことは、本誌掲載のマゾ作品を読んでいる人には今更云うまでもないことだ。もとより空想に止まるものが多からうが、旗手とする正統派マゾヒズムは、本来そういった観念的なものだ。してみれば、正統派の旗手マゾッホの脳裡にも、この空想が発展してたと見るのが自然であろう。

その証拠をあげよう。マゾッホがあるマゾヒストに出した書簡の内容をクラフト・エビングが紹介している中に、こんな話がある。あるデンマルク婦人の話である。彼女は求愛者達を一定期間自分の奴隷として取り扱うのが常で、この試練に堪え切れぬ男は結局彼女の寵愛を受けることができないのであつた。……

筆者註、マゾッホの文は、このあとその試練がどんなものだったかを詳述しているが、公刊誌としての制約から、それをこゝに紹介することはできない。人間ビデという表現でよろしく想像して戴きたい。

### 第九十七 三者関係

前項の事例のついでに、こゝで三者関係の概念について説明しておこう。マゾヒストの夢想は女主人への奴隷的奉仕である。彼は奴隷であるが、女主人を恋しているもので、恋愛の性質上、女主人の独占を要求する。即ち女主人対奴隷の間に夫婦のような強い結合があり、貞操義務によってこれが防衛されることを、彼の愛情は要求しているのである。これは至極あたり前なことであるとも云える。それだけ健全だとも云える。

この段階を二者関係と名附けよう。この段階で満足するマゾヒストは数多い。本誌作品で例示すると、「マゾヒストの会」（二八年五月）は積極的にこれを勤めているし、「幸福なる隷属の告白」（同九月）「悪癖」（三〇年五月一〇月）等の夫婦間のマゾプレイものは勿論、「捕虜の洗礼」（二九年三月）「ドレイ・ボーイ」（同四月）「悦虐回想録」（同七月）等いづれも、他の男性が入って来ない点で二者関係である。馬族氏の「美しい暴君」「牛乳風呂の饗宴」では、女主人公の夫にあたるひと（例えば弥生子を満州妻にしていた將軍）は登場せず、描かれた男は皆奴隷なので、女主人公をかなめにして二者関係が扇子状に成立したものであり、三者関係と云えない。——「奈落の欲情」（三〇年五月一〇月）は殆ど二者関係だが、女主人が他の男との間に造った子の墮胎のために奴隷が使用される点で二者関係に終っていない。

三者関係（Triorism）はこの二者関係にもう一人男が加つた場合である。但しいわゆる三角関係トライアングルと異り、両個の男女結合が女を共通にせば足る。今、マゾヒストを含む方の結合を劣位結合、他を優位結合と名附けよう。

劣位結合が夫婦であれば、優位結合は姦通を意味する。コキユ―妻に姦通された夫——たることは、夫にとって恥辱であり苦悩であ



る。それを夫が受容し希求するなら、これは明かにマゾヒズムである。ヒルシュフェルトがこれを指摘している。彼はメタトロピスム（男性マゾヒズムと女性サディズム現象）を分類した中に「仮装メタトロピスム」の項目を立て、三者関係（彼の用語）は往々にして自分で意識していないメタトロピスムであるとし、その理由を説いて云う。「妻が夫の面前で他の男と交わる。これは夫にのみ属すべき権利の否定であり、彼を苦しめ、刺戟する。多くのメタトロピストは彼の目の前で女主人が一切の羞恥心を振り捨て、しきりことを望む。彼は彼女から空気が見たいに無視されたいのだ。このような無顧慮無羞恥の極致は、自分の目の前で妻が他の男に抱かれることである。」と。そして次のような例をあげている。

ある工場主についての話である。彼は美男子の同業の友人を招待しておいて妻に彼と姦通するよう頼む。客がやって来る。妻は夫が急用で外出中であると説明する。実は彼は寝間の隅で、戸の孔から居間の一部始終を見聞してゐるのである。食事を出す、酒をすゝめるピアノを弾く、ふざけ合う中愛撫抱擁にまで発展し、結局同衾することになる。やがて、妻は急に慌て出し、今にも夫が帰って来るようなことを云って客をせき立て、帰らせてしまう。客が辞去すると直ちに、隠場所から現れた夫が、今度は自分で夫の役目をする。――ヒルシュフェルトはこの例から嫉妬の心理について考察するがこゝには割愛するとして、とにかく、このような例では男は自覚しなくてもメタトロピストだと断言している。夫婦合意のある点で、マゾ・プレイの一種とも云えるが、夫婦関係の存立を脅かすような危険なプレイと云わなければならない。

こういう合意姦通は特殊の事例だが、一般には「女の裏切」がコキユのマゾヒズムを刺戟するのだから、必ずしも合意を要求しない。「自分の愛する女が自分を捨て、他の男を愛し、しかも自分はそれを如何ともなし得ない」という意識を味うためには、むしろ合意に

よらぬ方が本格的だとも云える。――マゾッホは「女の裏切」を愛好した作家である。例えば「毛皮を着たヴェヌス」のゼヴェリンは云う。「私が愛し崇める美しい女の奴隷になる――自身は他の男のものになつていながら、私を縛り鞭打ち足蹴にする女の……」。逆に女の立場からは、例えば「ピアロボールのユーディット」は、敵王の寵妾になつて、王の命を狙つて捕えられた彼女の夫の処分を任された時、尋常な死刑では軽すぎるとして、王に向つて云う。「彼を貴方の奴隷になさい。貴方が足蹴になさる犬になさい。そうやって生かしておいて、私が貴方を愛しているのを彼に見せつけてやるのよ」。彼の大抵の作品がこの種の三者関係を含むと云つてよい。前項の彼の文章もこの三者関係の極端な現われといえる（次項参照）

姦通とマゾヒズムの関係は、右とは逆の場合もあり得る。即ち三者関係における劣位結合に情夫が入ることも考えられる。ヒルシュフェルトは、流石に、この種の場合をも逸せず前記の項目で触れていて、姦通の罪の意識や「経験ある」「処女でない」女性との受身の交渉という点にマゾ的效果があると指摘している。優位結合の男が女を尊重していない場合には、劣位結合は優位の男の「お古」を貰つたことにもなるわけである。

こうやって各種形態を検討してゆけば、三者関係の様式は仲々多様であるが、いずれにせよ、この場合のマゾ的效果が、二者関係のそれと異り、女の嗜虐性を必要としない点に特色がある。（パギスム的二者関係も女の嗜虐性を必要とせぬが、貴婦人には同階級の男との優位結合が潜在するので、実は三者関係である。）例えば「ボンパズールの奇行」（第九十二項）で、詩人を捨て、侯爵に嫁するアドリアンヌは、詩人の主観においてこそ「残酷な」女性だが、実は「移り気な」女性というに過ぎぬ。性格を離れて「女の裏切」というお膳立がマゾヒストを喜ばせるのである。

然しマゾ作家の常として、女主人に嗜虐的性格を与えていること

が多い。少くとも劣位結合を女主人対奴隷といった従属関係（夫婦であつても尻に敷かれてゐる時はこれに属すると見る。）として、構想するのが常である。

今、単純なコキユ又はその逆の形式を標準形式と名付け、これに對して従属関係を組み合わせたものをM形式と名付けると、次のように表示できよう。

	優位結合	劣位結合
標準形式	對等（夫婦又は恋人）	對等（夫婦又は恋人）
M第一形式	對等（夫婦又は恋人）	從属（女主人対奴隷）
M第二形式	從属（主人対女奴隷）	對等（夫婦又は恋人）
M第三形式	從属（主人対女奴隷）	從属（女主人対奴隷）

そして、このM型三形式において女の劣位の男に對する態度にも色々あつて、先の「女の裏切」の外、無関心の極における「女の忘却」、遂に二人して劣位の男を玩具にする「女の玩弄」等、二者関係でのモチーフが右の三形式に組合せられて、三者関係の多様性は一段と豊富になるのである。

この三形式の中で、マゾ作家に一番愛用されるのは、いうまでもなく第一形式である。即ち劣位の男が優位の男女に從属することになる。「二百字讃歌」「ヴィナスの重石」等いずれもこの形式であり、これに「女の玩弄」即ち優位の男女によつて劣位の男が玩弄されるモチーフ（「毛皮のヴェヌス」の終末がそれである。）を組合せたのである。鬼山氏の大作「らぶ・すれいぶ」も二者関係の虐待の描写には生彩がなく、他の男が登場して面白くなる。情夫等はいずれも性能力で主人公に優り、優位結合に立つので、優位結合が重複していることになるが、本質は第一形式の三者関係である。「痴

迷」は情夫の方が劣位結合に立つた珍らしい型であるが、實際に姦通までゆかず、夫婦して三木を玩弄しているのだから、視点が變る丈で、やはり第一形式である。

私の紹介した「人か馬か」（二九年二月）「内沙汰」（同十一月）「月光」（第八十七項）或いは偏癡のアルゼリア人の話（第五十六項）等も、いずれも第一形式に属するが、「人か馬か」やアルゼリア人の場合、畜生化の功德で「女の無関心」のモチーフが主眼となつて來ている点に注目される。

以上の例示はもとより尽したものでない。読者諸君は本誌作品は勿論、谷崎潤一郎——「饒太郎」から「鍵」までの作品系列は彼が三者関係の作家なることを語っている——の全集等を涉獵し、三者関係を取扱ったものについては、そのマゾ的效果を自ら体験しつつ、研究されるがよい。一般文学作品の理解にも資する所があるであろう。例えば、織田作之助の晩年の作「世相」に、妻に売春させつゝ自ら客引きをしている男が登場するが、三者関係の概念はこれに何かの示唆を与えないであらうか。

**附記第一** M形式の第二、第三については後に白人崇拜と関連させつゝ、第一百項、第二百項で述べることとし、こゝではたゞ「痴人の愛」「らぶ・すれいぶ」のように娼婦的な女性、進んでは真木氏の「魔性の姉妹」のように娼婦そのもの、に奴隷として奉仕する場合には「人に輕蔑されるような女から更に輕蔑されて生きる」という第三形式特有のマゾ効果が生じることを指摘するに止める。

**附記第二** 「痴迷」はリアリズムに徹し過ぎて、マゾヒストの読者の求めるロマンチズムを満足させなかつたから、マゾ小説としてはあまり受けなかつたと思われる。しかし研究対象としては、仲々面白い。鬼山氏個有の窃視願望という要素を問題外にして、マゾヒズム心理だけみても、単純でない。三木は特殊接触を



許されるだけなので、主人公は劣位結合が本当は姦通でない、という安心感の下に、夫婦して三木を玩弄しているわけであるが、一方この作者には特殊接触こそ女に対する唯一の接触方法であるとする思想があり、その意味では特殊接触は一種の性交となり、従って主人公は無意識において姦通されてると感じ、コキユの意識も楽しんでいるのである。単純に三木の立場のみにマゾヒズムを感じたのでは、この作品の理解としては不十分のそしりを免れまい。

**附記第三** 南欧ではチチスベオとて夫に公認された情夫を妻が持つことが少くない。これは中世のミンネに由来する特殊の三者関係である。また、前の夫が落魄して、新しい夫の下に権勢を持つ別れた妻の幸福を見る「芦荊」の主題も、三者関係の特別様式である。これらは、別項で取扱うことにする。

## 第九十八 人間ビデ

前項でヒルシュフェルトを引用して述べたように、三者関係は意識しなくてさえ、マゾ的契機を含むことが多い位だから、マゾヒストが意識的に三者関係に身を委ねると、他のマゾ的要素と複合して深刻な形をとり易い。前項末尾の附記第二でふれた特殊接触の問題もその一つである。二者関係の男は女の足やVに接吻するのが常である。所がそれが三者関係になって、新たに登場する優位の男は女と通常の接触や結合を行う。そこで彼女のV (vulva vagina) を媒介として劣位の男の (mouth) と優位の男の (penis) とが等価値と評価されることになり、その優劣が肉体的表現を以て示されることになる。これは通常のコキユ感以上の強いマゾ的昂奮を惹起する。「二百字讃歌」でも「ヴィナスの重石」でも、劣位の男は女主人とは本当の接吻を一度もしていないことに注意されるが良い。彼女を女として享樂しうる優位の男に対して彼は明らかに劣敗者であるこ

とがこれで象徴されている。この意識を極端に推進したものが、本項の標題とした「人間ビデ」である。男の顔をビデ——女性用局部洗滌器 (bidet de toilette) 速報四五参照。寝室或いはこれに隣る浴室に置かれる多くは瓢箪形の盤で、中に上向きに水や湯を噴出する仕掛けがあり、両側の凹部に腿をあてるように跨ると楽に洗滌できる。酒井潔氏は「下部洗滌盤」と訳している(「蕪園夜話」)が、浴の字がおかしい。単純にビデとする方がよい。——と見立てるのである。これはマゾ的下降形態の極致として人間便器の觀念に匹敵するものである。後者が二者関係の下降の極限とすれば、前者は三者関係という特殊形態における下降の極限といえるであろう。三者関係はコキユたることを以て始まり、人間ビデたることを以て終る。実例をあげよう。ハンスグロス刑事学年報に「奴隸」と題して、予審調査に基き、検事エルテル博士の報告しているあるマゾヒスト——ハンプブルグ在のある職業的女主人は彼を本当に犬と同じようにして飼った経験を供述している——は、娼婦の所に訪れても自ら交らず、自分はベッドの下に隠れていて、彼女に他の客をとらせた。客が何も知らずに事を終って部屋を出てゆくと、彼はすぐ彼女にビデとして奉仕した(原文は「最も嫌悪すべき事を行った」とある)もう一つの例では、前項のヒルシュフェルトの例と似てマゾの夫とサドの妻が出てくるが、先の例と違う点は情夫と夫婦と三者合意の上で姦通がなされた。……

**筆者註。**この報告も、公刊の制約から、省略することにするが情夫の面前での、人間ビデ使用の事実が、妻及び情夫の口から供述されている珍らしい事例であると承知されたい。つまり、優位結合の二人に文字通り身を以て奉仕しているわけで、ビデの存在を優位の男が知っている点が注目される。前々項マゾツホの文の伝える例もこれに属するといえる。

卒然先のマゾツホの文に接したノーマルな人は、健全な性常識に

反するという理由で、単純にこれを虚構視するかも知れぬ。然し本項の諸例は、いずれも専門の学術雑誌に掲載された学問的報告なのであつて、変態小説の筋書ではない。そして裏付けとするためには、こういう専門家の報告しか引用できぬとはいへ、實際界の莫大な事例に比しては、これらの報告は氷山の一角に過ぎぬのである。人間ビデの観念が唾棄すべき醜悪な妄想のように思えても、その感じと、一旦アブノーマルな方向に走り出すと人間はノーマルな人の想像も及ばぬ所まで達しうるものだとの認識とは別にすべきである。健全な常識に反するからと云つて人間ビデの報告を虚構視してはならない。こういうように考えると、「二百字讃歌」「ヴィナスの重石」或いは「らぶ・すれいぶ」等のように、劣位の男は(一)女に対して特殊接触しか許されず(二)しかも優位結合両人の枕席に侍る、という二条件が満されている場合には、むしろその発展として、(三)人間ビデとしての奉仕、まで考えるのが素直であるといわねばならない。「二百字讃歌」で使用後の桜紙を食べさせているのや、鬼山氏の別の作品「アマゾンの牝豹」(風俗草紙誌)で人間ビデの場面があるのなどは、これらの諸作品のそういう読み方が作者の意図に反しないことを示すものといつて良いであらう。

**附記** 二者関係においても人間ビデということはある。例えばマゾ小説「ジョジアヌとその奴隷」(仏文)において、女主人は奴隷ユーベルに命じて毎朝温めた牛乳を浣腸器に入れさせこれで前部洗滌をさせる。その使用後の牛乳が奴隷の飲料として与えられ、彼はこれにより栄養をとる。これもたしかに人間ビデの範疇に属することである。然し本項以下では、人間便器観念との概念上の区別を明確にするため、事終つて後の女主人に奉仕する場合のみを「人間ビデ」とよぶことにしよう。

果然、同好者への私的な文章においては、マゾッホはマゾヒスト本来の関心のまま、何等制約を受けぬ形で、事件を展開しているの

である。勿論創作ではなく、実話を伝えたのであるが、こういう記述自体にマゾッホの汚物趣味を見ないわけに行かない。

「黒女皇」の解説中で私がくりひろげた空想が、必ずしも作者の意志に反するものでないことを、私は確信しているのである。

なお余談であるが、このマゾッホの記述から「毛皮を着たヴェヌス」の読み方について示唆されるところがある。ワンダは寝台の柱に縛りつけたゼヴェリンを愛人に鞭たせて笑いこけるのだがそのあと二人が外に出て馬車で去る時、ゼヴェリンはいつのまにか縄を解かれて残されたことになっている。この間の時間の経過も、縄がいつ解かれたのかも記述がない。二人が何もしなかった筈はないから縛られたゼヴェリンの面前でその寝台が使用せられたに違いないとは、誰でも気のつくことであるが、前記の文からすれば、本来の構想はもっと悪魔的なものだったに違いないと思われるのである。

### 第九十九 準三者関係

前々項に述べた三者関係は、二人の男と一人の女で構成されるわけであるが、これに対し、二人の女と一人の男で構成される形式の「準三者関係」というべきものがある。

いずれ全文を訳出する機会があると思うが、女主人から奴隷への「返事」の一つに次のような一節がある。

妾と一緒にいる妾の愛人は、妾の知ってる中で一番の美人だよ。多分妾はお前を彼女の玩具として贈与することになるだろう。そうになったらお前は、お前の女主人である妾に対してと全く同じように、彼女に服従し、彼女の靴の塵に接吻しなければならぬ。

これは、かのクラフト・エビングの紹介した古典的な症例において、患者がその空想を語って

女主人は、私を彼女の友達に対して自分の奴隷であるとして紹



介し、私を彼女等に対して奴隷として貸し付けたりするのでした。

と述べているのに対応するといえようが、かかる女主人による処分、或いは複数の女主人という観念も、また独特のマゾ的興奮を惹起せしめるものである。前例では売却贈与という女主人の交替であり後例では貸借関係であつて女友達の参加という形になるが、いずれにせよ、各自女主人たりうる人相互間に、男の処分が行われるのであつて、単純な女主人の集合体で、その間に男を物品のようにやりとりするというのではない女群の概念とは区別すべきである。

マゾ的奴隷関係の心理的基礎は特定の女主人に対する男の愛情なので、女主人は唯一のものであるべきである。然るに女主人からは、彼の愛情など顧慮に値せず、彼は代りの得られる奴隷と考えられる故に、他に処分されることになり、彼は自分の意思に反して新しい奴隷関係に入らねばならなくなる。「処分されるもの」としての意識が、奴隷らしい、女主人の持物たるにふさわしい自覚を生じる。ここに他の方法からは容易に味えぬ特殊なマゾ的感興があるのである。これが準三者関係のマゾ的意義である。

本誌掲載の諸作品について調べても、準三者関係を扱ったものはごく少ない。女友達の参加を扱ったものとしては、「ダイアナ夫人」(続)(二十九年五月号)で人間馬をT婦人から借りて乗る条りがこれに当らう。「被虐性愛者の手記」(二十八年十月)「魔性の姉妹」(二十九年三月)「栄吉の半生」(同十二月)「色惚けのページ」(三十年一月)等は複数の女性を出す、処分の観念を含まぬから、これらは準三者関係と云えない。女主人の交替を扱ったものとしては、物足らぬが「妖虫記」(二十九年十月)で母の人間便器を娘が貰う条りが辛うじて数えられる位で、他には一つもない。準三者関係が三者関係よりも更に高度な特殊なマゾヒズムに属することが、これでも分るであらう。——西欧のマゾ小説には流石

に多い。マゾッホは屢々このテーマを書いた。例えば第八十八項の附記で触れた「売られて」。ペラは自分がパシヤと結婚するため、(ここは三者関係M第一形式)邪魔になる夫アゲノールを奴隷に売飛す。彼の新しい女主人となったアルメニア女は彼を荷車犬として使役する。即ち「女の裏切」をめぐる三者関係と準三者関係が複合しているわけである。これの亜流小説をザコパンスキが「女奴隷商人」として書いている。ズミグロドの女城主マリナが、新しい恋人が出来ると、今迄の恋人を縛って鞭った末、奴隷商に売払つてしまふ話である。これらは売却であるが、貸借の例では前項の附記にあげた「ジョジアヌとその奴隷」がある。彼女は自分の犬の自慢をし女友達二人はそれを見にくる。そして代る代るユベールを借りて特殊の用途における舌の具合を試用し、氣に入つたから譲れというのがジョジアヌは手放さない。更にゴーテの「鞭つ女達」では各種のモチーフが次々に取入れられていて、ミクロスは、或いはトランプ遊びの賞品に賭けられ、或いは人間競馬の優勝馬としてせりうり市場で売られ、或いは馬車につけられて来客の送迎にあたるなど女主人から女主人へと準三者関係を転々してゆくのである。

この準三者関係の概念から説明できると思ふのは、職業的女主人と同棲する女性の存在である。独乙では職業的女主人で令名あるものは美女と同棲しているのが多い。ヒルシュフェルトによると、彼があるドミナを訪問した時、昼近いのに二人は床に在り、ドミナはマゾヒスト達に対する残酷強暴な取扱ひ振りで有名だったにも拘らず、この愛人に対しては実に優しい態度で世話していた。ヒルシュフェルトは、この見聞から、彼女は同性を愛し、異性を憎む同性愛者であり、その故にこそマゾヒストの理想とするような冷酷な態度男に対して取り得たのだと結論し、これをオイレンブルグに話したら、彼も同意見で、「マゾヒスト相手のドミナの多くは、サディ

ステインというより同性愛者である。」といったと附記している。両碩学の言ではあるが、いささか性急過ぎないか。同棲してることから同性愛関係になっていることが多いことは認めてよいが、同棲の原因自体は別にあるのではないか。——つまり、客に準三者関係を味わせるためではないか。

あるドミナの所にやって来て臣従する。すっかりそのつもりでいると、今度はドミナの命令で他の女にも仕えねばなくなる。この感じを出すためには、本来はドミナ同志の連絡があれば良いのだが、客の秘密とか顧客の独占とか云った障害があつて、一のドミナから他のドミナに廻されるということとはできない。そこで、その代りに自分の所に女友達を住わせておくドミナが出て来たのである。これなら客の秘密も守れるし（尤も、これは評判を悪くしないための考慮で、本来この点ではドミナの信義はあまりあてにできない。奴隷を虐待する場面を隣室に孔を作つて観覧料を取つて覗かせるドミナもよくあるらしく、ヒルシュフェルトはこれを利用してマゾヒストの生態観察をしたと告白している位だ。主人の側からの奴隷に対する信義など本来要求する方が無理なのかも知れぬ）、また美人を置いておけば、それに対する奉仕の強制が客を失望させることもない（醜い女では、心理的には奴隷として女主人の選択はできぬと分つてても、良い気持でないから、顧客としての立場では、もう来なくなってしまうかも知れない）。

こういう様に、準三者関係を設定する点で好都合だから——また次項に書くように、折檻の技術において助手を必要とする時もある——その目的で美女を置く場合もありうることを、両碩学とも看過しているように思われるのである。商売上の理由で同棲する、同棲することから同性愛になる、こういった順序の場合には、同性愛者であることが必ずしもサディステインであることと両立しないわけではないのである。——谷崎潤一郎の「花」で柿内夫人と光子とは元来

同性愛関係であるのに、光子はマゾヒスト綿貫を知ったことによつてサディステインになり、最後には柿内夫人にも夫の柿内にも太陽として君臨するに至る。これは同性愛者にしてサディステインを兼ね得る例と云えるだろう。（未完）

### 雑報欄

一一三 林房雄「白夫人の妖術」（講談社版『白夫人の妖恋』、新潮文庫『白夫人の妖術』に所収）

一一四 張恨水作常石茂訳「白夫人の恋」（河出版）

一一五 八住利雄シナリオ「白夫人の妖恋」（前記講談社版に所収）映画「白夫人の妖恋」

西湖三塔記以来の雷峯塔伝説は日本で秋成雨月物語の「蛇性の淫」（石川淳の現代語訳あり）を生んだ。武田泰淳「人間以外の女」（同作品集三）などこの系列に属する。一方中国では「白蛇伝」のロマンとなつて民衆に親しまれた。一一四がその訳、一一三はその翻案で、映画は両方を踏えている。三者中マゾヒストに勧めたいのは一一三で、白夫人は自分を塔下に埋めようとする道雲和尚を却つて大衆の面前で五寸許りの小さな赤豚に変え、鉢に入れたまゝ穴に蹴込んで埋めてしまう恐ろしいキルケになっている。金山寺での法海禪師との術比べも彼女の勝利となり、小犬に化した許仙が濁流を泳いで彼女の膝下に至るのである。夫婦関係でも許仙は白夫人の玩具になっていると見てよい。一一三では小青のM型行動が嬉しいし、法術の描写も良い。映画はこの点では劣る。

一一六 橋外男「ハレムの寵妃」これは前に『コンスタンチノブル（君府）』という題名で出たものの新書版。この作者のものはゴリラ男が白人貴女を姦するといった筋又はその類想のものが多いで、サディスト向きののだが、この作品ではそのサディズムの主人



公が白人女性である点マンネリズムを脱している。ハレムに売られた独乙美女が帝の寵を得て復讐する。官宦頭の顔を足蹴にした拳句、狼の檻に投げ込み、それを他の女達に見せる所は、サディズムを描いた出色の文字といえる。

一一七 橋外男「貴夫人とゴリラ」(別冊文芸春秋五十二号)これは自叙伝の一部だが、有色人男性として白色婦人にあこがれ、これを崇敬せざるを得ない気持が書いてある。

一一八 遠藤周作「有色人種と白色人種」(群像九月号)これも右と同様趣旨のものを含むエッセイで、フランスのリヨン大学留学中の経験から、白人の優越感、有色人の劣等感を説く。四等船室の客として船員から「汚い黄色人」と罵られ、始めて肌の色の持つ深淵に気附く。フランスの少年漫画では有色人は醜惡な蛮人として兇暴にか、白人の召使となることによって善良にか、どちらかにしか描かれていない。そういう目で見られたことがないという帰朝談はウソである。人種問題に理解ある偏見を持たぬ白人連中でも「あなたは私達白人と同じ様だ」という白人本位の云い方をして怪しい。そして有色人自身も劣等感を感じざるを得ないのだから、そう云われても仕方がない。ギリシャ彫刻が人体の美の理想である以上、黒人に美を感じることはできない。黒いものは悪く、白いものは正しい(沼曰く、「白いきこりと黒いきこり」という映画一つとってその例になる)。云々。

一一九 朝山靖一「白鳳艶夢」この作者は夙に手帖に取上げるべくして機会を失して来た人で、異常性愛を扱った作品が非常に多い。「愛欲島」(宝石七巻十一号)では、夫婦の一方が四肢を切断された肉塊となって、健全な相手の世話を受けるという夫婦関係があり、「泥棒たちと夫婦たち」(宝石六巻七号)では、泥棒を捕えて熊にして鞭って遊ぶ夫婦が出てくる、といった工合。本書の諸篇

も寶石に出たものだがその中「白鳳艶夢」はコルセットマニアには絶対見逃せないもの。マゾヒストに勤めたいのは「僕はちんころ」で啞でこびとの放浪児が、飲み屋のマダム、飼犬になっている状況設定がたまらない。いずれ手帖で扱いたい。

一二〇 ホイエル著清水覚三訳「淫蕩女」「全能者なる女性」という連冊独語本に「淫蕩女」「残忍女」「奴隷女」「豊満女」「売春女」の五冊あり。その一冊である Das listerne Weib の訳である。訳は不満はあるが先ず合格。この五冊中の「残忍女」は本誌に森本氏の訳載される「残酷なる女性」のことである。五冊全訳されれば偉とするに足る。

一二一 谷崎潤一郎「鍵」(中央公論連載中)谷崎好みの足フェティシズムが三者関係(九十七項)と結合し、マゾヒストには別段の興趣ある佳品。

一二二 火野葦平「洗髪女」(小説新潮三千年十月号)これは手帖休載中のものとして前回挙げるのを忘れたので、追補しておく。明治一代に艶名を謳われた洗髪女お妻の話。朝鮮奉行安達良善の娘で広島師範学校長岡野利一郎夫人だった。学生藤沢欣一と通じ、捨てて出奔、芸妓になり、京橋花の家、頭山満、米倉一平、市村家橘等を愛人としていた彼女が帳場に岡野を坐らせ庭番代りの下男に藤沢をおいている。二人とも彼女の容色に迷ってすべての社会的地位を捨て、上京して彼女の召使となって「花の家」の半纏を着ることに生甲斐を感じている。どちらも純然たる使用人で彼女に酷使され、叱罵され、クビにするといわれてオドオドしている。旦那の来ない晩など時々お妻が気まぐれに夜の相手をさせてと有頂天になって、敗残者の二人同志で痴話喧嘩、それがおかしくてお妻は笑いこける。……本来のマゾヒズムでなく、いわゆる性的隷属であるが、マゾ的好読物だ。

## 『浣腸』に関するレポート

東 沼 完 一 提供

昭和二十二年十月二十二日 読売新聞朝刊

シベリアの一復員者の手記が掲載されており、その中に「愛の女軍医」と題して次の文章があった。（この復員者の住所は、八王子市元横山町一ノ二九、高橋清、当時三十一才）

## 愛の女軍医

一昨年の暮近いころ、コムスモリスクの収容所で三日間粟飯だったことがある。その粟が小鳥の餌のように殻つきのままだったため全員が便秘し、苦悶するものが続出して、ソ連軍の美しい女上級軍医T嬢の指揮で零下三、四十度の吹雪にさらされつつみんなが袴下を脱ぎ四つん這いとなって浣腸された。

連続浣腸一人最高二十数回、平均八回というこの「人間十姉妹事件」は一名の犠牲者と百余名の入室者を出しておさまった。だが、この事件で三日三晩、不眠不休の

看護に当たってくれたり、白米を食べさせるようにと所長のK中尉を説伏し、ついにそれを実現した仁愛の女軍医T嬢、母が上海にいたとかいう話でどこか東洋的な二十才前後の黒髪の佳人だった。公務の問題にはK所長にどこまでも食い下るほど強い彼女ではあるが、ひとたび私事でK所長と会う際は、彼にはのかな恋ごころでもよせているのであろうか、ほんのりとホホをそめて甘える女らしさ、私たちはいつとはなしに「東洋のナイチンゲール」と呼ぶようになった。

昭和二十五年七月十七日 読売新聞朝刊

福島保健所では集団赤痢が発生したのでさる七日から十日まで約千三百人にガラス棒を挿入して一せいの検便したが、そのとき婦人たちを四つん這いにさせて検便したのは人権ジユウリンだといわれ大騒ぎになったという事件があった。

NHK 女性教室「家庭看護と応急処置」

浣腸の仕方について説明があり、石けん浣腸をしている写真があります。差し込み便器、ちり紙、ワセリンが用意されていて浣腸のふんいきを満喫出来ます。（同書二十七頁）

昭和三十年十一月三十日 読売新聞朝刊

連載漫画「轟先生」 第二〇九回

子供の体温が九度もあるので、母親がさえていて父親がカンチヨウしようとするが、子供はいやがって暴れている。マニアの方々には興味ある漫画でしょう。

尚、この作家秋好馨氏は肺手術の当日、午前七時に看護婦に浣腸されました。（漫画読売第一号より）

昭和三十一年「主婦と生活」二月号 口絵

浣腸液の入っている浣腸器を実際に肛門へ差し込まれている写真があります。こんなにはっきり見せている写真は珍しい。大人の若い女性であれば申し分ないのでしようが残念ながら生後十カ月の土井一正という乳児なのですが。

◎本誌九月号（七九頁）の看護学雑誌の浣腸と導尿の写真は、いずれもモデルが人形である為、実感に乏しい。



# 「締めつけられた女優達」

## 古 留 節 人

最近、本誌上にコルセット・フエティッシユ、或は細腰愛好の記事が屢々載るようになりました。世上一般もディオール旋風以来、女性のウエストを緊しく締めつける風潮が盛んになって来たようです。もともと昔風のコルセットが復活するようになった先駆はディオールよりもマンブーシエではないかと思うのですが、それは兎に角、我が国でこのような流行を起した一因として、駐留軍将兵の趣味にも負う所が多いと推察せられます。

つまり西欧男子の嗜好が直接的に我国一般女性に伝染したものと見られるわけです。古来西欧で如何に女性の腰の細さが愛好されたか、従って細腰を作るためのコルセットがどのように重視されているかに就いて云々することは省きます。此処ではコルセット姿、コルセット着装シーンを取扱った最近の外国映画若干を列挙して、この道の愛好者諸賢の御参考に供しましょう。

(一) 美しいコルセット姿の現れるもの。

英画「舞姫夫人」(女優名失念) 米画「掠

奪された七人の花嫁」(共演バレリーナ六名) 米画「帰らざる河」(マリリン・モンロー) 彼女の腰付は如何にも可愛い。仏画「快樂」(ダニエル・ダリユー)等。

(二) コルセット着装シーンで締めつけの行われるもの。

英画「永遠の狼火」(主演マーガレット・ロックウッドなるも、締めつけられる女優名不明) 米画「パーキンソン夫人」(グリヤ・ガースン) ヒップが大きいのでウエストが益々細く見える。米画「風と共に去りぬ」(ヴィヴィアン・リー) 米画「俺達は天使じゃない」(ジョーン・ベネット) ベッドの柱に締紐をつないで、両手を腰に当て乍ら身体を前に引張る自縄自縛が面白い。伊画「夏の嵐」(アリダ・ヴァリ、締めつけ役はフアリー・グレンジャー) 仏画「フレンチ・カンカン」(女優名失念、締めつけ役はジャン・ギャバ) 米画「肉の蠟人形」(キャロリン・ジョーンズ等)

(三) コルセットは直接見せないが、特に美し

い細腰が見られるもの。つまり女優がコスチュームの下で非常に緊しくコルセットを締めつけていることが明瞭なもの。

仏画「パルムの僧院」(マリヤ・カザレス) 仏画「双頭の鷲」(エドワイジユ・フィエール等)

この他に、西部劇でも時折り良いシーンやポーズが見られます。又コルセット女優(こう云う言葉が適当かどうかは別として何時でもコルセットを締めつける役柄で、しかも美しい腰の持主)としては前記のダニエル・ダリユーとジイナ・ロロブリジータの両名が挙げられます。

扱て、右の例の中で一番締めつけシーンの素晴らしいのは「肉の蠟人形」で、この事は蜷間洋子氏が指摘されている通りです。壮観なのは「七人の花嫁」で、掠奪された娘達六人が寝室で何れもきつくコルセットを着けた儘の姿で十数分に亘ってヴァレーを踊りますからコルセットの前面、側面から更に背面の糸紐の締め具合迄充分味うことが出来ます。細腰美の極致を楽しませてくれる随一のものは、マリヤ・カザレス(パルムの僧院、伯爵夫人)でコルセットこそ見せませんが、ウエストの細さは格別です。その時代の宮廷風俗を忠実に現しているために着けているコルセットの構造も単にウエストの部分丈がくびれているのではなく、胸高に押上げられた乳房

の下から骨盤迄直線的に、丁度砂時計のような形態に締め上げてありました。くびれた腰囲りの細さは真に十八吋ウエストの再現と云えましょう。

これらのものはいずれも時代物ばかりの例ですが、最後に一つ現代物で物凄く細い腰の女が現れる映画を御紹介しますと、それは「泥棒成金」です。女優は誰だか判りません。恐らく無名のエキストラかと思われます。シーンには「猫」ケイリー・グラントが相棒の陰屋と街頭の花屋の所で密談する部分です。グラント等が向うから（カメラの方から見えて）こちら側に向って歩いて来るのと、反対にこちら側から（カメラの方から）向うへすれ違つて歩いて行く女の後姿の美しいこと。或は御記憶の方もあるかも知れませんか。果してコルセットを締めつけているのかどうか判りませんが（多分ウエスト・ニッパを使っていたと思われます）巾広のベルトでギリギリに締め上げた細腰のその細さ、見ている方で息がつまる位でした、恐らく外人の手でなら楽に両手の指頭が届くでしょう。十六吋位と目測しました。

以上、思い出した文を列記しましたが、興味をお持ちの方は御高覧をお奨めします。又これに類する映画とか、その他の資料でもあれば御知らせ下さい。

（終）

〔（新聞・雑誌）通信〕

## 泥棒に入られた南田洋子

古賀信司

雑誌「平凡」昭和三十一年九月号に「夏の夜の夢」と題して、日活の映画スタア南田洋子が、ドロボウに入られて両手を背後にねじあげられ、出刃庖丁をふりあげられているグラビア頁がありました。写真の説明には、

「泥棒に何度もいられた私はこのところすっかりドロボウノイローゼ。またしてもこんな夢をみてしまいました。ゾツとしてさぞ涼しかったろうって？ とんでもない眼がさめたら汗びっしりよ」

「命ばかりはオタスケ！ 映画だったらこんな時誰かステキな人が助けに来てくれるはずなんだけどな、まアこわい！ デバボウチヨウふりあげたわ」

と、こんな調子です。「平凡」のような雑誌にこのような写真が載るのは珍らしくポーズがサディスチックだったので、写真を模写してみました。縄を描き入れたのは私のちよっとした悪戯です。写真には残念

ながら縄は無かったのです。





晴雨随筆

## 責め絵の今昔

伊藤 晴雨

維新前から明治期迄を、私は仮りに昔として、大正以後を以って今と仮定して古今の挿絵の画き方から延いては、新聞雑誌単行本の口絵などの懐旧談を記して見るのも責め絵を語る一つの順序であると思われるので、カビの生えた様な話を百も承知で書く事にする。筆者は、其「昔し組」であって女の裸体モデルなど、夢にも手に入らなかった時代の人間であるから、（爺い引込め）と云われればそれ迄と多寡を括って昔の木版の挿画時代の不自由なりし思い出と、石版印刷が日本で発明されてから、オフセット印刷に進歩する処迄、昔の画家の苦心談と、呑気な話を書き残しておくのも満更でないと思うから、以下は日本の新聞挿画に就て、私の経験を土台として、其以前以後を一貫して語りたいと思う。其中に女の責絵の構成法やら、師匠と弟子との関係などを、記して古今の変遷を記して見様と思う。慶応から明治へと移った頃は、徳川時代の旧習を百事其儘踏襲して居たから、新聞もまだ十分発達しないので、其頃の浮世絵師は、主として時代に名残りの草双紙や、三枚続きの錦絵などを画いて生活して居た人が多かったが、其頃の浮世絵師は現代のような写生法はまだ教える人も少なかったもので、不完全極まる方法で女の責場なども画かれて居たのであった。前述の如く女を縛ってモデ

ルにする等という事は全く許されないもので、人体を紙摺りで作って責場の絵などは描かれて居た。筆者の師匠は、光淋派の野沢堤雨という先生で、故人伊井啓峰の父などと懇意にして居た人で、別に筆者の叔父に当る岡本北俊という人は昔の旗本の長男であったが、葛飾北斎に師事して居たので筆者は此人に就いていろ／＼な昔の描き方を教えられた。それが果して葛飾北斎の画法、其儘であるや否やは知らないけれども、凡ての点に就て北斎其儘の生活をして居た人で、恐らく北斎はこんな人であったかと思わせる様な癖のある絵と達者筆意で風の絵を画いて生活して居た。此人に教った人物のかき方は、昔の女の責場をかく方法にピッタリはまって居るのである。先ず三座六立という事を教えられた。座った時は胴は首の三倍、立身の場合は、六倍と云うのが、其頃の人物画の原則で、現代では首の八倍位にかく様になったと思われる。錦木清方氏の傑作である「築地明石町」などを見ても判るように、展覧会芸術とでも云う様な描方が、従来の日本画法から脱出して、新しい比例をとる様になったが、昔は三座六立を人物画の原則として北斎の如きは割り出しの法といって、人物を部分的に割り出して居たものであった。但しそれは、主として読み本の挿画の場合に限られ、草双紙の挿画

になると、「読み」(本文)を入れる余白をとる関係から人物は、首を大きく胴づまりに見開き二丁の間に都合よくはめ込む必要上そうした方法が取られたのである。女の責め場なども、胴が短く、首が比例外に大きいので近代人が見たら、昔の人間は皆んな一寸法師かと思うであろうが、事實は草双紙の約束から来て居るのである。

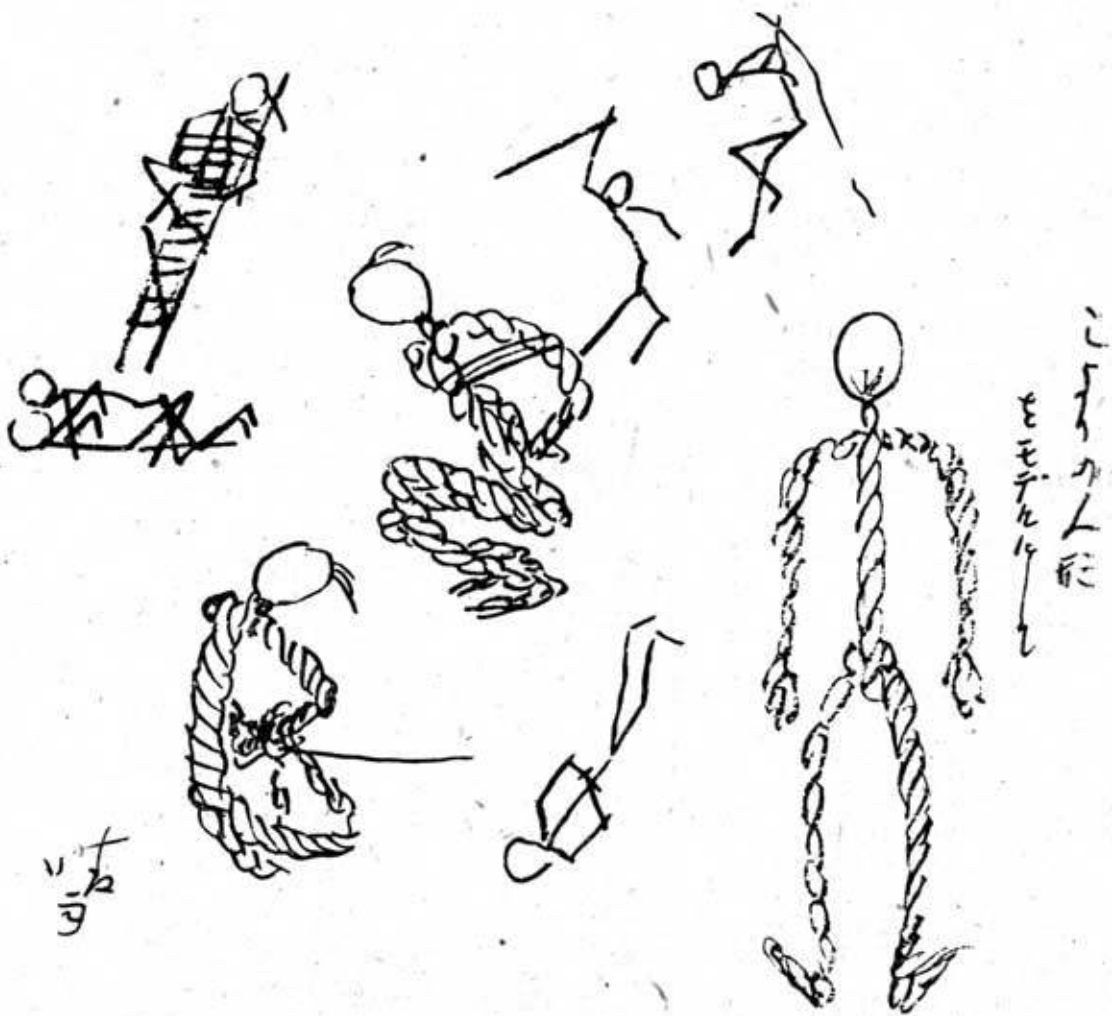
.....

自ら浮世絵師と称して、職人に甘んじて居た頃の維新前後の画家は、其生活条件として必要なものは春画であった。甚だ悪い例を挙げる様になるが、春画を画く事は当時の画家が当然為すべき事であつても、落款だけは流石に入れなかった。無駄麻羅屋親七とか何とかいゝ加減な名をつけて署名して居た。一二の例外を除いては春画の署名をしないのが原則になつて居たが、春画の組み合わせの方法と女の責め場の描き方に共通点があるのを発見したので、茲にその方法を記して、明治以前の責絵の人体の屈折を当時の画家が、どうして画いたかという事を書いて見る事にした。現代の画家の方法よりすれば誠に不合理極まるものだけれども.....

先ず最初には、紙燃りを以って図の如きものを作る。これは前記の三座六立の比例に作るので、これを屈折自在にして写生(?)をして之れに肉をつけ、着物をつけ、髪を結わ

せ、帯を締めさせるので、此の紙製の偽作人形は、モデル料も入らないければ文句も云わないで、主人の為に至極柔順に縛られたり、殺されたりして呉れるので便利此上なしである。

昔し天保の昔し柳下亭種彦が田舎源氏を著作した時、今戸焼の人形を机の抽斗に入れておいて、これに作中の人物の名をつけておいて、此人形を出し入れて筋立ちを考えたと伝えて居るが、それと同巧異曲の方法は、此紙紐の人形である。手を曲げ足を曲げても自由自在でいゝ考であるが、之れを応用するには、十分に人体の筋肉を呑み込んで掛らなければ、理屈は判つても実用にはならないのだからそこに口伝(クデン)といつて口から口に伝えて手を以て教える伝授が必要になつて来る訳で、尚学校へ行かずに絵画の通信講義録でも一通りの方法は判る訳なのだが、講義録ばかりでは胡粉の使い方が判らない様に手から手を以て伝える方法があつたので、初心の人には用いらなかった。



昔の大衆文芸は、何といつても草双紙である。

極めて狭い面積の中で責められて居る女が松の木に吊し上げられたり、水車に縛られて廻されて居たり、或は陣屋の白州で拷問されたりする場面を連続的というか、或は又、パノラマ式というか何れにしてガラリくと頁



を追って転換して行つて、所謂見た眼本位で行く小説であるから、登場人物の顔が一貫して同じでなければならぬから主として其頃人気のあつた役者の似顔になつて居るのである。二枚目の色男ならば八代目市川團十郎、敵役ならば松本幸四郎、娘ならば岩井半四郎といった風に当時売れっ子の役者の似顔になつて居るのである。それであるから全部の顔は似顔になつて居る丈けに画家は相当毎頁非常な労作をした筈であるがそこには昔の人とはいへ多少のトリックはあつた。

紙の人形で机の上でポーズを考えて大体の下タ図をつけると、人物の首は印判式に出来て居る顔の型で押捺して行くのだ。つまり一定の寸法が決して居る顔を型できめて行くので責場の女を描く場合であつても矢張り此方法を用いるのであるから、全然それは空想の世界に画家は飛び込んで行かなければならない事と、そうした制約の下に工夫された責の型が出来てしまつた事は、何としても否定出来ないものである。私は過去約五十余年間に蒐集した此れ等の草双紙の挿画を切り抜いて保存して置いたのを、戦災で焼失したが、貴重な文献だと云えばそうも云えるが又一面から云えば、其多くは類型的のもので責場の形は十数種に過ぎない事を発見した。

画工名と書名を並べた処で、其画を悉く本誌上に載せる事は實際問題として不可能であ

り、可能であつても現代人には感觸が鈍いから大体に於て其説明に止める事にする。

普通に一番取扱われて居る形は縛られて首はうつ向きになつて鬢の後れ毛を口に啣え、左の足を立て、右の足を下に附けて居る形でこれが一番多い便利な姿勢である。

次は吊し上げて大抵の場合髪は散し髪となつて、身体を反らして足をもがいて腰巻が出て居る図である。これには後ろ向きは殆ど無く、前向きの姿勢に限られて居ると云つても間違ひは無い。次は縛られて仰向けに倒れて居る形で、これも写生でないから横一文字に倒れて居るので、現代の挿画の様に女の頭の方から足の方を見た形などは絶対にない。其次は逆吊しでこれは何段も無い梯子へ縛つて松葉いぶしなどは吊し責の形の一部を変更したものであつて特殊な形などはない。其他に蛇責めや雪責めなどもあるがそれは何れも先人と古人の画を見本にしたものが多く明治期に至つては梅堂や橋本周延が描いた草双紙の挿絵は原画も粗末になり、彫刻も粗略になつて見る可きものが殆んどなくなつてしまつた。

人物の顔を印形で押捺して其上で似顔にした此類型的の挿絵の方法は今の青年画家の夢想だもしなかつた処であらう。

現代の挿画は一時に沢山の人物を出す事が多いのでそうした必要が無くなつたのである

う。女の責場の挿絵は屢々本誌の口絵に縮写されある如く、写真一点張りになつたので人物の顔は遠近法の原則から型で押捺して、其上をなでるなどという方法は過去の夢となつて仕舞つた。

女の責場から春画の話に移るのも如何かと思われるが次の様な方法で維新前の春画は出来て居たものであるという。「紙の紐で作つた仮想人間を上下に組み合せて之れを目安にして人体を想像して頭脳の中で造り上げたのが国芳の春画であり、歌麿の春画であり、祐信や豊国、或は初代広重の春画であつたとすれば当時の大家、小家を引くくめて紙人形を画室の机の上にして真剣になつて春画の構成に苦心して居る光景を思い浮かべて、私は微笑を禁じ得ないのである。」

葛飾北斎の弟子であつた筆者の叔父はこう語り終つて笑つた。其笑ひは昔を追想する様な、又自嘲する様な淋しい笑ひであつた。

……………

女の責場を写生に依つて描かんとしたのは武内柱舟と富岡永洗、其門下の松本洗耳などであらう。洗耳は都新聞に「小松嵐」や「堀のお梅」で幾多の傑作を遺して居るが新聞の挿画丈けに現在では図書館以外に保存されて居ないのは残念であるが、或る一部の若い先生方の眼からは刺戟が鈍いというであらう。老人の憎まれ口の様になるかも知れないが裸

## 【新聞・雑誌】通信

体が描けても衣類線が間違つて居たり、絹物と木綿物の線が区別のつかない様な画家は日

本人の癖に日本のキモノを着られず、日本の帯が締められない女と同様である。

(おわり)

## レポート

## 東 一 郎

## 渋谷にクレゾール痴漢

## ―同一犯?三十数人が被害―

代々木、北沢両署管内に便所の婦人をねらう痴漢が現われ、被害が続出している。

去る十八日午後十一時ごろ渋谷区笹塚町、事務員A子さん(二九)が自宅で用便中にいきなりくみ取口から噴射器のようなものでクレゾールの原液をかけられ、下腰部に全治三週間の火傷を負った。

また同時刻ごろA子さん宅から百メートルほど離れた世田谷区北沢五丁目の人妻(三三)も同じくクレゾール原液を浴びせられ三週間の火傷を負って入院中であることがわかった。被害者はいずれも外出先から帰宅したところをねらわれており、両署では同じ痴漢のしわざとみている。この種の被害はことしの春ごろから続いており代々木署管内で届出のあったものだけでも十件、北沢署管内では二十

数件におよび届出のないものを含めると両署合わせて五十件以上にのぼるものとみられ、犯人はいずれも未検挙のままとなっている。

両署とも夏季犯罪防止の意から最近管内の各町内ごとに防犯座談会を開き家庭の婦人に注意するよう呼びかけたばかりだった。

(七月二十二日付 毎日新聞)

## お墓の骨をしやぶる

## ―横浜の玉泉寺に奇怪な男―

二十四日朝六時ごろ横浜南区中村町一の一七玉泉寺住職吉本道灌師(六三)の裏手東側墓地内で石碑を倒し墓を掘って骨をしやぶっている二十二、三才の男を吉本住職が発見。横浜署で男を墳墓発掘、死体損壊で逮捕した。

男は同時刻ごろ本堂のガラス戸をたたく、同家の長女舜英さん(二三)が出ると「来いというから来たんだよ」といいながら墓石を倒

し、「南無妙法蓮華經」を唱え骨つばから骨をとり出したので一一〇番へ連絡逮捕となった。

男は調べに対し黙秘していたが、正午すぎ神奈川県三浦市南下浦町飯野海運宮島丸乗組員杉原勉(三三)で船に乗りおくれたとだけ自供した。問題の骨は去る二十一年磯子区内の人が火葬にして埋葬した老母の骨だった。

(七月二十四日付 毎日新聞)

## 飯粒が女事務員殺す

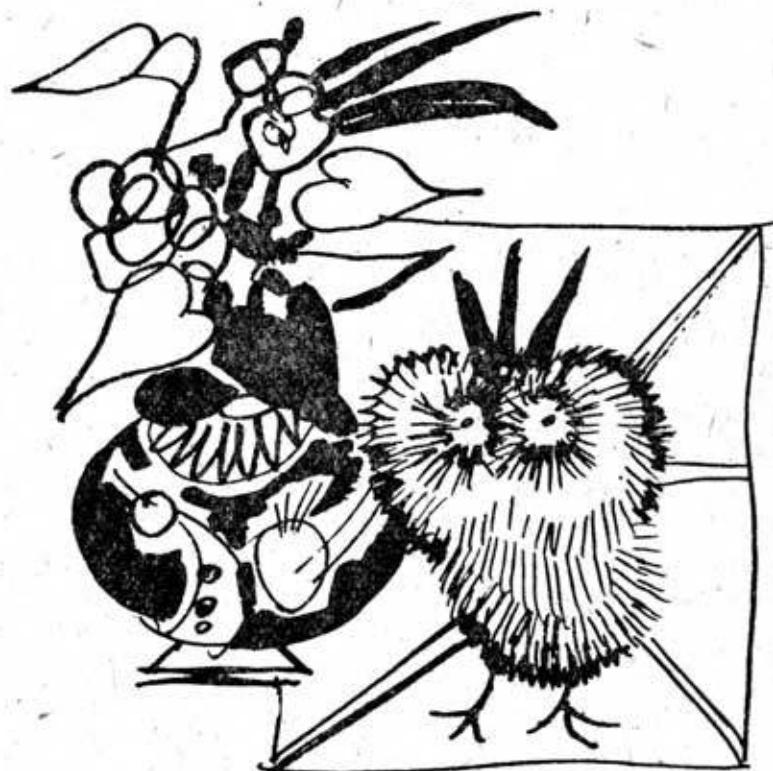
## ―気管につまり、

## 会社でパッタリ―

三十一日午後〇時半ごろ中央区日本橋本町通四の一東洋綿花会社東京支店内で同社事務員の深谷嘉子さん(二九)が一階エレベーターわきで倒れているのを同僚が見つけた。医務室に収容したが、呼吸困難となり間もなく死亡した。昼食に食べた御飯ツプが気管に入って呼吸困難となったものとみられている。

(六月一日付 毎日新聞)





## 探偵小説新考 (3)

—戦後の探偵雑誌から—

東 一 郎

今度は少し趣向を変えて、探偵雑誌から特殊な作品を選んで見ました。戦後創刊された「宝石」「ロツク」「妖奇」等々の雑誌も初期の頃は変わった作品もあり、中々に面白い小説もありましたが、今日残った「宝石」を見ても分りますが、マンネリズムに陥り、決して面白くて読みごたえのある作品には容易に見付からず、本格探偵小説は純文学なりや否やの前に、読者が興味を失ってしまったかにも感じられます。

読者は正直ですから、面白くなって、興

味が湧かないと分るといふそれは飛び附かなくなってしまう。勿論「宝石」にしても創刊当時は薄っぺらな雑誌でしたが表紙、内容共にすぐれておりました。私は「宝石」を創刊号から、昭和二十六年十二月号迄求めて来ましたが、それ以降はどうにもつまらなくなってきたので中止してしまっただけです。むしろ「ロツク」「黒猫」等の雑誌の方が面白かったとも云えます。純探偵小説専門誌は中々に刊行し続けると云うことはむづかしいでしょう。此

等の雑誌も廃休刊となり、今日は既にありません。「妖奇」は創刊当時は既成作家の戦前作品の紹介に初っていましたが、その間に、新人作家が登場して来てからは面白くなり、探偵雑誌とは云っても、「宝石」とは全然傾向が異なり、大衆的でありました。然し此れも「トリツク」と改名される二三号以前からは、面白くなり、そして何時の間にか廃刊してしまいました。今日「探偵実話」「探偵クラブ」等の雑誌も見受けられますが、此れとて決して買

い求めなければならぬと云う程のものではありません。本格探偵雑誌「宝石」の低調ぶりを見ても分るでしょう。

戦前の「新青年」「探偵小説」等の方が勿論時代も好かったのでしょう——何度も読み返しても面白い作品が掲載されていたと云っても過言ではないと思います。戦後此の「新青年」に変わって登場したのが「宝石」でありましょう。

さて余談は抜きにして、一応、「奇譚クラブ」読者に興味を抱く様な作品を選んで見るとなると案外無いものなのです。「宝石」からは次に挙げますが、僅か四冊「ロック」に至っては一冊、矢張り「妖奇」が圧倒的に多く、七冊位です。勿論見落しもあるとは思いますが、結局本格探偵小説は面白いのが少いと云うことになりそうです。

× × ×  
先ず何と云っても伝統のある「宝石」から選んで見るべきでしょう。第一には、昭和二十四年九、十月合併号掲載になる岡村雄輔氏の「ミデアンの井戸の七人の娘」から書き抜いて見ました。

## 殺人風俗画

アラベスク

湯気に混って、甘い匂が流れて来る。地階の浴場へ降りる石段の上に私服が、いら

いらして行ったり来たりしてゐる。真木のり子は部屋着の胸を押へて浴場の扉を開けた。妙な脱衣室、天上が円頂になってゐて、周囲の壁は、十二辺の全部鏡張り、のり子はすらりと部屋着を脱いで立った。周囲の鏡に映り映り合ふ無数の裸女群像。

タオルで胸を覆って、突当りの鏡を押した。湯壺は低い、滑らかな石段を踏んで数段降りた。室内一ぱい、濛々と、こもる湯気。

間接照明に、ぼんやり霞む天井の円頂。数多くの稜を持つ乳白色の周囲の壁、むせるばかりの甘い匂……

「のり子さん……此処よ……」

ぼしやりと湯をはねる音がして、含み声の、ぬめぬめした声の主、魚谷珠子。

「あゝッ……」

異様な動悸が、タオルの蔭の掌に感じる。

湯気に浮んで見える乳白色の床に切られた湯壺。三つの隅を丸みとった三角形の湯壺の向ふの隅には、両手を拡げて縁に載せ、湯の中から胸を出した、魚谷珠子が笑つてゐた。

「貴女もよい身体ねえ……」

妙に気押されて、湯壺に入った、のり子の両足は、とたんに何かに拘はれて、どっぷり頭から湯に沈んだ。

「あゝ……うゝゝ……あうっ……ぶー」

「ほっほっほっ……はっはっはっ」  
かん高い珠子の笑声が、耳の側の湯の音に混って聞えた。

「うゝっ……あゝっぶ、げえっ……」

ようやく顔を上げた。のり子の腋下に珠子の量感のある柔かい両足が入って、ぐいと掬って引寄せられた。

「あゝっ……げえっ……ぶうっ……」

やっと底に、両膝と両手を付いて顔を出すと、魚谷珠子の白い咽喉が目の前にちらついた。

「あの妾、あのタオルをどこかへ落してしまったわ」

「まあ、貴女、まるで、海豹そっくりよ。」

タオルなんかいゝでしょ。妾が洗って上げるわ……まあ頭の髪も前に垂れて、それに、はななんか出して、ちよっとこっちへ、いらっしやい。拭いて上げるから」

がっきと珠子の両足が、彼女のくびれた胴を挟んだ。両手が伸びて、のり子の首に廻る。

「妾、のり子のお母さんよ。えゝ、ほんとなのよ」

低められた含め声が、のり子の耳朵をくすぐる。

……(中略)……



「……のり子さん、貴女を見ると、あんなはこの妾のお腹から生れて来たような気がするわ」

湯の飛沫を上げて、珠子の逞しい腕が伸び、のり子の首に巻付く。湯の中で、からみ合った二個の女体が、ぐるりぐるり廻転して、珠子の力のある股が、彼女のくびれた胴を締め付ける。

「のり子、妾のお乳を吸って……」

鐘乳洞のような隆起の中に顔を突込んだのり子の口に甘い粘液が流れ込む……。

「もっと吸ってごらん……もっと……」

浴室にこもる湯気の中に、薄明の外光と、ぼんやりした乳白色の電燈の光が、溶け合って、澱んでいる浴壺の中に、からみ合ひ、もつれ合つて繰り展げられる息詰る、二個の女体の風俗図。

「あゝゝ……おゝゝ……うう……」

異様な叫びと同時に、彼女の首や胴を締めつけてゐた、珠子の手足の力が抜けた。珠子の胸から顔を離した。のり子の眼前一尺に展開した凄惨な光景……湯壺の隅に背を押付けた魚谷珠子の美しい眉は引絞られ燃えるやうな眸は瞼の下に隠れ、白い歯は、かっきり食ひしばられ、きりきりきしむ。両の手は左右に伸びて、浴壺の縁を、しっ

かり攪んで、引絞るやうな呻き声と共に、腕の筋肉、肩、乳房がぶるぶる浪うって、やがて白い咽喉をむき出し、頭を上へ伸すと、一瞬、烈しく、身体を痙攣させると、ぐたりと力が抜け、珠子の身体はすぽりと湯の中に落ち込んだ。仰向きに一たん沈んで、のり子の体につかり、だんだん浮き上って来る。浴槽にひたひた、溢れてゐる湯は、見るみる赤くなつてゆき、血の湯の中に立ち上つたのり子は両手で顔を覆ふと、

「あゝゝゝ……」

絶叫して、其のまゝ湯に浮んだ魚谷珠子の屍体の上にとぶんと、と折重なつて倒れてしまつた。昏々と、うづくやうな脳髓の中に、彼女は、倒れる寸前、窓硝子に顔を押し付けて浴場の中を覗いてゐた影のやうな一人の男の姿を憶えてゐた。

此の殺人風俗画——は全く岡村氏のオリ

ジナルな作風です。然かも挿画は山名文夫氏であり、実に印象的でした。此の異常な、息詰まるまでに甘やかな風俗画は……死よりも高貴な秘密……と次の章でのり子の立場から書かれております。確かに一風変わった探偵小説で此のストーリーはシヤム兄弟をめぐつて実に面白く興味深く書かれており私も夢中で読み続けた記憶があります。

此の号の編集後記で武田武彦氏が、本格にして、美しきロマン流れ、小栗虫太郎の「黒死館殺人事件」の再来を感じる力作である。此の熱意のある文章と構成は、ある意味に於ては「黒死館」以上であろうと書かれております。

が、岡村氏の此の第四作は、最高頂の作品であつただけに、後の作品には此れと云つてすぐれた物は見出されませんでした。そして此の作品は山名氏の幻想的な挿画が効を奏していることは勿論です。

× × ×  
同年十二月号からは渡辺啓助氏の「黒い扇を持つ女」より選んで見ました。

寿美江は崖の上にいた——其処にいるように命じたのは仙助であつた。はじめは彼女は仙助たちと一緒に、崖下まで降りてくると云い張つたのであるが、降り口はあるにしても、先般の颱風の結果岩崩れがあり、非常に足場が悪すぎ、女の脚ではとても無理だからとなだめて、崖の上でとどまらせたのであつた。

「まだア——」

彼女は崖のふちになつて、遙か下でうごめいてる仙助たちにむかつて叫んだ。  
「何が、まだアなんだ？」

「リノセロス、見つかった?——」

「そんな気の早いことを云って——始めたばかりじゃないか」と応ずる。

それから、また一寸間をおいて、

「ステゴドン?」と来る。

「まだア——」

「マハイロダス(劍齒虎)は?——」

「まだア——」

彼女は、面白がって、聞き囁りの第四紀哺乳動物の名をつぎつぎと反覆して、無邪気な声を森閑とした石山にこだませる。

だが、その間にそれらの何十万年も前の怪異な巨獣類よりも、もっと恐ろしい影のような女——例の黒い扇を持った女が、寿美江の背後に忍びよっていたのである。

「あッ——」仙助は何か堆積物でもないかと岩の凹みを覗きこもうとかがみこんだ腰を思わずあげた。

今まで動物名を口にしていた無邪気な声とは打って変ったけたたましい寿美江の絶叫を聞いたからである。

彼女は不意に背後を衝かれてよろめき、足を踏み外してそれでも辛うじて崖のふちに両手を引かけて、ぶらさがったのである——仙助はどんな風に背後から彼女が衝かれたかその瞬間を見たわけではない。それは見ようとしても、実際は、彼の位置から

は無理であった。なにしろ真直に切り立てたような三百米以上もある断崖を、下から見あげるのだから、崖のふちに立ってる寿美江の姿は見あげることができても、その縁から少し後方へさがってしまえば、崖の上の様子は、仙助の視角を外れてしまうのは当然で、上で何が行われたかは見上げた瞬間の仙助には全くわからなかった——彼はただ、崖の突端にぶら下って、ふちに掛けた両手で、必死に全身の重みを支えている寿美江の姿が眼に入っただけである。彼女の足は、ホンの僅か、岩肌の裂け目にひっかかっているものの、それは彼女の重量を支えるだけの足掛りにはなっていないかった。要するに、辛うじて断崖のふちにかけた手、それも指の力だけが彼女を支えているのである。

あッあああッッあ——もう精一杯だ……落ちる、落ちる——いや、落ちるな、落ちないで呉れ、根かぎり頑張れ——励げます声すら出ない。眼を覆うことすらもできない金縛りばかりにあったように凝然とこれを見つめてる方がまさに活地獄であった。

黒い扇の女の影は見えない——おそらく断崖の上に、ぴったりと伏せているにちがいない。

ただ手だけが見える——と云うよりも、

その手がもってる黒い扇だけが見える。

その黒い扇をたたんで、ピシヤリピシヤリと、崖のふちに掛けた寿美江の指先を叩いているのだ、それも決して力をこめた叩き方ではない、遊び半分におちやらかしに、ピシヤリピシヤリ叩いているのだ。

おそらく、あるかなしかの微風が吹いてさえも、その微かな風圧にさえも抗しきれないほど、寿美江の自らを支える力は精一杯の限界にきているのだ——だから、その程度の遊び半分な気軽な叩き方で、もう充分であったのである。

寿美江は墜ちた——彼女の指は彼女自身を解放した——今となっては、墜ちることそれ自体が楽しみであるかのよう、まっしぐらに谷底めがけて墜ちたのである。

そのあとから、犯人は追いかけるように開いたままの黒い扇を、ポイと投げてよこした。それは牙え牙えと明るい真昼間の石灰山の白い岩肌と鮮かな対照をなしながら無心な黒い胡蝶のように、ひらひらと狂めき舞いつつ、落ちてきた——。

同じ殺人でも、崖から衝き落すのは、何か後味は好くありません。それも一番卑怯なやり方であるからでしょう。然し此の渡辺啓助氏の文章は、全く悪魔的で心にくい



まで、きめ細かく描写し尽しております。此の衝き落す個所の文はともすれば先へへと読み勝ちなのを押えるには充分な書き方です。

——墜ちることそれ自体が楽しみであるかのように——等は渡辺氏なればこそその表現の仕方でしょう。此れなんか他の作家が用いればそれはそはなもちならぬ文になつてしまふでありましょう。その上扇でもって、崖のふちにかけた寿美江の指をピシヤリピシヤリ叩くとは、少々残酷過ぎます。が此れも一つのサディズムと云えます。あくと過ぎますが。然しそれだけ文章に気をくばっていることにもなります。

田代光氏の挿絵も又すばらしく印象的でした。左端に扇が、そして寿美江が落下しつつある場面がクローズアップされております。

× × ×

昭和二十五年三月号からは赤沼三郎氏の「翡翠湖の悲劇」より書き抜いて見ました。此の作品の副題として「湖中に死の舞踏を続ける美女、新鋭赤沼三郎が描き出す黄金色の妖虫の秘密は何か？」と書かれてありますが、私としては香山滋氏の作品等よりは、此方の方が内容から云つてはるかに面白くすぐれている様に感じられました。

「ごまかそうだったって——」

「一也さん！」

「何を云う！」

取りすがる彼女の腕をさっと払いのけた。

「あっ！」

よろめいて、ふなばたに支えようとした手先は、水の上へはずれていた。一也が引き戻せば立ち直れる姿勢だったが、一也は凝然と動かなかった。

あふりを食ったボートから泳ぎ出た彼女は、のめって、ざぶりと湖面へしぶきを散らした。

水面下に没した体は、しばらくして水を分けて泳ぎ出たが、ひる藻にからまれて水の中へと沈んだ。

三度、水面へ出た彼女は、

「一也さん、誤解よ。誤解なのよ。ボートを寄せて——ボートを」

言いかけて、水を呑んでまた沈んだ。

四度目には、ただあがく顔だけだったが、それも瞬時に沈んだ。

五度目は、水面上に出たのは片手のみ。

空気を渴望する口は、空しくあぎとうばかりで、遂に水面を破ることは出来なかった。

一也は月光の透す水銀色の中に、花のように開くスカートのゆらめきを見た。

もがいている腕。腕。そして金色藻のように輝く髪の毛のゆらめき。髪ばかりではなく、白い体全面から、黄金の後光が輝き出した。錯覚か。然らず。その黄金の後光は刻々とその輝きを加えて来るではないか。——船端から乗り出して、水面に顔を近づけて覗くと、ああ、水中に描き出された天女の舞。

かるやかにゆらめく羽衣、ものうくうごめく白蠟の肢体。髪は美しい顔にまつわり、あらわな腕に脚に、羽衣は楽しげに戯れる。そして全身の、なめらかな肌からは、ゆらゆらと発散する黄金の光。それよりも尚、密度濃厚な、めらめらと燃え立つ黄金の炎。天然の巧みか。水の精の装いか。

満月の夜でもないのに、この黄金の輝きは。一也はぎくりとした、背筋をはじかれた思いだった。

ひる！ ヒルデア・フラビデウム！

紅ひるもの根に巢食っている黄金色の妖虫。

この月夜、寝ざめがちなかれらのまどろみを突如破って飛込んで来た天恵のえじき豊満無類、甘美な体臭と血の匂いとを水中になき散らす一個の女体に、幾百、幾千とも知れない裸虫共は、狂喜し、乱舞して、

吸い着き、かみつき、がつかつと肌を破つて貪慾の限りをつくしている。

見よ、びっしりと吸い着いたかれらの随喜ぶりを。ゆらゆらと肩を波打たせ、尾をゆり動かし、のどを鳴らして、血をむさぼる光景は、宛然、黄金の炎の燃えさがる美しさだ。

探偵小説には溺死事件もよく扱われますが、此れは又一風変った物語です。ひるを使用させた点は、香山氏がうつぽを扱ったのと類似はしておりますが、此の作品の方がはるかに現実感を抱かせます。

文章の表現も中々に巧みです。探偵小説は単なるトリック、ストーリーの面白さのみでは興味を湧かすことはむづかしいと思うのです。殺人方法の表現が大事であります。此の個所が余りにも簡単に書かれてあれば何か物足り無く、されば云ってあくどければはなにつきますから。

此の赤沼氏の文は決してたいくつさを感じさせません、どんな名文でもある程度のたいくつさと云うものがあります。殊に探偵小説ではたいくつさを感じ初めたら何ともたまりません、途中でいやになってしまします。結局描写と会話を適当に組む加減がむづかしいのです。

高木清氏の挿絵も文句ありません。見出しのカットに私が書き抜いた場面が扱われておりますが、女の手、足にひるが吸いついており、此のペン画は文章とよく調和されておりました。

× × ×

同年九月号からは、朝日堀一氏の「白日の夢」より選んで見ました。此れは厳密な意味から云うと果して探偵小説たり得るか疑問ですが、伝統ある「宝石」誌上に掲載されてありますので、軽探偵物と私は解釈を下ろしています。此れは一コルセットマニアの幻想が述べられております。特にすぐれた文ではありませんし、何か素人臭い所もありますが、コルセットを扱った物は珍らしいので一応書き抜いて見ました。

あなたは、前のやうな意味では、わたくしを愛してゐらっしゃらない事、よく存じておりますわ。前にはあなた、わたくしに、と云ふより、わたくしの身体に対し、熱狂的な愛を持っておられました。あなたはいつも一日中、わたくしの身体のことばかり考へて夢中になっていらっしゃいました。わたくし、どんなに嬉しかったでせう。

あなたはご自分の好みに仕上げようとして、毎日朝から晩まで熱中してゐました。

わたくしの身体の寸法を計ったり、ご自分で針を持ったりして、あなたは美しいコルセットを作ってくださいました。中に鯨のひげを入れた丈夫な帆布を芯にして、肌ざはりのよい綾羽二重で覆った驚くほど華奢なものを、幾日もかかって、お作りになりました。

わたくしにこれが着られるでせうか、と云ふと、あなたは着られるとも、お前の身体はマシマロのやうにやはらかいから、どんな形にでもなることが出来るんだ。さあ、これを身につけて、僕を気狂ひのやうに喜ばせておくれ、云はれた時、わたくしは嬉しいやうな、恐ろしいやうな気持がしました。

だって、それは普通の人間の身体では、想像も出来ない美しい曲線を持った美術品のやうに高貴なものでしたが、触ると、はがねのやうに堅く強いのですもの。

あなたは、やさしくわたくしを抱きしめて接吻し、さあ僕が着せてあげやうと云つて、わたくしの着物をお脱がせになりました。わたくしは恥かしさで何も考へることが出来ませんでした。はじめ軽くコルセットが肌にふれたとき、わたくしは何とも云へない戦慄を全身に感じましたが、あなたが締紐を色々に結ばれて、さあこれでいい、



と云はれた時、わたくしは、自分の身体が、自分の身体とは思へぬほど、堅い甲羅の中へ閉ぢ籠められてしまった事を知りました。

わたくしは、あなたにしがみついたまま、手を離すこともできませんでした、わたくし、息を吸うことも、吐くことも出来ませんわ。そう云って、わたくしが息をつめたまま、あなたを見ると、あなたは上気した眼で、じっとわたくしの身体を見つめながら、笑っておいでになるのです。

わたくし、はじめはあなたの一時の戯れだと思っておりましたので、じっとこらへてゐられたのですわ。

横になると楽になるよ。あなたは意地の悪い眼つきで、さうおっしゃって、コルセットで固められた裸のわたくしを抱ひて、ベッドに寝かせて下さいました。

それからわたくしが、恐ろしく思ったほど熱狂的に、気が遠くなるほど、いつまでも愛撫が続きました。わたくしは、とても嬉しかったけれども、それは苦しい歓びでした。ねえ、もういいでせう？ 解いて下さらない？ 苦しいわ。

さう願ひすると、あなたは疲れた眼を不思議さうに光らせ乍ら、解く必要なんか、ないぢやないか。これがお前の身体なんだ

よ。僕が夢に描いてゐた天使のやうに美しい女の身体なんだよ。と云はれました。

わたくしは、これがあなたの戯れではなく、必死な愛撫であることを、やっと身を以って知ったのでした。

それに、一つはわたくし自身嬉しいことでもありました。さすがにあなたが、わたくしを選んだだけあって、わたくしは、どんな華奢な女のひとと比べても負けないほど、ほっそりとしてゐる上に、固い骨があるとは思へない軟かい身体をしてゐたのですもの。

それが更に妖しいほど曲線を与へられたのだと思ふと、何とも云へぬ官能的な満足を感じました。苦しかった幾日かがたつと、わたくしの身体も馴れて、そのコルセットの形の通りに変わってきました。苦痛は去り、堅い殻に閉ぢ籠められ締めつけられるわたくしのからだは、昼も夜も、しびれるやうな快感を覚えるやうになりました。

あなたは毎日、注意深くわたくしを観察してゐて、わたくしの身体が馴れて楽になると、追ひつめるやうにコルセットの紐を締め上げてゆくのでした。

わたくしの身体は、段々狭く細くなつてゆき、両方の親指と人差指で簡単に環を作れるほどになりました。あなたはそれをど

んなに喜ばれたでせう。感嘆して眺め、さすり、限らない愛情でわたくしを愛して下さいました。しかしあなたは、紐を締めることは忘れず、少しでも楽になると、更に紐を締め、コルセットの胴廻りを狭くしてゆくのでした。

あなたは、何処までわたくしをつめたら満足なさるのでしよう。どれほど身体が細く奇形になったら、おやめになるのでしょうか。さう思った時、はじめてあなたの執拗な追及の怖しさを知り、わたくしは激しい恐怖に襲はれたのでした。

わたくしの身体にも限りがあります。わたくしにも血の通つてゐる命があります。あなたの求める肉体の追及は、いま、わたくしの生命のともしびの、すぐ前に迫つてゐることを知りました。わたくしは肉体的苦しみでなく、精神的の苦しみで気が狂ひさうになりました。もういや、もういや、勘忍して、コルセットを脱がせて――。わたくし息が止まってしまひます。わたくしは、必死であなたに願ひしたのに、あなたは、それには返事をしないで、一分でも二分でも紐をつめることばかりに夢中になつてゐらっしゃいました。

処が不思議なことが起りましたわね。生活環境が変わったからでせうか。食餌の変

化からでせうか。あんなに細っそりしてゐたわたくしの身体に、脂肪がつき、いえ身体ばかりでなく、顔も、手も足も、皮下に厚い脂肪の塊が出来、風船のようにふくらんできて、あんなに華奢なわたくしが、あなたの嫌いな、とてもお嫌いな女のタイプに変わってきたのです。

いのちの反逆だったのでせうか。たうたうあなたが幾日もかゝって、わたくしの身体に加えた追求の糸を、ぶつ切り切ってしまったのです。あなたは大変お怒りになりました。また大層お嘆きになりました。裂けたコルセットを丹念に繕ひ、もとのやうにわたくしに着けようとなさいましたけれども、一度堰を突き破ってあふれた、わたしの肉体は、もう今まで縮めてきた小さな甲羅の中へは戻らうとしないで、ほれご覧なさい。今あなたが手で計ってごらんになるやうに、一番狭くつめていった、あの当時に比べると、あれからのち、あんなに苦勞したかひもなく二寸、はひろくなっています。もうこれ以上は、小さくならないって、あなたは諦めてられます。

その上肥りだしてからといふもの、あなたは眼について、わたくしへの情熱を失っている御様子です。確かにもう、わたくしには魅力がなくなってしまうわかれたのですわ。

わたくし、それが寂しいわ。あなたに諦められたことが、とても寂しいのです。自分で出来ることなら、どんなにしても、わたくし瘦せたいと思ひます。あなたの愛は、わたくしが前のような身体にならない限り引き止めることが出来ないのですもの。

わたくし近頃、ほとんどのものを口に入れませんのよ。それなのに、わたくしの身体ときたら、あなたの愛情に叛き、わたくしがどんなにあせっても、それをせせら笑ふやうに一日一日と脂肪がつき肥へてくるのです。悲劇でせうか。喜劇でせうか。あなた――。

いとしいあなた。わたくしは、どうしたらいいのでせう――」

一コルセットマニアの心理を描いた作品としては割合に成功している方でしよう。全くコルセットに憑かれてゐる本人にとつて、自分の意志にそむいて肥って行く身体はつらいものであります。作者は喜劇であると書かれておりますが、本人にとつては悲劇でしょう。然し、此れ程克明にコルセットマニアの幻想を書いた作品はちよつと類を見ません。

此の挿絵は関野準一郎氏であります。私

としては此の人の描き方は好みませんが、流石に上手いものです。砂浜に、胴がくびれて横たわっているえり子の死体、如何にも不気味です。コルセットのために身を滅してしまつたのです。然しどうすることも出来ない宿命でもあつたのでしよう。とにかくコルセットをテーマにした探偵小説は、此れが最初で最後ともなるでありますよう。

× × ×

次は「ロツク」第十五号（昭和二十二年十月号）に掲載されてある香山滋氏の作品「獵奇館スフィックス」よりエピソード「恐るべき演出」を、書き抜いて見ました。

九時三十分！ 目かくしは取除かれた！ 私は見た。見るべからざるものを。私は見た。見るに堪えないものを。額に第五号の刻印をうった全裸の美しい女、あれは誰だ？ 私でさへ未だ知らぬからだのすべてを惜しげもなく露はにさらしてゐる美しい女、あれは誰だ？ 私は夢を見てゐるのだ。たしかにさうに違ひない。でないとすれば、ここは、私も、その女とともに墮ちた地獄だ。血の池の管理者巨人ブルノオもゐる、片眼で僂僂の吸血鬼アルパゴンもゐるぞ。は、は、は、何だこれは、ダンテの神曲の



活人画か！

しかし、しかし、ついに私はこの空しい観念の遊戯を捨てて悲しくもこの悲壯の現実を肯はねばならなかった。

九時四十分！ 放たれた。五匹の劔尾蟹が。その頭甲に印された五つの番号——1 2 3 4 5——。

五匹の劔尾蟹は、長い間干されてゐた鍋きから急に救はれて元氣よく水槽中を泳ぎ廻った。ひらひらと蝶のごとく、暗黒色の半月形の甲冑をひらめかせ、口を囲む六対の前脚と、鰓を附けた五対の後脚とを、あたかも咲き満ちて風に揺すられる玉蜀黍の雄花のようにびらびらと、歓喜にうちふるはせ乍ら、ぶっかり合ひよけ合ひ乍ら游泳する。劔尾が慧星のように水を切る。何といふ巧妙に作られた劔尾の模型であらう！ そのうちのたった一つが真正であることは事実ではあるが、それがどれであるか、第何号であるか、てんで判別することは不可能だ。

女達の恐怖に怯へ切った眼、眼、眼。その眼はもう、何も見ていない、恐らくは、いつ、ぶつぷりと刺し貫いて来ないともわからぬ劔尾の戦慄の前に、視神経は完全に麻痺してしまつてゐるのであらう。ああ、梅真夫人は、ついに私の存在にも気づかず

にゐるのであらう。

賭けの番号を認めた紙片がタンブローテの手に集められた。彼の片眼がふたたび髯胸の巨大漢に合図する。彼は青竜刀をふりかざして水槽の中に突き入れて劔尾蟹を追ひまくった。驚愕と激昂が、五つの悪鬼を混乱におとし入れた。第3号の劔尾がひいんと反つて第1号の女の鳩底をぶすうと刺しとほした。

牡丹の花びらのやうに血が浮いた。女はのけぞつて、叫び声も挙げずに水底に崩折れた。真正の劔尾だった！ 第2号の劔尾はその間に第4号の女の腓を貫いて、その先が肉片をそぎ取つて水中花のやうにぱつと開花した。第3号の劔尾は再び活発に迫つて、第2号の女の脇腹をえぐり抜いた。

この凄惨な犠牲を眼のあたりに見て、氣を喪ひ水底に伏しかかった第1号の女の胸を下から突き上げて劔先を背中に突出した第4号の劔尾蟹は、そのまま女の胸にぶら下つて離れなかった。

ああ残るはついに第5号の劔尾蟹と第5号梅真夫人のみ！ 水は夕焼色に染められ、女の髪はその中でかちめのやうにぬめぬめとうねりもつれた。

恐るべき欺瞞！ 呪はしき奸計！ すべてが真正の劔尾だった！ そしてすべての

女が殺される！ 賭は？ 合法的な無効。

かくて最後に残された第5号対第5号。もはや、その結末は時間の問題にしか過ぎない。

ああ、両足に三十貫の鉄球をくくりつけた足枷よ。神よ、なにとぞ哀れと思し召さばおん身の奇蹟の手に触れしめてその重量を奪はせ給へ。我は怒れるヘラクレスと化して、かの水槽に飛込み、この齒もて劔尾蟹の劔尾をへし折り、われにわが愛する女を救はせ給へ。鎖は私の足首に深く食ひ込み、皮膚は破れ、肉はくだけ散った。顔面の膏汗は滝の如く、犬のやうに舌を垂らして息喘いだ。魔王タンブローテ！ 貴様は我を欺き、女を欺き、この悪鬼の所業を以て何を得んとする？ 金？ 快樂？ いな、いな、われ汝をかかる物欲の鬼のみとは断じて推断しない！ 汝は生きとし生けるもののの中の、稀代の殺人鬼だ。

汝は「邪惡の聖書」の中より甦へれるイスカリオデのユダ、黒人虐殺王三秘結社の団長カリオペロンの化身だ！ 私は飛び出さんとする両眼にタンブローテを睨み据へついに眼底の毛細管を破裂させ、血が両眼からたらたらとあふれ出るのだった。

ああ、その間にも、第5号劔尾蟹は青竜刀の一撃に猛り狂つて、梅真夫人の中央腹

部を正面から突刺し、背椎にひっかかった剣尾に吊り上げられて、尾をはさまれた百足のやうにその十一対の脚をもちいて暴れ狂つてゐる！

梅真夫人の苦痛にはげしく起伏する胸も次第に終りに近づいてか、収まりかけ、見えぬ目に何かをまさぐらうとする努力の眸が、最後の光をかがやかせやうとする頃ほひであつた――

悪魔が悪魔の血をもつて描いた奇怪な風景画獵奇館スフィンクス――の副題に書かれておりますが、此の筋は例の「千一夜物語」に類似している所があります。然し此の書き抜いた箇所は香山氏の独得の表現でしょう。があまりにも残酷し過ぎます。一つの幻想の様に書かれてはおりますが、劍尾鯊の使用もあまりにも突飛し過ぎます。此の部分の挿画があつても好いとは思うのですが、やはりむづかしいと見えて描かれてはおりません。

最後に「妖奇」から選んで見ました。此の雑誌は、矢張り探偵小説専門ではありませんが、興味本位に書かれた作品が多いので、その内容は面白くても、トリック等の使用は幼稚な場合もあります。然しそれでも結

構築しめるものです。

先づ昭和二十二年十一月号（第五号）から、竹谷十三氏の「仙人ヶ池の悲劇」を書き抜いて見ました。敗戦当時でもあり、此の頃は性の解放とかで割合に此種の獵奇小説が数多くありましたが、此の竹谷氏の作品も文そのものは余り巧みではありませんが、当時の世相が生々しく書かれておりましたので印象に残つたものでした。

『どうしたの、笑つて……』

耳許で、俊夫が低く囁いた。

『うれしいの……あなたが愛して呉れるから……』と邦子は甘たれた調子で言った。

『うん、今夜は、もっと愛してやらう、さあ……裸になれよ……寒くないもの……』

男の瞳は、情欲と惨忍な光に燃えた。

『だって……』

『誰も見て居ない……さあ……あの木の下で……あそこは、何処から見えない場所だから……ね……取れよ！』

男の声は、かすれた。

『……』

邦子は上衣のボタンを取つて、半裸体になった。小柄で痩せた子供くして居る彼女の体に比べて、乳房は大きく固く娘々し

て居た。月光の下にパツと拡げられた女の肉体は、男を熱情の嵐へと追ひ込んだ。

『全部取れよ……今夜は、素晴らしく可愛がつてやるぞ――』

男は、さう言つて、手早く、ボストン・バックの中から細い綱を取り出した。

『アッ、縛るの？』

邦子は、一寸不安気に言った。

『うん、拷問してやるのさ。』

男の優しい熱い息気が、女の興奮した耳許に囁いた。

『余り、痛くしないでね、いやよ、何時かの様にしては……』

女の幸福そうな黒い瞳が、じっと男を見た。

『大丈夫だって言へば、大丈夫だよ……』

大柄な肩巾の広い俊夫は、腕一杯に裸の邦子を抱き上げた。

女も、男の気持に、すっかり同調して居た。今や蒼白い月光の下に、熱情の夢が狂ほしく展開されて行つた。この瞬間、二人は全く何事も考えて居なかつた。唯あるものは、激しい幸福の感情のみであつた。

……（中略）……

ふくろが遠くで淋しく鳴いた。

情熱の嵐は過ぎ去つた。女は真裸で、やはらかな枯草の上に、ぐったりと横になつ



て居る。女の細い両腕は胸の上で縛られて居た。足も細い綱で固く結ばれて居た。だが、女は幸福そうな息を吐き出して、目を閉じて居た。男は反対に、カッと大きな瞳を開け、女の体の上に乗り掛る様にして居た。その瞳は——女が見たら必ず驚ろくだらう程に、ある決意に燃えて居た。男の右手が、女の首へかゝった。それでも女は黙って動かなかった。

男の大きな、たくましい右手に力が次第に加わって行った。女は息苦しさうになった。男の冗談をやめさせ様と、女は瞳を開いた。邦子には、すべてが解つたらしかった。苦しきためか、悲しきためか、よくものを語る黒い瞳は、涙が一杯であった。

女は体を動かそうとしたが、胸の上に縛られた両腕には、飛鳥の如く飛び込んだ男の両膝と体の全体の重みのため、全く動けなかった。男は左手でハンケチを何か叫ぼんとする女の口へ、ぐいぐいと押し込んだ。

最早、恋人同志の男女ではなく、恐るべき暴力者と被害者の二人だった。小柄の女は、とても肩巾の広い大柄の男の前に無力であった。斗争ではなく、一方は片方の意志通り絶対服従であった。

ふと、俊夫は、支那に於て、戦時中、公

然と皇軍の名の下に、この様な事が行はれた事を思ひ出した。

女は、一度、強く首をくねらしただけで、動かなくなつてしまつた。女は、一度、大きく見開いた眼は、今は静かに眠つてゐる様に閉じて居た。男は、さつと立ち上つた。女の寝姿は、先刻と全く同じ様だった。唯先刻は、激しく上下に動いて居た大きな乳房は、ピッタリと動かなくなり、大理石の彫刻の様であつた。

裸女を縛って殺してしまうのですから、此れ又無慚な仕打ちであります。然も計画的な犯罪ですので、殺された女には同情すべき点があります。が裸女を縛つた探偵小説は余り無いと思われまゝです（その上殺してしまうのですから余りにも残酷し過ぎます）此処に書き抜いた次第です。作者は、此の戦後の犯罪の多くの類型を見る共通した点は、ある種の感情的欠陥から来るものであると述べております。

林唯一氏の挿絵は余り好くありませんでした。氏独得の描き方は好きな人は非常に好きになるでしょうが、どうにも私にはついて行けません。

昭和二十三年一月号及び二月号の二回に

わたって連載（再録？）された浜尾四郎氏の「鼻原絵巻」は変態小説となつておりますが、此れこそサディズム物語としては珠玉に等しいものであります。中々にすばらしい作品です。嶺田弘氏の挿絵も文句ありません。

文の構成も上手いものです。此処では最も興味深いもののみを書き抜いて見ました。

あなたは矢月堂といふ名をきいた事がありますか、日本画の画家なんですがね。これが彼の作品ですが、どうです相当物凄いでせう。

私から云へば丁度父親位にあたる老人の簑島さんは、老眼鏡を鼻柱の所にぐつと下げながら、私の方を見て微笑を洩した。手には一巻の巻物をもって、その紐をほどこいて居る。

ね、あなたのやうに物凄事ばかり書きたがつてゐる方にはお氣に向くと思つて今日はわざ／＼婆さんにそう云つて蔵から之を出させておいたんです。

大矢月堂といふ男は今生きて居れば四十五六になりますかね、仕事に熱心な或る意味では感心な人でした。ただ仕事の事になると少々氣狂い染みた所はありましたが

ね。ほら、絵にも大分其の性格が出てあま  
せう。

かう云つて老人の手によつて拡げられた  
絵巻は成程、一瞬にして私の目を奪つてし  
まったのである。

何と云つていいか、いはばグロテスクな  
変態とでも云はうか、そういった血みどろ  
な物凄い光景が陸続として私の目の前に展  
開されて来た。

男が居る、女が居る。少年が居る、少女  
が居る、否赤坊さへも母に抱かれてゐる。  
それが皆、血みどろになつて、或は天に向  
つて叫び、或は地に伏して断末魔の苦悶を  
味つてゐる。私は其の絵を見た刹那、一体  
之は何を意味してゐるのかと疑つた。

老人は私の疑問に答へるやうにつけ加へ  
た。之は島原の殉教者達を画いたものなん  
です。月堂はこの絵を完成して死にました。  
この絵を完成させる為に生きてゐたと云つ  
ていゝ位なものです。をしい事をしました  
よ。あれが今頃まで生きて居れば、近頃の  
何とか趣味にうまく合つて絵も盛に売れた  
んでしようがね、何と云ひますか、まあう  
まい時に出会はずなかつたのですね、運が  
なかつたとでもいふのでせう、不運な男で  
すよ。

どうしてこんな絵を書いたかと云ふと之

が彼のほんとの趣味だったのです。御承知  
の通り、大家にならなかつた画家といふも  
のは惨めなもので、月堂は平常は芝居の絵  
だの、雑誌の挿絵なんか書いて食つて居た  
んですが、一生の中、百人の人間を立派に殺  
して見たい殺して見たいと云つてました。  
と云つて無論ほんとに人間を殺すわけぢや  
ありません。丁度あなた方が小説の中で何  
人も人を殺すやうに、立派な人殺しを絵の  
中でやりたいつて云ふんです。今でまづ変  
態な趣味とでも云ふんでせう。ひまがある  
と斬られたり、殺されたりしてゐる人間を  
描いてゐました。

ところがどうです、ようく一人一人見て  
行つてごらんさない。此の絵が非常によく  
出来て居ると思ひますが、物足りないとは  
思ひませんか。

かう云はれて、私ははじめの魅力から脱  
れた気持ちで再びその絵を見直したのであ  
る。素晴らしい、成程素晴らしい画には違  
ひないが、老人にはつきりそう云はれて見  
ると、絵の調子にどこなく誇張があるや  
うに思はれた。あなたは、気が付かれたら  
うが、此の画には大分嘘がある、きれいな  
画のすきな素人をごまかすのには之で十分  
だが、かういふ事に趣味をもつて居る人を  
ごまかすことは出来ないつてのが、月堂の

不満だったのです。何故かと云へば、月堂  
自身が、殺された死体は度々見た事がある  
が、殺されようとする刹那を見たことがな  
いからといふわけですね。

こりや尤もな話で、そうならそんな所  
を見る人もないものですが、月堂は死ぬま  
でにどうか一度さういふ所が見たい、見た  
いつて云つてましたが、とうとう其望が達  
しられて、——而も下手人が月堂自身なん  
ですが、——その結果出来上つたのがこれ  
なんです。

老人のこの終りの方の言葉が私に非常な  
驚きと好奇心をよびおこしてゐるのを尻目  
にかけながら、老人は、新しい一卷を取り  
出して私の目の前にさつと拡げた。

私はその画を見た時、ぞつと全身の慄へ  
るのを感じた。

画は三尺に二尺位の相当大きなものだが  
そこに描かれてゐるのはたった一對の男女  
だった。美しい小姓姿の男と可愛い娘とが  
小姓の方は全身を裸体にされた上、鎖でき  
り／＼と後手に縛られて鉄の柱にく／＼りつ  
けられてゐる。娘もやはり縛られたまゝ柱  
に仆れかゝつて居るのだが、すさまじい  
は小姓の顔面の表情であつた。

画面にはこの二人物以外に何もなく、た  
ゞ小姓の膝のあたりに墨がぼかしてあるば



かりだったが、小姓の顔色から、今にも彼が焼き殺されようとする最後の刹那の説明がはつきりと判る。今や火が上って来ようとするのだ。その刹那、火に対する極度の恐怖と、刑を行はうとする描かれてゐない役人に対する燃ゆるが如き呪いと憎念が、どんなにまぎ／＼と浮び出てゐた事か。

焰の一片をも描かずして、火あぶりの物妻さは局面一杯に拡げられてゐる。何といふ手腕だらう。美しい小姓は今にも私に向つて呪ひをあげせやうとして居る。私はぞつとして絵から目を離して老人の顔を見入った。

月堂は之を描く為に人を殺したんです。いや、人を殺したためにこの画が出来たんだと云つていいでせう。

斯うやって見ただけで、火あぶりと判るでせう。可哀そうに、二人の人間が月堂に焼き殺されたんです。

よく責めの絵をかく絵描きは、人間をほんとに縛ったりころがしたりして写生するって話ですが、月堂もやっぱりそうなんです。

下まはりの役者に頼んでは仆れてもらつたりしてゐたんですがその絵を描いて居る

時は全くむきなので、しまひにはその何とかいひますね。そう／＼モデル、そのモデルになつて人間が氣味が悪くなつて逃げるっていふ事です。

その頃、月堂は、養島老人が語つたやうな絵を描くのにはほんとうに真剣だった。實際彼の生命は彼が信じて居た通り、余り長くもないやうに見えた。自分の生涯が大して長くないと云う自覚と、その短い間にせめて、自分が画家としての記念碑を残さうといふ決心が、彼を駆つて全く真剣ならしめた。どうしても二人の男女のすがたを描こう、美しく、而も悲惨に！ 之が最後の望みだった。

彼はまづ女の顔を発見した。しかしその女は老人の云つたやうな役者なのでうちに入れるわけにいかない。ポーズをとるには凡て自分の妻を用ひた。

夫の此の苦しい、然し真剣な決心を知つてゐる彼の妻は、甘んじてそのモデルになった。

それには、真夏であることが都合がよかった。月堂は、初夏から夏の最中まで毎日のやうに妻を全裸体にして柱に鎖で縛りつけてはその形を研究したのだった。

ところがある日、彼はいつも通る近所の

八百屋にきれいな子供がゐる事を発見した。

彼が其の少年を一目見た時、いつの間にかかはる昔、その少年が稚児姿になつて、苦しめられて居る幻影を脳裏に浮べたのである。

いよいよその仕事をはじめに當つて、月堂は二人のモデルを同時に使ふ事に定めた。

家の柱に二人を同時に縛りつける。妻を胸まで露出させてくりつけ、それに接して勇吉を裸体のまま縛るのだった。

彼はかうして、島原の美しい一對の形をとらうと試みた。——以上二月号掲載部分。

『地震だ！』と思つた途端、台所においてあつたものがガチャンとはれる音がしたが、同時に家が傾いたやうな感じがして、メリ／＼と戸が音をたて、簾簾の上にあつたいろんな道具が頭からふりかかつて来るのを認めた。彼は全く夢中だった。二人を縛つた柱が斜に曲つたやうに思ったが自分以外の事はその時考へられなかった。否その自分でさへも、あの激動が一寸やむまで、どこでどうしてゐるのか判らなかつた。

若し、妻が、泣き叫んで彼に救助を求めてゐたなら、彼は無論通常の人間通りに行動したにちがひない。然るに、身もだえをして苦しんでゐたのは勇吉一人だけだった。

性来、非常に地震を恐れてゐた彼の妻は、最後の悲鳴をあげた刹那、そのまま氣絶してしまつたのだつた。喪心状態になつて。

——従つて鎖で半分身体を宙につられたまま蒼くなつてゐる妻の所に月堂は本能的にかけよつた。そうしてひどくからだをゆすぶりながらオーイ／＼とよんでみた。

『をぢさん、をぢさん、早く解いてよ——』

勇吉は死物狂いになつて叫びつゞける。月堂はそれが耳に入らぬもののやうになほ数回妻を抱いて名を呼んだ。身体をゆすぶつた。しかし妻は死んだもののやうになつて居る。勇吉は涙を流しながら足ずりをして叫んでゐた。

月堂の頭は全く不思議な魅惑で占領されてゐた。彼はいきなり懷中にあつた小布をとり出して驚く少年の口の中に無理やり押し込んだ。つづいて傍にあつた手拭をとつてきりきりとその口を縛りはじめたのである。理由も目的も判らないけれども勇吉は死力を出して防がうとした。しかし両足ま

で鎖で縛り上げられてゐる以上、僅かに首を振つて抵抗し得るだけだった。無論、月堂の力にはかなはなかつた。悲鳴はおろか、息をする事さへもやう／＼に見える位完全に猿轡をかけた月堂は、まだゆれ返す大地の怒りには、もはや何らの恐れのないもののやうに、又戸外に走り出た。

黙々として部屋に戻つた月堂は、冷かな目付で勇吉の方をながめた。勇吉は、身動きも出来ぬ悲惨な状態で、しかしまだ死力をつくして少しでも手をゆるめようとあせつてゐるけれども鎖は肉にくい込むばかりで一分もゆるむことではなかつた。地震の恐怖の為にまっ青になつたその顔面は、今や自分の辿らうとする恐ろしい運命から逃れやうとする努力のために紅を呈してゐる。その紅顔の上を油のやうな涙が流れおちて居る。何と思つたか月堂は黙つてそこにしやがんでしまつた。

人類のもつあらゆる残酷性が月堂を支配した。そうしてそれと、人間の死ぬまで捨てられぬ自己の欲望——月堂の場合には絵に對する何ものをも犠牲にしてもやまぬ欲望が彼を全くとりこにした。

残酷性と欲望とが人間の形をして出来た

ものが丁度その時の月堂だった。

全身の筋肉をはり切つて苦しんでゐる少年の横腹の辺に、まげをがっくりとくずれさせて死体のやうに、女が宙づりをされてゐる。此の形は月堂にはただ一つの構図としか考へられなかつたかも知れない。

月堂は、二人を写生した下図を手に握んでペリ／＼と引裂いた。さうしていきなり燐寸でそれに火をつけると、其を手にとつてそこにうづ高く積まれて居る屑に焰をうつさうとした。

その瞬間だった。彼は己れの耳を疑つた程、異様な物凄いうなり、全くそれは——唸りといふべきものだった——をきいた。勇吉の努力で猿轡が多少ゆるんだのだった。月堂ははつきりと勇吉の顔を見た。見た。見た。彼は一生涯探してゐた顔を見た。火刑にされやうとする人の顔、焼き殺されやうとする美しい少年！ あらゆる人間の呪いと恨みと、苦しみと、火に對する恐怖の顔色！

積まれた紙に火がうつた途端、月堂は、今まで描いた群像の下図を懷中にしたまま身をもつて家からとび出した。

改めて島原絵巻を見ると、全く鬼氣人に



迫るものがある。

少年勇吉をモデルとした美しい小姓は、今にも鎖を切って見るものに食ひつかうとしてゐる。その有様を仔細に見てゐる、月堂の目の前でなぶり殺しにされた勇吉のその時の様子がはつきりと考へられて、おもはず、目をそむけずには居られない。又氣を失つて仆れかかり僅かに鎖で引きとめられて居る美しい娘、顔は外にモデルがあつたのだらうか。

おそろく月堂の妻はかういふ風になつたまま焼かれたのであらう。

あの関東の大震災を、偶然とは云へ、月堂のやうに犯罪に利用した者は他になかつたらうか。又あの関東大震災は、あの直前に起つた幾多の大犯罪の証拠をどんなにくさんはなくしてしまつたか。最後にわれ／＼人間には、平生は考へられぬ位の残酷性が多分にある、といふ事である。

——以上二月号掲載

此れも浜尾氏の作品では余りにも有名なため御承知の方も多いと思われませんが、やはり取り上げるべきすぐれた物語であります。嶺田弘氏の挿絵も佳作です。或は此の文中の通りに——。此れは思い過してしやう。

一月号、二月号の見出しのカットには、島原絵巻が描かれてあります。十字架と共に。此れ又中々に苦悶している二人がよく書き表わされて何とも云えません。嶺田氏は顔の表現が実に上手いと思うのです。殊に最後の頁には、月堂の妻が氣を失つて、勇吉が炎のために苦しんでいる姿が書かれておりますが、その感じが出ております。変態小説とは云つても真面目な物語だと思ひます。最後に書かれた——残酷性が多分に人間にはある——と云うことは私達がじっくりとよく考えねばならぬことでありましよう。

× × ×

此の二月号には又、覆面作家氏の「裸女殺人事件（第五回）」が掲載されており、物語としては少々あくどく、文章も決して上手いとは云えませんが、とにかく面白く読ませ、トリックも余りにも奇抜な点もありますが、且つ興味本位に書き過ぎた嫌いが無きにしてもあらずですが、一応書き抜いて見ました。此の第五回が一番の山とも云える面白さがありますから。

いくら浅ましい職業の為、客の前で裸踊りをさせられ、貞操を強制的に売買される女であっても、娘二十五の肉体を、無理に

赤裸にむかれる事は。やはりたまらない事だった。

しかし淫獣達は何の遠慮も容赦もなく、衣類を奪い取ると、さすがに彼女は恐ろしさで羞しさに、身体の引緊るのを感じた。『どうだ姐さん、大人しく言つてしまえばいいものを』

彼女は裸のまま後手に縛られると、榎原はニヤリと笑つて、床に落ちてゐる煙管を拾ひ上げ乍ら、それで彼女の身体中を突き廻して淫雑な哄笑を吐くのだった。

やがて彼女は後手のまゝ、床から三尺高い所へ、宙にぶら下げられた。天井の大きな梁に縄を掛け、後手にぶらりと吊り下げられると、全身の重みが逆手になつた肘と手首にかゝつて、五分と経たない間に手は痺れ、縄目は肉へ喰込んで来て、堪えられない苦痛が襲つて来る、身体を捻じようとする程縄は締上げられ、手は肘から折れてしまふか、肩から抜けるのではないかと思われた。

麗子は美しい顔をギューッと吊上げ、口を引裂ける程に歪めて、ギリギリ歯を喰ひしぼり、双眸を苦しく血走らせて、その表情はぞつとする程凄艶に見えた。

そして遂には蒼汗を絞り、悲しい呻き声を上げると、榎原は彼女の足の下へ、椅子

を支えてやってから、

『どうだい、まだ言わないのかね』

とニヤニヤしながら言った。

『いつ迄も強情を張ってると、終いには命がなくなってしまうよ』

『……………』

『名前だけ教えてくれたら下してあげる。

どうだね麗子さん、どうしても言わないと、まだまだ痛い目に遇せるが、構わないかい？』

彼女は全くその言葉に、震え上る様な恐怖を感じた。実際この男達は、どんな事でもするに違いない。女を逆吊りにして、心臓の動いたまゝ引裂いてしまう位の事は、平気でやりかねない連中だからである。

麗子は、又次に襲って来る苦痛を思うと、一そ白状してしまおうかとも考えたが、自分の口一つで、折角今日迄の苦心も水泡に帰し、あの人達は全部殺されてしまうだろうと思うと、とても口を割る事は出来なかった。

『あゝ、こんな恐ろしい、死よりも惨酷な事をされるのなら、一そこのまゝ潔く死んでしまおう、自分は何を成す事も出来ず、このまゝ果ててしまうのは残念だが、友達を護る為に、今後の成功を地下で祈って、自分だけは永久に口を緘してしまおう』

最後にはそんな決心もしたが、さて又拷問が始まると、ギリギリ歯を喰いしぼるのが関の山で、殆ど失神状態に陥っては、舌の根を嚙切るだけの、氣力も無くなってしまうのだった。

麗子は又残酷な拷問を迫られ、羞しい身体を後手のまゝで、天井から吊下げられていた。彼女は死力を尽して苦痛と闘い、殆ど魂を失いそうになっても、まだその大恐怖に悶動していたが、その間に榎原と社長は、傍らのベッドへ長く寝そべりながら、長い烟槍の先に、錐子の先の阿片を焼いたものをつけ、傍のランプの焰にあぶりつゝ、強い強い煙を吸っていた。そして二人は忽然と阿片に酔い乍ら、神経の麻痺した眸で、大苦悶にのたうち廻っている裸女を、さも愉快そうに眺めていた。

あの夢幻的な一種独特の妖氣が烟槍の斗門からモク／＼と立上って、吊下げられている彼女にも、妖しく嗅覚を衝いて来る。その音氣の中で、もうこのまゝ死んでしまふのではないかと、麗子は思っていた。事実全身が痺れてしまつて、何の感覚も訴えないまゝに、次第に深い泥沼の底へ引込まれて行く様な、氣持になつていったのである――。

そして、仄かな脳髓の底でもうこれが最

後だなど、麗子は僅かに意識していた。

――(中略)――

阿片の香だけでも、頭がグラグラする様な眩暈を感じるのに、とても生きている神経では、耐えられない苦痛の連続に、麗子は何度か氣を失い、もう生きる氣力もない程に、グツタリとしていた。

拷問六時間、もう逆吊りから解放されていた代りに、あれから烈しく鞭で打たれた、いかに逆光線の娘だとはいえ、とても耐られない程の辱しめを受けて、冷たい床に裸体で転がったまゝ、さっきから動く氣力も失ってしまった。

美しかった滑かな肉体にも、赤紫に腫れ上った瘍痕が、肩にも背にも盛上った乳房にも残っていたし、頬へ垂れた血の跡が赤黒く固っていた。それらが果してどんな苦悶と共に刻まれたのかと思うと、死よりも烈しい苦痛に、打ちひしがれた彼女の身体は想像以上の苦しさを味って来たに違いない。

その室には、強い麻薬の香が一面に立罩めていて、もう社長木下俊は居なかったが、榎原だけがまだベッドに腰下していた。この奇妙な室の、奇妙な男女の取合せは、若し第三者が見れば、地獄の底で演ぜられている惨虐な一幅の血みどろ絵でしかなかった。



ただろう。

『もう死んだのかな』

槇原は触り泣くと、うつ伏して倒れている麗子の黒髪を撫でて、ぐいっと顔を引起した、彼女は僅かな意識の下でグツタリして、空ろな眸を開けると、それでもまだ妖しい殺気を、チロチロその眼の奥に燃やし乍ら、じつと槇原を見返した。

『麗子さん。貴女は随分偉い女だね。僕は貴女の度胸には感心したよ。天野屋利兵衛だってこんな真似は出来まい。もう君がたとえ口を割っても、誰一人嗤やしないぜ、これだけ頑張り通した精力を絶讃するだけの事さ、さア、それではこれから最後の荒療治に取掛ろう。これでも云わなきや、残念乍ら僕の負けだ。それ以上君の口を割らせる事は、諦めるより外に術がないからさ』

槇原はそう云いながら、床の上に転っている、血のこびり付いた笞を拾い上げた。それを見た時、彼女の朦朧たる神経も、確かに烈しい恐怖反射を示して、ビクビクと痙攣していた。女として、何よりも恐ろしい惨烈なる極刑を、この男は再び平気で、彼女に強いようとしているのを知った時、麗子は生きた心臓を捻ぢ断られるよりももっと、激甚な、最大の恐怖を知っていたのだ。

そして、鈴村淑子は昨日男に変装して、私と桃色の室で会い、鳴川探偵の攻撃計画を聞かせてくれたし、既に彼女が脱出してしまったのなら、一層の事、彼女の名前だけなら云ってしまおうかとも思うのだった。

『さア麗子さん、最後の根比べだよ』

槇原はまるで血のない動物の様に、神経のない虫ケラの様に、反撓する気力もない彼女に、恐ろしい笞を使い始めた。気も狂う様な激痛が襲い始める。彼女は激しく肩で呼吸して、歯を喰いしぼり、諸手で断末魔の虚空を、ヒクヒクと握み始めた。男の顔が引吊った様に、ギョツと歪む毎に、地獄の笞の大苦悶が、いよいよ最高潮に達した時、彼女は微かな気力の中で、

「許して、許して……」

と声も絶え絶えに叫んでしまっていた。

「とうとう降参したね。云うのかい？」

彼女は引吊った眼を引きしめて、コクンと一つ頷いた。

「そおかい、そんならもっと早く、云やア、こんな痛い目をしなくてもよかったのに」

槇原は猫撫で声でそう云って、処刑笞を投げ捨てた時、張りつめていた神経が、急に弛んでしまったのだらう。麗子はがっくりうながれて、そのまゝ崩れる様に、幽明の境を失神して行ってしまった。

此のサディズムの極地の所は、それでも中々に読ませます。多少猟奇的なふん囲気はありますが。槇原が阿片を吸い乍ら、麗子を見上げている挿画がありますが、嶺田弘氏の手になりますので、中々に実感は出ております。吊り上げられた彼女の脚の部分のみが書かれており、その影絵がくつきりと浮かび上っているだけに凄まじいものがありました。

見出しのカットは最後の文の挿画となつて、天眼となつた麗子の肢体が如何にもなまめかしい感じを出させております。嶺田氏は探偵小説の挿画には、うってつけの存在だと思ひます。

然し此の覆面作家氏の文章の表現には、何か物足りなさを感じさせます。今一息と云う所です。結局猟奇的なふん囲気をかもし出そうとして失敗したのではないでしようか。

犯人も男性仮性半陰陽にもって行った所も難があります。男であり乍ら、女子外陰部に非常に酷似して見える男性外陰部を持っている——余りにも特殊過ぎます。探偵小説と云うものは、誰にでも納得の行く様な終末を持たせなければ面白くありません。

×

×

×

昭和二十四年十一月号からは矢張り同じ覆面作家氏の「爬虫館殺人事件」を書抜いて見ました。此れは相当に凄まじいもので、余りにも残酷過ぎますが、一応は取上げるべき作品でしょう。人間の持つ宿命的な発作かも知れません。且つ此の覆面作家が持つ一つのイメージでもあったのでしよう。

博士は研究所を出ると浴室へ向つて来た。まさにその一刹那だ。ひとりの見知らぬ女が、窓から浴室を覗いている。怪しい奴と博士は咄嗟にカーテンの蔭にかくれて成行きを見守っていた。するとそれとは知らぬ怪しい女は、懷中からピストルを取り出すとピタリと狙いをつけた。博士は我を忘れて女の背後に組みついた。その時はすでに遅く二発の弾丸が銃口を離れていたのである。

女は必死に抵抗をつづけて遁がれようとする。いかに老人でもそこは男と女である。女は遂に博士のためにその抵抗力を奪われてしまった。すると博士は矢庭に女の軀をかっくようにして研究所へ連れ込むと、ピーンと扉に鍵をかけてしまった。実にこれは一瞬の出来事だった。

研究所へ戻った博士は、女を自由にしていた。しかしこゝは三方とも壁で出入口

は一つよりない。もはやも如何にがいても女の逃れる道はなかった。

「うぬッ、貴様は何者だ！」

女は窓際にびったりと身をつけて、油断なく身構えている。博士も警戒しつつじり／＼と肉迫していった。

「おや、貴様は月野澄子に似ているぞ！うむ、さては——」

博士の心にも思い当ることがあった。すると博士の表情は異様に緊張し、いつか博士の血潮の中に酷薄惨虐なものが鎌首をもたげて来たのだ。博士は次第に自制を失いそれと同時に冷血なものの残忍なものが博士の全身を支配し初めた。昂奮時に起る獸的発作は博士の宿命であつたかも知れない。

「判ったぞ。貴様は澄子の妹、花江とかいう女だろう」女の眼と博士の眼がぶつかる

と火花が散るほどの憎悪が閃めく。

「そうか！ 貴様だったのだな。この浜野家を狙い、僕の可愛い娘や孫を次々と惨殺しおつたのは——」

高島の生存を信じきれぬ博士は、花江を見て始めて悪魔の正体をつきとめたと思つた。そう思えば憎悪は炎となつて燃え上る。

「うぬッ、貴様、よくも今日まで俺を苦しめたな。よくも娘や孫を弄り殺しにしておつたな。ふゝゝッ……見ろ、因果応報は目の

あたりだ。今度は俺が、貴様にその返礼をする番が廻つて来た。貴様も悪党ならいさぎよく観念することだ」

呀っという間もなかった。いきなり花江に襲いかゝつた博士は、矢庭に彼女を床へ押し倒し、後ろ手に縛り上げた。

「畜生ッ！ 貴様こそ姉さんの仇だ。悪魔め！」花江は口惜しまぎれに絶叫する。博士は冷たく嘲笑つて、

「何とでも吐くがいゝ。いまにその息の音をとめてやるからな。——おい花江、貴様は千鳥の髪の毛を斬りさいなみ、齒を口を叩き潰した上、裸にして弄り殺しにしたのだ。僕はそっくりそのまゝ貴様にお返しする義務があるんだ。まあ遠慮せず受取るんだな。その位の返報は当然なのだ」

博士の声はさながら餓狼のそれに似ていた。彼は先ず花江の衣類を容赦なくベリベリと引き裂いた。花江は恐怖の余り羞恥を感じる余裕もない。大きく見開いた眼で博士を睨めているばかりである。

胸があらわになり、腹部が現われ、ついに女体のすみずみまでが露わにされた。

「はやく殺して——」

「ふむ、そうはいかん。——ふゝゝッ——なか／＼美しい軀だな。この軀をいま目茶目茶にしてくれるぞ。さ、そろ／＼始めよ



うか」

博士は花江の足許へ蹲んだ。悪魔が悪魔を刎上りのせ、この世で最もおそろしい復讐の大手術を施そうというのだ！

花江は足の親指に焼けるような痛烈な痛みを覚えた。

「あッ、痛、痛ッ！」

ギリ／＼と女の歯が鳴る。苦痛はそれでも忍び得ないのだ。花江の全裸の肉体が七転八倒して苦しんだ。それもその筈、博士は解剖刀を手にして足の爪を一枚々々、肉から剥ぎとっているのだ。

「む……もう許して！」

「まだこれは序の口じや。いまにもっと、ひどい目に合わせてやるぞ」

博士は完全に蛇性に還ったのだ。そこには人間らしい感情の一片すら認められない。解剖刀は情け容赦なく肉を破り神経も血管も切りさいて、それでもなお剥がれぬ爪はピンセットで摘み力任せにペリ／＼引むしられてゆく。

「ヒヒヒッ……」

苦悶のため花江の表情は変貌した。全身にギラ／＼と膏汗が滲み出ている。

「今度は手だぞ」

今度は鋭利な鋏だった。博士は花江の五本の指を次々と斬り落そうというのだ。皮

を切り肉を裂き、神経を切断してゆき、最後にはバリ／＼と骨を断つ。床上へ血潮にベットリと濡れた指がポロリと落ちる。その度ごとに肺腔をえぐるような女の悲鳴が怪鳥の啼き声のように部屋の空気をふるわした。

「た、助けて！」

「もっと泣け。もっと喚け。千鳥やとし江の苦しみに較べればまだ軽いわ。——だがまてよ、失血で殺しては面白くない。この辺で止血してやれ」

鋏はもう血糊でヌル／＼になっている。

博士はすでに五本の指を斬り落された奇怪な手に邪険にオキシフルをぶっつけた。その激痛、その苦悶——そして止血剤が塗られた時はさすが気丈夫な花江も危うく失神しそうになった。すると博士は覚醒剤を用いて花江の意識を呼び戻すのだ。

「殺して——一思いに殺して——」

「殺してたまるものか。この位のことでは俺の怨みが晴れると思っているのか」

その半死半生に喘ぐ花江を博士は冷然と見下した。まるで觀賞しているが如き態度だ。彼はひとたび冷血鬼になると獺猛残忍もはや鬼畜以外の何者でもなくなるのだ。

彼は女が苦しめば苦しむほどゾク／＼するほどの快感を覚えた。

「うあッ！」

女の口をつんざいた絶叫。——博士の解剖刀は情け容赦もなく花江の腹部へ突き刺されたのだ。さすがに花江の唇の色が変りすでに叫ぶ力も失ったようだ。だが、博士の気持はますます暴れ狂う一方だった。聴て花江はぐったりとなつてしまった。

「おや死んだかな。まだ殺すのは早いぞ」

そういうと、どうする心算か、今度は傷口を乱暴に縫い始めたものだ。

それが済むと、博士は女の顔へザ／＼と水を浴びせかけた。花江はかすかに眼を開いたが、それはすでに視力を失っているようだった。

「さア月野花江、もう一度苦しませてやるぞ」

それからもう狂人の乱舞だった。血に狂った博士は手当り次第、花江の軀を斬りきざみ、血の池となった研究室の中を踊り廻るのだった。花江は完全に動かなくなつた。この光景はもはやこの世のものではなく宛然凄惨酸鼻をきはめた地獄絵のそれだった。

全く此れはどうも余りにもいただきかねます。犯罪も此処まで来ると何とも云い様もありませんが、ある人間の一面性をえぐ

ったものとも云えるでしょう。戦争に於いての犯罪面——此の種のグロテスクな行爲が果して幾度となく行われた事でしよう。此の物語を書いた覆面作家氏の一心が強く反映した——とも考えられます。

老博士は最後に、多年飼つて来た蛇類のためズタズタに五体を喰ひ破られ見るも無残な死を遂げたことになっています。人を殺せば自らも死に落入るの鉄則の如く。

とにかく探偵物も此処迄来ると、ちよつといやになります。何もこんなグロテスクの表現を用いなくともと思いますが。人間の持つ残酷な面を画くにしても今少し他の方法がある様に感じられます。あくどさが強過ぎる様です。大久保四郎氏の挿絵も平凡。

昭和二十五年九月号に掲載されてある香山風太郎氏作「悪魔の貞操帯」はちよつと風変りな物語ですが、題名が示す様に中々に面白い作品です。従つて最も興味深い個所のみを書き抜いて見ました。

カチリ、神行の懷中電燈が点ぜられた。其の光芒の中に、くつきりと女の姿が映る。盛り上った乳房の上に一本の短刀。白いブラウスが血で汚れてゐる。私の予感が適

中したのだ。丸山名物技垂桜を距る五米の地点に、女の他殺死体がある。近寄つて見ると、死顔ながら其の女は凄惨な美人である事が判つた。既に息はなく、死後少くとも二時間は経つてゐる。私は夜光時計を覗いて見た。零時三〇分である。

「難波、この女、何だか変だぜ」

「變つて、何が？」

「下腹の辺を見てみるよ」

さう言はれて、仰向きに転つてゐる女の下腹部に眼をやつた私は、奇妙な事実に気が付いた。丁度臍の位置から二寸ばかり下の部分のスカートの縦に裂けてゐて、其の裂け口から金色に光る異物が、にゅつと突出てゐるのである。

「何だらう？」私は腰を落して其の物を注視した。その結果、それは黄金製の鍵である事が判つた。

「おい神行、こりや鍵だぜ」

「ふむ、鍵は判つてゐるんだ。問題は、何故そんな所に鍵が嵌つてゐるのかと云ふことだ。真逆とは思ふが、俺は今巴里博物館秘蔵のある奇妙な物を連想してゐるんだよ」

「仏さんにや悪いが、思ひ切つて捲くつて見るか。お嬢さん勘弁して下さいよ。僕達には特種を漁る探訪記者なんだ」

私は屍体にそう声を掛けて、おっかなび

つくりでスカートを捲つて見た。神行の懷中電燈に照し出された女の下半身。私は其処に、物語で讀んだ貞操帯を發見したのだ。十字軍の昔なら知らず、廿世紀のこの世にズロースも付けず裸身に怪奇な貞操帯を捲き付けた女！然も其の物は黄金色に燦と輝いてゐるのである。黄金製の鍵は、女性の扉を開く貞操の鍵であつたのだ。私は茫然と突つ立つて声を呑んだのだ。

処女か、非処女か、それは私にも神行にも判らない。だが私の直感には、この死せる貞操帯の女を処女なりと教へてゐる。

私達は電話で一応社の宿直記者に連絡して置いてキヤバレー・ヒーマンの裏口から忍び込んだのである。裏口の戸は幸ひまだ錠が下りてゐなかつた。先刻の男が云つた通り、鍵の手に曲つてゐる廊下の突当りは地下に降りる階段になつてゐた。

地下には全部で五部屋あり、其内四室は日本式に言つて八帖程の寢室であり、残る一部屋が十五坪余りの奇怪な広間であつた。奇怪なと云ふのは此の部屋には中世紀の恐ろしい責道具が一杯に並べてある事なのだ。床には深紅の絨毯が敷き詰められ四面の壁には陰惨な拷問の血みどろ絵が並んでゐる。



これに引替へ寢室の方は至極平凡で、部屋の隅にダブルベッドが据へられてあり、緑のシェードのスタンドが載った夜卓、その横の化粧台扉際の壁に沿った豪華な衣裳戸棚、と言った装置だ。私達は濃紺の綴帖の蔭で、今夜一晚徹夜する覚悟を決めた。

十二時頃迄は何事もなく至極退屈な時間が過ぎたが、私の腕時計が零時五〇分を差した時、地下室への階段を降りて来る数人の足音が聞えて来た。その登音は階段を降り切ると五つに分れた。それ／＼地下の寢室へ納ったらしい。私達の隠れている広間にもコツ／＼と登音がして誰か這入って来た。登音から判断すると這入って来たのは三人である。

私も神行も濃紺の綴帖の隙間から眼を覗かせて、様子を見た。這入って来たのは矢張り三人で、其一人は醜怪な面貌のマスター中条辰造であり、他の二人は私も顔を覚えていた女給の由紀と美沙子であった。中条は由紀に向って顎をしゃくって何事か合図した。すると由紀は純白のドレスをする／＼と脱いで、私達の眼前数尺の前で一糸を纏はぬ美しい裸体になった。貞操帯は嵌めていない。と、美沙子が部屋の片隅の鉄製の函の中から金色に輝く貞操帯を取り出して来た。中条は其の貞操帯を裸体の

由紀の股間に嵌め、ぴんと錠を下して仕舞った。それからマスターは自分の着ている燕尾服を脱ぎ初めた。上半身裸体になる。私は思はず声を立てる所だった。神行も驚いたらしい。私の手をぐっと握って来たので判るのだ。

私達は何故驚かなければならなかったのか。上半身を裸に剥いた中条辰造の胸に、何と女性の象徴たる豊かな乳房が見られたのだ。女だ！ この醜怪な髑髏の様な顔をした中条辰造が女とは！ 驚くなど云ふ方が無理である。彼が女としたら日本中を鐘と太鼓で探し歩いても、こんな醜い女は外に二人と見付け出せぬだらう。

上半身を剥き出したマスター中条は、いや女と判ったからには、マダム中条と言はう。兎も角彼女は部屋の隅の責道具の中から、強靱な鉄鎖を取り上げた。顎で美沙子に何か合図をする。美沙子は頷いて、今や金色の貞操帯を嵌められて裸身に耐へ難い羞恥と苦悩の色を走らせてゐる由紀を、後手に縛り上げて仕舞ふ。彼女はどういふものか少しも抵抗をしないのだ。

びしり！ 鉄鎖が由紀の裸身に鳴った。私は思はず息を詰めた。眼前に展開される恐ろしい地獄図絵！ 悪魔の折檻！ びしり！ 由紀の乳房が震へて其の豊満な乳色

の肌に赤い線が走る。私はポケットのカメラを秘つと取り出してゐた。広間の真中には煌々とシヤンデリヤが輝いてゐる。光線は充分だ、私は鉄筈が鳴ると同時に綴帖の蔭からシャッターを切る。凄じい特種写真だ。「美沙子よく見てお置き。誓約を破った者は、皆かう言ふ事になるんだよ」初めてマダム中条が囁いた声で口を開いた。

「由紀、お前はもう私の許しがある迄その貞操帯を嵌めてゐるのだ。そして明日はフットライトがお前の頭の上で止まる。お前は好色な男達に弄れるのだよ。其の唇も其の乳も、その胴も、お前は汚れた男の好色な舌で手で指で弄れるのだ。そしてお前はどんな恋しい男にも操を任す事は出来ないのだよ。お前は死ぬ迄処女であるのだ。ふ／＼、いひ／＼／＼」

それは地獄の声、地獄の言葉、地獄の笑ひであった。マダム悪魔はそふ言ひ捨てる。と、美沙子を連れて広間を出て行った。後には深紅の絨毯の上に冷たい黄金の貞操帯を嵌められ、後手に括られて、鉄筈の痕も痛々しい裸身の由紀一人。美しい、全く美しい其の顔を絨毯にこすり付けて、す／＼泣いてゐる。

舟橋聖紀氏の此の個所の挿画は実に印象的だ。答をふり上げてゐるマダム中条、由紀を縛っている美沙子、鉄鎖と歯車、一種、独得な氏の画き方は此のふん囲氣をかもし出すには充分な程です。由紀の清純な表情と、醜怪なマダム中条の顔が、実に対照的です。

とにかく金色の貞操帯を利用したのは仲々に面白い思ひ付きです。中世紀の責道具を使ったことにも興味深いものがあります。

事件の動機は至って簡単で、余りの醜怪な顔のために誰にも相手にされない中条辰江が、美人連中に復讐のため、此の貞操帯殺人事件を犯したのです。そしてその動機の原因は彼女等が此の誓いを捨てて処女を破らんとした事にあるのでした。

中条辰江自身も夫に裏切られ、真先きに貞操帯を嵌められ、その上その鍵を溶かされてしまった不幸な女でもあったのです。

ですから、一人でも多くの天下の美女を処女のまゝ永遠に閉じ込めてやろう——と云う野心を抱く様になったのもあながち無理ではないのでした。

然し少々突飛過ぎ、探偵小説としては難がある様に思われます。香山風太郎氏の作風は然し、若し此の様な事が起れば——と

誰しもが画きつゝあるイメージを満して呉れるには充分なものがあります。

× × ×

従つて同じ香山風太郎氏の作になる「暹羅崎型の鬼」もやはり同年十一月号に掲載されてありますが、中々にすばらしいイメージだと感ずるのです。それだけに作り過ぎた傾向は勿論ありますが。

パチリと神行が懷中電灯を点ける。ぷーんと何処からか血の匂ひが……。私は思はず神行の右腕を握む。

『奥だな』神行はさう洩らして突き当りの扉を押して奥へ進む。此処には電灯が煌々と点いてゐた。土間から硝子障子戸越しに見へる奥の座敷。私は一目見て危なく氣を失ふ所であつた。余りにも無惨な光景が其処にあつたからだ。それは今思ひ出して思はず嘔氣の来る程の、醜怪と言ふか惨虐と言ふか、とに角、言葉を知らぬ凄まじい地獄図であつた。部屋の中には爽々しい青畳と、純白の敷布を掛けた夜具を、毒々しい血の色で染めて、全裸にされた奇怪な三人の女の死体があつた。其の一人は厚紙を切抜いて作った鬼の面を恥部に貼り付けられ床の間の柱に細引で縛られてゐたし、他の二人は丁度暹羅姉妹の要領で、背中合せ

に腰の一部を縫ひ付けられて、床の前に転つてゐた。

三人共右乳の下を一突きにされて、胸部を鮮血に染めてゐる。余りの恐ろしさ、怪奇さに神行も私も暫く茫然と突つ立ってゐた。

吉見記者は其の夜警羅隊と行動を共にしながら、千本今出川の近くまで深夜の巡邏を進めた時、とある町角の「麻雀」と書いた小看板の掛つてゐる家の表戸が手開きになつてゐるのに氣付き、早速警羅隊の一員に注意すると、美人床の惨劇を経験してゐる事でもあつたので、はつとなつて調べて見た所が、此処の戸も不法に外から開けられたものである事が判つた。念の為に声を掛けて見たが、中からは何の応答も無い。

すはこそと踏み込む。奥の六帖の間に恐怖すべき二体の屍骸！一方の死体は上半身が女で下半身が男、もう一方の死体は上半身が男で下半身が女だ。このグロテスクな死体を見て、警羅隊の猛者連も呆然となつて声を呑んでしまった。吉見記者も狐にでも化かされてゐるんじゃないかと、幾度も眼を擦つて見直したが、男女合体の死骸は夢でも幻でもなかった。然し落付いて見ると決して超自然的な畸形児ではなく、それは



胴体を切断されて、異性の肉体と縫合された死体であることが判った。

——(中略)——

何はともあれ、上下性を異にした二つの死体の怪奇さは、一同を異常な興奮に誘ひ込んだ。白い、美しい豊満な乳房を持った女体に接続された、日焼した逞しい褐色の男の下肢。真黒な胸毛が房々と生へた男の上半身に接続された、柔いふくよかな女性の下半身。奇妙な倒錯の中に、くっきり浮び上ったデルタの刺激。吉見記者は夢中でザラ紙にペンを走らせてゐた。

此の作品も又奇抜し過ぎます。シヤム畸形、男女性を異にしたこの死体、何となくうすきみ悪さを感じます。正に怪奇的です。然し此処まで来ると読者も、厭気を流石に感じる様になって来ます。此れでもか、此れでもか——と云う感じの方が強く、どうにも面白くななくなってしまう。いくら探偵物でもはなについて来ます。

然し浜田稔氏の挿絵は完璧です。此の変った画き方がびったりと一致しておりまして。

いよいよお終いには、矢張り同十二月号

に掲載されてある尾久木弾歩氏の作品「般若面の秘密」から取り上げて見ることにしましょう。此れは長篇物語ですが、その一部を書抜いて見ただけでも中々面白いものと分るでしょう。

衣服を脱ぎ捨てた敏子は、裸になって浴室に入つて来た。それを見た俺は、好奇の眼を光らせた。かかる急迫した空気の中にありながらも、人間の劣情は、かくも妖しく刺戟されるものであるうか。うら若い女性の、その弾力に富んだピチ／＼とした肉体に、俺は、眼を惹きつけられた。般若面で面を隠した俺は、窓にそつと顔を押しつけて、うっとりとして浴場の内部を覗いていた。

敏子は、恋人のことでも思っているのであるうか、浴槽の縁に後頭部をのせ、胸から下を湯に浸しながら、陶然として甘い夢でも追っている風だった。が、やがて、ぐつと身を反らせて、豊満なその腰部を湯から露わした。それからの彼女の官能的な肉体の蠢めきは、さすが正視できなかつた。激しい腰部の動き。波打つ下腹部の律動。微かな全身の戦き。その女体のうねりに、俺は、処女の肉体の秘密を、まだ男を知らぬ女の性生活への憧れを、初めて知ったの

だ。

それを見せつけられた俺の血は、奔騰した。その時、脱衣室から由紀子の声が聞えた。その声に敏子は、はっと夢から醒めたかのように、慌て、浴槽から出た。そこへ由紀子が入つて来た。ナイフを懷中に忍ばせて——。

そして由紀子は、背中を流してやると見せかけて、敏子の胸部を突き刺そうというつもりだったのだが、本能的に早くも身の危険を予知したのか、敏子が、それを拒んだので、由紀子はまた脱衣室に戻つて行った。

好機到来とばかりに、聲音を忍ばせて開き戸の方に近づいた俺は、また硝子窓の下にそつと忍び寄った。その聲音に気付いたのか、敏子はギョツとして窓の方に眼をやった。そこに、般若面を見たのだ。

しまったッ！

そう俺が思った時は、既におそかつた。敏子は、「キヤアッ！」と悲鳴をあげて、立ち上っていた。だが、俺達の悪運が強かつた。立ち上つた敏子が、血相変えて逃げ出そうとした、その拍子に、ドシンと仰向けざまに引っくり返った。撲ちどころでも悪かつたのか、流し場に倒れた彼女は、動こうともしなかつた。

ところへ、緊張に双頬を硬ばらせた由紀子が入って来た。そして、失神している敏子を一目見ると、ニツと会心の微笑を洩らして、緩ろに懷中から兇器を取り出した。由紀子は、その兇器を逆手に握り締めると敏子の傍に踏み込み、一思いにグサリとその乳房の下に突き刺したのだ。

断末魔の苦悶に、意識を失っている敏子も、ビク／＼と手足を動かしていたが、それも間もなく、動かなくなつた。まったく呆気なかつた。人ひとり殺すということはこんなにも呆気ないものだろうか。

だが、それに引続いて行われた由紀子の世にも奇怪なる行動を目撃するに及んで、俺は肌に粟を生じる思いをさせられた。

今しがた、敏子の妖しい肉体の律動に、血潮を湧き立たせた俺は、今また由紀子の奇怪なるその動作に、一ぺんに血潮が凍るかと思われた。

敏子の胸からグツとナイフを引き抜いた由紀子は、それを傍に置くと、いきなりふくよかな乳房の下から滾々として溢れ出る血潮に、口をつけて吸い出したのだ。何とということだ！ 時々、咽喉をゴクンゴクンと鳴らしながら、血潮を吸っているのだ。吸血鬼！ そんな言葉が、俺の脳裡に閃いた。まったく。いま眼前に見る由紀子

こそ、その怖るべき吸血鬼に外ならないのだ。

由紀子が浴室から立ち去ってから、やつと我れに返った俺は、開き戸の方に歩み寄り、その把手に両手を掛けて、力一杯グツと引ッ張ってみた。錠は訳なく毀れて、開き戸は簡単に開いた。

浴室に足を踏み入れた俺は、隠し持っていたナイフで敏子の人差指を切り取って、ポケットに納め、ナイフはその場に投げ捨てておいた。

それから暫くは、美しい敏子の全裸の死体に見惚れて、俺は突ッ立っていた。

睫毛の長い閉ぢられた瞳。まだ仄かに血の氣が残っている唇。すんなりと伸びた両腕。異性を知らぬ、むっちり膨んだ両の乳房。張ち切れんばかりの肉付きのいゝ太腿。そうして、まだ此の歓喜を知らぬげな、バラの蕾にもたとえたい神秘の三角洲——胸部と右手の切断された人差指の傷痕を除けば、それは死体とは思われぬほどの魅力に溢れていた。

此れは犯罪者の手記になっています。然し中々に表現は巧みなものです。本格長篇探偵物とうたつてあるだけにとにかく読ませます。トリックも相当なものでした。

が、此の殺人鬼由紀子は吸血鬼でもありません。然しそれにも拘わらず、それほど残酷さを感じさせないのは尾久木氏の文章が相当に上手いからでしょう。此の挿絵は大久保四郎氏が担当しておりますが、此れは中々に印象的でもあり、割合に成功したものと云えます。由紀子が敏子の死体から血潮を吸っている場面ですが、それ程ひどくは感じません。般若面も効果的です。

× × ×

前後三回にわたつての「探偵小説新考」も此辺でペンをおきたいと思ひます。何しろ私も相当につかれました。印象に残る場面のみを書き抜くと云うことは相当に苦痛でした。私の能力では此れ以上はとてもこたえます。とにかく一応変つた探偵物ばかりを集めた積りでしたが勿論書き落しもあることでしようし、皆様方から色々と御指導いただければ此の上もない喜びとする所であります。

(終り)

〔編集部註〕文中、原稿に歴史的仮名使いを使用した引用文は、原文通りにしておきました。



## 「男色者の手記」

矢 桐 重 八

本誌をはじめとして過去の風俗雑誌、性雑誌に、男色者の手記、と称する告白体の文章は意外に多い。が、中には興味本位のいかかわしいものもあり、男色者の生感を真に描写した文は案外に少ない。誇張や恥らいが多くの場合、真の裸身をかくしてしまう。

その中で私がこれから紹介する「あなたたちは誤解している」という文章は、その真実に於て、洗練された文章の美しさに於て、また、読者に訴える力の強さに於て、まさに第一級の告白文だと思ふので、異色文献誌としての奇譚クラブに、是非記録しておきたく茲にとりあげる次第である。

この小文は、昭和三十年十二月特大号の「中央公論」が特集した「日本人の性意識」の中におさめられている。権威ある一流誌が企画しただけあって、この作者、久慈行二という人は年令的には若いらしいが、文章は感覚的で美しく、男色者の苦悩の実態が詩的に表

現されている。

全文を紹介しても、まったく奇クにはびつたりの文章なのだが、ここには私が特にすぐれていると思つた箇所、他の告白文の類型を破つた箇所をのみ取りあげることにする。

「僕が自分の裡に異常性を認めたのはいつのことだろう。最初はそれは可能への憧憬という多彩な光で僕の眼を欺いてきた。洗洋たる海面のような豊かな胸郭、ひきしまった腕の隆起、真夏の太陽に向つて生い繁る夏草のような豊醇な脇窩の漆黒の叢、微かな風にも躍動する強剣な胴、有蹄動物にも似た撓やかな脚、そして何にもまして大人のあの象徴でもある Penis の祭壇。やがて僕も大人になるのだ、あのようになれるのだという憧憬が僕をそこに繋いでいるのだと思ひ込んだ。」

「父の書齋から何気なく引出した画集に、アンドレア・デル・サルトルの『若き聖ジョーン

』を見出したとき、僕はふしぎな罪の意識に戦っていた。咽喉がからからに乾いていた。眼が開けていられないほどに痛んだ。が、モノクロームのその写真版からは眼をそらすことは不可能だった。広い顔をなぶる捲髪が一層この正義の若者を愛らしくみせた、そして遅ましいトルソー。腕からゆるやかに垂れて下半身を隠蔽していた布の下には、何も纏っていないかに想われた。

下腹部に怒濤のような戦慄を聴いた、自ずと手がそこに触れた。程経て、死魚の眼のように僕は絨氈に点綴する精液を見た。その夜から十二歳の少年の夢の中に『若き聖ジョーン』は下半身の布を除き去つた全裸のまま現れた。」

「十二歳は無邪気な錬金術師でもあった。少年は美しい花嫁を夢想した、純白なウエディング・ドレスを身に纏つた花嫁を——。がこれは查かな物語であつた。現実の肉体は既に

少女を嫌悪していた。僕の不用意が、ある美しい少女と急速に親しくさせた。が、僕には性的感性はいささかも混ってはいなかった。そのために少女は絶望して死を選んだ。」

「ある時、ある男がいった。彼は僕の横に裸身を横たえていた。世間を欺くための結婚です。倒錯者だと知られることを懼れたものですから」と。

しかしこの虚偽は彼をして二重の不幸に駆りたてる。夜への恐怖が、嫌悪が、この時から彼を蝕むのだ。そして妻からの避け得られぬ要求に際しては、彼は眼を鎖じ、かつて彼が接してきた幾人かの同性の肉体を空想することによって、ようやくこの交情を終えるのだ。彼はこの生活の中に、墓穴のように一日一日と不幸を掘りひろげてゆく。」

「罪悪だろうか。絶えず美しいものを求め、静謐を愛し、あらゆる外界のものを素直に信じようとしたこの魂のどこに、かかる非難さるべきものがひそんでいたのか。倒錯から遁れようとして続けられた長い努力は、すべてが徒爾だった。現在に到るまでの教養も、祈願も、決意も、この偏向を阻止する力は些も持ち合わせていなかった。しみじみ欲しいと思うのは、愛することのできる正当な権利であった。僕の血の最後の一滴までもが男を欲するのです……」将来を囁目されている青年外交官が僕の前でこういった。何か慄然と

する声であった。が、男はその声の中に自嘲を丹念に塗りこめていたはずだ。」

「彼らは口を開けば悩んでいるという。その声は莊重に粉飾されて、それを口にする男たちを恍惚とさせている。明らかな悲劇への傾倒である。二十歳の青年が、かくして野良犬のように道傍でたやすくその慾情を満たすことができるのだ。キスしながら、同性を愛撫しながら、しかも一時間後の別の男の肉体を夢想しながら、彼らは厚顔にも、僕は悩んでいるのですと、この快楽の呪咀を吐く。」

このように同性愛者は、その性慾を満足させることは常人よりも手易い。その一つの場所。――」

「ビル街にある公衆便所。通りからは入り込んでいるだけに、思わずその前を通り過ぎてしまうような樹蔭の小さな便所。通りに荷物を積んだ自転車、プラタナスの並木の蔭には流しのタクシーが停めてある。」

午後二時、ここではあらゆる自動車、次々と疾走してゆく。そして停車している自動車はあたかも落伍者のようにみえる。

やがて時間は十分過ぎる、依然として自転車と自動車はそこに置かれたままである。二十分過ぎる。中年の運転手と商人とが、同時に通りに姿を見せ、何事もなかったかのようになり、自転車と自動車の方向を違えて去る。

午後三時、同じ場所に僕は立っている。僕

の横には一人の少年がいた。黒いズボンに赤いチエックの細いベルトが少年の細い胴をくいい入るように緊めつけている。便器に流れる夥しい水の音に、少年はハトロン紙の書類袋を慌ててずり上げる。

まだ勤務中なんです。用事に出たもんですから……。五時には会社を出ます、

約束の時刻にも僕はその場所には行かぬだろう、おそらく少年も来ないかもしれない。互いに真昼間の、この一瞬の射精で事は終わったのだ。

同じ日の夜、僕はまた別の公衆便所に立っている。真昼間の少年の顔も忘れていた。得易さが、更に別の肉体を求めさせる。そこには暗闇がすべてを領有する。気がつけば、この暗闇に奉仕するように幾人かの人影が台の上に、壁際に、寂然と佇み、隠悶な動きの中に燐光のような触手を四方に張りめぐらしている。ここでも夥しい水の音だけが、彼らの行為にある悖徳の声を立て続ける。

やがて一つの影が隣の影の前に踞む。すると、それに感染したかのように影は互いに纏れ合う。

この儀式は初めから終りまで声を伴わない。快楽の呻きさえを、彼らは呑み込もうとする。暗闇は彼らの羞恥を巧みに無恥に改竄する。いや、無恥ではなく、羞恥を覚えぬまでの初々しさかもしれない。」



「またの場所、それは映画館の立見席である。何気なげに手が触れ合う。だがこの時、手は別の生き物に化している。スクリーンに向けられた顔は完璧な痴呆を露呈している。眼前に幾十の空席を控えながら、彼らは窄い立見席にひしめき合っている。精液の異様な匂いがあたりに瀰漫する。」

「美少年求む、優遇す——新聞の広告欄に、一月に一回はこんな記事を見ることがある。

広告主は決つてこのような喫茶店であり、バーであり、飲み屋である。ここで要求される美しさとは売りもののためのそれである。同性愛者の殆んどは、虚栄と被賞讃の偏重者でもある。臆面もなく彼らは自分を美貌だと思ひ込んでいる。美貌という言葉はもはや彼らの鏡のようなものである。今晚つきあつてやつて下さいな、この子のお床入りは凄いですよ、十分堪能できますわ。ママさんは抱えの少年を客の前に侍らせる。少年はこのとき身体をくねらせ、作りものの羞恥に顔を染めて客に流し目をくれる。これはすべて鏡が教えた、彼の美貌である。

ことさらな暗さ、壁に填めこんだ赤いランターン。煙草の烟り、緩いワルツ、ときたまに遠い潮騒のような囁きを破る嬌声。その中に頬を寄せ、互いの手をまさぐり合っている一組がある。絡むように踊る一組がある。

この場所におけるこの人々の特異さは、も

はや覗かれることのない安心がさせるそれであろうか。彼らが挙つて自分の妻を他人のようには批評するのはここであつた。ここでは彼らは、専ら愛されようと絶大な努力を払おうとする。かつて妻の知らぬ顔だつた。妻には吝嗇をもつて臨んだ彼らが、ここでは惜しげもなく金を浪費する。身に纏うものの細心な嗜好は、全てが同性の眼を意識して選択されたもののみである。

「この世界を知ると、少しでも、もてたい」という意識が、生活の全領域を侵して行くのです。

と、ある作家は、その手紙に記して寄越した。彼の豊かな知性をもつてしても、それだけはどうすることも出来ないのだ。いま僕はボックスの一つに腰を埋めている。

知名の音楽家が、俳優と向き合つて坐っている。彼らはいま恋愛関係にある。この男同志の恋愛とは、肉体を通してのみ形をなすものだった。相手の肉体への飽満は、彼らの恋を永続はさせず、その時から友情に改変するだろう。ここで演じられる全ては、肉体を通しての視角であり、嗅覚であり、嗜好である。この総復習が僕をいらだたせる。眼前にくり展げられる男同志の昵懇さが、心に嘔吐をかき立てる。溶け込めぬ魂はここでも漂泊者であろうか、なぜ僕だけがこれを感じるのだろうか。この心は単なる僕のポーズだというの

か。……僕だつて愛されたいんだ、親密な愛と強力な抱擁をこの肉体は眼前の男たち以上に欲しているはずなんだ。夢想はこの狭い愛の世界を、瞬く間充滿し、僕はそこに僕の理想の相手、を息をつまらせて思い描いたではないか、僕の庇護者である、僕よりは年上のオスを——

この溺れるような夢想は、しかし瞬時にして破れ去る。僕は立ち上る。テーブルの間を縫つてレジスターの前に行く。

「いまいらしたばかりじやありませんの、ゆつくりなさいましよ」

深夜の街路には人影はない、涙が滲んでいた。ポケットをまさぐつて煙草を取り出す。小さな火を救いのように見守っている。来る日毎を周到な努力のうちに、ひた匿しに匿してきた自分の生活の秘密を、ことさらにあばき出した克明な十分あまりは、自殺を耐える苦痛にも似ていた。そうだ、この年まで僕は幾度となく自殺を繰り返した。その時々には死んだはずなのだ。少年時代、誰よりも美しく生きようと希つた魂の、思いがけぬ汚穢に気づいた絶望をその初めとして。」

「あるドヤ街の旅館。表には青いネオンが旅館の名を掲げている。ここが限られた男たちの慾情の出発点となるのは夜の十時である。廊下を挟んだ両側の部屋。

番頭は一人の部屋に、一人の客を連れて行

く。

「お風呂どうぞ、いま一人入ってますが、中年です」彼はまたこうもいう。

午前一時。番頭が帳場に退った後、部屋から部屋へ裸のままの男が渡り歩く、廊下を徘徊する男同士の眼がかち合う。契約はそれで十分なのだ。

廊下に脱ぎ捨てた草履が一足、それは明らかに一人であることを告げている。ここでは一足だけの草履は特権階級をも意味している人々は競って一人の部屋を襲おうとする。黙って襖を開けて入って行く。すると、寝ていた男は枕をずらせ、自分の横に相手を誘い入れるだけの余裕を作る。

ここでの休息の時間は午前三時過ぎから四時過ぎまでのほぼ一時間である。五時には呻きや囁きや、襖を開ける押し殺した音がする。こんな時、ランニングシャツ一枚の、下半身裸の青年が、欠伸を噛み殺しながら自分の部屋に引き上げてゆく。

「常態人にとっては、彼らのかかる行為は忌むべく、嫌悪すべきものである。しかし、いかに嫌悪すべき行為であっても、その行為は嫌悪すべきであるがために犯罪とはなり得ない。幾世紀にかけて、彼らは異端や魔巫と同一視され、迫害されて来た。人々は肉体の不具者には惜しみない同情を注ぎながら、この魂の不具者には一切拒否をもって臨もうと

する。彼らの特殊な欲望に関する彼らの態度が自分たちの常態性慾に対する態度と本質的には何ら異なるものでないことには、眼をとじて見ようとしめない。これはなぜだろう。

隠されたものは、隠さるるままに暴く必要はないのだ。人間の行為のうち、それを拡大した時、思いがけぬその醜惡に慄然とするところがある。隠された性行為が直ちに猥褻行為に転位するのはこのためだろうか。人々が単なる興味を旗幟とし、この剔抉することのできぬ病巣に嫌惡と憎惡を叩きつけるのは、ある種の人々、倒錯者のうちのある一部の人々無恥を生計の資として男から男へ、それが常態の人々であっても、男であれば声をかけるあの一群の男娼のためではないのか。世の常の幸福を求むべくもない魂の、これは悲願の叫びではないはずだ。娼を売りものに肉をひさぎ、時には相手の弱点につけ込んでその生活を脅やかすことを恬として恥じぬ男娼たちの嬌声は、そのまま常態人の嘲笑となつてはね返ってくることを、彼らは知っているだろうか。孤独の故に、孤独を懼れるが故に、肉の世界に自らの魂を麻痺させながら、更に孤独の墓穴を掘り急ぐ限られた倒錯の人々にとっては、彼ら男娼たちの存在は腐肉に寄る蛆にも等しいのだ。が、常態人の非難は、蛆をも、この限られた孤独の人々、人生の流竄者をも区別なく唾棄し、侮蔑しようとする。

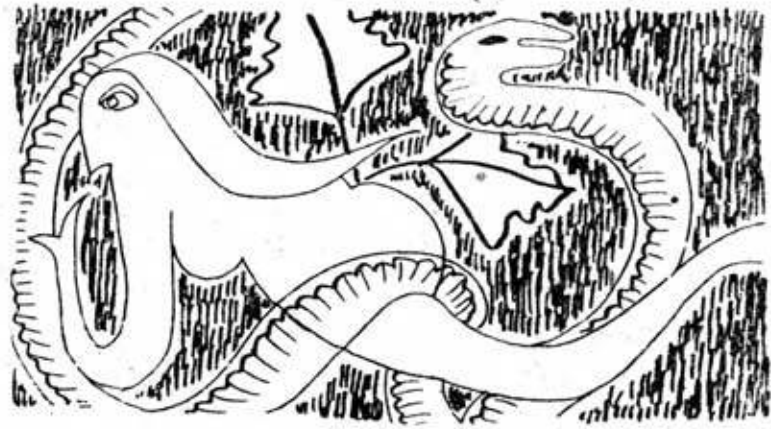
この限られた人々が、時として最愛の肉親であるかもしれないのに。……故ない人々の侮蔑は、かくして最愛の肉親をも自殺に追い込むだろう。とまれ、悶え、苦しみ、絶望の果てに、選ばれざるこの少数の人々が、最後の息の根のようにしてその両掌に懷きしめたものは、倒錯は所詮倒錯であるという絶望の平安だけである。地に踞まるこの小さな平安さえも、人々はなぜおびやかそうとするのか。十二歳の少年の純潔さながらに、軋られた倒錯の摸索の網の中に、自ら身を投じる以外に生きて行く術はないのに――」

大体、以上のようなものであるが、これだけの抄載だけでも、男色者特有の心理がよく表れていると思う。書かれてある事柄だけの興味だけでなく、この作者、久慈行二という人の男色者としての羞恥、屈辱が裏返しにされた虚栄、などが文章の背後にうかがわれ、興味ぶかい、といつては余りに人の悪い見方であろうか。ともあれ、苦悩の深さはこちらの胸にひびく。

尚この「中央公論」の「日本人の性意識」特集には、青木彰氏の「蔓延する第三の性」という、同性愛に関してのエッセイが掲載されていることを一言つけ加えておく。

(以上)





## 創作

## な め く じ

大谷 絢子

## (一) 邂逅

実家では頑固なだけに元気な母がよるこんで令子を迎えてくれた。亡父の墓参もすませた。けれども肝心の美代子の事は大変な立腹ぶりで到底話合うどころではなかった。ふだんから世話をかけておき乍ら、どうしてもいやと云うのなら、お前達もめんどうなど見るには及ばない、あれの好きな様にさせなさいその内にはどうでもひとりでゆきなやんで困るにきまつてる。同じ姉妹とは云乍ら、どう

してあゝ違うのか、お前だけがたよりになると、老の愚痴をまじえた、とりつくしまもない剣幕だった。

それにしても、あの話し振りや様子では、妹はもしかしたら、もう男を知ってるのではないか。

令子は寝つかれないまゝに、ハンドバッグからペロナールを一錠とり出してのんだ。令子は前から睡眠薬を常用してた。こうして久しぶりで独りしていると令子は、はなれて居る東京での保との夫婦関係が身にしみて考えさせ

られた。床に入っても、ふだんからひかえめな令子は、女の域を超えたはしたないまねは出来ないのに、保のいつも変らぬ消極的な態度の物足りなさ、いつかそれも情性となって今ではついぞ充ち足りた喜びに満足したことがあったろうか。そして自分の身体の中に感応しない神経がうつ／＼として疲れ萎んで終って居る。横になっても令子は、いつも肉体の目が見開いて何かを待ってる様で自分で自分をもちあつかいかねている時がある。そうした時、ペロナールをのむと夢の中で力強い

男性に引立てられて心のべール迄はがされる様な幻想が湧いてきて楽しかったのだった。目をさますと窓外はいつか白んできた。窓

### 前号の梗概

保は三十五才の一会社員だった。色白く中肉中背で多分に神経質で女性的な男だった。三十二才の妻の令子と結婚して足かけ八年、二人の間にはまだ子供はなかった。保は時々暖いじめくとしたところに住むなめくじの様な盲目で陰性な動物になつてすゝんで魅力ある女の足にふみつぶされた様な気持を抱くことがあった。ある日、保が会社から帰ると妻の妹の美代子が田舎から来ていた。令子は妹に田舎へ帰るよう勧めたがきかないので仕方なく一人で田舎へ行つてくることにした。土曜日の朝姉を東京駅に送つた美代子は保と銀座へ行つてパンプスのハイヒールを買つて帰つた。保は美代子の片足に靴をはかせて唇をパンプスの柔かい甲におしあてた。美代子は右足で保を振払つたので膝まづいていた保の体は重心を失つて前にのめつた。そして偶然美代子のおろす右足の靴の平底が保の首の根を押えつけて終つた。美代

を開けると汽車は浜名湖を通過していた。湖上の朝もやの中に水鳥がかすんで五六羽飛立つてゆくのが見えた。

子は罨にはまつた獲物をなぶる様な小気味のよい衝動を感じて、そのまゝ靴先に力をこめて保を押えつけた。戦慄する様な感覚が脊筋を走つた。保は蟹の様にいついていた両手を一、二度抵抗するかの様に突っ張つたが、やがて力なく床の上に投出した。ネットリと苦渋の色を見せて保の頬は床に押しつけられた。そして初め彎曲していた保の背中から腰はまるでストリキニーネでものまされた様に床に平に伸びていった。

美代子は腕組みし乍ら、やゝ力を抜いた靴をまだ保の首にあてたまゝ前後に動かし乍ら哀れな男の姿を見下して云つた。

「女の妾に、こんな目にあつて、それでもお兄さん、男。ホ、ホ、女、女の足でふみにじられて、どんな気持？」

保は美代子の足先に、美代子の豊かな肉体と、それからほとぼしり出る有る若い女の力を首筋に感じて、もがけばもがく程波うつ快感となつて全身に漲つていった。

戸外は夕暮近く入道雲が崩れ出したかと思ふと篠つく様な夏の驟雨が木立の葉を打つて襲つてきた。

軽く薄化粧をして令子は小紋の組ちりめん、に名古屋帯、浅黄色の夏羽織をかけて食堂に入つていった。すがすがしい白いテーブルの上に紅のカーネーションが飾られた卓子に坐つた令子は軽いトーストとミルクをたのむと向うの隅に居た一組の客の中から黒いジョーゼットの洋装の女が近づいてきて令子に話しかけた。

「やっぱり令子さんだったわね、妾、ハハ公よ」

令子が顔を上げると女学校友達の伏見公子が立つていた。たしか香港に居た筈なのに。

二人は久し振の奇遇に学生時代に返つて談笑した。戦争中外地で夫に死別してから貿易商をして居た夫の遺産が内地に残つて居たので公子は今世話する人もあつて東京で洋服店を開いて居るとの事。そういえば小柄な公子の洋装のドレスシーなデザイン、胸にあしらつた真紅の薔薇のアクセサリー、きらりと光る真珠の首飾り、一分のすきもないスタイルだった。

「妾はあなたとちがつて面白い事もあつた代りに、おそろしい目にもあつたのよ、でもどんなつらい事でも今からかえるとみんなつかしい思出よ」

といつてにっこりと金歯をのぞかせて笑つた。笑う度に顔を前に心もち出していたづらっぽい目で相手をにらむ様にするのも昔通り



の彼女だった。令子はその時分から何かにつけてよく笑いこけて種がないときは人のくせに綽名をつけたりして面白かったりした。そしてふふふとふくみ笑いをするのでフー公という綽名をもらって組中の人気者だった。かげではチャツカリやでいじが悪いという人もあったが、令子の目には育ちのよい仏蘭西風のニュアンスに富んだ優艶な人に見えた。こうして見ると年よりも三つ四つ若く見えて少し肥った公子の黒いドレスから抜け出した様な白い皮膚にも令子とは又一風ちがった中年の美しさが滲み出ていた。

「あなたのことだから、ぬけ目なく面白くしたら事でしょう。戦争中」

「そうね、空襲の時なぞは地下壕で徹夜で麻雀したりしたわ、フ、フ、フ、」

「あなたらしいわ」

艶々とした公子に比べて令子は自分が何だか古いつけものの様なひけめを感じて自分の生活がみじめなもの様に思われてきた。

「東京にかえったら是非遊びに来てね、それから、どうせわかることだから、一寸待って。」公子は席をはずして向うの隅で葉巻をくゆらしていた四十過ぎの紳士をつれて戻ってきた。

「妾のクラスメート令子さん、早川ですの」

令子はこの人が公子を今、世話している人だと直感した。

「早川です。よろしく」

早川は茶のダブルをきた、がっちりした体で会釈した。太い眉毛の下に人なつかしい柔かな目なごし、浅黒い顔には人をそらさない物なれた応揚さと、年配から来る重厚さがたゞよって、安心して話せる様な好ましい印象を令子は受けた。それにしても公子がぬけめなくこうした相手をさがし出す女としての腕の良さにいつも乍らおどろくと同時に、同性として少からぬ嫉妬を交えた気持で令子は丁寧に挨拶した。

「大阪で商用があるというので一緒についてきちゃったら、京都でお茶の会迄つきあわされて散々なめにあったわ、この人こうみえて案外日本趣味なのよ」

「いやどうも、忙中閑のつもりでやってるんですが、これにかゝっては形なしですよ。アハ、ハ、ハ、令子さんはお茶の方は？」

「はあ、まねする位ですの」

「妾はビールの御相伴ならまけないけど、すわって順番をまってるなんて第一妾の性分にあわないわ」

磊落な早川と快活な公子と逢えて令子は胸のつかえもとれた様に軽い気持になれて長旅の退屈を忘れていた。

東京駅には美代子が迎えにきていた。まあ近代的な妹さんだこと、お姉さんとぜひお遊びにと、公子の外交的辞令はあざやかで

卒がなかった。

早川夫婦と別れて令子と美代子は省線にのりかえた。

「早川の奥さん一寸遊閑マダムといった感じネ。お姉さんのお友達にしては、とてもモダンな素敵な方だワ」

「洋裁店を経営してるのよ」

「まあ道理で。妾、お願い出来ないかしら？」

「何を？」

「早川さんの御店においていただくこと」

「あなたったら、相変らずのんきにそんなこといって、里では大の御立腹よ。」

「内の方変ったことなかった？兄さんは？」

「何もなかったわ、お兄さん相変らず調べものか何かしてらしたわ」

保は調べものどころか本を開けても一寸も身に入らず、会社で、執務中にも放心した様な保の姿を仲間のものにみつけれられて奥さんがお留守で御察しますと冷かされたりした。

美代子も、あれから自分の作戦が図にあたった以上に、あまりいたずらの度が過ぎたと思つて、どうこう意志表示する気持にもなれず、サラリと忘れた様に兄の食事の仕度や何かめんどろを見た。保の方でも顔を合せても気まづい思だったが、そうかといって保の方から促すような変なまねも出来ないし、第一不自然で興のないことと思つて義妹のとなつた

態度を非難する気持が起らないどころか、却って自分の変なやり方を悪いものときめていた。それでも真夏の昼の夢にしては、あまりにリアルな出来事は、ともすれば墮地獄の思をせきとめかねる時があった。従って妻がかえってきて美代の処置を相談された時、保は何時に似ず美代子をつき出す話には強く反対して、お母さんが何と云おうが、二人きりの姉妹じやないか、かばってやるのがあたり前だと云った。二人の話の様子を見て美代子は内心ニヤリと笑った。

## (二) 相寄る魂

令子は美代子をつれて公子の銀座の店にゆくことにした。西銀座の並木通りにある公子の店はすぐわかった。MIMOSAと洒落れた花模様のネオン入の看板、三角型のモザイク張り縁とられた硝子で包まれた店構えは、そのまゝ飾窓の様に意匠をこらしていた。公子は飛んで奥から姿を現わした。グレイのシヤンタンでローネックの服、胸元にキラリと紫水晶が光っていた。上品な婦人連れの客が一组、女店員と話をしていた。美代子はこんな妖麗なマダムの店でいつも美しい婦人客相手にシツクな仕事が出来たらと、店にためさせてくれる様たのんでくれと姉にせがんできたのだったが、こゝへきて虹の様に希望の色を増した。そして店の一隅に向いあった

二人の対話を神妙の聞耳をたてゝいた。姉が今日の用件を切出したら公子はどう云うだろうと。性格から容姿まで、あまりにもちがうだけそれだけに、お互いの美しさを増して公子と令子は四方山の話に花を咲かせていた。姉は黄色い縦縞の入った納戸色の紹ちりめんの和服で、何か一筋にしんがあつて内攻的なつゝましい艶と色気がにじみでゝいるのに反し公子は紅薔薇の花の様に刺はあるかも知れないが刹那／＼を思い切り楽しんでるみたいな爛熟した色気が輝いて見えた。用件の話になると美代子もおぼさまどうかお願いします、何でもしますわと真剣な面もちで云った。「まあ、何でもするって、ばかに真剣になったのね。そうね、あなたがほんとにこれで身を立てゝゆくというのなら尚更よ、こう見えて並大抵の気苦労じや出来ないことよ。技術面ばかりでなくて矢ッ張りセンスの問題ね、一口に流行といつても人によつて体から肌合違ふでしょう。それに一々マッチしてゆかなければいけないんですからね」クリ／＼と目に笑を含せて、そういう公子の顔はむしろ楽しそうに見えた。「でも美代子さんは一寸日本人ばなれした体つきだし、フアツシヨンモデルになろうと思えばなれるわね」といった時、美代子は内心おかしくなって思わずクスリと笑った。「美は創造されるっていうけれども、やっぱ

り自分の身体に自信がなければだめね、その点美代子には及第点をあげられると思うわ、お姉さんの顔もたてゝ御引受けしましょう。そう／＼、今日はあなた方が見えるというので食事の支度をして早川が待ってる筈よ」早川ときいて令子は何か今迄とちがって心がつまる様な思いがしてきた。何よ、公子さんのパトロンじやないの、それがあなたと何のかゝわりがあるのと、自問自答してみたものの、胸のときめきを押えることは出来なかった。

美代子は美代子で、今日の首尾がうまくいった上、公子たちと食事迄出来るというので、まるでフットライトを浴びてステージに立った踊り子の様に心がはずんだ。早川と面と向いあつた時、令子は僅かながらチラリと頬をあからめと挨拶した。「この店も戦前におとらない位旨くなりましてよ、お口にあらうかどうか」など、早川は気軽に令子たちに話しかけたが、令子はさっき公子たちと話した様なおしやべりもどこへやら「いゝえ、とんでも御座いません」と淑やかにホークを口元に運ぶのだった。美代子は急に姉が口数少なくなったのは、よく知らない男と食事をするというだけでなく、若しかしたら姉は早川に好意以上のものをもってるのではないかと思った。



食事の途中、公子は

「そうそう思出したわ、御免なさい。今日二時から寄合だったの、こうしちやいられないわ、悪いけれど後お願いしてよ」と云って中座した。

「いつもあの通り、忙しがつてるのでね、ゆつくり御相手する暇がない位、都会的な女で困ったものですよ。久し振りで銀座にいらっして失礼しちやいますね、どうです。もし御暇でしたら丁度M百貨店で大徳寺の展覧会をやっているのですが、腹ごなしに妹さんも御一緒に御覧になりませんか」

「でも妾、今日は大変御迷惑ばかりおかけして」

と令子は美代子を振りかえっていった。

令子は美代子がほゝえんでるのを見て妹と一緒に早川の誘に応じて三人して銀座の舗道の人波に入っていた。早川と肩を並べて歩いている自分を意識して令子は悪い妻の様な気がふと心の隅に湧いたが、何時の間にかそれも消え失せて、何となく青春の日に返った様な楽しい足どりで歩いている自分を発見した。

「あら、美代子が」

気がついてあたりを見廻した時、美代子の姿があたりに見えなかった。

「どうしたのでしょうか？ おかしいですね」

二人して尾張町の角で、しばらく美代子の

姿を探し求めたが見当らなかった。令子は早川と二人きりとなって何となく面映ゆくどうしようかと一瞬ためらっているとき早川は

「アハ、ハ、ハ」と破顔一笑して、

「とうとう二人きりにされてしまいましたね。御誘いしたのは僕なんだか、別に今日でなくてはいけないというわけでもないですよ、令子さん、御迷惑なら」

早川の渋い太い声が令子の耳許に心よく響いてきた。

「まあ、迷惑だなんて」

令子はそういつて、思わず自分の足下に視線をおとした。

「宜しかったら喜んで御伴しましょう。」

早川は快活にそう云って、もう先に立って交叉点を渡りかけた。令子は見えない糸にひかれる様に早川の後に従った。公子の明るい生活や銀座のかもしれない出する特有な雰囲気のか、令子は秘密めいたスリルにうづく自分をどうする事も出来なかった。

令子は裏千家の免許を許されただけあって特に利休の書や、絵が有名な喜左エ門茶碗ですと、早川が説明すると令子はうっとりとした熱心に鑑賞した。早川と肩を並べてゆく内、人混みでどうかすると肩と肩がぴったりと触れあって早川の息吹きを頬に感じる時があった、令子是我にもあらず身内が熱くなるのを感じた。

「不思議なものです、ね、古人の作ったこんな素焼が我々現代人に渾然とした温かい親しみと美しさを与えるんですからね」

「こういう芸術品を、いつも手近において鑑賞出来たら、さぞ幸福でしょうね、令子さんどう思います」

「ええ、同感ですわ」

白い襟足からぬけ出した様な令子のうっとりとした美しいプロフィールを見て早川が突然に

「令子さん！僕は令子さんと一緒に居れたら同じ様な気持を、起すんじゃないかと思うのです」

と情熱的にさゝやいた時、令子はハッとして思わず蠟の様な白い顔をあからめて夢見る様なうるんだ眼ざしで男の顔を見た。令子の細身の体の中につまみさの堤が切れて新しい情熱の奔流がたぎって流れた。

「出ましよう。熱いお茶でものみましよう。」

風月堂の奥まったスタンドに向いあった二人の姿は、どう見ても中年の夫婦としか見えなかった。事実、二度しかあってない二人の気持は前からの知合の様に通っていた。

「公子は学校時分どうでした？」

「とても茶目できかんぼうでしたわ」

「そうでしょう。公子は今でもあゝした女で現実的な快樂主義者ですよ、自分が世話してるといっても現在の彼女にとっては単な

る事務的な取引に過ぎないのですよ。初めはあんな女とは思わなかったのですが、自分を豊かにする相手なら誰とでも交渉をもつ様な女です。そして自分がプラスにならないとわかると思ひ切り身を譲えす様な女です。そういう女とわかつてから僕は身近に信じたり愛したり出来なくなつていつも独りきりになるのです。そして僕が到達した心境は素直で日本的な静かな人の住む心の故里でした。あなたとお逢ひした時から僕のイメージは現実になつて来ました。」

あの優しそうな公子にも男の目から見るとそうした面をもった女なのかしら、令子は意外な早川のせつない言葉をきいて、この人がこれ程苦しんで、然も自分をこれほどまで思つてくれている事を知つて、夢の様な幸福感につままれて危く理性をなくすばかりだった妾には保という夫がいる。そのはかない綱に手をかけて離れまいとすればする程、火の様な熱情の波にさらわれそうになった。

早川はうつむいた令子の、白いうなじからほっそりとした肩先に目を落した。完成した中年の美しさを心の中に反芻し乍ら、早川の左手はいつしか令子の右手を固く握りしめていた。

男の熱い手の触感に、令子はしばし煩悩の心の鬼と戦っていたが、やがて静かにその手をはずした。

「余りおそくなりますから今日は、」  
「ぶしつけなまねをして令子さん、どうかお氣を悪くなされないで——いや今日はほんとに愉快でした」

「いえ、妾こそ——」

と云つたまゝ二人は無言で立上つた。有楽町の駅迄送られて令子は早川と別れた。

### (三) ヌードになる女

美代子はわざとはぐれた様にして姉と早川とを二人きりにした。美代子の心には何となく姉と早川に反撥する氣持が湧いたのも事実だが、例のアルバイトが三時からあるので予定の行動だった。

O 駅で省線を下りた美代子は、そこから程近いATスタヂオの二階へと階段を上つて行った。マネーシヤーから今日の客からの注文のポーズをきいてから、脱衣室でガウン一枚になつて奥まったヌーティンに入った。ステージだけ一段高くなつていて緋の絨氈が敷かれていてコロネーションカラーの緞帳が脱衣室と仕切られていた。こゝでモデルは大体自分の氣のすむポーズに注文をくずす自由が与えられていた。客の指示も多少はあるが何しろモデルがこゝでは主である為、余りえげつないことを云う客はモデルから拒否されるのだつた。そして裸になつても彫刻の様に一定のポーズを十数分つゞけるというのではなく、

一つの型のフラッシュがすめば客は次の室に下る仕組になつていて充分休息する余裕もあつて楽だった。

部屋には天窓がなく、螢光燈の間接光で霧のかゝつた夕べの様なあかるさである。

美代子は、両手を後について片足を床にたて、腰を下した。あごをのびして頭を後にたれ下げると、両の乳房がはち切れそうに両肩から突出て熟れた桃の様に先が色づいて見えた。斜めになつてくびれたあたりから臍のあたりが青磁の大きなお椀でも見る様に盛上つてのぞいていた。その下に乳房と対称的に床一杯に広い陰影を占めるヒップ、それを伸ばしてつくつた様な豊かな力と動的な美を思わせる大腿部、のびきつた美しい脚、素足の先の貝殻色の爪の色も印象的である。退屈した女という今日の主題である。美代子はこれによいと軽い自己満足を覚え乍ら側の呼鈴を鳴らした。すると待ちかねた様に客の一组が入つてきて、まるで獲物を狙う獵師の様な眼をして思ひ／＼のカメラをかゝえて立ったり坐つたりするのだった。

美代子は、あれから姉と早川はどうしたんだろうと考へていた。姉はやつと保に同調してくれて自分をつとめさせてくれたが、当り前ではないか、兄は變つてはいるが終いまで自分の立場を支持してくれた。裸にしてどっちが純な人間のかといえは兄の方だ。ふだんお



となしく淑やかそうに見せておいて、陰では邪しまな気を起す陰性な姉の冷い感激性のないやり方が憎らしくてたまらない。それにしてもそれでなくてさううまくゆかないらしい兄夫婦の関係は行末どうなるだろう？どっちみち自分の知ったことでないけれど、妾は妾なりに自分を生かせてゆけばいい。そして長々と若い肢体を横たえた美代子の眼底には、公子の姿が理想の女神の様に見えた。

仕事ですんで美代子がO駅へ帰る途中、赤い鞆を提げた女が、追いつがる様に声をかけた。振り返ると同じ仲間で顔はみかけて居るが挨拶する位で勿論相手の名前なぞも美代子は知らなかった。こうした社会では、こうした程度でお互に内情をしらずにすぎる方が多かった。

「台下の本やまで行ったけど、妾まだ一寸ひまなの、どう御茶でものみません」

小柄な丸顔に理智的な眼を輝かせて美代子に親しげに云った。

美代子もさっぱりした人柄や口振に前から好感を感じていたし、一人位話相手が欲しいと思っていた矢先だったので、にっこりとうなづき肩を並べて角の喫茶店の二階に上っていった。

彼女はしまって直線的な感じのする体に純白のブラウス、黒のヨークが胸元をしめて若々しく美代子と同年輩らしかった。

「妾、こういうものよ、宣しく」

そういつて赤い鞆から出した学生証には、『M大学法科夜間部二年生大川順子』としてあった。

「やっぱり学生さんだったのね、妾、美代子今度おつとめに出る様になったけど現在無職よ」

「あらヌードだって立派な職業じゃないの、でも一寸内証ネ」

二人は声を合して笑った。

「でも、どう思つてこの内職の方を」と美代子がきくと「妾は別に悪い仕事とは思わないわ、大して価値があるとも思えないけど、肉体は本質的に心の抽象表現として価値はあると思うけど、形態だけを見せて感情の伴わないヌードは妾は偶像に過ぎないと思うの。そう思つてヌードになつたけど、やっぱり初めは厭だったわ、けれどこの頃では何といつても時代の脚光を浴びた女だけの職業だし、めずらしいだけ予剰価値もすばらしいでしょう。兄に諒解して貰つて、すゝんでこの道を選んだのよ」

順子の割り切つた物の考え方は、法科に籍をおく学生らしく美代子には理屈っぽく聞えたが悪い気はしなかった。

順子はW大学の工科を来年卒業するという兄と、二人して矢来に下宿している。是非遊びに来てとあけすけに話すので、美代子も洋

裁の方は午後からこういう所にゆくのだと、いつて銀座の店の名まで順子にあかして別れた。

#### (四) 女性的な愛の告白

「美代ちゃん一人？」と保にきかれると美代子は

「そうよ、妾だけ先に失礼してきたわ」

と、さりげなくいつて風呂場で汗ばんだ肌を拭つてみると、硝子戸の外に人の気配がした。兄だなど、美代子はすばやくシユミーズをかぶり足を洗つてガラリと硝子戸をあけると、保が立っていた。青い顔の兄だ。気味が悪い。なじる様に美代子は手拭を顔にあて乍ら云った。

「どうしたの？ 兄さん」

「美代ちゃん！ 僕はたまらないんだ」

美代子の体に保は抱きつきそうになった。

美代子は

「アッ、いけない」

と身をさけてやりすごした。保は美代子の腰に両の手をかううじてすがったまゝ膝をついた。

「美代ちゃん、逃げないで。僕を軽蔑してくれ、僕は駄目なんだ。」

保の哀願する様なその言葉に、美代子はホツと氣をとり直しておだやかに云った。  
「どうしたつていうの兄さん」

「美代ちゃん、あの日から、いや君が家に来た時から、僕は生理的に君に参っていたのだ」  
「あら、生理的って？」

兄を見下して美代子はきいた。

「素晴らしい肉体のもつ若さと、したたる様な美しさ！僕が造化の神ならぬ至高の神として君の様な美の女神をまっ先に作つたろう。それなのに君は、僕よりもっと食べたり汗を出したりする同じ人間なのだ。君が冷たい神でなく、同じ人間で、しかも人間らしい道徳をわきまえてい乍ら、道にはずれた事をするかもしれないと思う時、尚更、君が魅力的になつて見えてくる。僕はすっかり君に附随するあらゆるものにしばられてしまった。君の一瞬一笑にも心がおのゝいて、。君の黒い髪の毛一本、君の爪の垢の一片でも意志があれば僕を束縛する事が出来る。その上、君は僕より年下の女で、しかも義理の妹だ。それが却つて僕を顛倒した気持ちにして僕を跪かせる」  
美代子は、何と云つてよいか、しばらくしてから云った。

「妾って、そんな風な女じゃなくってよ、兄さんの考えてる様な、」

美代子は、甘いことをいってすきを見て本性を現わす男の常套手段を知りすぎる程知っていた。姉の夫だといつても、これ程自分を慕う保に唇位なら許してもいいと思つたが、後どうなるか予測出来ない。

それとも保はいつかの昼間の出来事のように真剣になつて、こんなことを云っているのかも知れない。

「美代ちゃん、安心してくれ。僕は君が僕の愛情を受け入れたり、僕に哀憫をたれたりするのを望んでるのではない。若くて美しい女は沢山いる。それだけなら僕は唯ロマンチックな夢をみてればいいんだ。それなのに君はその人達のもつてないダイナミックな力で僕にせまってくる。そして君はあの日、思うままにアパッシェに振舞つたじゃないか。こういう僕が神を冒瀆してるんなら、神に代つて現実の君が僕を制裁したらいいんだ、いや僕にとつて今、目の前にいる君こそ、美の女神なのだ。なにもされないでも動けない様になつて僕を、どうかほんとに手をかけてしぼりつけてくれ」

男らしい魅力のないこの男の余りにも女性的な愛の告白をきいて、さすがに美代子も妖しく身の震うのを覚えた。女性的といえど美代子は保が男にしては珍らしく色が白く何てきめの細い肌なんだろうと前から思っていたそれが女の様に受身になつて自分の手出しをまつている。こんな女性的な男を云うがまに秘密にいじめてなぶつて見てやろうか——姉だつて現にあの男に秘密にあつてゐる。それに男という男、あの憎い宗谷だつて、ヌードに慕い寄る男だつて、そうだ。みんな自分のすき

勝手なまねをしている。この男一人位、反対な目にあわしてやつてもかまわないじゃないか  
第一相手がそれを望んでるではないか、美代子の心は、いつか自分を納得させる様に保の云う通り美の女神を冒瀆する男へのしかえしに神に代つていやこの男の云う通り、美の女神として、この男に制裁を加えてやれと叫んでいた。そしてその叫びが美代子の心に悪魔的な喜びを呼び起した。美代子の理性ははがされて薄いベールの様になつて僅かに心に残った。

## (五) 女神の打擲

「後悔しても知らないわよ」

半ば自分に云聞かす様に美代子は云つて保の両手をつかんで腰からはずすと保は

「美代ちゃん、かんにんしてくれ」

と訳のわからないことを云つて身をよじらせた。そして抵抗する様に見えたが、勿論初めからかなわないのを知つてのことなので、美代子はつかんだ保の両手を前に廻すと雑作なく口に喰わえた手拭でかたく緊縛してしまつた。

玄関や家の出入口にすっかり錠を下して洗面所に戻ると、薄暗い板敷の上に組合された両手の上に額をつけて崩れた様に伏つてゐる保の姿を見た時、美代子は何となく犯罪めいた気持ちになつてきた。裾がめくれて白い股が



ホノ白く露わに美代子の目に映った。前から白い体をしてると知ってたが、こんなに白いとは思わなかった。いつも体中見つめられる男へのみかえしに今日はこの男のヌードを思うさま見つめてやろうか。

家の中はシンとして停頓した室内の空気で蒸暑かった。豆腐やの呼び声が物憂い様に聞えてきた。

妾の前に一かけらの男らしさもなくして妾の手にかゝって自由な目にあわされるなんて、あの姉は何にも知らないで、美代子は体がかつとなつて体中の毛穴がゾクゾクして来た。唯眼だけが物に憑かれた様に異様に輝いて残忍な冷笑が口元に漂よっていた。

「お立ちなさい！」

美代子は命令する様に云うとくゝられた保の手を引立てる様に持上げて内法にある着物かけの金具に渡して着物の様に保の体を引つけた。保はやつと其の金具に体を支えられて後向きに立たされた。

「お兄さん、よくって、妾から刑罰を受けた」といったわね。どんなことをされても仕方ないわよ」

「美代ちゃん、どうでもしてくれ、僕を打ってくれ」

上ずった声で保は叫んだ。

「いゝわ、あんたはぶたれなければ分らないのね。さあ、うんと苦しむといゝ」

美代子は側につるしてあつたはたきの先を手にして保の臀部を思うさまたたいた。

保は狂おしくのびた上体をそらして苦しうにうめいた。

二振三振、女神の打擲は情容赦もなくつづいた。

そしていつしか手拭の結び目もゆるんで保の体はドツと床の上に抛り出された。

## (六) 汚辱に戦く

美代子は一しきり顔や体に滴る汗を拭き終ると、その手拭を三つに折りたたみ保の頭の方にかざんだと思うと、ひつつた様に紅潮した顔の兄の口に廻してグツと後頭部で結んだ。汗ばんだ美代子の体臭がムツと鼻や口を襲ったかと思う間に、口からあごにかけて食い込む様な圧迫をうけて保の理性は全く消え失せて、唯しびれる様な異常な感覚だけが目をつぶった保の体内をかけめぐって外から加えられて美代子の力をまぢ望んでいた。

美代子は姉の部屋から姉の湯文字としごきをもってきた。

「意気地なし！ あなたには男の姿なんて分不相応よ」

そういつて美代子はうつむきに伏っている保の兵庫帯に手をかけてたぐりとると浴衣の衿がみをとらえて保の両肩をむき出しにしてからまるで玉葱の皮をとる様に保の浴衣を一

気にはぎとった。必死に抵抗し乍らもう／＼保はくの字型にかく両足を折曲げて両手は何かにすぎる様なかつこをして白いパンツ一枚の裸像にされてしまった。美代子は息づいている蜥蜴（もろこ）のその様な保の腹に赤い湯文字をまきつけた。

美代子は、立つて電燈のスイッチをひねった。そしてそこに鮮かに照し出された恐怖に戦く哀れな男の姿を暫く見下していたが、やがて男の脊中に片膝をつく両手を保の両手にかけて逆手に曲げて手許にたぐりよせて折り重ねた。美代子の上半身の重みを脊中に受けた上に後手にされて保の頬と胸はむごたらしく床に押つけられた。美代子は保の両手を膝の下に敷いて振伏せると姉の赤いしごきをとって交叉した保の両手をその端で一卷二巻、ぎゅつと締あげた。そしてそのまゝ美代子はむきをかえて後の保の足首をつかんで押しまげ様としたがその手を止めていった。

「兄さん、これだけはかんにんして上げ様と思つたけど、あなたから男性を剝奪するのに、これがあつたんでは意味ないわ。どうせこうなつた以上、仕様がなくてしょう、さあおとななさい。」

美代子は姉の湯文字をまくりあげて保の残されたパンツに手をかけた。保はそれだけのかんにんしてくれと云わんばかりにかたくもゝを合せて両足をバタつかせた。

「いやだというのネ、妾のいゝつけに従わないというのなら、」

美代子は保の足の方に廻り保のパンツの端をつかむとゆっくりと引込むいた。そして手早く両足首をぐる／＼巻にすると後手にグイと締めつけて手足を背中一つにしてしまった。保の体は両肩と両膝が心持ち上って前半身は弓の様にそって床の上に奇妙な型をして動かなくなった。

「思い知った？ お兄さん、妾は唯あなたの望み通りにしてあげたゞけよ。だからこの事についてあなたには何にも云う権利はない事よ」

昏々として目をとじた保の耳には美代子の言葉が怒れる女神の叱責の様に快く響いた。美代子が室外に出ていった気配がしたかと思ふとやがて部屋つゞきの厠の方から滝の音の様に美代子の小水の音が聞えてきた。

(完)

## 代理部便り△特報▽

天星社代理部特選写真集、並にアプフト集、最新版女体緊縛フォト、等の目録は本号に掲載しておりますが、従来通り分譲しております。最近の新版発表の目録は、切手八円同封の上、お申込下されば急送いたします。

## 本誌のバックナンバー在庫

### 復刊号の在庫

復刊第一号 (30年10月号) 二百円 (送16)  
 復刊第二号 (30年11月号) 二百円 (送16)  
 復刊第三号 (30年4月号) 二百円 (送16)  
 復刊第四号 (31年5月号) 二百円 (送8)  
 復刊第五号 (31年6月号) 二百円 (送8)  
 復刊第六号 (31年7月号) 二百円 (送8)  
 復刊第七号 (31年8月号) 二百円 (送8)  
 復刊第八号 (31年9月号) 二百円 (送8)  
 ○以上の通り、各月号共若干保有しておりますから、御入用の方はお申込下さい。三

冊以上まとめてお申込の節は、送料は当方に負担いたします。

○休刊以前分譲中の写真類は全部絶版となり只今在庫いたしております。

○臨時増刊号「アリスの人生学校」及び、本誌旧号中、29年3月号以前の分は売切れとなり一冊も残っておりません。現在、在庫中のものも残部僅少です。

○晴雨画集「美人乱舞」は、今回売切れとなりました。アルバム「美しき縛しめ」、画帖「時代物責絵巻」も残り僅かですから、お早くお申込み下さい。

## 私のアイデア

### 「晒し台」

羽村京助

(構想)

ロープは頑丈な鉄管の柱の内部を貫通し、台の下にある巻取機で操作され、不要な場合は「滑車」と「ロープの先の鉤」だけしか見えない。手袋とトー・シューズの上から縛るので直接皮膚を痛めつけない代りに、美女の心理は辱恥に集中される。

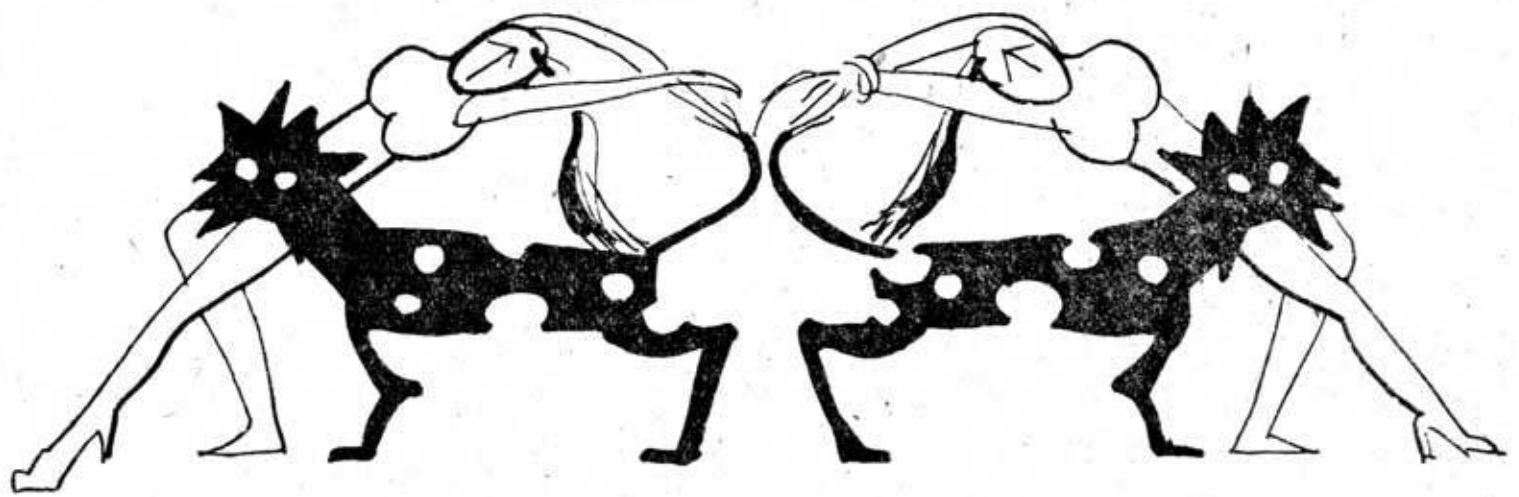
その上、髪の毛は三方向に引つ張られてあるので、少しでも顔を下向けたり、そむけたりすれば髪が痛むから、いやでも観衆の視

線と嘲笑を正視しなければならぬ。しかも「晒し台」全体は、ゆるやかに廻転するので全観衆の前に平等に露わされる。

(説明)

これは中世紀の或る都の女学校で、新入生の歓迎会に行われたものである。御披露の方法であつて、お仕置とは違ふので鞭は受けない。この美少女は「お願い、イルリガートルだけは許して！」と必死になつて哀願する。だが、彼女の男装のお姉様は、直きに戻つてくるだろう、イルリガートルを手にし——せめて誰も居ないところでならば……と恨しく思う。(略画省略)





## 〔ローカル・レポート〕

柳 沢 吉 保 提 供

## サドの価値への再認識

（朝日新聞、七月十四日朝刊学芸欄「空白を埋める文学」へ大井広介Vより）

サディズムのサドで片づけられていたサドについて、翻訳と称するものはかねて若干あった。しかし、サドが再認識すべき文学史上の重大人物だと、私に教えたのは、木々高太郎が「三田文学」に一部分訳出した「ジュステイヌ」と河出文庫の渋沢竜彦訳「恋の駆引」という短編集である。

「エプタメロン」や「ダーム・ギヤラント」などと、近代小説の間に、サドを置くと、とぎれたようにみえたものが、脈格がつく。「危険な関係」は決してコッ（忽）然とうまれたものではなく、サドのような偉大な同時代人がいたのである。文学史の空白を埋める作品体系である。われわれはフランス文学（とロシア文学）の訳業に、多大な恩恵に浴してきたが、サドは、つとに紹介さるべき宝脈だったと痛感する。新潮社の一時間文庫でボーヴォワールの「サドは有罪か」がでているが、これはたいしたものではない。日本の文学者の再評価で、フランス文学史の空白が埋められるとしたら、意義のあるきん（欣）快事だ。木々版「ジュステイヌ」のなかでは、ヘロインと強盗殺人団の鉄面皮という男の問答

が白ビだった。鉄面皮の世界観は、次の時代のバルザックのヴオトランなどに先駆し、しんなつた社会批判と徹底した無神論に貫かれ舌をまいた。ジュステイヌは強盗殺人団から紳士を救うが、紳士は御礼に彼女を手ごめにし、鉄面皮の否定的世界観を裏切る。フランスのブルジョア革命と、同じ時代にサドの文学が現われたのは偶然ではあるまい。

もし私が木々版「ジュステイヌ」や深沢訳「末期の対話」をさきに読んでいたら、メリメの諸編やフロオベールの書簡にあればどの感銘をうけていただろうか。

容赦ないリアリズムから快楽主義の人間的本能まで豊かに含む大胆不敵な大型作家である。

ただし、その生国ですら誤解され、正當に評価されなかった作家なのである。きたんなく肉欲もあばいている。木々はその移植に並々ならぬ工夫をしている。講談社の企画した全集も延び延びになっている。こんど彰考書院から深沢訳で三冊の選集「ジュステイヌ」は別個の、後年のその素朴な原形というべき短編集だろう。道学者に誤解される個所があるため、このような優れた文学の上し（梓）がさたげられるのは遺憾であるが、到底文学の理解できぬ口やかましい道学者もいるから、やむを得ない意識ないし要約の個

所はカッコでもして、区別する他はない。そうでもして、是非その全ぼう(貌)を披露し、わが文学界にひ(裨)益すべきだ。

サドのように優れた文学が、そのまま移植しにくいふんいきを招いているのは、文学的にはハシにも棒にもかからぬ作品が、単に挑発で物議をかもしたりするためだ。はた迷惑だ。商業主義の自肅をのぞみたい。ただ谷崎の「鍵」を念頭においてそういうのではない。「鍵」はシチュエーション(場面)は、きわどいみたいだが、ポルノグラフィ(春画)のような具体的な描写はない。あの作品はくだらないが、その点で騒ぐには当たらない。

(評論家)

## ワキ毛の魅力

(週刊娯楽よみうり八月十日号「ワキ毛の魅力」△石蔵江▽より)——余技本技——

毎日を診療におわれ、映画を見るひまもなかなかないが、ひさしぶりに「悪者は地獄へ行け」というのをみた。

この映画の広告は、駅のホームや街のなかなど、あちこちに見られる。マリナ・ヴラディの水着姿はひじょうに美しく魅力的で、一度は見たいと思っていた。

この映画は肉体の魅力を武器に、殺された恋人の復しゅう心にもえる女と、二人の脱獄

囚の逃亡への必死の努力と、相克する愛欲をうつつしたものである。

マリナの大きな魅力は、一口にいえば、私たちに親しみやすい東洋的な愛くるしい美しさであるといえるであろう。

豊満な張切った肉体の魅力、万人の注目をあびた驚異的な肉体の持主であるマリナは、いまでは、フランス、イタリア、オーストリア、ヨーロッパ各国の映画界からひっぱりダコの人気である。

両肩に長くたれかかった美しい金髪、かぎりなく青くすんだつぶらなヒトミ、年齢十八歳、ようやく成人期にはいりかけたすばらしい肉体には、どこからともなく感じさせる彼女の神秘的な魅力は、この映画を見る者に、たしかに忘れ得ない印象をのこす。

すらっとした、一メートル七十センチもある背の高さ、体重は知らないが、十四貫程度であろうか中肉的な均整美のとれた四し(肢)しやんとした姿勢、すべてにバランスがとれている。

水着をきた女性はずいぶん見てきたが、この人ほど肉体の魅力を感じたことはない。また、宴会で、キャバレーなどへ行ったとき、たくさんストリップパーを見たことはあるがこの人のように、均整のとれた、すらっとした魅力を見たことはない。

目は、はっきりした二重マブタで美しい。

鼻は、西洋人は高いものだが、マリナは高くもなく低くもなく、私たちが見て、このましく感ずる鼻である。

胸は大きくても、たれさがっている人の多いのところが、彼女のは大きい、適当の丸さを持ち、乳首が前を向き、ぜんたいに張りきった感じの乳ぶさである。ふつう私たちは乳ぶさの形を①小さくて、ぺしやんな扁平形、②大きくて、だらりとたれさがっている下垂形、③適当に大きく、たれさがりがなく、ちようどオワンをふせたような形の緊満形(オワン形または半球状形)、④なみはずれて大きい肥満巨大形の四種類にわけてみると、マリナの乳ぶさの形は最もよい形である緊満形(オワン形、半球状形)の代表的なものと見える。おそらくこの人の乳ぶさの直径は十八センチ、もりあがり七、八センチくらいはあると思う。このような胸を若い青年たちが見て、魅力を感じるのは当然のことである。

腰部は、腰の適当なくびれと、ふくらみをもつでん(臀)部にかけての曲線がなんともいえず美しい。

つぎに私のもっとも目についたことは、女優とか、また一般の女性でも、ワキ毛をとってしまふ人が多いが、マリナはそれをとるところか、むしろ手を上げてわざとらしく見せている。これが男性にはひじょうによく目に



つき、魅力的であると思った。

では、どうしてマリナのワキ毛が魅力的に見えるのか？ それは多くもなく少くもなく形もヒョウタン形にとのって、ワキ毛がきれいに生えているからである。

一般に、あるべきところに毛がないということ、女性にひじょうに悩むけれど、なぜか、多くの人はワキ毛をきらってとってしまいたがる。私の病院へも電気分解によって脱毛したいという人が、一日に十何人もくるので、ひじょうにいやしいが、ワキの下に、毛が多すぎたり、また長くていちめんに生えているのは、いかにも暑くるしそうで、魅力的とはいえない。ところが、ぜんぜん毛がないのは、きれいかもしれないが、異性に刺戟的な魅力にあたえることはできないと思う。ワキ毛の多すぎる人も全部とってしまったわな

いで、適当に形よくのこしておくのも美容の縛シーン。

大映映画「魔の花嫁衣裳」の南左斗子の緊縛シーン。  
船越英二の財産を横領せんとする高松英郎は船越の妻、矢島ひろ子を誘惑し、共謀で船越を海に突落し殺す。然し奇蹟的にも命を取止めて船越は友人の医者に依頼し、整形手術で顔を変え、高松達に復讐せんとし、ひろ子を誘拐し、彼女にも無理矢理手術しているところへ高松から電話がかかってくる。

一つではないかと考えられる。ワキ毛も陰毛の魅力とおなじく、性の魅力をあらわしている。

マリナ・ウラデイが手をあげて、そのワキ毛をわざとらしく見せて魅力を發揮するのも肉体派女優として、考えてみればもったもなことである。(筆者はセキ病院長・医博)

## 「月丘夢路」談話

(日刊スポーツ、八月十四日「演芸欄」)

日刊スポーツの八月十四日付の演芸欄に次のような「月丘夢路」の話がのっていた。私は、この記事を読んで、とたんに彼女に対して非常な親しみを感じた。どなたか、読者の中で「奴隷にして」と要求されたのではないですか。ともかく、人気女優で、こんな記事を新聞にのせたのは、彼女が初めてではないだろうか。

高松「お前が僕の妻を誘拐したから僕も前の妹をさらってきた。お前が妻を返して呉れたら妹を返してやる。妹を返してもらいたかったら妻を連れて速く僕の家迄来い、来なければ妹を殺してやるぞ」

船越「この事件に関係のない妹に非道い事をするな、それで妹はどこにいるのだ」  
高松「僕の傍にいますのだから、今ちよっと口をきけないのでね」

そういえば、この間「火の鳥」で、三橋(達也)さんのホッペタを私がなぐつちやう場面があったでしょう。よそ目では随分私がいい気持でぶつてるように見えるらしいんですネ「あなたはサジストだ」なんて投書がきちやった。本当はネ、私「愚弟賢兄」や「昨日と明日の間」の時のように、男の人からなられた方がよっぽど気分がいいの。マゾヒストなのかも知れないけど、女の人ってやっぱり、ぶつよりぶたれた方が気持の上で救われるんじゃないかなア。

## ガラスの眼「お見事」

(文春、オール読物九月号、マンガ「お見事」(境田昭造画))

漫画、電車の中で吊革を握っている若い女性の腋の下に房々とした毛が生えているのを見て驚いている紳士の図。女性の腋毛をのぞかせるのが流行しているのを皮肉ったものか或は、腋下の無毛に対する皮肉か？

こゝでカメラが、電話をかけている高松から徐々に左に移動する。そこに、ぐるぐる巻きに縛りつけられ、ハンカチの猿轡をかまされてる南左斗子がうつる。

電話をかけ終った高松は身動きも出来ず、口惜しげに彼を見つめる左斗子に近よる。

高松「うらむなら兄貴をうらめ」とむごい平手打ちをくわせ、苦しみ呻くのを見ると傍のテーブルの抽出しからナイフを取り出し左

斗子の髪の毛をつかむと無理に猿轡の顔を仰向かせる。その時廊下に靴の音、ハツとした高松はナイフをテーブルに突きさし、ポケットからピストルを取り出し身がまえる。と部屋に入ってきたのは意外船越ではなくひろ子

## 繁縛映画速報欄

千葉栄市

だった。然しその顔は先刻迄の美しいひろ子ではなく、手術の為に変貌した五十才ぐらいの女の顔だった。あまりの事に呆然とした高松の背後の扉を開けて入ってきた船越は、み

にくい自分の顔に気がつき発狂し敵味方の区別のつかぬひろ子を利用し、高松達を射殺する。そして「兄さん早く縄を解いて」と云うように自分を見上げる妹の猿轡に手をかけは

どうとしたが「お前の声を聞くとまたこの世に未練が残るといけない」と云い、縛られたままの左斗子をそのまゝに気の狂ったひろ子を連れて部屋を出ていってしまう。そのあとで自殺する兄をとめようと必死に泣き呻き悶え苦しむ南左斗子のアップ撮影。この女優は鼻の形が悪いので口だけでなしに鼻迄覆う猿轡の方が美しく見られたと思う、ただ口だけなので頬に猿轡がキツチリ喰い込み、十分ばかりの間に合計八カット、近写、遠写、前

横後とあらゆる角度から撮影してくれるのでマニアには充分楽しめる。

### 東映映画「人喰い狒々」

天刑病にかゝった城主の命を救わんとする家老は城下の娘を次々と狒々にさらわせ、その生ギモを霊薬と偽って城主にのませる。新人若水美子もかどわかされ、台上に仰向けに縛りつけられ口には白布の猿轡をかまされ、殺害されてしまう。二カット。

### 新東宝映画「女人曼陀羅」

目明しの女房お杉（花岡菊子）は勤王の志士達につかまり、寺の本堂に後手に縛られ、手拭の猿轡一カット。

### 大映映画「続・折鶴七変化」

三万両の遺産を我物にせんとする後妻のお千賀は本妻の子敬太郎、喜美の兄妹を屋敷より追い出す。然し不幸な兄妹に同情する腰元楓（立花宮子）はお千賀達悪人の行動を折鶴

に書いては兄妹に知らしている。或る夜忍び込んだ敬太郎の双生児の弟春之助と行燈部屋で逢っているところをお千賀達に気付かれてしまう、春之助はとっさの機転で

春之助「あんたがあつし達の味方である事を感じかれてはまずいから苦しいだろうが我慢してくんな」とありあわせの細引で後手に縛り、豆しぼりの手拭で鼻まで覆う猿轡を噛せ、その楓を盾にして逃げ出す。二カット。

### 新東宝映画「怪傑修羅王」

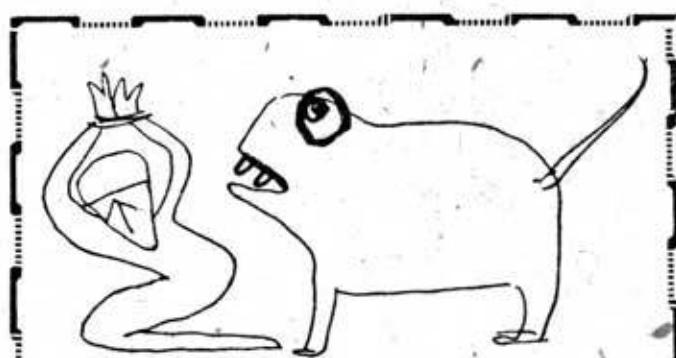
幕末の大江戸を舞台に次々と勤王の志士迄を襲撃する暗殺団を相手に大活躍をする修羅王と名乗る白覆面の怪人、そして彼を慕う暗殺団の一味日比野恵子は恋敵筑紫あけみをかどわかし、土蔵の二階に閉じ込める。細引の後手、黒布の猿轡。一カット。

### 大映映画「人肌蜘蛛」

江戸市中の米を買占めて巨利をむさぼろうとする尾張屋の秘密を探らんと祭礼の夜を幸いに町内の娘に化けて手伝いに行った娘目明しお品（山本富士子）は悪商人達の密談を立聞きしているのを発見され、米蔵のハリに後手に縛られて吊されてしまう。但し女優が痛くないようにと考えてか全然緊縛感が出ていない。監督に本誌の緊縛写真を見せてやりたくなりました。

（以上）





## サジスチンの

## 半生記

鷹野 めぐみ

始めて皆様に御目通りさせて戴きます。一時、休刊のまゝ残念に思つて居りました処、お店に來た客の方から復刊した分を見せてもらい、私も仲間入りをさせて戴きました。申し遅れましたが私は東京生れ、現在渋谷に住んでいますが、勤めは有楽町のN劇場にある某喫茶サロンへ通つています。生をうけて二十五年になりますが、私の此の半生は幼い頃から徐々に、それは大体お転婆だった故もあるでしょうけれど、サジストとして育てられました。先日マゾヒストを自称する馴染みの客と五時間程、彼の別荘と云われる江の島近くの家に車を飛ばして、現在彼の家族が東京へ出ていて誰も居ないのを幸いに、二人

だけで大いにサジ女とマゾ男の遊戲に耽ったのですが、正常な男女の辿るコースは全然ぬきにしての事ですから、考え様によれば、案外プラトニック的なつきあいといつていゝかもしれません。

然し、現在の事は順を追つて書いてゆくとして、私のサジズム半生記を「幼女時代」「少女時代」「女学生時代」「娘時代」「サジズムの女」にわけて書いてみたいと思います。

## 「幼女時代」

私は三人兄妹の二番目、兄、私、そして妹の三人で、父は或る薬品製造会社（栄養剤）の重役で、非常に恵まれた家庭に母と共に五

人家族、それに女中が二人、書生が一人の中で育つたのでした。幼女時代はとにかく甘やかされたのと、家にいた書生と云うのが当時二十才位の青年でしたが、よく私を背中に跨らせて馬になってくれたので、そんな事から男を自分のお尻の下にふみしく事に興味を覚えた様でした。それに二つ年上の兄が私や妹のお転婆とは反対に、女の子の様に色が白く温和な性格でしたので何時も私から苛められる存在となつていました。

と云つて喧嘩ばかりしたわけではなく、仲のいゝ兄妹であり乍ら時折、と云うわけで、今から考え合せれば兄はマゾの傾向を持っていた様で恐らく現在も義姉の貴美江さんのお尻に敷かれて居ると思います。此の二人が結婚する迄に随分面白い事があつて、貴美江さんの前で私が兄をレスリングの要領で押えつけ馬乗りになつてぎゅう／＼背中の上からおしつけ果は「お馬ハイドウ／＼」とふざけたりして貴美江さんに自然に兄をお尻に敷く楽しさ、それが愛情の第一歩で、又男を苛めるよろこびを教えたと言ふ結果になりました。でも二人は今、とても幸福な生活を送つて居るそうですから皮肉なものだと思います。

私が六才になつて幼稚園へ通うようになった時、お隣りに明男と云う私と同じ年の子がいて、その子が四つだった輝子という妹を苛めたので私は猛然と明男君に裏庭のお隣りの

境界である垣根の処で組みつきました。明男君は自分の家に逃げこもうと垣根の下をくぐりぬけ腹ばって頭をつゝこんだところを、私ごとびつき足を持って自分の陣営にひきずり込むと背中の上に馬乗りに跨って拳で幾つもくぶってやりました。明男君は私をはね返そうと手足をバタつかせましたが散々に私にぶたれ、その上頭をぎゅう／＼おしつけられて砂と土の上に顔をこすりつけられ、とうとう大声で泣き出してしまいました。私の家とお隣りの女中が出て来ての大騒ぎとなりましたが、結局明男君の悪かった事が判って此の騒ぎは治まりました。しかし、私のお転婆ぶりはこれでいよ／＼近所までも有名になったのでした。

〔新聞・雑誌〕通信

大阪夏の夜ばなし

ながまおんのはらきり

長町女腹切

〔産業経済新聞、三十一年八月廿四日朝刊〕

「長町女腹切」の実説について、新聞紙上に載っていましたので御紹介します。新聞には、日本橋四丁目から三丁目に至る間の、昔の長町の位置を示した略図と『長町と呼ばれていた日本橋四丁目附近』という説明の松坂

それからの明男君はすっかり私の家来で私の云うなりに動く子になってしまいました。大抵の遊びはお馬ごっこで、明男君の口に紐を咬えさせては部屋の中、或は砂場の遊び場を這い廻らせたものです。そして時折、兄も私のお馬にさせられて明男君と共に私のお尻の下で一生懸命潰れまいと子供乍ら歯をくいしばって頑張るのでした。

そういった或る日の事でした。明男君を又お馬にしようとした処が、明男君のお母さんが私の母と話し乍ら見ていたので、子供心に明男君は恥しかったのか、それとも女の子なにかに負けては駄目よと云われていたのかどうか知りませんが「女の馬になんかなれないよおだ」と云って逃げてしまいました。私は

畑村 一 提供

屋上あたりから撮影した写真が載っていましたが「女腹切」に関しては、直接興味は薄いと思いますので省略しました。

★：浪速っ児の哀歓をひなびた調べで織りなす庶民の街「新世界」から北へ約一キロ、浪速区日本橋四丁目付近は、今から約二百年前「長町」と呼ばれた。当時、この長町は堺港と浪速を結ぶ賑やかな通で、やどや商家が一杯に立ちならんでいた。武家育ちの女という心意気と孤児によせる叔母としての愛情とが

それを追って誰もいない裏山の木蔭で明男君をつかまえました。

明男君はさっきとは違った様に「ごめんよごめんよ」と謝りますが私は許しません。泣きべそをかいている明男君に「私のおしっこをのめ」と、今考えても幼時の頃、どうしてそんな事を云い出したのか判りませんがとにかくそう云ったことを、はっきりと覚えています。きつと、汚いことを無理強いすること自分の威厳を示すと共に、一種の体罰として考えていたのかもしれない。

以上が私の幼女時代の思い出の一つです。

(未完)

(続稿送られたし)

織りなす女性心理を背景に、前代未聞ともいえる女性の切腹事件がこの長町の一角で起った。

★：当時京都下立売に石見屋という刀屋があった。この店の手代が半七、彼の祖父は伊勢亀山の家臣で猪瀬文平というれっきとした士族、ところが文平はささいなことから三代にわたって祟りがあると恐れられた、不吉な銘刀「信国に魅せられ同僚を殺し、自害する。半七の父母はこの祟りのため若くして病死、孤児になった半七は士分を捨て刀屋に奉公していたわけ。この半七は京都石垣町井筒屋の



遊女お花と夫婦約束までしている良い仲というのが切腹事件に至るプロローグ。

★…ところがこの半七をどうかして士分にしたいと考えているのがたった一人の叔母である大阪長町伽羅細工職甚五郎の妻。とある日甚五郎が立派な脇差を持ち帰って、この刀トギを出入のお屋敷から命ぜられた。よいトギ屋はないだろうか。と思案の体叔母がこれをつと見て驚いた。いんねんづきの「信国」ではないか。だが、そこは武家育ちの女、ボンと膝をうってはるばるこの刀を京の半七の店まで持ってくる。これを立派にとげばあんたがまた士分に戻れるようお屋敷に頼んであげます。というのが半七を愛する叔母の心根だった。一生懸命半七がこの刀をときあげたころ持ちあがったのがお花の身請けの話。二

十両で今すぐ身請けしてくれねばまた養父に売りとばされる。というせつぱつまった事情もお花のためとあらば仕方がない。と恋愛至上主義者の半七は預った「信国」を売りとばし安物の刀にすりかえサヤで稼いだ金二十両でお花を身請けして手を取りあって姿を消す。

★…一方、ニセ刀を受けとったお屋敷では大変な立腹、あわてて叔母が京に人を走らせたところ愛の失跡を聞く。ところが半七とお花は一人逃げたものの良心の苛責にたえかね二人でわびをいれに長町の叔母の家までやってくる。このうちしおれた二人の姿をみて叔母はけなげな心情をほめ、罪は私がかぶってやろう、さあお前たちは立去って幸福に暮らしなされ。私が死ねば刀の祟りも終ろうほど

に。というよりはやく左腹に刀を突きたて、武家の女らしく見事横真一文字にかききって果てる。これが「長町女腹切」の荒筋。

★…近松はこの珍しい女の腹切と前後して大阪に起った心中事件をくっつけ浄るりに脚色したものだが、彼の作品としては恋する二人が慈悲深い犠牲のおかげでハッピーエンドにしたのは珍しい。気の弱いロマンティックな優男、この男をオイにもって烈しい気性だが慈愛深い女性、おそろしいいんねん、こうした近代的なものと古風なものが美しく描きだしたモザイク模様ではあるけれど、いまではこうした人情ばなしはどこへやら、騒音ときらびやかな店の装飾にかざられている大阪の長町である。

## 一、入会資格

気まぐれでなく、心の底から伝統の和服を愛好し、研究心極めて旺盛な方、男女を問いません。但し老齢な方は色々な意味で御遠慮願うこと。

## 二、機関誌

『和姿(わすがた)』不定期発刊、奇ク附属雑誌として定価三百円、グラビア写真入り、

## 三、会の内容及び運営

### イ、研修会

会員相互の寄稿投稿の記事——芸妓、令嬢、町娘、舞踊の立姿、坐り姿、長襦袢姿、お腰し姿、責められる姿などを満載、その他古着屋、デパートの掘出し物案内欄の特設、和服人形(例えば、浦里、播州皿屋敷、雪姫、欠皿等)の造り方手引など、二百頁に亘る限定特集版で複製を許しません。

現今流行の洋装に、なんらのレジスタンスを感じることなく、大和撫子伝統の衣をまとい、優美にして華麗な姿に酔いしれる人との桃源境、ここに同好の士集って多年の夢を實現せんとする和服マニア専門部会——遂に発足す。但し一寸お待ち下さい。早合点してはなりません——とまあ、こういう集りがあつたら、どんなによからうかと苦しまぎれに思案したまでですから……。

まず会則から御披露致しましょう。

徳川末期から昭和の

現代にかけて和服の移り変わり、すなわち種類、柄と仕立方及び着付の変遷について実地にモデル（かつら着用）を使用して研究する。必要に応じ矢絣立矢結びのお菊が折檻される際は衣裳のどの部分から乱れて来るかなど簡易な舞台セットで実演、この場合、誠にお気の毒ながら、第三者（会員外）の立入観覧は堅く絶対にお断りします。

# 口、懇親会

およそ月一回、会員（申し遅れましたが会員数は一支部当り十名内外に限定したい）相互の持廻りで、字句が示す通り、席上全くの自由発言、自由振舞いの無礼講主義、和服の交換——帯、紐類、長襦袢から裾除け、お腰しに至るまで会場狭ましのばかり陳列した上遂一由来、生地、柄などを話し合い、お気に召せば即時心よく融通し合う。やがて夕闇迫る頃ともなれば吉原おいらんの某名妓着用のいわれある衣裳の一切をまとい、朱塗りの行

## 私のイメージ

## 「同好和服マニア会」遂に設立さる！

## 逸名居士

燈をアクセサリとして古い昔のよすがを偲ぶのも一興でしょうが、手取り早く最もスピーディに早速今しがた交換した着物を——肌にしかにピンクか真紅のお腰しを巻き（月経バンドやパット入りブラジャーは締めても、ゆめズロース、猿又の類はしてはなりませんぞ）浴衣に細帯、素足のお揃い姿よろしく冷めたいビールを抜く夏の宵から秋冷冬雪の季節ともなれば、今様の胸高々の広幅帯に艶美な帯揚げをのぞかせて一献傾ける。裾は曳いてよし、きちんと坐ってよろしく酔う程に足元乱れ、いずれが女装の美女か判らぬまゝに百花撩乱、毛ずねが出れば百鬼夜行ともなりぬべし。

と一たび姐御（月当番の方がなる）怒号すれば忽ち捕われの誘拐美女の群と化す、骨身に徹したきつい責め折檻を受ければ肉に喰い込む荒縄に随喜の涙をこぼすこと受け合い——などはいかなるものでしょうか？

以上題して真夏の夜の夢！ 倒逆に徹底して男女性の境界を脱し、和装の泉に混浴して生活のうるおいを求めんとする唐人の寝言に御賛成、御入会希望の方は奇く編集部（但し未交渉に付何んとも申上げられません）へ至急御申込み下さらんことを……。

（おわり）

『帯に手を掛けたら嫌やよ』

『アラ、そんなに裾をひっぱっちゃ、お腰しが出るわよ、よしてよ……』

などと姦しいこと。

ありきたりが超越すれば場面一変、怖い海賊船と変っても一向差支ないでしょう。

『こやつらを片っ端から縛っておやり』



ザッヘル・マゾツホ  
黒 女 皇

## 沼 正 三 訳・解説

## 一

ガリチヤ皇帝ウラジミールは、女奴隷ナルダの足許に坐っていた。時は紀元九百年、文明の光は漸くロシアの国土にさしそめていた。此処ハリツの帝城は、キエフの戦争の後で帝の築いたところ、城闕宏壯で良く帝力の大なるを示すものといえよう。後宮奥まった美しい一室の柔らかな絹の褥にふうわりと身を休める絶世の佳人、その片足は下に突き出されて、足許に跪いている時の帝の膝に、まるで足台の上に載せたように、無造作に休らっているのだった。彼女は皇帝と同じくロシア人で、その体軀は華奢で優美でありながら、威風堂々とした豊満な感じをも備えていた。寛闊な黒絹の衣裳、高価な黒毛皮で裏と縁をつけた外套は、その女王然たる姿態をしながら、かにやわらかに纏っていた。その手では何気なく帝の頭髮の捲毛をもてあそびながら、その眼差は驚のように孤独に窓外の景色の上に

漂っている……何を考えたのか、彼女は急に身慄いし、視線を彼の面に戻し、笑った。

「どうしたの？」

「びっくりしたのよ」

「何に……？」

「あなたの眼附に」

「怒ってるのかい？ 女主人様」

「いや！、女主人様なんて呼ばないでよ」

「だって、そうじゃないか？ あんたは女主人様だよ。時の帝が、万乗の君が、現にこうしてあんたの足許に奴隷として跪いているじゃないか？」

「奴隷めが！」

と彼女は叫んで、吐き出す様な笑いをほとぼらせた。その嘲笑は高い天井に物凄く鋭く反響した。

皇帝は、美姫の膝に顔を埋めつつ、彼が初めて彼女を見出した時の思出話を始めるのだった。キエフの戦争の折、彼女は敵国人の妻であった。戦火に彼女の邸は焼かれ、彼女の夫は戦刃に斃れた。彼女は敗戦国の美女のならい、捕えられ、俘虜として帝の後宮の女奴隷の一人とされたのだった。しかし、彼女は帝に対する他の女達とは異なるところがあった。

「あんたは、わしに気に入られたいと思って、あんなことをしたのかな？」

「違うわ。私はあなたに気に入られようとは思わなかったの。そうじゃなく、私はあなたから恋い慕われようと思った。あなたを囚えあなたを俘虜にするために、私は他の女とは正反対の仕種ばかりをしたんだわ」

「あんたはわしを突き退けた。わしの顔を撲りつけた。しかも皇帝であるこのわしが、あんたには甘んじて撲らせていたのだ……」

「私はあなたを睨んでいった、『殺して頂戴！あなたは私を殺すことはできるわ、だけど私を無理強いする事は決してできなくてよ。』と、私はあなたのことを笑ってやった。けれどあなたは子供同然の無力さ、何もできなかった」

「わしが庭であんたが花を持っているのを見かけて『花を呉れい』というたら、あんたは『命令なさるの？』と喋って捨ててしまった。

『歌を所望じや』というたら、『そう、御所望？』と笑って不貞寝をしてしまった。わしが怒って琴をもって来てあんたに押しつけ、

『弾け！』と命じたら、絃を切って琴をわしの頭に叩きつけた。他の女共が毛皮の服だの宝石の髪飾だのめかしおった時、あんたは髪を解き、服を脱いで、美の女神のような姿で浴場に向った。こんな風にしてあんたはわしを征服したのだった」

「ある日、あなたは私にいった、『行くが良い、お前は自由の身じや』と。そして私がびっくりしてあなたを見つめたら、『行っていく

れ！何も訊かんでくれ！』というなり、あなたは私の前に身を投げ出して平伏した。皇帝のあなたが顔を地べたにつけて土下座したのだった！けれど私はあなたを扶け起して、キスしてあげた。こうして私はあなたの持ちものになった……」

「いや、それ以来わし達の関係はあべこべになったのだ」と帝はやり返した。

「あんたが女主人に、わしが奴隷……」

「ひやかさないでよ」

「とんでもない。わしはあんたを神様以上に愛しておるではないか？ あんたはわしのからだを足台の代りにできるではないか？ わしはあんたのものではないか？」

「いつまで続くことかしら？」と女奴隷は疑わしげにいった。「あなたは私のこの髪を、この眼を、この唇を愛しているだけなんだわ」

「おう、わしは全身全霊を以て……」

「……私を愛しているわ、私だけを愛しているわ、たしかにね。だけど、私が今の私でなくなっても、あなたは私を愛するかしら？」

「わしはあんたのものだよ、永久に！」彼は情熱をこめて叫んだ。

「わしをあんたの自由にしておくれ」

「心にもないことを！」すつくと半身をもたげたナルダは、怒に燃えて叫んだ。

「本当だ。本心からそう思ってるんだ」

「じゃ、あんたを私の好き勝手にしても良いのね！」

片肘で身を支えながら、帝をじっと見つめつつナルダはいった。彼女の顔には何か超人的な掴み難い気配が溢れた。彼女の目附は彼を脅えさせた。

「わしをあんたの自由にしておくれ」と皇帝は繰り返した。

「誓いなさい！」魔に憑かれたような笑を洩しながら、彼女は叫んだ。



「神かけて！皇帝に二言はない」帝はおごそかにいった。何故とは知らず、恐怖が彼を襲った。

「あなたは言質をとられたんだから、私がどんなことをいい出して、不平はいえないのよ。よくって？」

「いいとも。約束だから不平はいわぬさ」

してやったり！この瞬間彼女の口許には、そこはかとなき狡智奸策の気味が漂った。

「私はあなたを好き勝手に処分するわよ」虎視眈々として彼女はいった。「約束を忘れちや駄目よ」

「大丈夫」

「じゃ、私が女皇になりたいっていったらどうする？」

「何だって！」ウラジミール皇帝は吃驚して叫んだ。

「無茶をいうな、無茶を。」

「大丈夫と請け合った口の下からもう嘘をつくの？」

「わしはとつくにあなたの奴隷ではないか。あなたは皇帝の女主人様ではないか。それで充分じゃないか」

「その女主人様の好き勝手になるとあなたは誓ったのよ！」

「ナルダ、わしにはあなたの気紛れが理解<sup>わか</sup>らない。わしがこれほどあなたを大切に思つて……」

「違うわ！」と彼女は叫んだ。「そんなことではないの。私は万民を支配できる地位に就きたいの。貂毛<sup>ヘルメリン</sup>褒衣を着て皆から仰がれたいの。さあ、私に貂毛褒衣を渡して！」

どうしても譲ろうとせぬ彼女に、困り果てた皇帝は一策を案出した。

「正式に女皇にするなどはとてもできぬが……一日だけ、わしの代りに玉座に坐ることを許そう」と彼は笑いながらいった。「一日だけは貂毛褒衣を纏って女皇として皆から仰がれるのじゃ。どうだ、やつて見る気があるか？」



「あるわ！」

「では、その一日の日出<sup>ひで</sup>から日没<sup>ひのり</sup>までの間、わしは、わしの帝国<sup>こく</sup>も、わし自身をも、あなたの支配下に置くことにしよう」一日だけで済んだことに内心ほっとしながら、皇帝は問うた。「で、その一日を何時に選ぶな？」

「明日！」

「よし、明日あなたは女皇じゃ」

二

遙かな地平線に曙の光が輝き始めた。皇帝ウラジミールは、ナルダに征服され屈従の喜びを味わわれて以後は、彼女に奴隷のように奉仕したことも屢々で、今日もそのような楽しい恋愛遊戯<sup>ぼんもの</sup>を予想しつつ彼女の寝室にやつて来た。昨日の約束がその遊戯を真剣事らし

く思わせ、それだけ彼の心を酔わせていた。寝台に近づくと、彼女は上気して赤い顔をしているので、

「気持が悪いか？」と低声で訊ねた。

「身心とも爽快よ」と彼女は答えて、彼を見遣ったが、その目には尽きせぬ愛と憐憫があった。

「どうしたの？」

「何でもないの」と彼女はいった。「太陽が私に女君主として挨拶しているわ。ウラジミール、奴隷よ、跪いて！」

皇帝は命令に従った。

「私の足にキスをおし」彼女は、赤い掛布団の下から、大理石のように白い、すばらしい裸の足を突き出した。皇帝は、恍惚となって、濡れた唇をその足先に押しつけた。

「じや起きて着更えるから、手伝って」

皇帝は立ち上った。

「女皇らしく」と彼女は叫ぶようにいった。「貂毛<sup>ヘルメリン</sup>袈衣を着て皆の前に出るからね」

「すっかり準備してございます」彼は部屋を出て、彼女の衣裳を抱えて、戻って来た。

先ず彼女の寝台の前にもう一度跪き、彼女の足を膝の上に載せて、小さな、赤い、宝石の飾りのある長靴を穿かせた。

ついで彼女は寝台を離れて、ウラジミールに手伝わせながら、朝の化粧と着附を終った。その間彼は、彼女の胸に頸に腕に燃えるようなキスを一面にするのだった。

「どう？ 気に入ったかい？」身支度のできた彼女は、嬉しそうに訊いた。

「何だか恐くなってきました」と彼はいった。「あなたの美しさがあまり威厳に満ちているので。あなたが私に注ぎ込まれるこの情熱、私をして自分の意志を捨ててあなたに身をゆだねさせるこの狂気、



これを私は残酷さのように感じます。そして仮借することを知らぬこの無限の権力に身をゆだねていることは、そもそも何という快感でしょう。この快楽は苦悩となり、苦悩もまた快楽となるのです。

あなたが私を酷い目にお合せになっても、私は何も申しません。あなたの手で殺されたって、その苦痛は浄福でしょう」

「お前は私を挑発するのね」と彼女はいった。「少し軽卒すぎるわ私は言質をとってあるから、お前を好き勝手にできるのよ。もし私がお前の愛情がどの位深いものか試して確かめて見ようという気にな





「つたら、どうだい？お前を奴隷見たいに鞭たせたり、拷問台で肉の裂けるほど責めさせたり、処刑させたりするとしたらどうだい？それでもお前は、殉教者が神を賞め称えながら死ぬように、最後の

瞬間まで私を賞め称えるだろうか？」

皇帝は無言で点頭した。

ナルダが先に立ち、皇帝があとに続いて、二人は朝見の大広間に入った。そこには既に全廷臣が集合していた。皇帝は彼等に向って告示した。

「朕は本日日没迄の間、朕が国土と国民とを統べる朕の主権をこれなる女性ナルダに与える。皇帝たる朕自らも今日一日は彼女の奴隷に過ぎぬ。見よ」皇帝は恭しくナルダの前に跪きつついった。「私は女皇陛下に忠誠を誓います」

廷臣一同も次々に進み出て、これに倣って忠誠を誓った。皇帝の物数奇に内心は呆れたものも、皇帝自身の示す模範に反抗するまでの勇氣はなかった。それにたった一日のことではないか？

「朕は女君主として汝等に挨拶する」ナルダは語り始めた。「朕が領土は平和と幸福との国でなければならぬ。故に一人の男子たりとも身に寸鉄をも帯びてはならぬ。平和のシンボルとして朕の近衛隊は婦人を以て充てることとする。次に朕の治世を国民に祝わせるよう、百人の騎兵をして朕が宝庫内の財宝を国民の間に撒き散させよ。正午には菩提樹のある城の広場で朕の裁判法廷を開く。日没の二時間前には、廷臣の皆を招いて大宴会を催す。よい。朕が命令に違背なす者は容赦せぬぞよ。朕の欲するのは服従じや、命令に応じて即座に実行されるような完全な隷従じや。朕の意を損ねる輩は、国家財政上朕の国土の不要物として、直ちに処刑させてしまうから、その積りでいるがよい。さあ、皆の者、武器を差し出せ」

全廷臣、全兵士が、次々に帯から佩剣を外して、彼女の足下に置き、やがて堆い一山となった。最後に残った皇帝ウラジミールも、ナルダの鋭い一瞥に促がされ、一旦躊躇したが、遂に帯から匕首を取り外してしまった。

「朝見の儀が終ると、彼女は帝の後宮を訪れ、女奴隷達全部を集めさせて、今日からは自由の身である、と解放の宣言をして彼女達を狂喜させた。

「ところで、お前達、私は男達の武器を全部取り上げてしまったのだが、お前達はその武器を取って、今日日没迄、私の近衛隊になっておくれ」

女達はもとより一議にも及ばない。ナルダはその中から武技に長けた二人の美人、ロシア女のオルガとギリシヤ女のツオエを選び出し、オルガを槍隊の長に、ツオエを弓隊の長に任命した。

「それから、あのチルギスはどうしたい？」

「牢に入っております」

「連れておいで」

間もなくやって来たのは真黒なアフリカ女だった。彼女は殺人狂として捕えられ、監禁されたまゝ処刑の日を待っていたのであった。

「チルギス、お前の罪を赦してやる」

「おゝ、女君主様、ありがとうございます」

「そして、お前を私の裁判の死刑執行人に任命しよう。しっかり仕事おし」

女奴隷達の一隊を引具したナルダは、熊狩りに出かけた。そして見事に大熊を仕止めて帰る途中、山の中で鍛冶屋をやっている山人



に出逢った。仲々の好青年である。

「お前の名は何ていうの」

「イエゴールと申します」

「立派な身体をしている、見れば武士のたしなみもある様子、どうして都に出て仕官せぬのか」

「ウラジミール皇帝が嫌いなんです。帝政という奴がそもそもあまり好きじゃない」

「私も嫌いかい？」

「あなたは嫌いじゃないです」

「今日は私がこの国の女君主として君臨しているのだけど、お前は私になら仕える気があるかい」

「はい」

「じゃ、私について山を下りておいで」

こうして、若者イエゴールを拾ったナルダは、正午の裁判のために帰城した。

### 三

帝城の広場の菩提樹の下で、彼女の法廷が開かれた。彼女の右にはオルガを長とする二十人の槍手が立ち、左にはツオエを長とする二十人の弓隊が立ち、後には首斬役のチルギスが真黒な腕に刃の光る屠殺刀を抱えて立った。広場の周囲には女君主の裁判を見んものと集まった民衆が黒山のような人だかりである。広場の一隅には皇帝の物数奇がとんでもない馬鹿げたことにまで発展したと憤る大貴族達が、批判的な目をナルダに向けつつ、表面は静粛に立ち並んでいた。

裁判が始まった。訴えたいことのある者は訴えよ、貴族の横暴に泣く者あらば申し立てよ、とのお触れに応じて、四人の百姓が出て来た。その訴えるところは、悉く貴族の一人ゲデミユンの悪逆非道



である。

「ゲデミユン、出て参れ」ナルダの声は凜としてひびいた。

赤ら顔の憎さげな貴族が、ニヤニヤ笑いながら出て来た。四人の百姓は怖気づいて引つ込もうとする。

「其の方、只今の百姓共の申し分に対して、申し開き致すことがあるか」

「ありませぬ。百姓共に申し聞きなどする必要を認めませぬ」

「申し開き致さぬとあらば、判決する。被告ゲデミユンを死刑に処す。四ツ裂にして四人の原告にその一片宛を取らす。それにて恨みを晴すが良い」

ゲデミユンの顔から血の気が退いた。群衆は騒然となった。

「この馬鹿々々しい芝居はこれで終りにしてやる」

貴族の旗頭としてこの国の貴族政治を左右し、皇帝も一目置いていた顯勢家のイッアスラウ將軍が憤然として口を開いた。「あの女を玉座から突き落せ、誰が女奴隷なんか頭に下げられよう！」

貴族達はナルダの方に殺倒して来たが、オルガの槍隊に遮ぎられた。

「お前達が政治を左右して来たのも、これで終りになるのだ、貴族達よ」とナルダは叫んだ。そして近衛隊に命じた。「彼奴等を捕縛しておしまい。誰がこんなわがままな奴隷共に頭を下げられよう！」

女皇の近衛女軍と貴族達との戦は、民衆が女軍に味方したことによって、貴族達の敗北となり、一人も残らず捕縛されてしまった。

女皇の面前に貴族達の引き据えられるのを眺めて、群衆は喝采した。皇帝は平生邪魔に思っている貴族連中ではあるが、成り行きに驚いてナルダを止めようとしたが、彼女の鋭い目附は、彼女の意志に服従しなれた彼を再び尻込みさせてしまった。

今は全く無力無援となつて彼女の権力の賛に捧げられた。傲岸な

貴族達の方へナルダはあざわらいながら下りて近づいて行つた。

「お前達は皆死刑だよ」彼女は美しい顔に仮借のない峻厳さを漲らせながらいった。「犯した罪を悔い改めて、お祈りをするがよい」全員死刑という意外な判決に貴族達は腰を抜かして哀願した。

「どうぞお慈悲を！」

「慈悲を、というのか？よからう、与えて取らそう」女皇は輕蔑するようにいった。「お前達はゲデミユンとは殺し方を変えてやる。

お前達は朕の女兵士達の生きた標的になつて死ぬのだ。これがお前達への慈悲だよ」

処刑が始まつた。まずゲデミユンが引き出され、黒人の女死刑執行人の屠殺刀によつて、四ツ裂にされた。(この条り省略)。

次に貴族等が一人一人広場の木に縛り附けられた。ツオエの弓隊の弓手達がこれを離れて的にして射る。民衆は広場の周りで息を殺して見物している。

「あんまり狙いを良くしちや駄目だよ」とナルダがいった。「すぐ殺しては面白くないからね」

「はい、分つております、陛下」とツオエは答えた。

「貴族という野獸は一寸珍らしい動物でございますから、この射獵は楽しんでございます」

彼女は笑いながら死刑の宣告を受けた者達を見廻して、一人の青年を見付け、非常な美男子なので、不気味な喜悦を示しながら、視線を止めた。

「お前が気に入ったわ」とツオエは彼に呼び掛けた。

「お前を私の標的にしてやろう。名は何ていうの？」

貴族は黙っていた。

「じきにいわせてやるよ」彼女は語を継ぐと共に、一瞬狙いを定めて、第一矢を送った。左腕に命中した。

「ツオエ！」当てられた男は叫んだ、血がたらたらと滴つた。

「私の名を知ってるんだね」とギリシヤ女はいった。

「お前の名は何なのさ？」

「ロマン」

「さあ、二番目の矢はどこに当てて欲しい？」とツオエが訊いた。

「あなたは美しい、女神のように」青年は穏かな青い眼で彼女を凝視（みつ）ながら、いった。「どうぞ、神々が人間の祈りを聴き容れて呉れるのと同様に、慈悲深くして下さい。第二の矢はどうぞ……」

「さあ、どこに？」

「心臓に」

発止、矢は彼の心臓に命中し、彼の首はがっくり胸に落ちた。

一方、アフリカ女のチルギスも弓矢を借りて試みるが、うまく当てられない。美人達はそれがおかしいとではしゃいで、子供達見たいに彼女の周りで踊りはやした。チルギスは笑って又射て放つ。すると今後は標的（まてき）の右の脚に矢がささった。まぐれ当りで当たったのだ。

「ツオエ、すぐ左を！」とナルダが叫んだ。

ツオエが射た。左脚に命中した。ナルダは感に堪えたといわんばかりに點頭（うなず）いた。



一矢は一矢毎に貴族達は赤く染って行った。群衆は見物していて命中する毎に喝采した。矢の飛ぶ音、射られた者の呻き、女達の残忍な笑い声が混って聞えて来る。女皇は倦きて来て頭を廻らした。「あとは急いでおやり」と彼女はいった。「寒くなって来たわ」そして毛皮を豊満な胸の上に引き寄せた。



イツアスラウ將軍だけは、二十数本の血を受けても絶命しなかった。そこでナルダはチルギスに命じて首を斬らせてしまい、その上で、イエゴールを呼び出した。

「イエゴール、お前は今から將軍だ、イツアスラウに代って司令官として軍隊の指揮をお取り」と彼女は、前に跪いた青年に向ってい



イエゴールはナルダから御名御璽の附いた辞令を貰って、国境に向い出発した。

#### 四

日没二時間前になると下の大広間には全廷臣が集って酒宴が始ま

った。「マジャール人との国境にいる軍隊の所まですぐ馬で急ぐがよい、そして全軍を引きついで此処まで帰っておいで」

「ナルダ、ちと行き過ぎておるぞ」皇帝ウラジミールはたまらなくなつて口を容れた。横暴な、帝権を危うくしかねない貴族達を殺してくれたことでは、彼はむしろ、ナルダに感謝していたが、国境の軍隊の司令官の人事まで彼女にされるのでは、黙っていられなかったのだ。だが、「忘れては駄目よ」彼女は彼の肩に無造作に腕をかけながら、いった。「昨日はまだお前に属していた全領土を、今は私が支配しているのだということを。」

又、皇帝ウラジミール自身と雖も、生存を許されるのはその女君主の慈悲によるのだということ

一喝されて、皇帝は退き、イ

った。この大広間を見下すバルコンはナルダの寢室にだけ連接して  
いて、下の広間からはどうしても入れない張り出し様敷になっ  
てゐる。ツォエ、オルガ、チルギス等の腹心がナルダに喜ばしい情報  
をもたらした。彼女が騎兵に撤かせたお金に国民は狂喜したこと、横  
暴な貴族達をやっつけたことで今まで彼等の圧制を受けていた大多  
数の国民が喜んでゐること、彼女の治世が一日も長からんことを祈  
つてゐること……等。聞き終つて、

「準備の方は良いかい？」ナルダが訊ねた。

「すっかり手筈が整つております」

「よし、皇帝はどこにいます？」

「陛下の御命令を待っています」ツォエが答えた。

「ここに来るように！」

ウラジミール皇帝がバルコンに現れた。ナルダは傲然と坐して、  
片足を高々と組みながら、いった。

「奴隷、お前には私の身の廻りの世話をさせてやる。この恩恵に答  
えてしっかり仕事せねば駄目だよ。不手際なことをしたら、ひどい  
目に合わせるから」

「御用は何でございましょうか、女主人様」ウラジミールは、微笑  
みながら訊ねた。

「食事の支度をお願いします」

ウラジミールは象牙細工の小卓を彼女の前に置き、白い布を掛け  
た。その上に銀の皿を並べ、食物を運んで来て、跪いて彼女に差し  
出し、酒を持って来て、跪いて彼女の杯に注いだ。彼女は白パンか  
ら小さな塊をむしつて玉に捏ねると、それをウラジミールに投げて  
やった。

「許す。拾つてお食べ！」

帝は、犬のように、床からそれを拾つて口に入れた。  
「肉のお代り！」慌てて皿を持って来ると

「酒！」酒を注ぐと

「果物！」

次から次へと彼女は彼を追い廻した。そのあとで  
「ウラジミール、手にキスさせてやろう」

皇帝が慌てて跪いて、彼女の小さいふくよかな手を唇の方へ持つ  
てゆくと、途端に、彼を足で蹴り退けて

「あっちにゆけ！ お前なんかうんざりするよ」

そういつて、下の大広間を眺めると今や正に酒宴はたけなわだ。

彼女はそれを見て、また振り返り、

「酒！」と命じた。

ウラジミールが酒を注いで引き下ろうとすると

「お待ち」と彼女は彼を止めた、その態度の高圧的なことやその目  
附の余りの異様さに、彼は彼女の前に戦慄した。

「お前、私が恐いんだね？」彼女は朗らかにいった。

「いいえ」

「うそをつくんじやない！ 身体中ぶるぶる慄えてるじやないか。  
私を恐がつてるんだね」彼女は怒った声で繰り返した。

「はい。あなたが恐いのです」ウラジミールが答えた。

「そんなら、私の氣に入つたよ、お前は」ナルダはさういうと、再  
び笑つた。次で、頭を揺すり、何気なく軽く口笛を吹き、外套をパ  
ツと左右に開いた。

「身体が熱つて来たわ」と彼女は声高くいった。「奴隷、氣をお附  
け、私の血は沸き立っている。不手際なことをすると鞭たせるよ」

ウラジミールは蒼白まつさおになつて、齒をくいしばつた。怒りであつた  
か、恐れであつたか……とまれ惑乱して身を慄わしている帝の前に、  
貂毛ミンク袈衣インを脱いだナルダは、上衣の釦を外して胸をくつろげ、女神  
のような肉体を誇示した。そして、慄えている彼を見やりつつ、低  
い声で命じた。



「酒！」

ウラジミールは立ったまま、彼女の肉体に気を奪われて、動かなかった。

「酒だというのに！」彼女は激昂して叫んだ。「聞えないのかい、酒だよ！」

彼はあわてて酒を注ごうとした。彼女はわざと盃を傾けた。酒はこぼれて卓の布や彼女の衣裳を汚した。

ナルダは怒って杯を投げ捨て、跳び上って、

「不器用な奴隷だね」と荒々しく叫んだ。「ちっと鞭をくれてやる、お前にはそれが相応だよ」

皇帝は笑いながら彼女の前に跪いて、彼女の手を執った。

「素晴らしい女主人役の演技だね」と彼は云った。「だが、この位でもう充分だよ」

「何をいいだすやら！」と彼女は叫んだ。

「わしはもう日没まで待ち切れない」皇帝はささやいた。「欲情を

催るような残酷さがあなたの物腰から流れでて、わしに注がれ、わしを酔わせる。わしはあなたにキスして欲しくて死にそうなんだ」

ナルダは彼にかぶさるように上半身を屈めながら、ささやき返した。

「おゝ、私は残酷よ。どんな残酷なことをするか知れなくてよ」

彼女の唇は彼の唇の許まで下降し、彼は彼女の熱った息吹きを感じた。情熱をこめて彼は両腕を彼女の腰にまわし、目を閉じて、甘い濡れたキスを飲み込んだ。

と、次の一瞬、彼女は彼を突き飛ばしていた。

「厚かましい奴隷だね」彼女は声高に叫んだ。「鞭を持つといで！」

彼女は床をふみならした。待っていたように、バルコンに続くナルダの寝室から、ツォエが入って来て鞭をナルダに渡した。ナルダはビュウ／＼と音させながら、これを振り廻した。

「もう沢山だ」と皇帝はいった。「わしはあんたの主人じゃ！」

「お前は私の奴隷だよ！」

「日は沈んだ」とウラジミールは叫んだ。「わしはあんたの主人じゃ！」

「お前は私の奴隷だよ！」ナルダは冷かにいい返した。「私の支配はまだ一時間はあるわ。私はそれを利用してやる。その第一着として、お前に、厚かましい奴隷に、鞭の味がどんなものか教えてやるよ」

彼女は毛皮の上衣の袖をまくりあげると、ウラジミールの顔に無慈悲な一撃を加えた。帝は激怒して鞭を奪い取ろうと彼女に跳びかかった。と、ナルダはもう一度床を踏みならして合図した。——忽ち大広間の扉口は閉められて、オルガに率いられた一隊が手に手に槍を光らせてこれを固めてしまった。同時にツォエを先頭に一隊の女兵士がバルコンに突入した。

「反逆だ！」皇帝は叫んだ。

「もう袋の中の鼠だよ」荒ぶる王者の風格を示しつつ、ナルダはいった。女兵士達は帝を捕えて、後手に縛りあげた末、床に引き据えた。

「手向い致す所存の者あらば、参れ！」ナルダは力強い声音で、下なる大広間の廷臣達に向って呼び掛けた。「ウラジミールの帝国は滅びたのじゃ！」

帝を救おうとして、貴族等はバルコンの向うに詰めよった。しかしツォエの率いる弓隊の矢が二階から飛ぶと、徒手空拳の彼等はバタバタと倒され始めた。

「同じように貴族という名の野獣を射獵するのも」と、ツォエは矢を番えながら、側に昂然と立つ女皇に向っていった。「昼のように縛ってあるのより、こうやって動き廻るのを狙う方が張合がございますわ」

二十人余りを血祭りにあげると、抵抗する元気のある者は残って  
いなかった。

「陛下、お慈悲を！」百人余りが異口同音に叫んだ。「何なりと御  
命令下さいませ、御心には背きませぬ」

「朕の要求はお前達の服従じや」  
貴族達は、一齊に顔を地面につ  
けて平伏し、彼女に臣従を誓った。  
女皇は、奴隷ウラジミールの方  
へ向き直った。

「どう、ウラジミール、何かい  
うことがあつて？」

彼女は両腕を胸の上で組みなが  
ら、残酷な愉悅を覚えつつ、彼を  
見守った。ウラジミールは彼女の  
前に身体を投げ出した。

「支配して下さい」と彼は叫んだ。  
「私をあなたの奴隷として仕えさ  
せて下さい」

「駄目だよ、ウラジミール」彼女  
は笑っていった。

「それは危険過ぎる。奴隷が帝位  
に即くことが決して難しくないこ  
とを現にお前はその目で見たじや  
ないか。私がこの帝国を支配する  
ことになる限り、お前を生かして  
はおけないんだよ。そして私はこ  
の帝国の支配者になるつもりでい  
るんだよ！」



「ナルダ！」帝は恐怖の念に駆られて絶叫した。

「どう、私は残酷じやないこと？」とナルダはいった。「お前から  
言質をとったとおり、私はお前を好き勝手に処分するのよ。さあ、  
私の虐待を満喫するがいい。私に殺されて死の苦痛を味わうという快  
楽に耽溺するがいい。何故って、私はお前を死刑に処するからだよ。」





ウラジミール」

「お慈悲を！」

「最後の慈悲として」とナルダは答えた。「私はお前の愛情がどの位深いかを試して確かめて見たいと思う。お前にもう一度私の足にキスすることを許してやるよ」

彼女は、輝く絹の衣裳の下から片足を突き出した。そしてウラジミールは、夢中になって乾き切った燃える唇を、その上に押し附けた。

「さあ、死ぬ覚悟をおし」

「ナルダ、本気でいってらんじやないね！」ウラジミールは絶叫した。

「生憎と、本気なのよ」

「お慈悲を！ お慈悲を！」彼女の足許に戦慄しながら彼は哀願した。

しかし、ナルダは首を振って、後に控えたチルギスに合図した。アフリカ女の手の屠殺刀が一閃し、ウラジミール皇帝の首が転った。アフリカ女はそれを高々と掲げて大広間の者に示した。ナルダは宣言した。

「朕の命に従わぬ輩はすべて死罪に処するぞよ。朕はガリチャの女皇じゃ！」

丁度この時太陽は地平線に没し、夕映えは赤く大広間の壁を染めた。……

ナルダ女皇はハリツの帝城にあって、ガリチャを始めた。白い土の貴族と黒い土の農民と、この両階級の対立がその歴史を貫いているロシヤ人は、貴族を抑えて農民の支持を得た彼女を「黒女皇」と呼んだ。

×

×

×



## (解説と鑑賞)

## 一

これはザッヘル・マゾッホの「黒女皇」 Die schwarze Czarin の抄訳である。マゾヒストの目から見ても重要でない所では大幅に省略したり、原文にない文字を勝手に補ったりしてあるが、必要箇所では原文に即した訳文を附することを怠っていないから、読者にとっては全訳と同様の感興を与え得ると信ずる。まだ本邦には紹介されていない筈である。

これはマゾッホ中期の傑作で、プロッホ、オイレンブルグ等の研究家も、代表作の一つに数えている。私の広からぬ読書範囲内では権威ある立言はできぬが、本篇末尾の足接吻の場面を惹起するマゾヒズム的昂奮は、他に容易に比肩するものを見出し難いということはいえようかと思う。純正マゾヒスト諸君に自信を以てお勧めできる作品だ。

## 二

皇帝と訳し、女皇と訳したのは Czar, Czarin とあったからであるが、正式には大公、女(大)公と訳するのが正しい。Czarin は「公妃の復讐」では「公妃」と訳したが、本篇では代って即位するとい

う関係から、皇后、公妃、いずれもそぐわない。(この関係は、女子の最高の地位も男子主権者の配偶者たるに止まる日本——古代の女帝は例外として——や中国の伝統の下では理解し難いであろうがエリザベス女王、カタリナ女皇など、queen, empress の語が「王妃」「皇后」でなく「女王」「女皇」を意味する場合が西洋には多いことを念頭に入れて置かれたい。)

つまり、ナルダが帝にねだるのは「皇后」になることではなく、「女皇」になることなのである。貂毛<sup>ヘルメリン</sup>衣は帝位のシンボルだから、「貂毛衣を引き渡せ」という要求はそういう意味なのである。だから、ナルダが位についている間は、帝は主権者ではなくなる。実は「皇帝」でもなくなる。エリザベス女王の婿君エジンバラ公が「王」でなく、臣下であるのと同じである。だからこそ、ナルダはウラジミールを遊戯としてでなく、奴隸(専制君主の下では臣下はすべて奴隸である。)といい得るのである。この点グレース・ケリーがモナコの公妃になったのなどは全然性質が異なる。誤解ないように願いたい。

貴族と訳したのは Bojar という語で、これは宮廷貴族と異り、地主貴族である。領主と訳してもよい。領主は農奴を所有し、賦役や年貢を課した。農奴は売却や贈与の対象になったし、これを体僕として家庭内に使役することもできた。農奴は領主の許可なしには、土地を離れることも、職業を代えることも、結婚することもできなかった。裁判権は領主にあり、笞刑にも、追放にも、懲役にも処してよい。つまり、領地と農奴に対しては一の小主権者で、江戸時代の大名小名の権力にも近い。ナルダが昼の裁判で誅戮したのは、その中の大名にあたるような大地主貴族だったわけで、さてこそウラジミール皇帝は内心この誅戮を喜んだのである。

「白い土」「黒い土」については、詳しい解説はこの紹介の性質上



不要だから省略するが、とにかく、国土はこの両種のいずれかに属し、白い土は御料地莊園寺領等を指し、黒い土は農民に耕作権ある土地で租税賦課の対象となるものを指した。この両種の消長がロシア経済史を形造るのである。ナルダは農民の支持を基礎にしたから「黒い土の<sup>やがら</sup>女皇」という意味で「黒女皇」と呼ばれたというのであるが、黒の語に含まれる陰謀や暗殺の意味合をこの題名から読みとるのは、むしろ当然であろう。

## 三

「公妃の復讐」や「ポンパズールの奇行」（手帖第九十二項）の解説でも書いたように、マゾツホは大学の歴史学教授の地位にも在った人であって、その歴史小説は一応過去の史料を典拠にしているのが常であり、全くの虚構を事とせることは稀である。従ってこのナルダの事蹟も少くとも伝説としては存在していて、それを骨子としてこの作品が成立したものと考えられるが、私自身は不学にして、このナルダ伝説を裏附けるべきものを知らない。

筋書だけを見れば、これは所謂セミラミス伝説に酷似している。

セミラミスはアッシリア王シャムシアダド五世の妃、アダドニラリ三世の摂政としては、紀元前八〇〇年頃の歴史実在人物と考証されているが、ギリシヤの史家クテシアスのアッシリア史の所伝によると、彼女はニネヴェの建設者ニヌス王の妃であって、本篇のナルダと全く同様な計略で<sup>クテシ</sup>篡奪を行って女王となつたとされているのである。そしてバビロンの都を建設し、古代世界の七不思議の一といわれた<sup>ハンギンガーデ</sup>架空庭園を営造し、西部アジア一帯を征服した世界史最初の女傑と考えられている。更に男子を去勢して宦官として使用することを創案したのもセミラミスだったと伝えられているのであって、色々な点でマゾヒストには関係が深いので、いづれ「手帖」に一項を設けるつもりであるから、ここではこの位にしておく。

更に、女皇になったのが、はじめは捕虜にされた女性だったという点では、これをロシア史に探って、エカテリナ一世の事跡を想起させられる。彼女はリトアニアの農夫の娘で、スエーデン人に嫁したが、北方戦役中に捕虜になり、ピョートル大帝の寵妃となり、皇后の冠を受けたが、寵臣メンチコフと通じ、帝の死（従って弑逆だったという説もある。）の後、女皇として即位し、強力な独裁制を敷いたのである。十八世紀のロシアは上層階級における女性支配と下層階級における農奴制の結合によって、真にマゾヒストの理想境といわれているが、この女性支配は実にエカテリナ一世から始まったのである。十八世紀のロシア諸女皇についても、やはり「手帖」で取り扱う予定であるから、この位にしておく。

ナルダについて、どのような伝説や史料があるにせよ、本作品成立の過程において、作者マゾツホの脳裡にセミラミスとエカテリナ一世のことが思い浮べられていたであろうことは、殆んど断言してよいと思われる。

## 四

最後に、この作品の読み方について、老婆心までに蛇足を加えておく。

第一章は後章への伏線であるが、男女主人公が紹介される。両者ともマゾツホ好みの例の如き人物。帝はこの物語の始まる前既にナルダに征服され、奴隸になっている。本来誇り高い男をこの物語における地位逆転によって屈従せしめてゆく方がマゾヒズム小説としての効果は優れているわけだが、マゾツホにはマゾヒストしか書けないのだから、仕方がない。その意味ではウラジミール皇帝は一の「典型」として描き出されている。ナルダも権力に渴した支配的女性の典型だ。第一章に見るようにこの二人の間は既に女主人と奴隸の関係になっている。ナルダは<sup>カーテン・レクチュア</sup>寝室口説で帝を動かそうとすれば何

でもない筈で、事実上政治の枢機を握ることもできる。そして古来の支配的女性もこの限度で権力への渴を癒してしまった例が多いのである。ポンパズール夫人、デュバリ夫人など皆そうだ。しかし本当に権力に渴したら、それでは満足でない。ここに則天武后のように夫を病気にしたり、エカテリナ二世のように弑逆を行ったりして自ら帝位に即く、「セミラミス」型の女性が登場する。彼女等には他の人間は手段に過ぎない。愛情も権力の前には犠牲にされる。ナルダも実にかかる型の女性なのだ。彼女は帝を愛していないのではない。それは文中所々に暗示されているとおりで。しかもその愛情も権力欲の前には玉座への手段と化せしめられ庄殺されてしまうのである。

ナルダがこの巧妙なクーデターをいつ考え付いたか、については、帝の「お前の自由にくれ」ということばに触発されたものとする見方も存しうるけれども、右のような超弩級の支配型女性と考えると、冒頭で窓外を眺めている時にそれに思い附いて身慄いたものと解する方が面白い。「女主人様」を遊戯的に使われるのを嫌がるところ、「私が今の私でなくなっても……」というところ、す



べて腹に一物あつてのことばとした方が味があろう。

# 五

第二章冒頭の足接吻は末尾のそれに照応する。日出時と日没時と、要するにこの運命の一日をウラジミールはナルダの足へのキスで、



終始したわけだ。そのあとに出てくる問答も末尾への伏線である。「お前の愛がどの位深いか……」と既にここできいていっている。換言すればナルダはこの時既に斬首の直前に帝に足接吻させることまで計画を立てているのである。

第二章の終りの方は、本筋でないので簡単に抄したが、女性軍隊とか、女性の狩猟とかいうテーマからは興味あるところである。熊を射止めて帰るあたり、ルーベンスの名画「帰郷のダイアナ」の画面を髣髴とさせる。なお、後章でツォエによって貴族が野獣に見立てられるのも、彼女がここで本物の狩猟をしてその面白さを知っているからなのである。

第三章の裁判と処刑の場面は貴族達を生きた的にする所に紹介の重点を置き、ゲデミュンの四ツ裂刑の細かい描写はグロテスク過ぎるので省いた。ナルダははじめからこの重立った貴族達を殺すつもりでいるのだから、ゲデミュンの四ツ裂は彼等を挑発させて処刑するための手段に過ぎないのである。

生きた標的になって女達から射られるというテーマはマゾッホ好みのものであることは「公妃の復讐」中にも簡単にだが記されていたことで分るだろう。この描写からは「残酷の美」といったものを感じさせる。青年ロマン——これもマゾヒスト、マゾッホはこんなタイプの男しか書けないのだ——の射られた姿は、古来の好画題「聖セバスチアンの殉教」を想起させるが、彼を射るのが残酷なギリシヤ美女である故に一層刺戟的である。

他方黒人女のチルギスが射損じたとはやされるところや右の脚に命中したらもう一つ左の脚を狙わせ当って喝采するところは、全くの罠（ここでは女男女と書く方が本当だが）り殺しである。いや、罠り殺しという時は、殺すことに重点が置かれるのだが、ここではもっとマゾヒスティックな感じを与えるのは、女達にとっては射技の競争こそが重点なのだということだ。射殺という死刑の執行それ自

体を目的としていない。つまり普通の標的を使ってする射技練習の代りに生きた標的を使ったに過ぎず、処刑の意識が稀薄なのだ。犬追物の標的になる犬から云えばそれは死刑の執行であるが、人間から云えば射技が全てであり、犬の生命はリクリエーションの手段として消耗されるものに過ぎない。この場での貴族達はその犬と同じ様に扱われているのだ。これは四ツ裂に処刑されるゲデミュンよりもむしろ人権を、自尊心を無視された扱いなのだが、しかもそれを慈悲（恩恵）といっているのは、女皇の近衛女軍という高貴（女皇という最高貴の周囲に在ることによって他よりも高貴である。）な存在のリクリエーションのために消耗されることは、人権を認められて処刑される以上に有難く思えという意味合を含んでいる。単純に四ツ裂の苦痛を省かせるといふだけの慈悲と見ては充分でない。苦痛を省かせる気はないからこそ、ナルダは一矢で殺すな、と注意して処刑としての意義も考慮に入れているのである。しかしそれはあくまで副次的効果としてであって、彼女自身も単に射技競争を見物している位の意識でいることは「寒くなつて来た、早くおし」というふざけた言い方からも推察できるだろう。（未完）

### 告 知 板

○文通の幹旋、手紙の転送、並に寄稿家投稿家の住所本名の通知などは一切致しておりませんから御承知お祈いします。

○但し御自分の住所本名を誌上に発表しても差支えない方は、読者交歓室宛、通信をお送り下

されば出来る限り読者通信欄に掲載の勞をとります。

○編集に關しての電話によるお問合せは、内容の如何に拘らずお断り致します。

○回答の出来る御照会に対しては、つとめて返信致しておりまして、すから御諒承下さい。

# 続・乗馬ズボンの女腹切



藤 山 秀 雄

## 一、特 攻 作 戦

「どうか頼む、お国の為に、一人でも多くの人を助けるために死んでくれ。手についてお願いする」

藤田少佐は頭をさげた。若く美しい従軍看護婦、美也子と妙子はじっと少佐の話をきいています。ソ連の突然の進入で、退却しようとしても追撃がはげしく、何とかしてこれを

くいとめなければ、この町の人々は全滅しなければなりません。藤田少佐は、この美しい二人を犠牲にして、その間に撤退しようと思心したので、この二人に死んでもらって、関心をそらせ、時間をかせこうというのです。次第にその「特攻作戦」に筆をすゝめることにいたしました。

「はい、喜んで死にます。敵中へしのび込んでも必ずなにか事件をおこします。そして立派

に……」

「有難う。とにかく八時間あれば全軍が助かるのだ。苦しいだろうが泳えてくれ」

「はい、では支度をして参ります」

「軍服を用意する。着て行きたまえ」

あゝ生きて帰ることのない二人。でもお国のためです。二人は喜んでこの重い責任を受け入れるのでした。

カーキ色の軍服、乗馬ズボン、長靴、髪はたばねて結び、心ばかりの化粧をつくし、りりしい姿で二人はレインコートを着け、小雨けふるN町を、隠れるようにしのび出るので

す。

## 二、責 め 苦

二人は、やっとの思いで敵陣へしのび込みます。宵のことゝて、陣地はざわめいていますが、二人は一体何をしようというのでしう。

二人は、叶わぬ迄も敵の大將を殺そうと決心したので、そして、もし事がやぶれたら、どんな恥しめものなので、つなげるだけの時間を、生きぬこう。そして敵兵を悩殺して、最後には、女中らも腹を切つて死のう。

これが二人の特攻作戦だったので。

でも、二人の計画はそう簡単には成功しま



せんでした。二人は惜しくも寸前に捕えられます。

レインコートのフードをはねて、二人を女と知るや、敵兵は忽ち二人をとりかこんで、革ベルトでしぼり上げ、拷問にかけるのでした。敵兵は、美也子と妙子の美しい男装にみとれたり、鞭打ったり、つねったり、面白がつて責めるのです。

二人はジッと恥しさにたえ、乗馬ズボン姿で材木につながれ歯をくいしばっています。

妙子は柱に海老ぞりにしばられただけで、美也子は年長であつたせいもあつてか、もつとサディスティックなしばらく方、それを入替り立替り敵兵がゆすぶったり、こづいたりするので、あまりかねて呻き苦しむ声、流れる汗に、軍服は水をあびたようにぬれて、敵兵たちは、その一挙一動をあかず見守っています。

藤田少佐が美しい二人を特にえらんだのはこうした時のことを考へてのことでした。

敵兵は次第に大勢になり、中には、あまりかねて抱付いてキスをしたりするものさえあります。

いかなる恥しめも覚悟して来たのですから二人は、時をかせぐために、なやましく身を悶え、乗馬ズボンの腰をしごいて煽情的な姿体をつづけます。恥しさに赤らむ顔を、キツと兵隊たちの方にむけて、美しさはたとえが

たなく、ズボン姿の魅力はこゝに極つたときえ思われました。

そのうちに兵隊達を押しわけて将校と通訳がそばへ来ます。二人は、何のために来たのか、と訊ねられます。答へません。そして、この上は日本の作法に従つて腹を切る。敵に捕えられて、おめ／＼生きては居ぬ。刀を持つて来るように、と云いきります。

将校は、どうせこの二人は口を割りはすまい、それよりも、話にきいたハラキリで死ぬと云うなら、又とない見ものだ、とても思つたのでしよう、この場で自決をゆるし、支度を命じます。

将校が去ると、敵兵は、むらがり寄つて、もう一責め。

「むむッ！」

うめくと、ワーツとはやし立てる残忍さ。

今度は棒ぎれがズボンを穿いた両股の間へ突込まれます。乗馬ズボン姿ですから、そのはち切れそうな腰の線は惜しみなく波打ち、グツと棒切れを捻じ廻されるたびに

「ア、アーッ！」

と体を硬くして腰をひねるのです。ギヤバの乗馬ズボンが、ゴワゴワときしみはじめます、そして、やがて材木から引下された二人は、更に凌辱の彼方へと追込まれるのでした。

### 三、腹 十 文 字

二人は、殆ど氣を失うばかりでした。数えきれぬ獣どもが二人の体を踏んだり蹴ったりしたので。それでも時のたつのをジツと待っている健気な二人。「お国のため！」この一言が二人を与える力なのです。

「ハラキリ」「ハラキリ」

処々で兵隊がさゝやきはじめました。二人はいましめを解かれ、将校に向います。

「アナタガタ、ホントニハラキリマスカ、ナゼココエキタカ、ソレイエバユルシマス、イナサイ！」

二人は黙つて首を振ります。

「ヨロシイ、デハココデハラキリナサイ、ニッポンノオンナノヒト！」

美也子は妙子を顧みて

「妙子さん、もう夜あけも近いでしょう、たつぷり苦しんでみれば、時間も約束通りになるし……大和撫子の最期も華々しくかざれるわよ。ね、苦しいだろうけれど、出来るだけ長く、血だらけになって呻いてやらない」「えゝ、もう私は苦しいことなんか平気です。死ぬなら華々しく……」

通訳が、軍刀を持って来ます。美也子は、ポケットから白布を出してきりきりと刃に巻きしめ、草の上にヒザをつきます。

「一人宛死にしましょう。ゆっくりね。お先へ！」

ニツコリ笑つて、美也子は軍刀をかまえます。妙子は美也子の斜後にやゝはなれて不動の姿勢で立ちます。時ならぬ人垣にかこまれて二人は緊張した顔を、いやが上にも引きしめています。美也子は、泥に汚れ果てた軍服のボタンをゆっくり外し、乗馬ズボンのベルトをゆるめ、用意をととのえた上、片ヒザを立て、

「天皇陛下、万歳！」

云い終るや、ぐッと左の脇腹へ軍刀を突立てるのです。

「むうっ……」

低い呻き。白布を巻きしめた刀身をつかんだ両手に力がこもり、ずぶずぶと次第に深く吸込まれて行く白刃。大きく肩が喘ぎます。突込むと同時に、敵兵の間にさめきがきこえ、「ハラキリ」「ハラキリ」という声が、そここゝに洩れています。

美也子は二十六才の女ざかりの腹を、いまこゝに自ら屠つて最期をとげようとしています。責め、訊問と甚しい屈辱につかれ果てた体に鞭打って自らの腹を刃で裂き、苦痛に耐えて死んで行くのです。いまは、ひとりで勇ましく死ぬことが彼女の倅せなのです。

やがて唇をキツとかみしめ、刃を右へ引廻します。傷口は血汐を吹き、呼吸につれて白い脂肪層がのぞき、若き女武者の苦痛は次第につのります。立てた右ヒザに力をこめて、

美也子はキリキリと一気に腹を真一文字にかき切つて、

「ア、ア……」

と吐息をつきます。彼女は刃を引抜こうと「ううむ……」

と一寸呻いて刃をえぐり、ぐッと力をこめます。唐紅の血を吸った軍刀が抜き取られます。

あゝ、彼女は十文字に切るつもりか。突くべき場処を探っています。なんたる氣丈！

グーッと押してみても、こゝではない、と云うように刃を移します。やがて、ふるえる手は、そのまゝむちちりと盛上った両の乳房のその谷間をさぐりあてます。切先が……。大きく喘いだと思うと腹から絞り出す呻き、

「ウウッ！……ううッ」

刃は鳩尾へ突込まれ、両の手はその柄を抑え、前のめりに息をつめて苦悶の姿。敵兵の間に悲鳴がきこえ、あまりの凄惨さに、氣を奪われている様子です。美也子は、齒をくいしばって刃を下腹へと切りおろして行きます。

ぎりぎり肉をさく音、烈しい息遣い……。彼女はどきりと腰を落します。額にはつぶつぶと脂汗がうかび、激痛にゆがむ頬には異様なまでの美しさが……。

「美也子さん、しっかり、私も参ります……」

「う、うゝ何……これしきに……」

苦しいことでしょう。妙子もおくれじと、

上衣のベルトをゆるめ、手早く支度をすると「天皇陛下万才！」

声をかぎりに叫んで、片ヒザをつき、

「ウウムッ！」

ぐさっ……腹腔ふかく切込んだ様子。はげしく体をふるわせて休えています。ヒザの乱れもズボン姿なら氣遣いはありません。再びワツとあがる嬌声。やがて水を打ったように静まり、二人の呻きだけが、なまなましく耳を打つのでした。

妙子は深く突込んだので、引廻す苦しみも一段と烈しく、ぐッと切り立てつゝ「ウーッ！」

と体をくねらせて苦悶するのです。

あゝ、二人の美貌は、苦痛に引きつゝて、悲壮な女腹切りはいよゝゝクライマックスへとすゝむのです。

二人は、思い／＼の姿勢で、体を寄せ合い互の名を呼んではげまします。

「タ、妙子さん！」

「オ、お、おねえ様！」

「き、き、切った、私は、私は、十文字腹……き、切りおほせた！ タ、妙子さん、け、けがれた臓腑を、臓腑を！ 一緒に……ッ、ッ、つかみ出して、シ、シ、死……ア、アアッ……むうッ——死、死にたい……」

「待って！ お、おねえさま……わ、わ、わ



たしも、い、いま、いま！ ウウムッ……」  
うめきと共にキリキリと腹一文字にかき切った妙子。美也子は、うなづくと、肩で喘ぎ乍ら妙子が十文字腹をしとげるのを待つ。  
「ううむッ」

妙子も鳩尾へ突込んだ様子。

「タ、タ、妙子さん、がんばって……」

美也子は苦しい息の下で妙子をはげましています。妙子もいまは必死です。

「は、はい、タ、妙子は……妙子は……」

もう二人にとって敵兵の存在などは、ないのと同じでした。苦しみ、悶え、そして日本女性として最期の御奉公に命を捧げる。

この苦しみこそ祖国を救うのだ。誇らかに死にいとむ二人。やがて妙子も十文字腹をしとげて、血まみれの軍刀を

「むむッ……」

と引抜きました。いざり寄る妙子。

「お、おねえさまッ！」

血みどろの手が互の体を抱きすくめて……

「う、うれしい。い、いさぎよく！」

「は、は、はい。はやく、臓腑を！」

「気をたしかに！ い、いざッ！」

「いざッ！」

二人はガバと俯伏せになり、右手を腹腔へぐっと突込みました。

「うゝゝゝ……」 「ううゝゝ……ッ」

凄惨なうめき。けがされた臓腑をさいなん

で、せめてもの申訳をしようと云うのです。

「ウーッ、ウーム……」 「ウウーッ！」

体をしごき、二人は血みどろの内臓をずると引出します。二人は取乱すまいと必死

でした。せぐり来る苦痛は、二人をのたうち廻らせようとします。二人は抱合い、はげま

し合いながら腹腔をつかんで歯をくいしばっています。

「ううッ……むむ、くくくくくゝゝゝッ」

夜は次第にしらじらと明けはなれて行きます。

二人はナースですから腸管を傷けた場合

どの位で死ぬるものかよく知っていました。二人は互に相手の臓腑をにぎりしめ、きりき

りとしほりあげては

「ウーッ！」 「もっと、ううッ、ウゝ……」

とはげましあい、苦しみに耐えているので

す。

あゝ二人は同性愛だったのです。短い同性

愛の倖せと二人は、切腹の中にもとめたので

した。血みどろの腸が、異臭を放ちます。

もうこらえきれない。意識の有るうちに差

しちがえて……。と、つさに決心した美也子は

「タ、タ、妙子さん……さしちがえよう！」

「う、うれしいわ、お、おねえさま！」

二人は引出された臓腑をまとめ、軍服をか

きあわせようとします。二人はベルトをしめ

るにも、傷口が上衣とふれあう度に苦しみ、

歯をくいしばってベルトをしめて行きます。

男でさえ、こんなに行儀正しくしかも美事

に切り完せた例は稀でありましょう。乗馬ズ

ボンの両肢を組直し、互に抱付き乍ら、

「いざッ！」 「えいッ！」

悲壮な気合いと共に互の乳房めがけて突込

みました。

「アア、むッ！」 「むむッ！」

力のかぎり二人ながらに抉りたてれば、正

坐した腰も浮き立ち、乗馬ズボンの両モモは

苦しさに揉み合って烈しくけいれんします。

やがて二人は、あまりの苦しさに、抱合っ

た手もほどけ、草をかきむしり乍らのたうち

廻りはじめます。一時間。

#### 四、凄 惨

敵兵たちは、二人が差しちがえてからとい

うものは、のたうち呻くばかりで、長くかゝ

るところから、あらたな刺戟をもとめて動き

はじめたようです。やがて、呻き苦しむ二人

は、情容赦もなく引き起こされます。

「ううッ、な、なに、これしき……」

「う、う、ううゝゝ……」

あゝなんたる残忍。いま死にゆく若きナ

スを再び革ベルトでしばりあげるのです！

立てない二人を無理に立たせ、傷口をこづく。

「む、くくくくくッ」

手はしばらく、胴体をベルトでしばると、

二人ながら立木の枝へ吊し上げられて行きます。

す。

あたりがあかるくなって、二人の蒼白な美貌と、鮮血にまみれた男装が、くっきりと浮かび上っています。

敵兵たちは、二人を火焙りにしようというのです。切腹も見あきた。火にやかれて苦しむ処を見よう。火で衣服が焼けて裸になって死ぬのだ。これは面白いぞ、口々にさゝやき合っています、吊し上げられつゝ深傷になやむ二人の姿。下半身は文字通り血達磨です。

「お、おねえさま！ ザ残念……」

「わ、わたしも。火、火あぶりまでしなくても……うゝ、こ、このうらみ……」

「お、お鬼となります。の、のろいます！」  
火は二人の長靴をなめはじめます。革のこげる臭いが二人の死を誘います。ズボンの腰あたりまで煙が巻いて……。着衣が燃えれば、それで万事は終りです。

しかし、敵兵は、二人の苦しみを永びかせようと、火もわざと強くたかず、着衣には水をかけて、じわじわと殺そうとしています。煙にむせ返り乍ら、二人は互の名を呼び、歯をくいしばって苦しみ悶え、祖国の安泰をいのる姿の神々しさ。

あゝ遂に、火勢は乗馬ズボンを呑みこんで行きます、ズボンが黄色い煙を吐きはじめます。

「ア、ア、ッ！ タ、妙子さん、私は、私は、

行きます、さ、さ、さようなら！」

「お、おねえさま、あ、あの世で、あの世で……なぜ、なぜ仰言らないの！ アア、私のズボンも、う、うゝむッ」

黄白色の煙に包まれる乗馬ズボン。二人の両手は虚空をつかみ、両眼はきつと見開いて、美也子は体をぐつと曲げ、妙子は両肢を揉みあわせ、

「タ、タ妙子……」

## ☆ 編集だより ☆

○原忠正氏の「現代マゾヒズム芸術時評」の本月号の追加としてソ連邦より送って来たという貴重な資料の提供を受けました。締切の都合で間に合いませんでしたので、次号誌上に紹介することにします。

○世論に依って雑誌の体裁を考慮いたしましたため、口絵はつとめて穏健なものにしたいと思えます。或は一部読者の方々の要望と背馳するかもしれませんが、如上の理由に依るものでありますから、何卒御理解下さらんことを願う次第です。

○豊富なる口絵資料につきましては、本誌とは別に、代理部分譲品として御希望の方々へ御紹介することに致します。

○掲載出来かねるような原稿は、極力「玉

オ、オ、おねえさま、ま……」

ゴーツと音を立て、燃え上る紅蓮の炎。ズボンから上衣、煙につままれるうちに、二人は女乍らも悲鳴一つ立てず、押泳えた呻きに気丈な男装を托して次第に焼けたゞれて行くのでした。

そしてこの二人の健気な最期によってこの町の日本人は無事に撤退して行ったのです。

(完)

稿落穂集」を続けて皆様のお目に入れるよう心掛けますが、落穂集に対しての御照会は勝手ながら御断りいたします。

○本誌の文献誌としての使命に鑑み、あらゆる方面の事柄を盛り上げたいと考えておりますので、何卒、資料の提供、告白、体験、見聞等の投稿について御協力下さるようお願い致します。

○企画中の「限定版各種特集号」は、目下時機が良くありませんので、当分無期延期と致します。状況好転の暁は、追って誌上に広告しますから、それまでこの件についての御問合せは御遠慮願います。

○「天は知っている」の宝塚二三夫氏並に「サジスチンの半生記」の鷹野めぐみ氏へ続稿お送り下さるようお待ちしております。



## 四馬孝・傑作集

## 「美しき女体家畜飼育室」

△「潰滅の前夜」より▽

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円 (送共)

「縛り絵」に対して、独自の境地を打ち樹てた四馬孝氏が、ここに筆を新にして、逞ましき制作意欲を湧かして、鋭意ものされた傑作画集を、マニアの方々の要望に応じて分譲することに決しました。テーマを本誌七月号並に八月号所載の「土路草一作」『潰滅の前夜』にとつておりますが、アイデアは、これすべて四馬孝氏の発案になるものばかりです、写真と変らぬ精緻なタッチは、きつと皆さまを妖しい女体嗜虐の恍惚境に彷徨させることでしょう。

## (一) 奇妙な磔

Y国人の地下室へ捕われた美貌の日本娘、彼女たちは従順な

る家畜として飼育させられるため、言語に絶する厳しい調教が科せられる。胴に絡らんだ冷たい鎖、足首にはまった鉄のベルト、そして口には、革製の鉗口具が、しっかりとこまされていく。あゝ、これ程の美貌に対する凌辱が又とあるであろうか。黒い手袋をはめたY国人の触手は、日本娘の顔に迫ってくる。

## (二) 排泄の強要

天井から荒縄で吊り下げられた足首、身動き出来ない緊縛の上、鼻をつまみ、吐いて仕方なく開いた口の中へは、大量の食塩水が情容赦なく注ぎ込まれてゆくのだ。今は観念の眼を閉じて、その水を受け入れているが、や

## 女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案 北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付 八枚一組 千円 (送共)

## 甲、時代物

## (一) 女武者の最期

戦陣の間、すでに戦の勝敗は決し、落城の火焰が遙かに望める山の高みに、二十才ばかりの身分のある女武者、鎧をぬぎ、腹真一文字に鎧通しにて掻き切る。血が着衣に滴りしみ、唇か

りを巻き締めた九寸五分で左脇から臍下まで真一文字に切りさばき、やゝ上向き加減の苦痛の表情、膝前の三宝には遺書が置かれてあり、血汐が左手の上膊部から膝の上の白衣裳にしたゝり落ち、更に膝下になで溜っている。

## (三) 遊女の自決

慶長風俗の遊女、上半身の前をひらき、左手は袖から脱いで左脇腰をおさえ、懐剣の切先は臍下をしたたかに、真一文字に切り開き、血痕淋漓、上半身から、下腹部、膝まであらわれ、豊かな肉体の苦痛にもだえるさま、まことに見事、血は下腹部より太股にまで飛び散り、切口から臍のあたりまで、にじみ出

## (二) 腰元の自害

白装束の腰元風の乙女、上半身肌脱ぎ、下腹部まで十分にあらわし、切先を残して紙縫で握

がて起ってくるであろう生理現象を想像してY国人は、にやりとやりと、ほくそ笑むのであった。

### (三) 煙草責め

完全な後手しぼり、足首は揃えて椅子の脚に固定され、真紅の猿ぐつわの上には、更に革のベルトを二重にはめられて、口からは、息を少しもすることは出来ない。只二つの鼻孔から、あえない喘ぎをくりかえすに過ぎなかった。背後に迫ったY国人の手にしたのは、火のついた紙巻煙草であった。形のよい右の鼻孔にその煙草をさし込んだ忽ち、左の鼻孔からは、煙が渦を巻いて吐き出された。苦悶にもだえる美貌の日本娘、Y国人は更にもう一本の煙草をとり出して火をつけようとするのであった。

### (四) 現代の火責め

膨隆した両尻に艾のけむりを挙げる全裸の日本娘、あゝ、なんたる美貌に対する凌辱であるうか、一見、肌に粟を生ずる凄

絶きわまりなき責地獄。

### (五) ミンミン責め

「そうら、鳴き声が悪けりや、声の出がよくなるようにしてやるぜ、それで足りなきや、まだまだ手があるんだ。これはほんの序の口だよ。」

### (六) 空気ゼメ

なんとという惨忍な恐ろしい男の責めでしよう。身動き出来ない彼女は猿ぐつわの苦しきも、縄目の痛さも忘れ、鼻孔を僅かでも開けようと切なく喘ぐ。

### (七) 食事ゼメ

「フ、フ、さあ、腹がへつたらう、食事の時間だぜ、特別料理だ、ゆっくり食べさせてやるからな。」白い顔がぐっと仰向かされて、男の手から……。

### (八) みじめな美しい白豚

「さあ、後でゆっくり又鳴声をきくからね、その美しい顔をよく見ておきな、ふん、いくら奇麗だっからって、あんまりなめた真似をしやがって、ざまア、見ろ。」

(以上八ポーズ)

ている。妖艶きわまりない女体の切腹図。

### (四) 武家の娘

武家の娘、姉妹二人。姉娘は矢絣の着物の襟をくつろげ、畳に端座、懐剣にて、臍下を深くしたたかに真一文字に切りさばき、溢れ出た腸を左手にて攪かみ出さんとしている。畳の上に懐紙を敷き、切腹に用いた血塗れの刀を置く。苦悶の表情は清婉、上体は双の乳房もあらわに右斜めに、今まさに倒れようとしているポーズ。妹娘、姉に寄り添いながら背後より支える。妹娘も共に腹を切る態にて、豊満なる乳房をあらわすまで、着物の襟をひろげている。

### 乙、現代物

### (五) 女剣劇の腹切

舞台の上、男装小姓風の男髪の女優。上半身肌脱ぎにて、立ったまま大刀を下腹に突き立てたところ、血が派手に飛び散り袴にまで血痕をつけている。むっくりと盛り上った乳房を十分に見せているので、男装ながら

女であることを、はっきりあらわしている。

### (七) 現代風

洋風のアパートの一室、カーテンの蔭にベッドが見える。近代的な美しい顔つきのオフィスガール、パンティを膝頭まで下げ、ブラジャー一つの全裸に近い姿にて正座する。太股、臀部のあたり、肉づきよく肉体美。短刀にて左下腹から膝下まで切り、血は膝頭から床にまで流れて溜る。左手は胸を押さえ、苦痛をこらえた顔は悲愴。

### (八) 農家の娘

木立の茂った丘の上、十七、八才のお下げに結った可憐な娘モンペの紐を解いて、胸、下腹部を開き、鎌の柄を右手に、刃に左手を添えて、今まさに下腹へ突き立てようとするところ。鳩尾の窪み、膨らんだ腹部、臍窩等を十分に正面にあらわし、顔は鎌の刃先から下腹部に注がれている。膝前に着替え、カバン等を置き、背後に駒下駄が揃えてある。



## 「女優緊 映画速報版」

## 最近の映画から

白石 稔

## 悪魔の街 (由美あづさ他)

開巻早々警察自動車で護送される容疑者たちの描写がある。うち女性も二人、手錠をはめられ縄で珠数つなぎに姿をみせる。ラスト近く由美あづさは自動車で連れ去られようとする。後手猿轡の不自由な身体で警笛を鳴らし急を告げる。白布で縛られた顔を窓外に出し救いを求める。惜しい事に夜のシーンで暗いのでよく見えない。(B級)

## 人肌蜘蛛 (山本富士子)

九月号本誌上にて嵯峨さんが予告して居られる様に、米の倉庫の奥深く吊り下げられている。助け降されても青い着物姿のままぐったりしている。天然色映画であり仲々美しい。併し、ただ吊られているだけで物足りない。

## (B級)

## 疾風鞍馬天狗 (松島トモ子)

物置の柱に猿轡まではめられて縛りつけられて居り、救いの手に向って必死にもがいている。(C級)

## 怨霊佐倉大騒動 (花井蘭)

ラスト近く磔刑のシーン。荒縄で柱に十字に縛られ、眼下で行われる我が子の斬首に顔をそむけ、最後に非人の槍に両脇を突き上げられ絶命する。横木に縛りつけられた手首や指の表情を写している。脇下から流れる血は囚衣を黒く染め折りから降り出した雨はがっくり傾いた頭や身体に注いで凄惨な場面を展開する。これ以後亡霊となって悪臣たちを脅すのであるが、その度ごとに縄のかけ方が異っている。(A級)

## マリヤ観音 (夏川静江)

姫の存在を必死に求める悪臣たちの為、荒縄で後手に縛り上げられ鞭で打たれ拷問される。後手の縄目も見せ地面を転げたりして必死に鞭を避ける。これが若い女優だったらA級確実といった所。(B級)

## 折鶴七変化 (立花宮子)

前後篇の二部作であるが、後篇のファーストシーンで敵を欺くため恋人の勝新太郎の為に縛られ猿轡姿で敵の前に引き立てられる。

(C級)

## 裁かれる十代 (川上康子他)

川上康子を含む不良団が妾の家へ侵入して誤って妾を射殺し裁判される。判決を終って婦人警官が彼女に手錠をかける。また侵入した家の女中が柱に縛りつけられていった。

## (C級)

## (予告篇)

## ノートルダム・ド・パリ (仏)

G・ロブリジータ

有名な「ノートルダム」の拘束男」の再映画化、拷問の末処刑される美女に扮する彼女は肉体美を誇るだけあって、その成果は期待される。

## 侵略者 (米) S・ローレン他

侵略した敵軍の為捕虜となる。尚、この映画のポスターに両手首を吊り縛りにされた女が乳房をむき出しにした所があったが果して画面にあるかどうか。

## マリー・アントワネット (仏) M・モルガン

中世紀の暗黒時代の革命の際、捕えられて断頭台に送られる。

## 花笠大鼓 (松竹) 伊吹友木子

鳴門の妖鬼 (東映) 不明

## 外国文献分譲

## “Rebellious Wasps”

-by- Eza.

大中判印画紙焼付 英原文入  
4枚1組 600円(送共)

女性の女性に対するコルセット責め、尻打ち、注射、等々、拷問部屋に於ける数々の責場面の展開。

## “Three Painful Years”

-by- Claire Willowes.

大中判印画紙焼付 英原文入  
8枚1組 1000円(送共)

女性が女性に加える苛躰なき調教と責苦。緊縛、鞭打、吊下げ、逆吊り、足くさり、木馬、猿ぐつわ、あらゆる小道具を用いて、犬にしたり、馬にしたり、或は乳牛の乳を搾らし、床を磨かせ、果ては腹這いにして、ハイヒールの先を舐めさせる等、惨酷なるサジスチンの考案した責が絢爛として繰りひろげられる。

## “Inuitation to the Dance”

-by- MacClyde.

大中判印画紙焼付 英原文入  
16枚1組 1800円(送共)

マダムのメイドに対する責め、手と足とお尻を縛られ、鼻輪、舌輪をつけられた女中、ソファーに傲然と鞭を持つマダム、拷問室に於ける女性に対する女性の加虐は、一枚一枚その程度を加え、エキゾチックな趣向と相俟って、見る者をして桃源境へ誘い込まずにはおかない。水車責めに自転車責めといった奇抜なアイデアも生かされている

## “Bound for Slaves”

-by- B. Feminda.

大中判印画紙焼付 16枚1組 2500円(送共)

美しい女護島ならぬ美人ばかりの部屋へ迷い込んだ男が、女たちの手によって、あくなき責苦に逢うという、女性による男性責めの場面ばかりの集録、マゾヒストにとっては唯一無二の宝典。

太縄で井戸に吊されるシーンあり。

髑髏銭(東映) 長谷川裕見子

敵を欺き損ねて庭先に後手縛りで引き据え

られ、弓の折れで責められる。

決闘地獄(日活) 美多川光子

まぼろし城(東映) 喜多川千鶴

金語楼のお巡りさん(新東宝) 若水陽子

ギヤングに誘拐され身代金を要求される。

風雲黒潮丸(東映) 北見礼子、丘さとみ

忍術快男児(東映) 千原しのぶ

東映お得意の活劇もの。忍術現代劇という

所が交っている。彼女はラスト近く一室に閉

じ込められている。

復讐にきた男(ワーナー) P・キャッスル

「指紋なき男」で前手縛り女を好演した彼女

再び登場。

叛逆者の群れ(アメリカ独立プロ)

U・シース

人質として捕えられ殺されようとする所を

救われる。

続・女人曼陀羅(新東宝) 宇治みさ子

女囚と共に(東宝) 久我美子

あばずれ女の女囚に扮し手錠をかけられて

もがく。

復讐快艶録(東映) 三笠博子、田代百合子

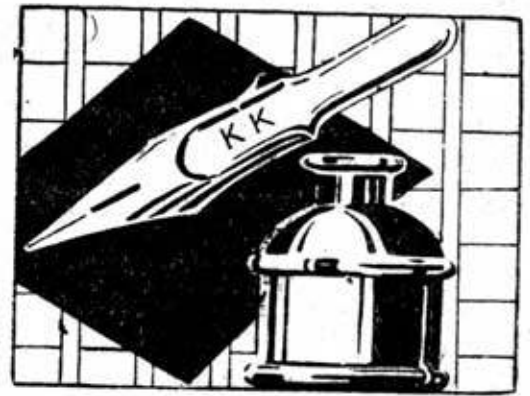
秘密書類をめくり敵味方の争奪が続けられ

るが彼女等はその渦中に巻き込まれて捕えら

れる。中でも三笠は再度にわたって捕えられ

斬首されようとする。





## 【読者通信】

毎月の読者通信欄をうれしく拝見させて頂いている者ですが、殆んど毎月の様に数多くのマゾヒストの男性の方々が、真剣な亦切実な心からの願いを以て、女王様方に御慈悲を願いつづけていられるのに、女王様方からは、少しの御返事もなく、あたられ等男性の悲願を無視されておられるのを、マゾヒストの一人として本当に残念に思つて居ります。荒井貞子様、原美智子様、春日ルミ様、戸破貞子様等女王様方は、一寸、御返事さえなされば、一人若くは数人の男の奴隷の奉仕によつて、安楽な生活を楽しむことが出来るのですから、何卒、速かに御決断なさる様、伏して御願ひ申し上げます。荒井様、春日様、原様等は折角御家

の近くに奴隷志願の男性を御もちなので、御用命さえないなれば簡単に出来ると思ひます。マゾヒストの夢を是非叶えて下さいませ。様重ねて御願ひ致します。それから八月号の読者通信欄にありました「マニヤ」の方のビクニユー・ス本当にすばらしいと思ひます。恐らく沢山の愛読者の方から希望が殺到すると思ひますが、御手紙差上げるとしても、その連絡場所すら分りませんので困つています。何卒至急誌上に、連絡場所を御明示下さいませ。様御願ひ致します。

(愛知 M生)

二伸、大いに期待していた「特集号」は、無遠慮に申せば「泰山鳴動して、ネズミ一匹も出なかつた」ので全くがっかりさせられました。次、この次の企画の時は、また、重大な支障に逢着しない様にお願ひ致します。世の中は皆々行かない事の方が多様です、編集後記は本文に劣らず読み応えがあります。「御主婦様」達の運動に妨げられ、多くの世人の無理解に抗して、敢然、出版を続けられる御苦労は想像に余りありますが、決して移り氣を起して、戦争物な

どに転向なさらぬ様、巷間に氾濫する、いわゆる「戦記物」のなんとチャチで空々しいものばかり多い事か！ 万一、そんな事にでもなれば、たとえ十年間予約していても、たとしても、直ちに起こり得る事です。(尤も小生、今迄いつも「毎月組」だけども) 今月(八月)号の読者通信として、小生の投稿を二通も載せて頂いて居りますが、前の方の「インシヤル」が「H・W生」となつていたので「？」と思ひました。そちら様の何かの御都合で、そうなつたのでしよう。何れにせよ、同好の諸兄へ呼び掛けられた事は大変嬉しく、御配慮を深く感謝致して居ります。若し出来る事でしたら、読者通信の頁は、もっと増やしても良いのではないでしようか(人の好みは尊重せねばなりませんが、切腹ファン辺りに少々我慢して頂いてその代りにでも)。(畑中敏夫氏と同感) 連続の力作数篇、完結、中でも「幽囚十ヶ月」と「英雄信長論」は、単行本として出しても決して恥しくない本当の力作だつたと思ひます。次号からの新力作が大いに待たれます、末筆乍ら諸先生の御健康を切にお祈り申し上げます。

(東京 S・K生)

毎号かゝらず拝見致している一人ですが、こゝ二、三カ月の間に色々の方の意見が出ておりました、大体貴誌の持つて行こうとする方針がわかり、心強く思つて居ります。やはり無理を云えば、私だつてもつと自分の好みに合つた本にしたいし、増頁もしてもらいたいが、色々と注文はありますが、やはり貴誌の方針通り、多少はつまらないと思つても、根をたやさない様にしたいと思つても、根をたやさないであらうと思ひます。根をたやせば、後はいつかは木にもなれば、実もみのつてくれる時も必ずあると思つて居りますので、私も前より一層の支持を致しますから、どうか私達を見すてないで、私達と一身同体になつて張切つて下さい。御願ひ致します。以上の様な訳で私は貴誌の歩み方に賛成して、現在の歩みを確実に続けていつても、いたいと思ひます。

(東京 K・S生)

サドマゾは紙一重だと誰かが申して居りましたが、私は今迄はサドに興味を持つて居りましたが、近頃はマゾに興味を持ち、奴隷とかマゾを主体とした写真のモデル

をさせてもらいたいと思っ  
ていますが、どなたか御用  
のある方にはいませんか。又  
本誌にも男性マゾの写真が  
なくなりましたが、四分の一  
位でもいゝですから載せて  
下さい。私等と同じ様な意  
見を御待ち致して居ります。  
又御手紙も下さる様御願ひ  
致します。本誌に出でいら  
れたモデルの方々はその後  
どうされていきますか、その  
様子を御知らせ下さい。私  
なんか一度は、貴誌のモデル  
となつて見たいと思つてい  
るのですが、いかがなもの  
ですか。

(東京 J・O 生)

うつとうしい梅雨も終り、海に  
山に楽しい夏がやって来まし  
た。御社には益々御繁栄の兆、フ  
ァンの小生にとつて大変うれ  
しく思つて居ります。御誌のフ  
ァンになつてより三年、内容  
の豊富さ、奇抜な責絵、写真  
等、全く目の正月をしていて  
る感じです。小生、思春期の頃  
より、現在に至るまで女体縛  
りのある映画、小説、雑誌等  
は必ずといってよい程、みたり  
読んだりして居るサジストで  
す。半裸の美女がぐるぐる巻  
きに縛られて責められ、悶え  
る姿を見る度に、体中が熱く  
なり手に汗を握る程に

なります。小生は、昔の日本  
髪的女性が責められて居る  
絵、写真が大好きです。着  
物を半分脱がされ、後手に  
縛られて、苦しさにもたえ  
る様は、言葉に尽せぬ程魅  
力があります。

(S・Y 生)

奇ク八月号の四馬氏の(美  
しい床間)良好と思う。北原  
純子画(華々しき私刑のお  
灸責)が実に良好だったと、  
小生お灸マニアには思つた。  
この様なお灸責小説を適  
当に掲載して下さい。尙時  
代物の女責小説を希望する  
者に候、乱筆にて御めん下  
され度。

(U・S 生)

九月号お送り下さいまして  
厚くお礼申し上げます。今日  
の現状ではただでさえ刊行  
を続けることが困難である  
ことはよく存じて居る積り  
でしたが、先日は大変勝手  
なお願いを申し上げ御迷惑  
をおかけしました。一刻も  
早く従前の如く貴社の経営  
がうまく行かれる様に影  
乍ら祈つております。さて  
九月号は先月号と比較する  
と、チヨット物足りません  
でした。挿絵が少くなつた  
故でしょうか、それに北原  
さんの画き方もだんだん荒  
れて来ました。とくに今月  
号はひどかつた

様です、挿絵画家もあと二、  
三人は増やしていただきたい  
と思ひます。勿論新人の方  
で結構です。常に新鮮な  
雑誌にするには、挿画の扱  
い方によるのではないかと  
思ひますが、雑誌ですから、  
各号によつて出来不出来  
があるのは止むを得ない  
と思ひます。K・K 生様、  
大阪 F・A 生様、お呼び  
かけ感謝します。未熟な  
私ですので、今後共色々と  
御指導いただければ幸い  
であります。私としては身  
分不相応に「大物」に取り  
かゝつたので、準備も満足  
出来ない内に初めたので、  
まとめ方も不満の点もある  
ことと思ひますが、何卒御  
諒承下さい。

(東一郎)

先日は女だてらにお恥し  
い投稿を致しまして申訳あ  
りません。あの時にも書き  
ました様に、同じ化粧品  
売場に勤めている美人の  
妙子さんを、一度機会があ  
つたら思い切り組み敷いて  
見たいと考えていました所、  
とうとう昨日実行すること  
が出来まして、私はあまり  
の嬉しさに未だ取りのぼ  
せています。それに前々  
からやつて見たいと何時  
も思ひ乍ら、どうしても  
出来なかつたことを、昨  
日の妙子さんに目をつぶ  
る思いで断然行いまし

た。つまり、仰向けに捻じ  
倒した妙子さんの美しい  
顔の上に、べったりお尻  
をのせて馬乗りになり、  
口と鼻を息も出来ない  
様にびたり蓋をしてやつ  
たのです。此の時私は、  
わざとすき通る様に薄  
いナイロンのパンティ  
ーだけをはいていました  
ので、くすぐつたくて全  
身ブーンとしびれてしま  
う程でした。妙子さんは  
息をつまらせ眼を白黒  
させて半泣きになり、苦  
しそうに呻きましたが、  
後でパンティを脱いで  
見ると、口紅で赤く染  
つていましたので洗つて  
しまふのは何となく惜し  
くて、未だそのまゝ付  
いたパンティーを何枚  
でもためて行つたらさぞ  
楽しみたいと思つていま  
す。でも女は、私に組み  
敷かれた位でどうしてあ  
んなに腹をたてるのでし  
ょう。妙子さんは今日  
私の顔を見るなり、とて  
も可愛い目付きでにら  
みました。こんなこと  
なら、昨日もつと死ぬ  
程ひどい目に合せてや  
ればよかったと思ひま  
す。弱いくせに美人だ  
とうぬぼれているのか  
も知れませんが、私に  
どんなことをされても  
怒らない女性はいない  
ものでしょうか。勿論  
男の方なら尚よいので  
すが、私より強くては  
困ります。若



し居られましたら、顔をお尻の下敷きにして差上げようと思ひますこんなことを書きますと、余程あはずれ女だと思われるかも知れませんが、普段は案外女らしくて純情ですよ。(三木恵子)

○ 前文御免下さい。先日ふとした事から奇譚クラブをよみ、たいへんうれしく思いました。こゝ一年来熱烈なる浣腸マニヤで、一日多い時で三、四回、グリセリン、又は塩水を五〇〇Cから最高二五〇Cまで、浣腸しています。こんな事は僕一人だと思つていた処多くのマニヤの手記及び浣腸の女王、花村恵美子様のお話を読んで思わず浣腸器を握りしめました。花村様及び多くの浣腸マニヤの方と文通したく思いますから、お教え下さい。(S・K生)

○ 東京近辺在住のマゾ諸公と交際致したし。小生連絡場所は中野区駅前通一四赤坂正三方(本名、住所等を伏せておかれた方)は一方連絡も可)マゾ心理、健全なるマゾプレイのアイデア、資料交換等を望む。(鬼山絢策)

○ 原美智子様へ、貴女の四月号の

読者通信嬉しく拝見致しました。美智子女王様の忠実なる奴隷たる私は、無条件に盲目的服従をいたす事を御約束申し上げます。貴女の思いのまゝに恥しめ苦しめていただきますと思います。たとえ女王様のために責め殺されても幸福で御座居ます。私は満二十一歳、五尺二寸、気が弱く無口の恥しがりです、美智子様、私も市内に住んでいます。是非貴女にお会いしたいと思ひます。(石本完治)

○ 編集部諸氏、暑中如何おすごしやら御伺い申し上げます。八月号を前にして、諸氏の御努力に只々頭の下がる想いです。復刊後の刊行も回を重ねて既に八回を迎える処です。小生の乏しい書架の内容にも、アリスの人生学校を含めて、四十五冊の端麗な冊子が並んでいます。学業や就職に困つて住居を転々と変じながらも、これらの伴侶は綺麗にカヴァをかけられ、手製の本箱に並んで常に座右を離れませんでし、これからも増しこそすれ、決して姿を消すことはない筈です。過日、聊か苦言を呈した形になつてしまいましたが、こうして復刊第七号を手にして見ますと、何処か充足しき

れない気持よりも、この僅かな誌面が最大限に有効に活用されている現実をしみじみと感じない訳には参りません。高村民子さんの「被縛症」は(二)に至つて完全に高村氏に羨望を感じさせられました。小生にとって奇巧の現状の大痛恨事は、古川裕子さんが姿を消してしまわれたことですが、全く久方振りで古川さんの文章に接したと同様な感に打たれました。珍しい御自身のフォトでしたが、第一のものはもう少し側面から、第二のものは全身を入れるように撮られれば、表情は顔が見えなくとも充分だと思ひます。そうなれば文字通り錦上の花となつたことでしょう。松井籟子さんの「赤い花は泣いている」は完結となりましたが、中心になるべき正樹が弱いため、却つて照子や伯母が活きて来て妙になりました。はじめめとした陰惨なものはいけません。正樹が照子を探し出し、その結果、美沙子が艶子、照子、伯母と夫からそれぞれの正当な理由に基いて私刑を受ける構想の方が、同じ死の結末を迎えてもさっぱりしていると思ひますが如何でしょう。土路草一さんの「潰滅の前夜」大いに感銘した作品です。物が戦争に

結びついているので聊か暗い気持でしたから、良い処で救いの手が打たれたという感じですが。慾を云えば、伶子が雌の機能を初めて大野六太に喜んで働かせることを強いられて了つた情景が欲しかったことと、雌の清潔保持のため調教の後で水漬けにされることであつたらと思ひました。藤見郁さん、東一郎さん、門田奈子さん、緒台あふさんと並べてみれば、奇巧がその再出発の地歩を堅実に固めつつあることは自明です。その他脇坂さん、蟬間さん、玉稿落穂集や幾つかの映画速報等にはサデイズテイックな感興を得ましたが、サデイズムを除いた性向の方々には八月号は如何でしたでしょうか。読者通信のT・M氏(一六八頁)に全く同感です。特集号については小生もできる限り儉約を重ねて申し込みたいと願ひしています。その企画については、T・Y氏、京都F・K氏、一七五頁の無名の案はそれぞれ面白いでしょう。分譲写真については、小生も舞鶴生氏と同じ希望を抱いていました。ただあの希望が叶えられたから、それによつて注文が来るということはないでしょうし、あくまでもサデイズムとなつてしまふ訳ですか

ら、実際には無理でしょうね。アルバム第二集一揃、申し込めますからよろしくお計らい下さい。

(東京 H・K生)

○

奇ク、益々の御発展を心から御喜び申し上げます。今後共に私共の心の糧として、何時々までも続刊されん事を切望致します。四馬孝画集、「美しき女体家畜飼育室」八枚、早速に御送附下さって有りがとう存じます。美貌の近代女性を画いて独得の味のある四馬画伯の画は期待していましたが、この画集を見るに及んで、そのアイディアの卓抜さに先ずドギモを抜かれました。特に小生の如き鼻マニアは、何と御礼を申し上げてよいか判らぬ程の恍惚境に浸らさせて頂きました。四馬画伯は続いてこうしたテーマの物を画かれん事を御願ひします。次にその内容について、小生の感想を述べさせて貰います。(一)奇妙な襟、いつも乍ら鼻孔の美しい描写、(二)排泄の強要、つまゝれた鼻に吾々鼻マニアは先ず興奮します。(三)煙草責め、かねて小生も考えていたアイデアですが、その苦悶の表情と鼻孔より出る煙の描写にはウットリとします。(四)現代の火

責め、美しき凄惨さ(五)ミンミン責め、裸体の美しさ、惱ましき(六)空気責め、サジストの鼻マニアの最後の空想はこの御仕置でしょう。休刊前の奇クの口絵に載った伊吹嬢の「繃帯」の写真を見てこの場面を想像しましたが、事実この絵を見るに及んで、このまま放って置くと美貌の女性も命が危いと、サディストも思わず仏心を起さす程、画集中、圧巻の惨忍さです。(七)食事せめ、美貌も台なし。鼻マニア垂ゼンのシーンです。鼻孔へ食物を流し込んでいのが、丁度排泄物が流れ出ている様で楽しい眺めですが、作者も案外そうした意図で描かれたのかと思います。(八)みじめな白豚くついでなく鼻の上から綱で縛るそれも鼻孔を上向きにして……何という心憎い迄のアイデアでしょう。以上暴言御詫びします。四馬画伯の万才を叫んで筆を擱きます

(江藤生)

御多忙中の所余計な事と存じますが、マゾ的性癖を持つ私の体験を聞いて頂き、心から貴誌の発展を願う次第です。私は貴誌愛読者の一人でしたが、別段罪悪感を感じてと云ったわけでもないのです

が、いずれにして私の性癖は余り健康的でない事は事実で、出来る事なら忘れたいと殊勝な気持ちをして、精魂して編集された貴誌を失礼ではありましたが全部焼却し其の他フオート等随分色々大事に置いておいた物をすっかり焼却して決心をしました。が、やはり毎月の発刊を楽しみに、買求めては焼き買つては焼きを繰り返して居りました。またその時は、何となく生きてる事に楽しみがあり、仕事にもはりがありましたが、どうした事か最近店頭で貴誌が見当たらないので、私を楽しませてくれる物がすっかりなくなつてしまつたわけです。私は始めて貴誌の本当の有難さを知りました。始め私は、フオートや雑誌を見るから忘れられないのだと思つて居りましたが、それは全く逆で、フオートや貴誌に自分の性癖を楽しませ慰められる事によつて適度に調節され、健康が保たれる事を知りました。なかなか感じて居る事をうまく表現出来ませんのでうよします。いずれにしても貴誌の益々御発展と充実を願う次第です。

(大阪 A・T生)

暑中御見舞申上げます。毎日暑

い中を、奇ク発展のために努力して居られる諸兄の御苦勞を感謝します。しかし「マゾ特集号」の発売が無期延期されたことは、惜しまれてなりません。どのような事情かは存じませんが、一日も早くこの計画が復活し、実行されることを祈ります。次に九月号「読者通信」に初めて名乗りを上げられた神戸のT・S君、小生は君の現われるのを待つていた。同県でもあり月に一、二度神戸に行く事もある。今後は非文通したいと思うが如何小生三十四歳の会社員、君の望まれる美青年ではないが十人並で適度のたくましさと野性味は持ち合わせています。若し許されるならば文通のみならず時々会い度いと思ひます。連絡方法を知らせて下さい。小生は君を奇ク旧号の三根氏や嶽氏の文の様に、種々の方法で貴めるだろう。あくまでもプレイとして楽しみたいと思う。君の返事を待つ。

「兵庫 Z・Y生」

貴誌愛読者の一マニヤとして御便りを致します。編集部の方々が毎号に於いての御努力には、蔭ながら感謝致して居ります。何卒、今後益々の御発展を祈つています



さて甚だ勝手な様ですが、マニヤの私として、最近号にズロースについて写真及び画が少くなつて来ている様に思えるのですが、一口に下穿きマニヤといつても、どちらかと云つたらバンテイ、ブリーフよりも、女学生が運動会などに穿く黒のブルマーや白、黒のズロースの様に、裾口のゴムが太股に喰い込んだところ、又腰廻りの膨らみや、ひだのある所に引きつけられるのです。先日着きました九月号口絵の中に、北原純子さんの画がかれた女学生は、アイデプが大変良かったが、あの下穿きが太股に喰い入ったブルマーかズロースであつたら良かったと思ひます。此の次は少し変つた所を取り入れて下さる様、適當の御配慮を頂けたら幸いに存じます。

(兵庫 K・H生)

○ 六月号の僕のお手紙を下さいました方、どうも有難うございました。誌上より重ねてお礼申し上げます。二十七年の六月及び十二月号はどなたもお持ちではありませんでしたがお手紙を下さいます方の中より、身も心も裸になつて語りあえる友を一人得ることが出来ました。それもみな奇クの

お蔭と思つています、僕らは現在月に一、二回責めのプレイを行つております。フオートもとりました。お互に納得のいくまで何回か文通をかわした上での事です。ですから僕達には暗い影はありません。東京都内及び近辺の方で、どなたか一人僕達のお友達になつて下さる方はありませんか。僕は二十七歳、彼は二十歳です、三十五歳位までの方で勿論男性に限ります。お手紙をお待ちします。

(東京文京区柳町篠原方 久保)

○ 一柳トシ様、貴女の愛用されていられる様な皮製の素晴らしいコルセットがどうしても必要です。で、一柳様のいつも頼まれていた靴屋さんに、私のも注文して頂きたいのです。金額を御送りしますから、費用はどの位ですか、至急お知らせ下さいませ。尚サイズはバスト、ヒップ、ウエストだけでよろしいのでしょうか。出来れば一柳様の使用された古いコルセットでも結構です。(横浜神奈川局私書函第十三号)

○ 森山美歌女王様、七月十日附のお手紙、たゞ夢の様に恍惚として読ませて頂き、身内の血がたぎる

様な感謝感激の極みでございました。然し丁度生憎、私事遠方へ出張して不在でありました。女王様の命令の日に出勤できませず、折角の機会を逸し残念至極でございますのみならず、恐れ多くも女王様をお待せ致し御無礼を働きましたことは、存せぬこととは申しながら、不忠不敬の至りと只管恐懼致して居る次第でございます。何卒女王様特別の御慈悲をもちましてお許し下さる様、おみ足の下に三拝九拝してお願ひ申し上げます。実は奇ク七月号発売当時は、或は女王様のお手紙が頂けるかとほのかな期待を待つて居りましたが、御多忙の為かそのこともなく、一二月月々ありましたので半ば諦めていたような次第でございます。女王様の御懸念をお解きする為に、若干の自己紹介をさせて頂きますならば、私は身長五尺三寸五分、体重十七貫のオールドマゾヒストでございます。東都一流の大学を卒業、現在は社会的地位もでき金銭的にも多少余裕もでき、やうざ的な所など全くございません。この点は安心下さいませ。容貌の点は中以下で自信はありません。それに近頃はゴルフばかりやって相当日焼けして居りますので、初

対面では損をする方ではありますがつきあつて頂ければ誰からも好かれ信頼されるたちのものでございまして、どうか御安心下さいませでございます。女王様から虫けらへのお言葉をお聞かせ頂きますよう、又虫けらから女王様への叫びをお聞き頂きますよう、宛先だけでもお教え下さいますよう(女王様には御迷惑をおかけするようなことは断じてございせんことを神かけてお誓ひ致します。女王様に対しますときは犬であり、けたものであり、虫けらであります。人間の社会では紳士でございますから御安心下さいませ)お願い致します。森山美歌女王様、御足下へ、女王様の御足の下にうごめく虫けらより。

(東京中央局私書函一三九一)

○ 貴社の御発展を御祈り申し上げます。九月号を入手致し嬉しく拝見致して居ります。我々には唯一の友である奇クの八月は休刊との由我々愛読者はどんなに淋しい事でしょう。九月下旬までの五十日間を如何に過すべきか。復刊なつて以前にもまして読者数の半減に、貴社に於かれましては大打撃であ

り、又私達読者に手痛い事です。現在のスタイルや規模で、以前の様な豪華な容姿で我々を慰めてくれる事の一日も早い事を願って居ります。さて一ヶ月奇巧の缺刊の心の空虚さをどうして癒そうかと今から頭をなやましております。御多忙中御手数を御掛け致しますとて恐懼に存じますが次の点について御説明願えましたら幸甚に存じます。悦虚フオートに併せて今度口絵に独自の流暢な筆蹟に依ってかざられる四馬氏の画いた画集が分譲品として作製される由、又女流画家としても繊細な筆致にて読者の魅惑されていられる北原女史の画集も分譲されます。大いに奇俱に価するものと存じます。人間にもそれぞれの個性がある様に、それぞれ読者の趣味も緊縛、灸、切腹、鞭撻、浣腸、フェチ、M・Sがあり、切腹緊縛のフオートは数多くありますが、復刊以後の代理部特選フオート集には、浣腸物が依然として変らずマンネリズムをかこって居り、この次こそはと変わった浣腸フオートを期待致して居りますのに、全くこの種のフオートは出現する様子もない様に思います。売行きの良い物に力を入れ増強すると云う事は、商業者なら誰しも

の事と存じます。この様な点に於て、編集子の御心中の一端も御聞かせいただき度く存じます。浣腸オシメと云った様なフオートの作成に対しては、モデル嬢の意志もあり、他のフオートを作成する様に容易に作成する事は困難な事でしょう。モデル嬢もおいそれと同意は困難とて、企画されましたも流産する事もあると存じます。フオートが作成不能なら四馬氏、北原女史、滝女史の手に依って浣腸されている場面、オシメを嵌められている美しい女性の絵画を分譲品として作成していただけないでしょうか。外国分譲分譲の朗報あり又特集版刊行が延期になり奇俱未発表品が分譲されます由、この種の物に一抹の期待をかけて居ります次第です。この様なフオート及絵画がありましたら是非御知らせ下さい。又読者から貴社へ送附されておきます浣腸、オシメのフオート又絵画も沢山あります事と存じますが、この様な物を分譲していただく方法はありませんでしうか、代価はいりません。これ等の趣味に合った物なら何とか分譲していただき度いものです。私も浣腸、オシメに関しての記事、画は一冊のノートにスクラップして

永久に保存したいと念願して居ります。御多忙中恐懼に存じますが是非御教示下さる様御願い致します。(S・A生)

○

私の好みは、被縛体は必ず女性でしかも純情可憐な美少女又は美しい娘である事。(十五—二十五歳位まで)縛り方は必ず後手高小手である事。猿轡はないのもしよいし、あるのも又別の味があつてよい。裸体はたまにはいいが、あまり興味が無い。むしろ種々の服装で縛られるのがいい。特にセーラー服の女学生、振袖姿のお姫様等好きだ。その他ワンピース、ブラウス、セーターに下はスカート着物羽織、ユカタ姿等、種々な服装で縛られるのがいい。ただし先のべた如く縛り方は必ず後手、高小手、胸の上下をしつかりと荒縄でしめ上げ、できるだけきつく縛り上げる。縦縛りや股間縛りにする時は、洋装の場合はスカートの上から、和装の時は着物の上から縄をかけた方がいい。ポーズとしては、柱等へ縛りつけたり又吊り責めやえび責め逆えび責め等がよい。洋装は必ずスカートをつけている事、純情可憐な美しい乙女である事が第一の条件です。

○

(大阪 西成生)

友人からKK復刊号の十月、四月、六月、七月号の四冊を送与されたので、はじめてKKが通信販売で赤字経営ながらも確実に再起の道を歩んでおられることを知りうれしく思っています。前記の四冊では確かなことは判りませんが、れども、大多数の読者の好みであるサジズム小説が、漸次量質ともに良くなつてきているようで、まことにうれしい限りです。殊に七月号の土路氏作「潰滅の前夜」は近來の傑作と見えます。この部分だけでも充分読みごたえがある小説です。願わくば、以後毎号にこの様な刺激的な(と申して悪ければ)徹底した力のこもった作品で読みごたえがある読物を一つ二つ入れて下さるなら、KKの読者中の多数を占めるサジストも、満足して永く継続購読していくことと思われまします。編集後記を見ましても、箕田様が読者の種々層の要求を満たすため、非常に御苦労なさつておられることを知って申し上げます。それはともかく、四月号には「鼻のプレリニード」七月号には「H氏の奇妙な告白」を載せて頂いて、大変ありがたい



ございました。少い頁数に頭を悩ましておられるのに拘わらず、私の下手な文のために多数のスペースをさいて頂いて、誠に申し訳なく思っております。また復刊創刊号には「鼻いじめの写真」と題して私の短文が出ていましたが、あれは以前の「鼻いじめ」という私の責めのアイデア乃至は「鼻は花なり」「性愛警句哲学」「四つの美しい女性の鼻」という文のため、キャビネ型五枚の鼻いじめの写真をお送り下さった時の礼状に書いた一部でした。KKも、なるべく写真挿入を緩めて一日も早く公刊して、市中の書店で自由に各自が買えるようにして頂きたいものです。(尤も、いくら絵や写真を自重しても公刊出来る可能性がないとお考えになつてゐるなら今のままで結構です)また、現在のような不安定な状態では、例えば松井女史の「赤い花」のような大長篇は気抜けして駄目目目目目です。長くて四、五カ月ぐらゐまでの連載で終るものが欲しいです

「潰滅の前後」はどのようなか楽しみですが、力をこめて書いた、このような新人の中短篇にむしる力作が多く、アブ性も濃厚であつて、今の状態では「赤い花」

のようなベテランの作品よりもよいと思ひます。私も近く一文をものにしてお送り致しますよう。お元気で御奮斗をお続け下さるようお祈り致します。(北谷英二)

○ 奇譚クラブを、通信販売制度になつてから始めて知りました。今春高校を卒業して大学入学の希望も事情により断念し、平凡な毎日を送つてゐる者です。自分が大人になつたという事を自覚すると共に、自分のアブノーマルな性質を知りました。一時は日夜不安に暮しました。生れながらの宿命だと思ひ、その中から少しでも幸せを見つけようと努力しておりました。愛読者の方と文通、交換を望みます。御返事は必ず差上げます(横浜市若区井土ヶ谷上町三三、高橋好彦)

○ おくればせながら、復刊おめでとうございます。実は、もう貴誌には御縁のないものばかりあきらめて居りましたのに、昨日、近所の古本屋で六七八月号を見つけて、見栄も外聞もなく買ひ求めました。私は二、三年前より貴誌を知り、以来夫と共に愛読してゐたのです。とは申せ、夫とは全然別

な意味において……ですが。貴誌を知つて以来の不満を云わせて下さい。勝手なお願いかも知れませんが、卒直に云つてレスポンスについての記事を書いて頂き度いことなのです。男の方には、ソドミヤの欄とかいろいろと羨ましい程多くの記事があるのに、女の人の為にはその記事が少ない(時にはない時さえある)ことなのです、何故なのでしょう、結婚前レスポンスの経験があつて忘れられないのです。その後、妻であり二人の子供の母になつてさへも、この性質だけはどうしようもなく、日夜悩んでゐるのです。世の中には私の様な二重人格者の様な女の方もいることではないでしょう。どうかそう云う者もいることを心にとめてレスポンスの欄を作つて下さい。因みに、私は二十八歳で容姿はマア十人並とみて下さい。どなたか私とおつき合ひ下さる同好の方はいらつしやいませんか。私は能動的で、受身は苦痛です。御手紙下されば必ず御返事致します。相手の方の年令、容貌共にかまいません。(R・D子)

○ 拝啓 貴社愈々御隆昌の段慶賀申上げます。突然の事にて失礼と

は存じますが、貴誌の入手経過並に私の希望等を述べ、購読の御了解を得たいと存じます。実は昨年春、大阪に出張の折たまたま大阪駅の売店にて貴誌四月号を発見し早速購入致したのですが、其の後最近まで貴誌を発見できず、甚だ残念に思つて居りました。ところが本月初め門司出張の折、露店にて貴誌を見出し、幸にも三十一年五月号―八月号四冊入手出来まして、それにより旧号三冊購入申込みました次第です。扱而、小生女性切腹に関心を持つて居りますが貴誌を知るまでは只一人にて種々想像を廻し(参考的書籍殆んど無きため)面を書いたりして居りました。貴誌を拝見し、男性の方ならず女性の方々まで同好の志の多数あることを知り、心強き次第です。私も種々都合もあり連続購読という訳には参りませんが、御了解の上よろしく御取計の程御願ひ致します。貴誌の発展を御祈り申上げます。(T・K生)

○ 愛読者の一人です。猛暑にめげず御奮斗のおもむき、誌上を通じて推量するにつけ感謝にたえません。さて休刊以前の華やかさに比すべくもありませんが、復刊後も

かなり盛大に、いわゆる「禪美」の問題をお取上げになって下さる御好意は、まったく涙の出るほど嬉しい思い出です。御誌が休刊になったときは、暗夜に灯台の火を喪ったような気がしたものでしたが、由来というものは東京の出版物は禪美を積極的に取扱ってくれず、その点御誌の献身的な努力はかけがえのない貴重なものなのです。大袈裟に申すのではありませんが、復刊後の誌上を飾る幾多の禪美関係の論文は、私にとって福音書のそれに勝る法悦を与えて呉れるものです。ところで御誌一九五六年第七号の読者欄の投書「六尺ふんどし愛用生」氏の寄せられた投書は、いかにも肉体労働者の書いたものらしい素朴さと美しさに溢れた名文でありまして、私は今後このような人と文通を続け、同志として水魚の交わりをお願いしたいと思う次第です。御面倒と

は存じますが、微意のあるところを御賢察願いまして、同氏の住所をお知らせ下さいます様御願ひ致します。最後に貴誌の発展を心からお祈り致します。(F・A生)

酷暑の砌、貴社益々御盛昌の段大慶に存じます。小生、幼時より外人の耳環に妙に心を惹かれ、十歳の時新京極で、外人の耳環のあけた孔が直径三分程の大ききで豪華な飾りをつけたのを見た時はたまらなくなり、帰宅後始めて千枚通しで耳環に刺し通しました。が、抜いてそのまゝです。から五日もすると元の通り塞がって仕舞いました。十数回刺し通しましたが結果は同じ事なので、十六歳の時刺し通した直後に妻楊子の先の細い処を差し込んで、時々排膿(約三日程)して約一ヶ月したら完全に貫通した時の嬉しさは筆舌に尽すことが出来ませんでした。それ

## 血紅使用の女体切腹写真

分 譲

女体切腹研究家某氏(特に名を秘す)が、うら若き女性をモデルに使用して作成された女体切腹シリーズ。同氏よりネガを提供されていますので、御希望の方々は焼増して差し上げます。ネガは十枚あります。御入用の方は、焼増の大きさを御指定の上、返券封入にて御照会下さい。

から孔に通した針金に、有り合せの玉をつけ耳環の孔に通して人通りの少い処を歩き、耳環を婦人に見せびらかしました。昭和初頭のカフヘー盛なりし時、女給數十人の耳環に孔をあけてやり、神戸まで耳環を買いに行つて与えました。が、其の時神戸市中を歩く外人の耳環の孔を見て歩くのが楽しみでした。鼻環の方は三十歳の時世界風俗写真を見て、早速鼻環子に孔をあけました。鼻の方は肉がやわらかいので案外早く完成して小指が通る位に大きくなり、そこへ時計の鎖を二重に通して両端を耳環の孔に引掛け、鼻の二重に通し輪になつていてところへ、五十匁位の魚釣用の錘を下げてその重量感を楽しまますが、鼻環の桃源境とはこの事だと思います。日本人男子では八歳の時七十歳の老人が真鍮の耳環を、十二歳の時五十位の人、三十歳の時芸人が耳環をつけているのを、五年程前行者が一分位の鉄の耳環をつけているのを見ました。婦人は戦前は十余人と、戦後は三人見ました。街頭を歩く時は婦人の顔を見るより耳を見て歩く程で、今流行のイヤリングは単にねじで止めてある文です。から興味はありません。孔のあ

けてある人を見た時はとてもたまりません。鼻環は神戸でインド人の三人みましたが、戦後は未だ一人もみません。

(京都 佐々木ミネ生)

暑さ厳しき折柄貴社御一同様御元気で御仕事のことゝ存じます。小生、東京へ盆休みに帰省の節、空中ブランコというサーカス映画を見ましたが、その中でローラーというアクロバットダンサーがマイクというぶらんこ乗りに、次の様に語るところがありました。あなた達はドサ廻りのサーカスのことを知っていますか？ 雨が降ると興行できないから食物も食べさせてもらえないし、逃げるといけないからとお金もくれない、象よりもひどい目に合つて暮すのよと語るのです。アメリカの派手なサーカスでも未だにこの様な有様ですから外のサーカスはもつとみじめなものでしょう。これから考えますと七月号の畑中氏の公開状の中でサーカスものを取り上げようと云う案は、誠に多数の読者の声の代表と云うべきでありましょう。食べものも与えられず逃げることも出来ないで、けものよりも非道い取扱いを受けたこのアクロバットの



女こそ、畑中氏のイメージに一致するものと思います。公開状の中で、読者の意見を聞きたいと書いてありましたが、私は畑中氏の意見に賛成すると共に、その卓抜なる考え方に敬意を捧げる次第であります。  
(大阪 泉敏一)

連日の酷暑に諸氏如何お過ごしでしょうか。東京の猛暑は遂に摂氏三十四度を超えるという有様、今八時半というのに坐っていて汗が吹き出して来ます。動くこともわずらわしいこの暑さには、大切な座右の奇譚クラブを持出して素晴らしいフォトや女性マゾヒストの記事に没頭する以外、何も手につかないのです。過日御送り下さったフォト第二集確かに拝受致しました。お礼状が遅くなって申し訳ありませんでしたが、改めて貴誌の誠実な経営方針に感激致しました。八月号読者通信のT・Y氏と重複になりますが、T・Y氏の指摘なさった各フォトは勿論すぐれたものでした。小生は、その他に次の各フォトが気に入りました(1)傾いているロウソクを流れる蠟涙と押しつけられた女体の妙。もう少し美人ならば……と思うのは慾目でしようか(4)モデルは中富嬢

でしようか、猿轡はもう少し巾を狭くするか無い方が目の表情を生かすのではないでしようか(6)左膝についた砂が生きています、どうも修正が目障りで、むしろブリーフ様の肌着があった方が効果があつたのではないでしようか。(9)川端さんでしようか、全く素晴らしいフォトです。(13)腕、肩、首を締めつける縄目やビニール様の紐の黒と女体の白のコントラスト。二つ折に押しつぶされたボリウムも見事です。(20)被縛女体の無惨美(22)顔を覆いすぎたようですが、反り返った女体、就中下半身の見事さは修正が全くうらめしいものです。フォトに関しては観る者の欲求と作製上の許容限界との調和点が問題になるのですが、どうも修正の結果、在るべき様にならないとは残念ですから、着衣やポーズによつて修正をしないで済むように考えて頂けないものでしようか(2)パンティがあつた方が良いでしょう(3)枷は主題ですからもつと生かすべきです(7)表情は良いのですが、これでは立木に縛りつけた様子が判りませんし、修正が目障りです(10)ポーズが感心しません(10)寒々とした感じを受けるのはモデルの故でしようか、(11)(12)(14)(16)(18)(19)(20)

## 北原純子・責画傑作選

△ハートの的△女体洗滌室△

大判判画紙焼付

二枚一組 三百円

全裸の豊満な女性に加えられ  
る奇想天外な責場面二態。

△緊縛ヌード十六ポーズ△

大判判画紙焼付

二枚一組 三百円

柱、棒、杭、石、等を用いて  
女体緊縛ヌードの様々な姿態を

お目にかける。

(以上、二組にて五百円)

△女学生の羞恥責め△

大判判画紙焼付

四枚一組 五百円

純情可憐な美貌の女学生をモデルとして描いた大胆きわまらない責構図四態。内容は見てのお楽しみ。必ずお気に召す北原純子女史の快心作。

は無難ですが中でも(24)の縛り手の可憐さ(14)(26)の被縛体の美しさは印象に残ります。処でT・Y氏の御意見には全面的に賛成ですが、氏のおっしゃる美女なるものは、年若く可憐でセーラー服や運動服の似合う所謂少女のようですが、小生はこの他に松井女史の「小百合夫人」の気品ある美しさや三十代の女盛りの豊満な情熱を求める者です。「被縛症」(二)文中の二葉の写真には、女盛りの美しさとも云うべきものを感じます。今日までのモデルの中では藤田節子さんが一人だけそのような感じですがそれにしてもモデル嬢は皆若い方ばかりで、三十代のモデルがない

のは何か物足りないようです。いっぞや切腹写真を寄せられた原桐さんのような被縛モデルがあつてもよいと思います。八月号の絵物語「華々しき私刑」所感を記してみます。嵯峨さんの「幻想」なかなか残酷な若い娘の思いつきが、今度も睡眠薬、鞭撻、針責灸責、算盤責等、現代風俗、時代風俗のまざったアイディアでした。こんこんと眠りつづけていながら縛られるとすぐ目がさめるといふのは変な話ですが、それは別として、二枚目の絵で益子に猿轡が無いのは何故でしようか。二枚目、三枚目の絵で革バンドというのに

## ◎お願い◎

雑誌の購入や譲品の御申込みのため、或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず右は固くお断り申し上げます。  
必ず郵便にて御申込下さるようお願い致します。

細い棒状のムチであつたり、縛られてゐる益子の服装が違つていたり、三枚目で里子がハイヒールをはいてゐるのは変ではありませんか、四枚目で裸足の益子が五枚目でストッキングをはいたり、体中どこにいつて拘束を受けていないのになあのような灸責に逢つてゐるのは不思議ですね。三枚目、四枚目、五枚目で露わになつた胸が、六枚目ではかくれ、脛と太股の間というソロバンが、脛の下にあつて堂々と胸を反らせていたり、更に七枚目ではまたまたストッキングをはき、疾うに脱がされた筈のブラウスまで着てゐるのはどうしたことでしよう。技術を云々するなどのおこがましいことは小生にはできませんが、以上のことは確かに不合理だと思ひ記した次第で

す。北原さんの絵は少女趣味の可憐な美しさがあつて好きですが、この場合は何か嵯峨さんの幻想に引廻されてゐるような印象を受け残念でした。御礼状の心算で書き始めながら、とんでもないことになりましたが御宥怒の上、奇譚クラブを愛する者の願ひとして八月号一七五ページ舞鶴生氏及びそれに続くアイデアの存在を御記憶願ひます。小生、目下諸費節約中、余裕ができ次第「古川裕子好み縛り」の第一集第二集を申し込みたいと思ひます。特集号を欲しい上に分譲品にも食指が動きまゐるので余裕に乏しい小生にはフォトオンパレードの本誌掲載が是非にと望まれます。次便で御送金できることを希ひながら、諸氏の御健勝を祈ります。(M・T生)

しばらくぶりで「奇ク」の八月号を手に入れました。内容体裁はさておき、とにかくにも復刊をみたことは慶びに堪えません。アブの通人は、とかく孤獨小心の者に多いという原則があるようで、本誌の存在が何れの社会に於てもそれ程害を流すとは考えられず、寧ろかくの如き何パーセントかの人々の、ささやかな安住の地を提供し

てゐるという貢献も、改めて認識されなければならぬのではないのでしょうか。ところで小生、森卓志なるペンネームで「女性の腕狂者」としての告白、啓発を旧刊に於てたびたび述べてきましたが、休刊となりその後の反響は知り得ません。女性の美は、何といつても肩から腕にかけての魅力に集約されるといつても過言ではありません。世人にあまり対象にされてないのが、小生には頗る奇異に思へてならないのです。同好の方は奮つて本誌、或は直接小生(本名在社)へでも名乗り出てくれることを期待してゐます。特に(腕のマゾ女性)の方。それから写真部へのお願ひですが、数あるフォトの中に「若い女性の腕責め」の場面を一枚加えて下さることを。(東京 E生)

前略、先日内外タイムスに、今年の水着という見出しで新型の水着の写真が出て居りましたが、それはゴム紐に特別な加工をしてアセテードという化繊の生地を織り込んだもので、身体にピッタリと付き体の線を美しくみせるように出来てゐるそうです。丁度、色付のコルセットと同じ感じのもの

と書いてありましたが、これを読んで感じたことは、七月号の公開状で畑中氏がエラスチック水着のことを書いて居られますのが、実現したと云つた感じですが。七月号に間に合うためには、六月号の始めには原稿が出来ていないと間に合わないのですから、畑中氏は六月の始めに、もはや今年の流行をとらえて利用する様に提案されてゐるのですから、その先見の明には頭が下ります。何卒、今度はどんな流行をとり入れた新しいコルセットものをお載せ下さる様お願い致します。(大阪 山田芳夫)

拝啓、奇譚クラブ八月号有難うございました。いつも御心配戴きまして本当に御礼申し上げます。誌上にも何人かの方々が公刊誌としての不如意を嘆いていらつしやいましたが、奈子も本当に同感ですが、「注意の上にも、注意して編集」なさつてゐる御苦心と、読者の求めているものが必ず一致しないといふことは、本当に悲しいことです。せめてKK通信にありました、いろはに補遺抄の様なものがあると良いのですけれども、読んでいて明らかにカットされてゐると思はれる個所にあたつた時な



# ◆次号の本誌は十月下旬発売です

今後毎月下旬発売の予定です。三カ月分、半年分予約の方々へは出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、中旬頃までに誌代のお送りを願います。

どは、編集部に通っていつて、こ  
こはどうなっているのでしょうか  
とお聞きしたい様な気持ちになりま  
す。でもどうか私共に残された最  
後の一線をあくまでも保持して戴  
けます様、ここからお願ひ申しあ  
げます。春田一郎様の幽囚十ヶ月  
が遂に完結致しましたことは、ア  
ブノーマルという限定されたもの  
から飛躍して、大きな意味を持っ  
ていると存じます。この一篇だけ  
でも、奇譚クラブの社会的価値は  
大きなものだと思います。恐らく  
一流の出版社から一流の書籍とし  
て出版されてもさしつかえない程  
のものが、奇譚クラブを通じて世  
に紹介されたという事は、私達  
もある程度自覚して誇りを持って  
も好いのではないでしようか。奈  
子は「裁判官」「財閥」「指導者」  
などとならべて少しもひけをとら  
ないと思うのですけれども、サジ、  
マゾ特集号といったものとは別  
に新書版として「幽囚十ヶ月」

倒錯の英雄織田信長」「あるマゾ  
ヒストの手帖から」「残酷なる女  
性達」など刊行して戴けましたら  
奇クを見る世間の眼も急速に変化  
するのではないかと思います。次  
に個人的なことですけれども、蟬  
間洋子様 ウェストについてのお  
話、大変興味深く拝見致しました  
出来ましたら詳しいお話伺いたい  
のですけど、同封のおたより御転  
送戴けないでしようかし不可能  
なら開封の上誌上御掲載下さつて  
も結構です。いろいろと勝手なこ  
とばかり申しましてお許し下さい  
とり急ぎお礼傍々御願ひまで。

(奈子拝)

「洋子様みもとへ、突然のおたよ  
りにて失礼お許し下さいませ。八  
月号の奇ク誌上にて貴女のお話を  
拝見致しまして、とても感銘を受  
けてしまいました。それで失礼と  
存じましたけれど、いろいろと詳  
しいお話を伺いたいと思い、おた

よりさせて戴きます。私も長い間  
奇クを愛読してまいりましたけれ  
ど、やはり第一に眼につくものは  
自虐、特に衣服に関係した責めの  
アイデアです。それは私の性格上  
止むを得ないことだと存じますけ  
れど、特に今月号の貴女の「女性  
は自分の身体の愛着は誰でも持つ  
ているものです」というお言葉に  
強くひかれました。私も自分のウ  
ェストを細くすることには、ずい  
ぶん苦心しております。現在、常  
態で測りますと五八センチです。  
皮のベルトで締めてそのまゝ眠ろ  
うとしたこともありましたが、強く  
締めすぎたためか一時間位ではず  
れてしまいました。貴女の様に、  
足先の色が変わるまでやって見たこ  
とはありません。是非、今夜体  
験して見たいと存じます。その他  
自虐の方法や御経験などお教え戴  
けないでしようか。私の場合、自  
己愛などと云っても自分一人とい  
ろいろやって来ましたので、何ひ  
とつ理解出来ませんの、まだ子供  
ですから——ホ、ホ、後のことが  
先になつてしまいましたけれど、  
私は今年二十四歳になります。洋  
裁をしておりますが、二年程前ま  
では東京に居りました。三越のデ  
ザイン部にいたのですけれど、今

ではすっかり田舎者になつてしま  
いました。そのころの体験を奇ク  
に投稿致しまして、掲載されてし  
まったので初めは驚きましたけれ  
ど、やはりうれしくて、その後い  
ろいろと体験をまとめては書いて  
おります。もしお読み下さつてい  
らっしゃいましたら、奈子の性質  
が大体おわかりのことと存じます  
が、自分でもずいぶん苦しみてし  
ましたけれど、今ではあきらめてし  
まつて毎日奇クを友として暮して  
居ります。淋しい身にすこしでも  
理解していただけるお友達が欲し  
く、思わず最初から失礼ながらお  
たよりを書いてしまいました。重  
ねてお詫び申しあげます。では最  
初のおたよりですので御挨拶のみ  
にて、御身体お大切になさつて下  
さいます様。

(奈子拝)

○ 奇ク旧号、昭和二十七年十二月  
号以前の本をお待ちの方は高価に  
てゆずられました。(東京都港区青  
山町五の二四西五号、小島方、京  
極厚仲)

○ 「揮マニアの女生徒の手記」掲載  
して下さいまして、本当にありが  
とうございました。厚く御礼申し  
上げます。この一年間程の間に「



## 代理部分讓品目録

## 新作発表！

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

奇ク」の誌上にも、次々に女性の  
 輝愛用家が名乗りをあげられて、  
 輝愛用者の一人として、こんなに  
 うれしいことはありません。胸を  
 おどらせながら毎月の誌面に目を  
 通しています。それに私の高校で  
 も私の「奇ク」の文章がきっかけと  
 なって、同じダンス部員のA子さ  
 んが輝愛用していらつしやるこ  
 とを知り、感激で胸が一ぱいにな  
 りました。この人は一年程前に、  
 弟さんの水泳輝愛用一寸拝借して着  
 用してから、自製の水泳輝愛用  
 して、パンティやブリーフは使用  
 しないようになったとうちあけて  
 いました。A子さんが輝一本にな  
 った姿を良く見せてもらいますが  
 輝が実にキツチリと出来ていて、  
 実に見事なものだと思えます。ま  
 たこのA子さんの体操パンツは（  
 勿論のことキヤルマタ式ですが）  
 肌ピッタリと密着していて、う  
 しろは、どうかするとお尻が半分  
 位出るほどの短さです。この点私  
 の体操パンツと同じなのでダンス  
 の時には二人でお尻の露出競争  
 をやっています。極端に短い、股に

喰いこむ様なブリーフやキヤルマ  
 タ式体操パンツを好んで用いる人  
 はお友達の中にも非常に多いので  
 すが、こういう人たちは、輝マニ  
 アになる素質を十分に持っている  
 ようです。しかし輝は男子のもの  
 ときめこんでいるものだから、輝  
 着用とまでは気が進まないのとし  
 よう。A子さんの話で、輝に興味を  
 持っている方が、校内に多数ある  
 ことを知り、この分だと私たちの  
 学校でも、ますます女生徒の輝愛  
 用者が増えるだろうと喜んで居り  
 ます。そうして将来は「女性輝ク  
 ラブ」を作り、女子用輝の研究や  
 普及につとめたいと思っています  
 おそらく私達女性の半数以上は、  
 一回輝を着用して見たら、もう手  
 ばなすことは出来ないのではない  
 でしょうか。岐阜の若柳キヨコさ  
 ま。あなたの輝を常用される様  
 になった動機、水泳輝（三角輝）の  
 型、輝を着用した感想など詳しく  
 発表して下さいませんか。三木恵  
 子さま、あなたは薄いナイロンの  
 パンティをはいてプレイをなさる  
 由書いていらつしやいますが、そ

の場合、真赤なデシンの水泳輝な  
 どいかがでしょう。勿論、お尻は全  
 部露出すれば一層快適だと思いま  
 す。  
 （福岡 池田ふみ子）

女斗美が少しもないので不平に  
 思います。責め写真よりもよいと  
 思うが、モデルが輝をしめ四つに  
 組んだフォトなどすぐ出来る筈だ  
 が、女斗美のフォト記事を毎月少  
 くとも一つは載せてほしいと思ひ  
 ます。アブに興味のない人でも引  
 きつけられます。見世物の女プロ  
 レス、女角力は裸体が駄目です。  
 全国女斗美ファンで文通の機会を  
 つくりたいと思います。又フォト  
 画、資料の交換をしたいと思ひま  
 す。  
 （東京 女斗狂）

一筆、感想述べさせていただき  
 ます。三十一年八月号の一六三頁  
 のとりこの白人娘。これについて  
 ……元来アメリカインデアンはど  
 ういう理由か、女、殊に白人の女の  
 髪と、その頭皮にサド的な感情を  
 抱くのです。故に、このとりこの  
 白人娘も単なる火あぶりよりも金  
 髪（長い断髪……丁度、肩の  
 あたりで大きくカールした……）  
 をぐいっと掴んで上向かせた額（  
 前髪）より鋭利な刃物で皮を切ら

んとしている図が、真実のインデ  
 アンの姿だと思ひます。先日、女  
 レスリング（外国映画）花の決斗  
 （日本映画）を見て感じたことは  
 何れも決定的な技にもつていく手  
 段として、相手の髪を掴んでいま  
 した。男のレスリングと異り、美  
 しい女の髪が無残にも、わしづか  
 みにされて上半身の自由を奪われ  
 た女の姿は、貴誌あたりが取上げ  
 てもよいのではないかと思ひます  
 （神戸 T・H 生）

佐賀、淀川様、神戸、T・S 様  
 お二人の記事を見て同感共鳴しま  
 した。御親交を得たくお便り下さ  
 いませんか。奇ク長年の愛読者で  
 すが、お友達がなくて寂しく思っ  
 ていた所で、ソドミアですが、サ  
 ジに大いに興味を持っています。  
 思いきりいじめ、また縛り責めて  
 見たいと思うや切、また縛られい  
 じめられたいとも思ひます。男性  
 サジ、マゾ、ソドミアの方の便り  
 をお待ちして居ります。  
 （大分県佐伯市南中区 東忠義）

楽しみにして居りました夏も、  
 何時しか過去の思いでに流れる気  
 候に成りました。毎月の奇クの発  
 刊が待遠しく思ひます、九月号の



青葉楓一様の「紅蓮」を幾度も繰返して拝読致しました。そして現実を放れ、桃源境の楽しさを満足させて戴きました事を、感謝致します。亦九月号読者通信の中のS・R生、其の他の人の非難の声があるに拘わらず、此の小説を掲載して下さいました編集部の諸兄に、厚く御礼申し上げます。毎月一編でも結構です故「紅蓮」の様な小説を掲載して下さる様希望致します。青葉楓一様、紅蓮の後編を書いて戴けないでしようか。小宮山光の手に入った鷲尾中尉の遺品の日記に稿を起し、鷲尾中尉と三原一等兵の初対面より、軍律厳しい上官と兵との垣を越えた砲火の中の愛情、三原一等兵の重傷、死期近く冷えゆく体温軍服を脱捨て逞しい裸体で三原を抱きしめ、我が情熱であたためる中尉過去の楽しかりし思い出の数々が一瞬走馬燈の如く胸のあつさはこみ上げて湧々と落る涙を拭いもやらで「三原、三原」と愛しき従兵の名を連呼しつつ……青葉様、是非続編を書いて下さい。上官に愛される兵卒の喜びを、青葉様の筆で表現して下さい。勝手な事のみ書き、何卒悪からず。

○

(東京 宮誇修)

皆川夫人様、読者通信を通じお手紙賜り、有難う御座居ました。僕は貴女様の足許にひれ伏して、様々の御命令に従い度く存じます誤解下さらず、何卒今一度お手紙下さいませ。(渋谷区上通り二の六六牧岡方、山口文吾)

○

特集号としてマゾヒズム号の発行される事を、一日千秋の想いで待ちます。七月号の読者通信で、東京のSK生の投書を拝見して、同感です。是非、マゾ特集号には拘束具の写真か挿画で、皮手錠や緘口具、搾衣等(刑務所や感化院で使用)往時の刑事特刑等で使用した責具等の図を載せて下さい。古来からの捕縄術(縄の掛け方)が調べがつかますならば、各流のを集めて下さい。三根さんの少年刑務所の記録で、搾衣がどんなものか、皮手錠がどんな構造か一寸も知りませんから、これを機会として是非加えて下さい。

(竜岐男)

KK通信、昭和二十八年十一月号をお譲りいただけの方、お知らせ下さい。価格は三百円程度で買取上げします。

(東京都渋谷区千駄ヶ谷五の九八八岩瀬祥一)

### ◆編集後記◆

○本誌の八月中に発売する号を休刊致しました為、毎月愛読しているのに、休むとは何事だと苦情を申して来られる方もございましたが、誌上を以てお詫び致します。中には大変同情的に、誤解され易い現状をよく頑張つて発行しているのに、は感服の至りだ、十分休養をとって、秋には充実したものを出版してくれるようにと、激励して下さい方もありました。

○掲載したい原稿、並に読者通信なども大分溜まりましたので、三百頁位の雑誌にしたかったので、目下の状態ではそれも望めず残念でした。毎月この欄でも、愚痴が多いようで恐縮ですが、実情は以上の通りでありますので、一時的に強がりを言ったりしても仕方がないという気持ちから、ありのまゝ申し上げている次第であります。

○読者の方々から、種々販売方法や宣伝方法についての御教示を賜り、大変有難く感謝しておりますが、多くの方々は、現在の状況というものについて、余り深く御存じない為、歯がゆくお思いになつておられるように見受けられました。

○復刊以来、発行しております雑誌につきましては、何かと御不満も多いこと、

思いますが、只今、発行部数が極めて少いことでもあり、いずれ近いうちに、各号とも品切れとなることと思ひます。その時は、きつと貴重な文庫誌として引っぱりダコになることでしょう。

○休刊以前の雑誌が、現在中々入手困難で、その当時は何とも思っていないものが、まだ二、三年か経っていない今日、プレミアム付で取引きされているのを見ても、さぞこそうなづいて下さること、思います。

○今後は、出来る限り順調な発行を続けてゆく考えでありますから、つとめて、欠号のないよう、引続いて御購読下さるようお勧めします。

○毎月号に掲載してあります通り、発行所への直接の御訪問を固くお断りしているにも拘らず、電話などで面会を強要される方がありますが、何卒、事前に書面にて打合せの上、お訪ね下さるようお願い致します。

○本月号では、原稿の都合で、長いものが掲載になり、予定していたものの中、惜しい作品も来月廻りとなったものがあります。その月その月の内容により、一喜一憂されることなく、長い眼で御批判されれば幸甚です。

○口絵並に挿絵の低調は、全く、此の種雑誌の誤解を避けるための自粛であることとを御承知願ひます。